山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書

— 富士山信仰遺跡に関わる調査報告 —

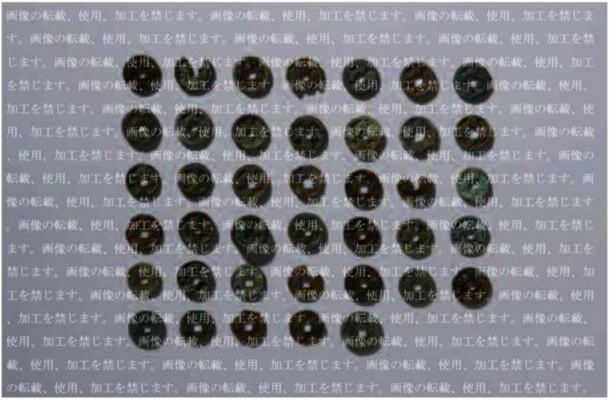
2012．3

山梨県教育委員会

冨士御室浅間神社里宮　片山社　土台石出土遺物

冨士御室浅間神社里宮　片山社　土台石出土の墨書された石

剣形鉄製品


画像の転載、使用、加工を禁じます。

冨士御室浅間神社里宮二合目本宮境内地遺跡出土銭貨

河口浅間神社に伝わる文化財

陶 製 猿 像

河口浅間神社に伝わる文化財

陶製こま犬　阿形

陶製こま犬　吽形

伝経ヶ岳出土資料（特論第６節）

写真１　経筒

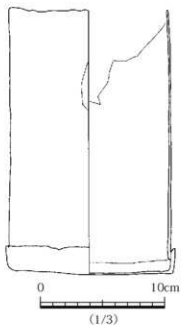


図２　経筒実測図

写真２　経巻

写真４　経軸頭（部分拡大）

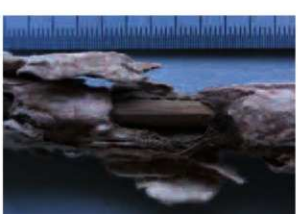
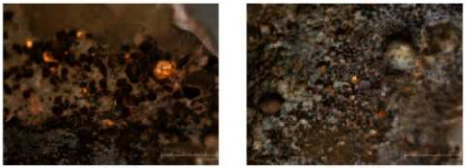


写真３　経軸（部分拡大）

写真５　経紙 No.12

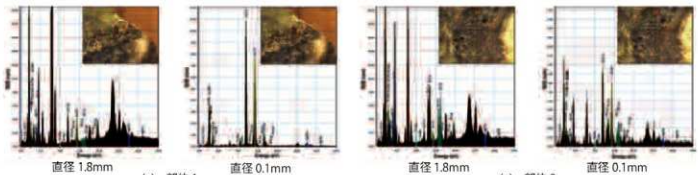


(a)　部位 1　　(b)　部位 2

図 1　顕微鏡画像

(a)　資料画像　　(b)　エックス線透過画像

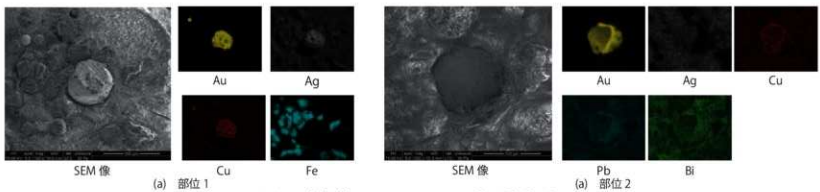
図 2　調査資料のエックス線透過画像



直径 1.8mm　　直径 0.1mm　　直径 1.8mm　　直径 0.1mm

(a)　部位 1　　(a)　部位 2

図 3　各部位の蛍光エックス線分析チャート



SEM 像　　Au　　Ag　　Cu　　Fe

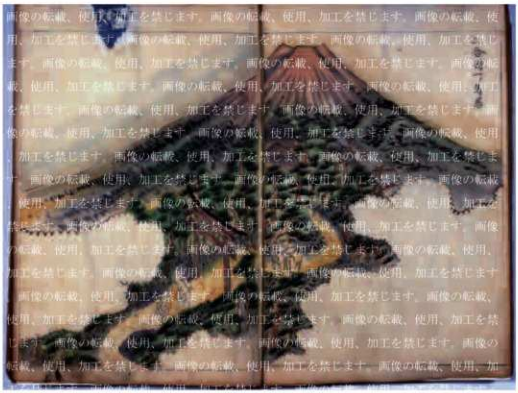
(a)　部位 1

SEM 像　　Au　　Ag　　Cu　　Pb　　Bi

(a)　部位 2

図 4　各部位の SEM-EDX マッピングデータ

『富士山明細図』　墨描淡彩色　江戸時代末　川口十二坊　二十七代目　本庄元直氏所蔵



二合目　一ノ鳥居

二合目　小室浅間社

序

本書は、平成21年度から平成23年度までの3年間にわたり、国庫補助金を受けて実施した『山梨県内山岳信仰遺跡分布調査』の報告書です。

山梨県内には多くの遺跡が所在しており、中でも縄文時代の遺跡は質・量ともにすぐれたものが多く、全国的にもよく知られています。豊かな森という環境が縄文時代の暮らしの源となったとも言われています。現在もまた豊かな森が広がる山梨県ですが、それに加えて富士山をはじめとした多くの山々に囲まれた地域でもあります。山梨県と富士山との対比では、古く『万葉集』で「なまよみの甲斐の国、うち寄する駿河の国と、こちごちの国のみ中ゆ、出で立てる、富士の高嶺は…」と詠われ、一説では「行（並）吉みの甲斐の国」＝「山の並べ方の素晴らしい甲斐の国」とも考えられており、古くから、山とは結びつきの深い土地だったといえます。この'山'は畏れの対象であるのと同時に豊かな自然の恵みを与えてくれる存在として、古くから大きな信仰の対象でした。

近年、金峰山信仰に関わる杣口金桜神社奥社地遺跡の調査など、県内でも山岳信仰に関する調査が行われるようになってきました。また富士山については、世界文化遺産登録に向けて様々な分野からの調査研究が進められています。このような動きの中で、富士山信仰に関わる遺跡の調査については、その立地環境等から事例が少なく、埋蔵文化財包蔵地として周知化が図られていない現状があったことから、これらの山岳信仰遺跡の所在を明らかにし、開発行為と保護措置との調整ができるよう、基礎資料を作成することを目的に、『山梨県内山岳信仰詳細遺跡分布調査』として、3ヵ年計画で実施することになった事業であります。

今回の調査では、富士山信仰に関わる11地点についての試掘確認調査を実施し、地中レーダー探査やボーリング調査などの関連調査も併せて行い、多くの成果を得ることができました。

この報告書が、山岳信仰を考える上で、また各種開発と文化財保護との円滑な調整に役立つことができれば幸甚です。

最後になりましたが、試掘確認調査・関連調査等について快諾していただいた社寺および土地所有者の皆様や、史資料を提供して下さった方々、並びにご指導いただいた指導者会議の先生方をはじめ、さまざまなご協力をいただいた関係者・関係機関の方々には厚く御礼申し上げます。

平成24年3月9日

山梨県埋蔵文化財センター
所長　平賀 孝雄

例　言

1　本書は、平成21年度（2009）から平成23年度（2011）の3ヵ年でおこなわれた、山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書である。

2　調査は、山梨県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、山梨県埋蔵文化財センターが山岳信仰遺跡分布調査・試掘確認調査・その他の関連調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。

3　今回の調査では、山岳信仰遺跡の中でも特に富士山信仰に関わる遺跡についての調査に重点を置いた為、調査箇所については山梨県の東部富士五湖を中心とする地域とした。

4　調査主体は山梨県教育委員会、調査機関は山梨県埋蔵文化財センターである。

5　調査については、野代恵子（副主査 文化財主事）と古郡雅子（非常勤嘱託職員）が担当した。
また、調査にあたっては指導者会議設置要項に基づき、次のとおり指導者会議を設置した。

指導者会議　清雲俊元（山梨県文化財保護審議会会長）
坂詰秀一（立正大学名誉教授）
笹生　衛（國學院大學教授）
櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）
堀内　亨（山梨県立山梨園芸高校）

6　本書の編集は、山梨県埋蔵文化財センター野代恵子がおこなった。また、本書の執筆は、次の通りである。
特論の第1節　坂詰秀一氏・第2節　笹生衛氏・第3節　清雲俊元氏・第4節　櫛原功一氏・第5節　堀内亨氏・第6節　篠原武氏・第7節　杉本悠樹氏・第8節　沓名貴彦氏にそれぞれ依頼した。それ以外については野代恵子が執筆した。また、遺跡における遺構等の写真は野代恵子・古郡雅子が撮影した。また遺物の写真は、ツカハラスタジオの塚原明生氏に撮影を委託した。

7　調査期間および実施箇所については、第1章の第2節に記載した。

8　整理作業については、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。

9　本報告書にかかる出土品・記録図面・写真・調査カード等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

10　地中レーダー探査については、株式会社テラインフォメーションに、簡易ボーリング調査については、株式会社山梨地質に、富士山吉田口登山道の測量および図化と富士山二合目周辺の地形作成については、昭和測量株式会社に、それぞれ委託した。

11　協 力 者（五十音順・敬称略）

［団体］

愛知県陶磁資料館、北口本宮冨士浅間神社、河口浅間神社、環境省富士五湖自然保護官事務所、熊谷市立港南文化財センター、熊谷市立図書館、甲州市教育委員会、静岡県島田市博物館、富士御室浅間神社、正福寺、大善寺、鳴沢村郷土史研究会、帝京大学山梨文化財研究所、鳴沢村教育委員会、笛吹市教育委員会、笛吹市産業観光部、富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合、富士河口湖町教育委員会、富士宮市教育委員会、富士吉田市教育委員会、(財）富士吉田文化振興協会、富士吉田市歴史民俗博物館、山中湖村教育委員会、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県環境科学研究所、山梨県企画県民部世界遺産推進課、山梨県県土整備部砂防課、山梨県立博物館、蓮華寺

［個人］

新井 端、在原慶夫、飯島 泉、石原豊春・井上哲秀、上杉陽、大石 方、奥脇和夫、小佐野静子、小佐野勝、小野仲夫、河西 学、梶原 充、金子正之、神崎かず子、北川 洋、沓名貴彦、輿水達司、小林静作・小林昭輪・駒井彰、坂本輝幸、佐々木満、篠ヶ谷路人、篠原武、上文司厚、神宮司恵一、杉本悠樹、鈴木直人、鈴木康之、中田進、中村義朗、新津健、八須一成、浜将盛、平井 隆、平野 修、布施光敏、堀内真、本庄元直、茂木雄功、村石真澄、望月和幸、渡井英誉、渡辺昭訓、渡辺真一、渡邊芳明

作業員

［分布調査］池谷千代子・石坂恵理・伊藤津真子・岡 和子・加藤光男・千野富子、野呂瀬秀臣・米山孝子

［試掘調査］石坂恵理・猪俣順子・岡 和子・金丸恵美・坂口 正・鮫田勝男・菅沼芳治・中込 榊・野呂瀬秀臣・藤原さつき・望月孝次・矢崎 緑

［整理作業］石坂恵理・猪俣順子・金丸恵美

凡　例

1　遺構・遺物の縮尺は、各図面に付した通りである。

2　遺構断面図中のレベルポイント部分にあたる数字は標高を示す。

3　遺構図中の数字は、出土遺物実測図の番号と対応する。

4　スクリーントーンの指示内容については図中に記した。

5　遺物観察表中の括弧付き数値は推定値である。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第１章　調査経過と組織……1
　第１節　調査目的……1
　第２節　調査方法と調査の流れ……1
　第３節　指導者会議……3

第２章　富士山信仰遺跡の分布……4
　第１節　富士山信仰の歴史……4
　第２節　分布図について……5

第３章　富士山信仰遺跡の調査……6
　第１節　富士山信仰遺跡に関するこれまでの調査……6
　第２節　調査地の選定について……6
　第３節　富士山中の調査……15
　　第１項　富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡……15
　　第２項　定善（禅）院跡伝承地……17
　　第３項　富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地点……18
　　第４項　五合目で発見された石碑……19
　第４節　富士山周辺の調査……54
　　第１項　北口本宮冨士浅間神社社有地……54
　　第２項　富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）……56
　　第３項　河口浅間神社……57
　　第４項　御墓……58
　　第５項　宮ノ上遺跡……59
　　第６項　富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原下Ａ地点……59
　　第７項　行者平遺跡（御坂山中：大善寺行者堂跡伝承地）……60
　　第８項　行者屋敷遺跡（足和田山中：蓮華寺奥の院伝承地）……61
　　第９項　藤塚（南都留郡山中湖村）……62

第４章　富士山吉田口登山道の測量成果……123
第１節　吉田口登山道の歴史的環境……123
第２節　吉田口登山道測量成果……123

第５章　成果と課題……123
第１節　富士山中の信仰活動……123
第１項　富士山二合目……123
第２項　富士山五合目……127
第２節　富士山麓の信仰活動……128
第３節　山岳信仰遺跡調査の今後に向けて……129

特論
第１節「富士山と修験」……131
清雲俊元
第２節「山岳信仰遺跡調査の課題」……136
坂詰秀一
第３節「富士山の古代祭祀とその背景　―火山活動・災害と古代の神観・祭祀―」……142
笹生　衛
第４節「山梨県の山岳信仰遺跡」……148
櫛原功一
第５節「富士山二合目の信仰施設と文献」……159
堀内　亨
第６節「伝経ヶ岳出土資料について」……161
篠原　武
第７節「富士河口湖町河口　西川遺跡の概要」……171
杉本悠樹
第８節「宮ノ上遺跡出土の金付着陶器の科学調査について」……176
香名貴彦

図 版 目 次

第 1 図 『八葉九尊図』 …… 7
第 2 図 富士山の登山道と浅間神社 …… 8
第 3 図 富士山信仰関連地点分布図（1）…… 9・10
第 4 図 富士山信仰関連地点分布図（2）……11・12
第 5 図 富士山二合目 周辺図 …… 19
第 6 図 富士御室浅間神社二合目本宮（H 21）トレンチ位置図 …… 20
第 7 図 同上 1 トレンチ平面図・セクション図 …… 21
第 8 図 同上 2 トレンチ平面図・セクション図 …… 22
第 9 図 同上 1・2 トレンチ出土遺物 …… 23
第 10 図 同上 3 トレンチ平面図・セクション図 …… 24
第 11 図 同上 3 トレンチセクション図・出土遺物 …… 25
第 12 図 同上 4 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 26
第 13 図 同上 5 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 27
第 14 図 同上 6 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 28
第 15 図 同上 7 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 29
第 16 図 同上 8 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 (1)…… 30
第 17 図 同上 8 トレンチ平面図・出土遺物 (2)…… 31
第 18 図 富士御室浅間神社二合目本宮 表採遺物 …… 31
第 19 図 同上 9-1 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 32
第 20 図 同上 9-2 トレンチ平面図・セクション図・出土遺物 …… 33
第 21 図 富士御室浅間神社二合目本宮（H 22）トレンチ位置図 …… 34
第 22 図 同上 本殿跡周辺 セクション図 …… 35
第 23 図 同上 拝殿周辺 礎石および石段 平面図…… 36
第 24 図 同上 4 トレンチ全体図・セクション図・出土遺物 …… 37
第 25 図 同上 2 トレンチ 出土遺物 …… 38
第 26 図 同上 表採遺物 (1) …… 38
第 27 図 同上 表採遺物（2）…… 39
第 28 図 二合目 一の鳥居周辺テラス 平面図・セクション図 …… 40
第 29 図 同上 セクション図・出土遺物 …… 41
第 30 図 定善（禅）院跡伝承地 トレンチ位置図・出土遺物…… 42
第 31 図 同上 セクション図 (1) …… 43
第 32 図 同上 セクション図 (2) …… 44
第 33 図 同上 6 トレンチ 平面図・セクション図 …… 45
第 34 図 同上 6 トレンチ 出土石碑および石灯籠の笠部 …… 46
第 35 図 同上 出土石造物 …… 47
第 36 図 富士山五合目周辺 信仰拠点位置図…… 48
第 37 図 富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点 概況図 …… 49
第 38 図 同上 第 1 テラス 平面図・セクション図…… 50
第 39 図 同上 第 3 テラス 平面図・セクション図・出土遺物 (1) …… 51
第 40 図 同上 第 3 テラス 出土遺物 (2)
同上 第 10 テラス 平面図・出土遺物・周辺表採遺物 …… 52
第 41 図 旧富士守福荷周辺で発見された石碑…… 53
第 42 図 北口本宮富士浅間神社 周辺図 …… 63
第 43 図 同上 A 地区・B 地区トレンチ位置図 …… 64
第 44 図 同上 B 地区 出土遺物 …… 64
第 45 図 同上 A 地区 トレンチ平面図・セクション図…… 65
第 46 図 同上 B 地区 トレンチ平面図・セクション図…… 66
第 47 図 北口本宮富士浅間神社 C 地区 トレンチ位置図 …… 67
第 48 図 同上 C 地区 1 トレンチ 平面図・セクション図…… 68
第 49 図 同上 C 地区 1 トレンチ 集石状遺構 …… 69
第 50 図 同上 C 地区 1 トレンチ 出土遺物 …… 69
第 51 図 同上 C 地区 2・7 トレンチ 平面図・セクション図 …… 70
第 52 図 同上 C 地区 2・7 トレンチ 出土遺物 …… 70
第 53 図 同上 C 地区 3・5 トレンチ 平面図・セクション図 …… 71
第 54 図 同上 C 地区 3・5 トレンチ 出土遺物 …… 71
第 55 図 同上 C 地区 4 トレンチ 平面図・セクション図…… 72
第 56 図 同上 C 地区 4 トレンチ 出土遺物…… 72
第 57 図 同上 C 地区 6 トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物…73
第 58 図 同上 C 地区 8 トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物…74
第 59 図 同上 C 地区 9 トレンチ 平面図・セクション図…… 75
第 60 図 同上 C 地区 11 トレンチ 平面図・セクション図 …… 76
第 61 図 大塚丘 近接地 トレンチ位置図 …… 77
第 62 図 同上 トレンチセクション図 (1) …… 78
第 63 図 同上 トレンチセクション図 (2) …… 79
第 64 図 同上 出土遺物・表採遺物 …… 80
第 65 図 北口本宮冨士浅間神社（随神門周辺）トレンチ位置図 …… 81
第 66 図 同上 セクション図 …… 82
第 67 図 同上 出土遺物 …… 83
第 68 図 御室浅間神社里宮 調査区・トレンチ位置図・出土遺物 …… 84
第 69 図 同上 セクション図 (1) …… 85
第 70 図 同上 セクション図 (2) …… 86
第 71 図 同上 A 地区 石列検出状況・出土遺物…… 87
第 72 図 同上 石垣 エレベーション図 …… 88
第 73 図 同上 片山社上台石 平面図・セクション図…… 89
第 74 図 同上 片山社上台石 出土遺物 (1) …… 90
第 75 図 同上 片山社上台石 出土遺物 (2) …… 91
第 76 図 河口浅間神社周辺図…… 92
第 77 図 同上 A 地区 トレンチ位置図・セクション図…… 93
第 78 図 同上 B 地区 トレンチ位置図・セクション図 …… 94
第 79 図 同上 B 地区 集石状遺構・出土遺物 …… 95
第 80 図 同上 C 地区 全体図 …… 96
第 81 図 宮ノ上遺跡 トレンチ位置図・セクション図・出土遺物 (1) …97
第 82 図 河口浅間神社 A 地区 出土遺物 …… 98
第 83 図 宮ノ上遺跡 出土遺物 (2) …… 98
第 84 図 河口浅間神社に伝わる文化財 (1) …… 99
第 85 図 河口浅間神社に伝わる文化財 (2) 10 は廂構遺跡出土遺物 … 100
第 86 図 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原 A 地点 全体図 …… 101
第 87 図 同上 コの字状石積 平面図・エレベーション図…… 102
第 88 図 同上 セクション図・出土遺物 …… 103
第 89 図 行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）全体図 …… 104
第 90 図 同上 セクション図、A 区 出土遺物 (1) …… 105
第 91 図 同上 A 区 出土遺物 (2) …… 106
第 92 図 同上 セクション図、C 区 出土遺物 (1) …… 106
第 93 図 同上 セクション図、C 区 全体図・セクション図…… 107
第 94 図 同上 C 区 出土遺物 (2) …… 108
第 95 図 同上 表採遺物 (1) …… 108
第 96 図 同上 表採遺物 (2) …… 109
第 97 図 行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）全体図・出土遺物 … 110
第 98 図 同上 セクション図 …… 111
第 99 図 権名池（足和田山中）全体図・エレベーション図 …… 112
第 100 図 藤塚（山中湖村）周辺図 …… 113
第 101 図 山梨県の富士塚分布図 …… 114
第 102 図 富士山吉田口登山道測量図 …… 125・126

表 目 次

第１表　踏査地一覧 ……13・14
第２表　山梨県の富士塚一覧 …… 114
第３表　陶磁器類遺物観察表 …… 115～117
第４表　金属製品観察表 …… 118
第５表　古銭観察表 …… 119・120
第６表　石製品観察表 …… 121
第７表　その他観察表 …… 121
第８表　河口浅間神社に伝わる文化財 遺物観察表 …… 122
第９表　疱瘡道祖 出土遺物観察表 …… 122

第１章　調査経過と組織

第１節　調査目的

当センターでは、未調査の重要遺跡について発掘調査の対象となる埋蔵文化財としての位置づけを行い、遺跡の保護・保存をはかるため、これまでに７事業を実施してきた。直近では、平成16年度からの５ヵ年で「山梨県内中世寺院分布調査」を実施したが、そのなかで、富士山信仰に関わる遺跡が多数存在していることを改めて確認した。富士山信仰遺跡は富士山の北麓地域を中心に縄文時代から近現代に至るまで多数点在している。また郡内地域に限らず、甲府盆地地域にも同様な遺跡が点在する。これら遺跡の内容は、遥拝所、寺社とその旧地、宿泊施設とそれらを繋ぐルート、富士塚、溶岩洞穴など多岐に渡っている。

今回の調査は、これら失われつつある山岳信仰に関わる遺跡の資料収集や聞き取り調査、試掘確認調査などを行ない、保護・保存のための基礎資料を早急に作成することを目的として、文化庁の補助金を得て３ヵ年計画で実施した。

第２節　調査方法と調査の流れ

本事業で、調査対象とする「山岳信仰遺跡」は、県内に所在するものとし、特に富士山信仰に関わる遺跡についての調査を実施した。地域については、富士山に近い県南東部の地域を主な対象地域とした。調査の開始にあたって、「山梨県内山岳信仰遺跡分布調査実施要項」（平成21年４月10日施行）により、平成21～23年度の年次計画を策定した。まず、平成21年～22年で聞き取り・地域伝承採取・遺物の表面採集・地形観察を目的として踏査を行ない、踏査結果により調査が必要であると判断された地点については、試掘確認調査を実施した。また併せて各地点の状況に合わせた関連調査を実施した。調査地点は以下の通りである。

なお太字は、今回の調査で埋蔵文化財包蔵地として周知化した遺跡である。北口本宮冨士浅間神社社有地および河口浅間神社社有地については、平成23年２月７日付で史跡となっており、保護措置がとられているため、それ以降の調査により遺跡と判断された場合の周知化は行なっていない。

〔平成21年度〕

試掘確認調査

- **富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡**（富士山二合目：富士河口湖町）
- 北口本宮冨士浅間神社境内地・**御鞍石遺跡**（富士吉田市）

地中レーダー探査

- 大塚丘（北口本宮冨士浅間神社社有地：富士吉田市）

〔平成22年度〕

試掘確認調査

- 冨士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）（富士河口湖町）
- **富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原Ａ地点**（富士吉田市）
- **富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点**（富士吉田市）
- **富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡**（富士山二合目：富士河口湖町）
- 大塚丘（北口本宮冨士浅間神社社有地：富士吉田市）

地中レーダー探査

- 北口本宮冨士浅間神社境内地（富士吉田市）
- 河口浅間神社境内地（富士河口湖町）
- 藤塚（山中湖村）

簡易ボーリング調査

・大塚丘（北口本宮冨士浅間神社社有地：富士吉田市）

〔平成23年度〕

試掘確認調査

・北口本宮冨士浅間神社境内地（富士吉田市）

・河口浅間神社境内地（富士河口湖町）

・**宮ノ上遺跡**（富士河口湖町）

・**行者平遺跡**（大善寺行者堂跡伝承地：笛吹市）

・行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地：鳴沢村）

地中レーダー探査

・河口浅間神社境内地（富士河口湖町）

・御墓（富士河口湖町）

【山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査　実施要綱】

（調査目的）

第1条　本事業は、埋蔵文化財包蔵地としての周知が図られず、開発行為等による破壊や消滅の畏れがある山梨県内の山岳信仰遺跡の所在位置・時期・内容等を調査・整理することにより、埋蔵文化財包蔵地として周知し、開発行為等との調整や保存整備・活用のための基礎資料を作成することを目的とする。なお、今回の事業は国庫補助を受け、平成21年度から平成23年度までの3ヵ年計画で実施するものとする。

（事業名称）

第2条　本事業の名称は、「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査」とする。

（事業内容）

第3条　本事業の内容は、山梨県内に残る山岳信仰遺跡の所在と内容についての詳細分布調査とする。

（事業主体）

第4条　本事業の主体は、山梨県教育委員会とし、山梨県埋蔵文化財センターが実施する。

（調査組織）

第5条　本事業の調査組織は、以下のとおりとする。

ア）事務局

山梨県教育庁学術文化財課

山梨県埋蔵文化財センター

イ）指導者会議

学識経験者より調査に係わる指導・助言を得るため、別に定める「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査指導者会議設置要項」に基づいて設置する

ウ）協力者・協力機関

市町村教育委員会

関係寺社ほか

（調査対象）

第6条　本事業の調査対象は、県内に所在する山岳信仰遺跡を主たる対象とする。ただし山岳信仰遺跡に関しては調査手法が確立していないため、それに関係する施設・遺構等（道・遙拝所・寺社・伝承地・石造物・宿泊施設など）を調査することによって、山岳信仰の実態を明らかにする。

（調査計画）

第７条　各年度における調査計画は、概ね以下のとおりとする。ただし、各年度の調査対象の詳細については、平成 21 年度中に各年次調査計画を定める。

平成 21 年度　基礎資料の調査、試掘・測量を伴う現地調査１

平成 22 年度　基礎資料の調査、試掘・測量を伴う現地調査２

平成 23 年度　補足追加調査および調査報告書の作成、印刷製本

（調査方法）

第８条　調査は、以下に挙げる基礎資料の調査を経て、踏査・発掘調査・測量調査を行なうものとし、最終年度に調査結果を報告書にまとめる。

１）基礎資料の調査

各種の文献資料、発掘調査・遺跡詳細分布調査資料（発掘調査報告書等）、各地域・関係社寺に残る口承・伝承等を含む資料の調査や信仰と関わりのある場についての調査（カード化）

２）発掘調査等の現地調査

山岳信仰遺跡の所在および範囲や性格を確認するための踏査および発掘調査や測量調査

（その他）

第９条　この要綱に定めるもののほか、調査に関して必要な事項については、事務局が協議して定める。

附　則

この要綱は、平成 21 年６月 10 日から施行する。

第３節　指導者会議

当事業では、「山梨県内山岳信仰遺跡分布調査指導者会議設置要項」（平成 21 年６月 10 日施行）に基づき、県内外の学識経験者５名よりなる指導者会議を設置した。指導者会議は年間３回を開催し、専門的かつ客観的な視点により調査方法の検討やその成果の検証・評価を行なうことを目的とした。その内容については、年度初回は、調査予定箇所の調査方法、留意点に関する指導・助言を行ない、２回目は試掘確認調査の現地視察を行なった。また３回目は調査結果の検討及び次年度の調査計画についての助言を行なった。さらにこれら指導者会議の他、資料調査への参加や調査の視察なども行なった。また平成 23 年度の第２回指導者会議については、調査成果を広く一般の方々にも知ってもらうために、「富士山と山岳信仰遺跡」と題し、山梨県富士山総合学術調査研究委員会と合同で、公開発表会形式での開催とした。

〔開催の記録〕

平成21年度	第１回	平成21年10月26日13：00 ～ 17：00	於：北口本宮富士浅間神社 富士吉田市歴史民俗博物館
	第２回	平成22年２月15日13：30 ～ 17：00	於：県民会館403会議室
		同　３月10日13：30 ～ 17：00	於：埋蔵文化財センター
平成22年度	第１回	平成22年６月10日13：30 ～ 17：00	
		同　６月11日13：30 ～ 17：00	於：富士御室浅間神社里宮
		同　６月24日13：30 ～ 17：00	河口浅間神社
	第２回	平成22年９月９日13：30 ～ 17：00	於：富士山二合目
		同　９月10日13：30 ～ 17：00	
		同　10月８日13：30 ～ 17：00	於：大塚丘 富士吉田市歴史民俗博物館

第３回　平成22年２月15日13：30～17：00　　於：県民会館702会議室
平成23年度　第１回　平成23年6月2日13：30～17：00　　於：河口浅間神社
甲州市立勝沼図書館
第２回　平成23年3月4日13：00～17：00　　於：富士吉田市民会館小ホール

【山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査　指導者会議設置要項】

（設置）
第１条　山梨県埋蔵文化財センター（以下、「センター」とする。）が実施する山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査（以下、「調査事業」とする。）について、その調査方法等を検討するために、山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査指導者会議（以下、「指導者会議」とする。）を設置する。
（組織）
第２条　指導者会議は、５名の指導者で構成する。
（所掌事項）
第３条　指導者会議は、調査事業について、必要な指導・助言を行なう。
（会議）
第４条　指導者会議は、センター所長（以下、「所長」とする。）が招集し、概ね年３回開催する。
（任期）
第５条　指導者の任期は、委嘱の日から所長が定める日までとする。
（関係者および有識者の出席等）
第６条　所長は、必要があると認めるときは、会議に指導者以外の出席を求め、意見又は説明を聴くことができる。
（事務局）
第７条　指導者会議の事務局は、センターに置く。
（その他）
第８条　この要項に定めるもののほか、指導者会議の運営に関して必要な事項は、所長が定める。

附　則
この要項は、平成21年６月10日から施行する。

第２章　富士山信仰遺跡の分布

第１節　富士山信仰の歴史

童謡「ふじの山」に歌われるように富士山は日本で一番高い山として親しまれている。特に近年は登山ブームを背景として、シーズンには多くの登山客で溢れかえっている。また地質学的に見ると典型的な成層火山であり、この種の火山特有の美しい稜線をもつ。このように雄大で美しい山姿は、古くから信仰の対象として人々の関心を集めてきた。富士山は、先小御岳火山・小御岳火山・古富士火山・新富士火山という複数の火山体から構成される。古富士火山は約10万年前から活動が始まり、約１万年前に現在に近い形になったと言われている。この類い希な山‘富士山’に対する信仰は、古くからあったと考えられている。例えば静岡県富士宮市の千居遺跡では縄文時代中期の住居跡や配石遺構等が発見されており、中でも配石遺構は富士山を意識する形で配置されていることから、富士山に対する祭祀的な遺構である可能性も説かれている。また山梨県都留市の牛石遺跡でも、直径50ｍの大形の環状配石遺構が見つかっており縄文時代中期には、富士山を意識した祭祀が行われていたと考

えてもよいのではないだろうか。富士山の噴火活動が国史に記されるのは、『続日本紀』天応元年（781）の条にある「七月癸亥。駿河国言す。富士山の下に灰を雨らす。灰の及ぶ所は木葉彫萎すと。」を初見とし、平安時代初期以降多くの記録が残されるようになる。噴火活動が活発化すると、富士山の荒ぶる神はより敬われるようになり、国は位階を授けた。このように噴火活動に対して国が積極的に関与するようになり、国家祭祀の対象として富士山の荒ぶる神（浅間大神）を鎮めるために駿河国に浅間大社が造られる。浅間大社ははじめ山宮の地に祀られるが、その後湧玉池の近くの、福地（フヂ、フチまたはフクチ）神社という富士山そのものを神として祀った神社の鎮座地に遷座する。浅間大社に場所を譲った福地神社はその後、別の場所に遷座する。ここに、純粋な自然崇拝の対象としての富士山信仰から国家祭祀の対象としての信仰へとシフトされていくようにも感じる。

その後、『日本三代実録』貞観６年（864）の条には、富士山の側火山である長尾山から大噴火して、甲斐国に甚大な被害をもたらした旨が、甲斐国からの報告として記されている。この被害により、甲斐国にも浅間明神が祀られることになる。この甲斐国で初めて置かれた浅間神社が現在のどの神社に該当するのかについては諸説あるが、『三代実録』の現地視察の記事に拠れば、神社は熔岩流に埋め立てられた「せの海」に近接して建てられたとあることや『和名抄』の郡郷配置などからすると、富士河口湖町河口に鎮座する河口浅間神社がこの神社に該当する可能性が高い。その 11 日後には山梨郡にも浅間明神が祀られたことが同じく『三代実録』の記述にあり、これは現在の笛吹市一宮町の浅間神社である可能性が高い。

平安時代の終わり頃から、噴火活動が一段落すると、山中での宗教活動の痕跡が伺えるようになる。『本朝世紀』には、久安５年（1149）、末代上人が山頂に登り大日寺を建立したという記事がある。また山頂の三島ヶ嶽南麓から出土したと伝わる経典群は末代が埋納した一切経である可能性があり、この時期には宗教者による山中での活動が活発になったものと考えられる。二合目の富士御室浅間神社本宮には、かつて文治５年（1189）銘の日本武尊像と建久３年（1192）銘の女神像があったと『甲斐国志』には記されていることから、末代とその周辺の人々による富士山頂での宗教的活動を皮切りに、山中での宗教行為がより活発化したとも言えるのではないだろうか。また富士御室浅間神社の神像は、その銘に走湯山の覚実らにより納められたことが記されており、走湯修験と富士山との関わりも伺える。また、末代の流れをくむ頼尊という人物が「富士行」を創設し、富士修験（村山修験）を確立させる。その後、室町時代中頃に至ると『勝山記』の明応９年（1500）の条に「此年六月富士へ道者参ル事無限。」という記述が見られ、この頃には一般民衆による登拝が一般的に行なわれていたことがわかる。

また角行は、『吾妻鏡』などで「浅間大菩薩の御在所」と記される人穴で 16 世紀から 17 世紀に修行したとされるが、この角行を祖とする富士講は、江戸時代に入って多くの信者を集めるようになる。この富士講は、享保 18 年（1733）の食行身禄の富士山七合五勺烏帽子岩での入定後、さらに大きく繁栄した。また同じ享保年間には村上光清による、北口本宮富士浅間神社の大改修が行われたが、この２人の存在により、富士講は関東を中心にさらに栄えた。

時は移り明治時代に至ると、神仏分離令のもと廃仏毀釈の波が富士山にも訪れる。山中および周辺の仏教施設は神社内に組み込まれ、仏教色はことごとく排除された。1872 年には、信仰の山における女人禁制が解禁され、富士山への登拝はさらに拡大した。19 世紀以降、東海道線や中央線等の鉄道の開通や、北麓の富士山スバルライン、南麓の富士山スカイラインなど自動車道の開通により、交通手段が確保されると登山者は急激に増加した。時代が下るに従い、人々の登山の動機は、信仰中心のものから富士山への憧れを主とするものへと変化していったが、その核には富士山という偉大な自然に対する畏敬の念が今も変わらず息づいているのではないだろうか。

第２節　分布図について

今回の調査にあたって、富士山信仰と関わりのある寺社・その旧地など関連箇所を挙げ、その中から調査地点を洗い出す作業を行なった。関連箇所については、細かいものも挙げていくと膨大な数に上るため、今回は中でも特に関連のあるものを選んで地図上に落とした（第３・４図）。

第３章　富士山信仰遺跡の調査

第１節　富士山信仰遺跡に関するこれまでの調査

これまでに実施された富士山信仰遺跡に関わる発掘調査としては、富士山吉田口登山道関連遺跡の発掘調査、富士山二合目の冨士御室浅間神社本宮社有地の円楽寺行者堂跡推定地の試掘確認調査がある。前者は歴史の道整備活用推進事業の中で、旧来の登山道の遺構確認を目的として、富士吉田市教育委員会により平成８年～ 10 年にかけて、馬返しから一合目までの発掘調査が実施された。この調査によって明治時代の終わりに開かれた現登山道以前の旧道や、一合目鈴原社前の山小屋、一字一石経塚の存在が明らかとなった。後者は山梨県内中世寺院分布調査の一環として山梨県教育委員会により実施された調査で、この行者堂跡は甲府市盆地にある真言宗の古刹円楽寺の富士山側の拠点施設であると考えられている。円楽寺には、役行者像としては最古級である鎌倉時代の像が伝えられているが、かつてはこの像が夏季に富士山二合目の行者堂で祀られていたと言われている。調査の結果、行者堂があったとされるテラス付近で、登山道に沿う形で石列が確認された。またテラス壁面では、土留めの為の石垣も確認されている。出土遺物で注目されるのは、13 世紀初頭の東遠系の山茶碗片が出土していることである。この他、発掘調査ではないが、富士吉田市史編纂事業の一環として、馬返から頂上までと噴火口を一周する範囲についての分布調査が行われ、山中各所において銅銭・鉄鏃・鎌・和鏡の小破片・銅造仏像の破片・鉄釘等が表採されている。

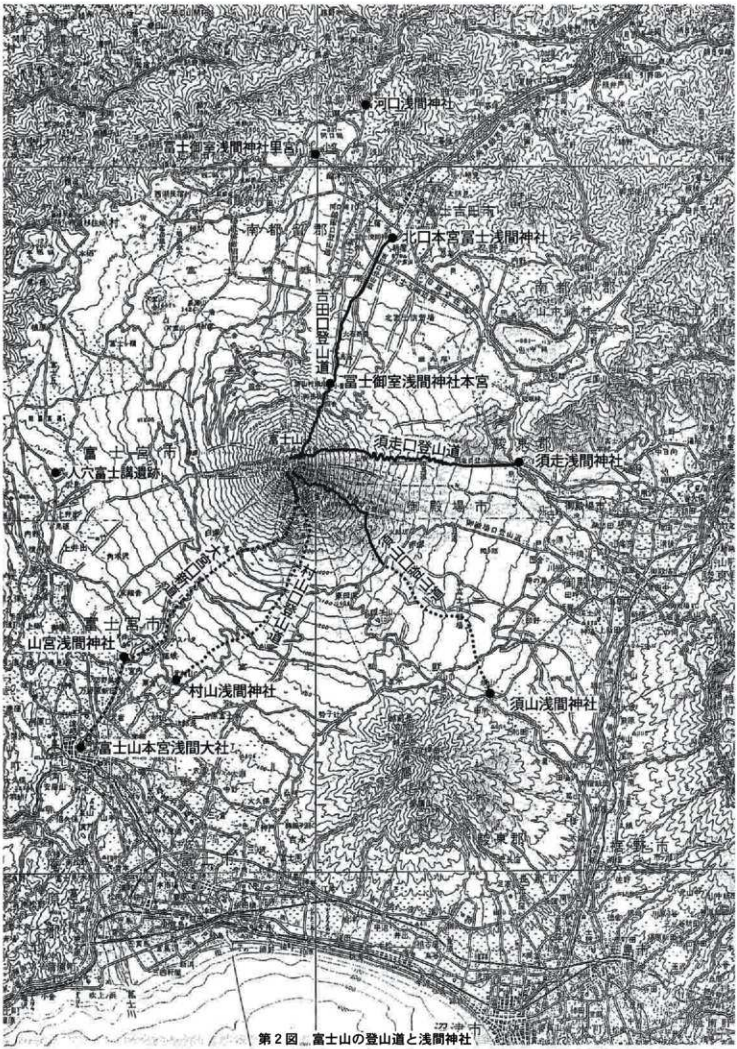
第２節　調査地の選定について

試掘確認調査については 10 箇所、関連調査として、地中レーダー探査については４箇所、簡易ボーリング調査については１箇所の調査を実施した。調査対象地については、事前に聞き取りや踏査を実施し、指導者会議にかけて決定した。また特に富士山中の調査については、山梨県側からみた富士山の信仰世界を描いた最古の絵画資料である『八葉九尊図』（延宝８年（1680））（第１図）を調査箇所の選定資料として活用した。

『八葉九尊図』

第１図

木版墨色　延宝８年（1680）　正福寺（版木所蔵）



第２図　富士山の登山道と浅間神社

S＝1/200,000

第３図　富士山信仰関連地点分布図１

○・・・調査地　　●・・・踏査地

第４図　富士山信仰関連地点分布図２

0　5000m

第１表　踏査地一覧

	名　称	住　所	内　容
1	柏尾山　大善寺	甲州市勝沼町勝沼 3559	真言宗智山派　養老２年(718) の創建、開基は行基とされ柏尾山と号する。神変堂（役行者堂）元禄 13 年（1700）土屋相模守が建立。鎌倉時代に作られたとされる行者像を御坂峠より遷し安置。柏尾山経塚出土の康和５年（1103 年）在銘経筒には当時の伽藍の様子が記され天台寺院として機能していたことも示される。
2	廻橋遺跡	富士河口湖町河口 1343 ほか	御坂峠へ続いている旧鎌倉街道に隣接。縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺物が出土。
3	母ノ白滝	富士河口湖町河口	アメノオシオミ尊の皇后で栲幡千々姫命（タクハタチチヒメンミコト）が祀られる。また木花咲耶姫命（浅間明神）の姉神。平安時代のころより富士登山者は村の宿坊を宿にし、この滝で潔斎をおこない富士山へと向かったとされる。
4	産屋ヶ崎	富士河口湖町浅川	瓊瓊杵尊と木花咲耶姫命が結婚し、わずか一夜で身ごもった子を国津神の子ではないかとの疑いを晴らすため、誓約をして産屋に入り「天津神であるニニギの本当の子なら何があっても無事に産めるはず」と無戸室に火を放ち、火照命（ﾎﾃﾞﾘ）、火須勢理命（ﾎｽｾﾘ）、火遠理命（ﾎｵﾘ）という御子を無事に出産。このことから産屋ヶ崎と名がついたといわれる
5	霊鷲山　常在寺	富士河口町小立 139	寺伝では真言宗の忠門田山法寺と号す　妙法寺は末寺　明応９年（1500）に日国が妙法寺の住僧に迎えられるが、永正５年（1508）に当寺に戻る　平成７年 (1995) に山梨県史編纂の調査において「日国覚書」を発見し「勝山記・妙法寺記」の原本系統に属する史料から転写された断片であると考えられている。
6	寺ノ入遺跡	上暮地字寺ノ入	現在富士吉田市寿町にある宝珠山福昌寺の前身となる寺院があったとされる。
7	持名山　蓮華寺	富士河口湖町大嵐６	大同４年（809）弘法大師空海が富士山小室社に安置されていた諸像を大原村（蓮華寺）へ移し一宇を建立、大同山御堂寺という真言宗寺院を開く。弘安５年 (1282) 日蓮聖人が身延山より常陸の国へ向かう途中、川口村上ノ坊に宿した際に、河口浅間神社の御師の梅谷采女を折伏。翌日、采女の兄弟（法玄阿闍梨）のいる御堂寺に聖人をつれてゆき折伏。これより真言宗から日蓮宗へと改宗。寺号も大同山御堂寺から持明山蓮華寺となり、紋は梅谷の紋を用いる。鰐口（享禄元年（室町時代）作・県指定有形文化財）が伝わる。
8	新倉山　正福寺	富士吉田市新倉５８５	浄土真宗本願寺派。弘法大師空海の高弟道海が真言宗富北院に起源し、建長年間（1249 ～ 56）に至って真宗寺院となる。かつて富士山五合目に小屋を所持　19 世紀初頭には当寺の手を離れていたが、緑年（庚申年）になされた牛玉宝印（富士山宝印）や「八葉九尊図」の配布は継続し多くの版木が伝存するなか、延宝８年（1680）の「八葉九尊図」は富士山北面の信仰世界を描いた図像としては最古のものと考えられる。
9	大原山　如来寺	富士吉田市新倉 613	浄土真宗本願派。一説に救願寺と称する真言宗寺院に起こる。安貞２年（1228）甲斐を遊化中の親鸞に帰依し真宗に改宗。また遊行上人が巡錫の折に開いた時宗道場に起源すると述べる由緒もある。富士山七合三勺の所在した太子小屋（現太子館）を所持。文化８年（181 1）に江戸の講中より寄進された「太子像」が祭祀されていた。現在は境内一隅の太子堂に安置。
10	聖徳山　福源寺	富士吉田市下吉田 5780	浄土真宗本願派。聖徳寺と号する真言宗寺院に起こるというが詳細は不明。文安４年 (1447) 蓮如が遊化した折改宗。境内に建つ「太子堂」には聖徳太子の自筆といわれる太子 16 歳の肖像画と太子の木像が安置されている。
11	小室浅間神社	富士吉田市下吉田 5221	延暦 12 年（793 年）、征夷大将軍坂上田村麻呂が東征の際、この地より富士山を遙拝。戦勝祈願し大勝、その神護を謝して大同２年 (807) 社殿を建てる。社号は幕末まで「下宮浅間」、明治に入り「小室浅間神社」と改称。上吉田・下吉田・松山の三村の産土神。
12	水上山　月江寺	富士吉田市下吉田 869	寺伝によると浅間明神（北口本宮冨士浅間神社）の祈願を司った天台宗寺院称光院に起こる。14 世紀末、上吉田の祥春庵（現廃絶）に寄留した向嶽寺（甲州市）の開山抜隊得勝の高弟絶学祖能が再興を企図、毎年 6.7 月には富士参詣の道者に勧進し再興。月江庵と称し向嶽寺の末派になる。17 世紀初頭、妙心寺の派下に転じる。禅刹となったのちも浅間明神との関係は維持され、明治初頭まで同社境内の随神門を所管。

	名　称	住　所	内　容
13	小室浅間神社	富士吉田市大明見 148	近世の神社名は浅間明神（甲斐国志）、富士浅間大神（社記・寺記）。この地域には２軒の御師があり、富士浅間御師としての活動をとあわせ神社とも関わりがあった。祭神は木花咲耶姫命、誉田別命、国狭槌命
15	法輪山　地蔵寺	富士吉田市上吉田 5-5-25	臨済宗妙心寺派。下吉田にある月江寺の末寺。天５年 (1577) に雪峰和尚が開基したとされる。本尊は地蔵菩薩。甲斐国志・社記に諏訪明神（現諏訪神社）の別地に建立されたと記される。
16	吉穐山　西念寺	富士吉田市上吉田 7-7-1	養老３年（719）、行基により開創された天台宗寺院。富士山来迎阿弥陀三尊を安置し、富士道場と呼ばれた。永仁６年（1298）遊行２世他阿真教によって改宗し甲斐武田氏一族、一条右衛門太夫吉穐を本願として諸堂を再建し、吉穐山と号する。富士山の一合五尺に所在したといわれる定善（禅）院は塔頭清光院の所管で６，７月の登拝期にはその住僧が参籠し法要を執行した。本尊は薬師如来立像で県文化財に指定。現在も火祭の執行に際し諏訪神社の社頭へ参詣し諷経。御幸する神輿を門前で出迎える。
17	吉祥山　上行寺	富士吉田市上吉田 38	養老２年（718）富居入山のころ休道坊と号したものが寺院となる。文永６年（1269）に日蓮大士を開山として改宗。寺所蔵の釈迦如来立像は、８世紀頃朝鮮の新羅で造られ日勝聖人の手で富士山へもたらされ、上行寺に納められたとされる。日蓮上人木坐像、多宝如来、釈迦牟尼仏
18	魔王天神社	南都留郡鳴沢村 7932	社殿はなく、この社中に古くは太郎坊の小祠があり、後に富士山小御居に遷され小御居権現と称する。
19	船津胎内樹型	富士河口湖町船津剣丸尾 6663	元和３年 (1617) 富士講の開祖長谷川角行が富士登山の際、焼入（現胎内の南上）に洞穴を発見し浅間明神を祀る。延宝元年（1673）富士仙元道５世村上七衛門は現在の胎内洞穴を発見し、開祖が祀った浅間明神を遷宮する。浅間明神誕生の地ともいわれ、木花咲耶姫命が無戸室に火を放ち無事に無事に皇子を出産したという故事にならい無戸室浅間神社と称す。宝永２年 (1705) 本殿建立。仙元道信徒は登山の往復に胎内をくぐり身の潔斎をおこなった。
20	忍草山　東円寺	南都留郡忍野村忍草 38	天台宗東叡山寺末、その後比叡山延暦寺末。忍草浅間神社の別当寺、創建年代は不明。　浅間神社神体に「正和４年 (1315) 別当東円寺」とある。江戸時代は大日寺と号し廃仏毀釈の折、鉾原社（当時は大日堂）から降ろされた不動明王を受け入れる。江戸時代以前の旧地と伝わる斜面には雛壇状の平場がある。
21	忍草浅間神社	南都留郡忍野村忍草向屋敷 456	建久４年 (1193) 源頼朝から朱印地を賜り鎌倉幕府の武運長久祈祷を申し付けられる。随神門・金銅力士像を建立したと伝わる。本殿には慶長８年 (1613) の棟札がある。正和４年（1315）10 月 13 日銘のある木花開耶姫命、鷹飼、犬飼、（三神像）の御神体を所蔵。

第３節　富士山中の調査

第１項　富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡

（1）概要と調査に至る経緯

富士御室浅間神社は、富士山吉田口登山道二合目に鎮座する本宮と、河口湖の南岸に鎮座する里宮とから構成されている。神社由緒記によると、本宮は文武天皇３年 (699) 藤原朝臣義忠が勧進し、大同２年 (807) に坂上田村麻呂が社殿を創建したという由緒をもつ富士山中で最古の神社と伝えられる。『富士山明細図』の「二合目小室浅間社」（巻頭図版６）には、江戸時代末ころの神社周辺の景観がよくあらわされている。

地質的に見ると富士山二合目は、小富士火山（８万年前～氷河期時代が終わる 10,500 年前）の噴出物地帯であり、新富士火山期（後氷期）の堆積物や熔岩に覆われていない場所はここ以外にはほとんど見られないことから、古代においては土壌形成の由来による顕著な植生の違いがあった可能性が高い。神社周辺には、登山道が沢を渡る部分があり、またこの近くにはかつて「神泉飲料水」を汲んだ水場が今でも残されていることから、古くから信仰拠点として着目されていたと考えられる場所である。文献上の初現は、『諸州古文書』にある文明７年 (1475) の小林入道正善の神領証文であるが、『甲斐国志』によると、文治５年 (1189) 銘の男神像と建久３年 (1192) 銘の女体合掌神像が祀られていたとされ、神社の存在時期は少なくとも平安時代末～鎌倉時代初頭に遡るものと考えられる。ただしこれら神像は現在行方が知れない。平成 19 年には、「山梨県内中世寺院分布調査」において、神社に隣接する行者堂跡推定地の発掘調査が実施された。この行者堂は、甲府盆地の真言宗の古刹である円楽寺の兼帯である。調査により、テラス壁面を土留めする石垣や、13 世紀初頭に位置付けられる東遠系の山茶碗片などが見つかっている。

このように、富士山中での重要な信仰拠点のひとつでありながら、その創建年代等については、はっきりしたことがわかっていないため、第一に二合目の信仰拠点としての起源を探る目的で、第二には境内周辺に残るテラスの性格や使用時期を探り、また周辺の旧道と信仰施設との繋がりを考え、神社周辺の信仰拠点としてのかつての景観を知るためのデータを得る目的で平成 21 年 10 月５日～同 30 日にかけて調査を実施した。

なお、調査の結果、神社社有地である、富士河口湖町の飛び地の範囲を、富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡とした。

（2）試掘・確認調査

■平成 21 年度の調査（第６～ 20 図）

現在、拝殿が残るテラスとその裏の山林中に見られる小テラスについての調査を実施した。

第１トレンチ

建物跡などの遺構は発見されなかったが、永楽通宝や熙寧元寶など中世段階の銭貨４０点あまりが確認されている。土層の状況から、人為的なテラス造成がなされていると考えられる。

第２トレンチ

調査に入る前から、石が並んでいたが、石の上面が平らではなく建物礎石などではないと考えられる。旧道に面する小規模なテラスという状況は第１トレンチと同様であるが、銭貨の出土は５点と少ない。

第３トレンチ

拝殿が残るテラスから裏の山林に入ってすぐのところにあるテラスである。第１・２トレンチと比較するとやや規模の大きいテラスである。建物礎石と考えられる石が確認された。調査前から１基のみ石の頭が見えていたが、調査の結果６基の礎石が確認された。またここからは釘が９点発見された。釘が出土していない第１・２トレンチとは性格が異なり、建物があったことを補強するデータである。土層の堆積状況から、人為的なテラス造成がなされていると考えられる。

第４トレンチ

本殿裏側のマウンド状となった場所である。銭貨の他、土器片が確認されている。このトレンチを 120cmほ

ど掘り下げたところ、新富士中期（約 4,000 ～ 1,600 年前）と考えられる噴出物が確認されている。

第 5 トレンチ

本殿跡の北側にあたる場所である。土器片が確認された他、地表下 70cm～ 160cmにかけて炭化材が多く出土している。細かい破片ばかりではなく、10 ～ 20cm程度の大きな材も含まれていた。その分布を断面図で見ると、地表下約 50 ～ 60cmまでは土器等の遺物を含んでおり、炭化材は遺物を含む層より下から出土している。これら炭化材について奥水達司氏（県環境科学研究所）のご協力のもと年代測定を行った結果、西暦 1100 ～ 1200 年という結果が出た。

第 6 トレンチ

本殿跡の北側に接して設定したトレンチである。銭貨が 3 点出土した。土層の状況からすると、かなり改変されている状況が見られた。

第 7 トレンチ

拝殿裏側にあたる位置である。寛永通宝・文久永宝が 1 点ずつ発見された。

第 8 トレンチ

もともと石塔の一部があった場所である。寛永通宝や鉄銭（新寛永か）、土器片や陶磁器片も確認されている。

第 9 トレンチ

本殿跡の南に接して設定したトレンチである。ここからは本殿下の基礎となる版築と考えられる土層が確認されている。陶磁器片や銭貨も確認されている。

現在拝殿があるテラスの裏に広がる小テラスからも、遺物の出土が見られたことから、ここに広がる旧道とそれに面するテラスについても、ある段階で使われていたということが確認された。遺物の出土状況をみると、銭貨の出土が多い第 1 トレンチには何らかの信仰施設があった可能性もある。ただしここでは、礎石や建物跡などは確認されておらず、釘なども出土していないことから建物があったとは考えにくい。一方で第 3 トレンチからは建物礎石が確認され、釘の出土も見られることから、このテラスに建物が存在したことは確実と思われる。土層の堆積状況から第 1 ・ 3 テラスともに人為的な造成によるものと考えられる。

全体的な概観としては、遺物の出土状況から見ると、境内地内からは渡来銭に加えて寛永通宝など江戸期の銭貨が混在して見られるのに対して、境内地裏側からは渡来銭のみが見つかっており、江戸期の銭貨は含まれていない状況がある。ただし渡来銭は江戸期になっても使用されていたことから、銭貨のみで明確な時期分けをすることはできないが、旧道に面する山林中の小テラスは中世段階に使用されたものであり、江戸期には使われていなかったことを示唆している可能性もある。土器類は第 5 ・ 8 トレンチから多く見つかっている。土器の時期については、編年がある程度把握されている甲府盆地周辺地域と比較すると、15 世紀後半くらいに位置づけられるという見解もある。また、中世末頃、静岡県富士宮市の大宮城跡で出土している、富士系かわらけに類似するものも含まれているという指摘も得ている。郡内地域の、該期の土器様相についてはまだはっきりとわかっていない為、在地土器編年の中での、これら土器類の位置付け等については、今後の課題である。以上の成果や、現在の境内地が慶長年間に整備されたことを考え合わせると、整備以前には現在とは異なった景観が存在した可能性もある。

■平成 22 年度の調査（第 21 ～ 29 図）

前年度の調査で確認された神社周辺における信仰施設の広がりについて、旧道との関係を含めて明らかにするために、二合目一の鳥居に近接するテラス、神社より一段下のテラスである定善 (禅) 院跡推定地周辺について調査を実施した。また現在の境内地においては、前年度確認された本殿跡の版築について、その規模を確認する目的で調査を実施するとともに、現在の境内地であるテラスの造成状況について確認する目的でも調査を行なった。調査期間は、平成 22 年 9 月 2 日～ 10 月 6 日である。

本殿跡周辺（第１～３トレンチ）

本殿跡周辺では、全体的に付き固められた土層が確認されたが、それは方形のようなきちんとした形は成さないことが確認された。また合わせて、礎石の確認を行なった。礎石らしきものも幾つか確認されたが、規則的に並ぶものは見られなかった。

本殿裏側にあたる第２トレンチでは、前年度も確認されている古富士火山噴出物の続きが検出され、もとは東側（一合目方向）に向かって落ち込んでいく地形であったことが明らかとなった。

石碑群石垣裏（第４トレンチ）

富士講の石碑が立ち並ぶ石垣の上からは、石垣と軸を同じにする石列が確認された。その周辺からは近世の陶磁器片や寛永通宝などの銭貨が出土した。

二合目一の鳥居周辺のテラス

この周辺では、江戸期の陶磁器片が上方から落ちてきたような形で確認されている。上に何らかの施設等があり、そこから落ちてきたと考えるのが自然である。ただし踏査ではこの上方にテラスなどは確認されていない。その中で旧道に沿ってやや広いテラスが見られたが、このテラスには上にある富士御室浅間神社の裏側の山林を通って下ってくる旧道と、一合目方面から上り一の鳥居に向かう旧道とがクロスする位置にあたる。ここに２本のトレンチを設定した。調査の結果、両者のトレンチともに踏み固められた部分が確認され、ここが旧道として使われていたことが明らかとなった。一部には焼土が集中する箇所も確認されている。建物跡等の遺構は確認されなかった。

第２項　定善（禅）院跡伝承地（富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡内）

（1）概要と調査に至る経緯

『甲斐国志』によると、富士吉田市上吉田に所在する時衆寺院「西念寺」の塔頭のひとつであると伝えられる。ここでは西念寺の塔頭清光院の住僧が、毎年６・７月の登山期に参籠して常念仏を執行していたところであり、仏法修行の参詣者にとっての道場であったと思われる。現在西念寺に安置される「薬師仏（釈迦如来像）」〔山梨県指定文化財〕は、定善（禅）院の本尊であったと伝えられる。この台座には永享 12 年（1440）に作られたとの記録がある。『甲斐国志』には、定善（禅）院の記録は見られないことから、甲斐国志編纂時には廃寺であった可能性が高い。

この付近には、他に良好なテラスは存在しないため、定善（禅）院があったのはこの地点であると考えられてきた。このため、今回の調査は、第一にこのテラスに釈迦如来像の銘と同時期の建物跡等が存在するか確認すること、第二に、このテラスには旧道が通っていたものと考えられるが、テラス上にあった施設と旧道との位置関係を明らかにすることを目的として実施した。

なお、調査地点は、富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡内に含まれる。

（2）試掘・確認調査（第 30 ～ 35 図）

定善（禅）院跡伝承地のテラス（第１～５トレンチ・第８・９トレンチ）

７本のトレンチを設定し掘り下げを行なったが、全体的に土中には陶磁器片の他、ガラスや缶が含まれていることから、大規模に撹乱されているか、土を入れられているものと考えられる。土層は水平堆積であることから、撹乱後に平らにならされているものと想定される。出土した陶磁器類は江戸期～近代のもので、中世に属するものは含まれていない。周辺を見渡すと、現地は唯一の広い平坦地であることから、登山道の改修などの折にも資材置き場等として活用されたものと考えられる。また、富士御室浅間神社総代さんからは、昭和 49 年に本宮本殿を里宮へ下ろした時にも、解体した本殿の部材をこのテラスに仮置きしたという話を伺っている。このように、後世に作業スペースとして活用されたことも、遺構が確認されなかった一因である可能性もあるが、釈迦如来像の銘にあるような中世段階の遺物が皆無であったことから、あるいはもともと定善（禅）院があった場所がここ

ではなかった可能性も高いのではないだろうか。

旧道部分①（第６・７トレンチ）

江戸時代末期に制作され、吉田口登山道に点在する信仰拠点の風景を納めた『富士山明細図』の「二合目一ノ鳥居」（巻頭図版６）には、一の鳥居から右に大きく曲がって、冨士御室浅間神社に登り上げる道を行く道者の姿が描かれている。現地にはこれと同じカーブを描く旧道が残されているが、そこに大きな石が露頭する場所があり、ここを中心にトレンチを設定して掘り下げを行なった。調査の結果、露頭する大きな石の上には、富士講の石碑が倒れた状態のまま、埋もれているのが確認された。石碑の正面には「御中渡大願成就禅行」、右側面には「寛政八辰歳　七月二日　御師　外川能登守」、左側面には「江戸麻布廣尾町　先達　包市郎兵衛」と記され、御師である外川能登守と山包講の講祖的存在である包市郎兵衛によって、寛政８年(1796) に制作されたものであることがわかる。また、旧道部分に設置したトレンチからは (㊮)、(㊞) の講印（朱入れ）がある石灯籠の笠部分や四角く加工された石、陶磁器片、寛永通宝等が出土した。石灯籠の笠部分は、冨士御室浅間神社の拝殿前に埋没していたものと同じものであり、かつて、神社の拝殿前に設置されていた対の石灯籠であると考えられる。『富士山明細図』「二合目　小室浅間神社」にも神社前の鳥居の脇に対で描かれている（巻頭図版６）。これら石造物は、旧道に沿って神社周辺から転がり落ちてきたものと考えられる。ただし富士講の石碑は、倒れた状態で埋没していたことから、もともとは露頭する石の上に立っていたものと考えられる。とすれば、この道が登拝道として機能していたことを如実に物語っていると言える。

旧道部分②（第10・11トレンチ）

二合目一の鳥居から現登山道を挟んで、定善 (禅) 院跡伝承地のテラスに至る間に、幅の狭い平坦地がある。旧道を通って鳥居をくぐり、再び旧道から冨士御室浅間神社本宮を目指すにあたって、おそらくは旧道として機能していたと考えられる場所であったため、トレンチを設定した。その結果、道と考えられる踏み固められた範囲が確認された。このことからかつての旧道は、上述の「二合目一の鳥居周辺のテラス」から鳥居に至り、現登山道を横断し、「旧道部分②」を通って定善 (禅) 院跡伝承地のテラスを通過して、「旧道部分①」を上り上げて本宮に至ったものと推定される。

第３項　富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地点

（1）概要と調査に至る経緯

五合目は古くは中宮と呼ばれ、富士山における宗教上の大きなポイントのひとつであった。このあたりには、富士山中の役銭場のひとつである中宮役場が置かれていた。中宮改所は、戦国の頃に鐚銭改めのため１８軒の小屋が設けられ銭改が行なわれ、吉田・河口の師職が交代でそこへ詰めて銭改を行なったのが始まりと言われる。山梨県側の富士山中の信仰世界を描いた延宝８年 (1680) の版木『八葉九尊図』には「こやかす十八間」と記されており、延宝期までに中宮十八軒が成立していたことは確実である。その後、享保 18 年 (1733) の記録によれば、「富士山中宮惣小屋　中宮十八軒」と記されており、江戸時代中期にもこの辺りに 18 軒の小屋が設置されていたことがわかる。中宮小屋は、参詣道者からの山役銭の請取場所とされ、同時に茶屋など参詣道者の休憩所として商いが営まれていたと考えられている。五合目以上は「天地境」であり、それ以上は神聖な場所であると考えられてきたため、商い小屋を建てる事ができなかった。このため、早朝の御来光を拝む参詣者の宿泊施設として、ここに小屋が集中したものと考えられる。江戸時代中期以降は、信仰観の変化により、五合目周辺の小屋はより上へと移り４軒の小屋のみが残った。文献・絵画資料等によるとこのようないわれのある場所だが、赤色立体図によりこの周辺の地形をみると、五合目館跡よりも上で早川館跡よりも下の範囲の山林中に 20 ほどの小規模なテラスが段々に見られ、富士吉田市教育委員会の踏査によって現地を確認した。その結果、自然地形とは考えにくい小規模なテラスが集中していることから、ここが中宮十八軒に当たる場所であると想定し、比較的広いテラスを３つ選んで調査を実施した。調査期間は平成 22 年７月 15 日～同 23 日である。

（2）試掘・確認調査（第 36 ～ 40 図）

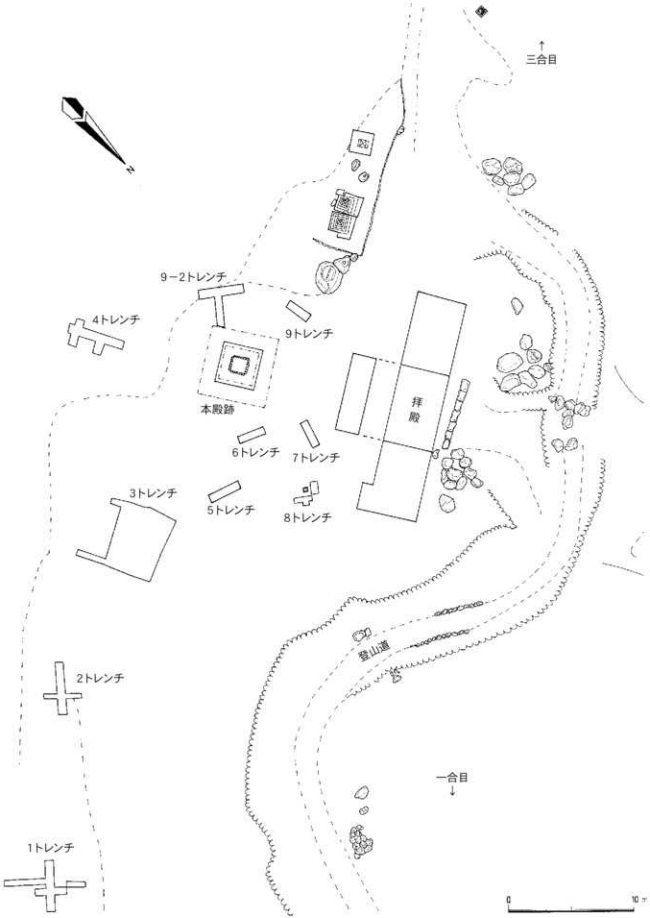
対象となるテラスのうち、第 1・3・10 テラスについてトレンチを設定した。第 1 テラスでは礎石状に並ぶ石が確認されている。第 3 テラスからは銭貨が 13 点出土した。鉄銭 1 点を除いては全て渡来銭であるが鐚銭が多い。また火打石も出土している。礎石等は発見されなかった。第 10 テラスは、拳大～人頭大程度の石が多く露出する場所があり、ここを中心に精査を行なったが、これらの石は建物礎石や基礎を成すものではなさそうである。ここからは寛永通宝などの銭貨が 3 点出土している。今回は 3 つのテラスのみの調査であったが、銭貨などの遺物が出土し、礎石とみられるものも見つかっていることから、この周辺に見られるヒナ段状の地形に中宮十八軒があったものと考えてよいのではないだろうか。また、ヒナ段の周辺には、それらを繋ぐような形で谷状に窪んだ旧道と考えられる溝が巡っている。ここからも徳利の破片が見つかっていることから、これら溝は旧道と考えられる。

第 4 項　五合目で発見された石碑（第 36・41 図）

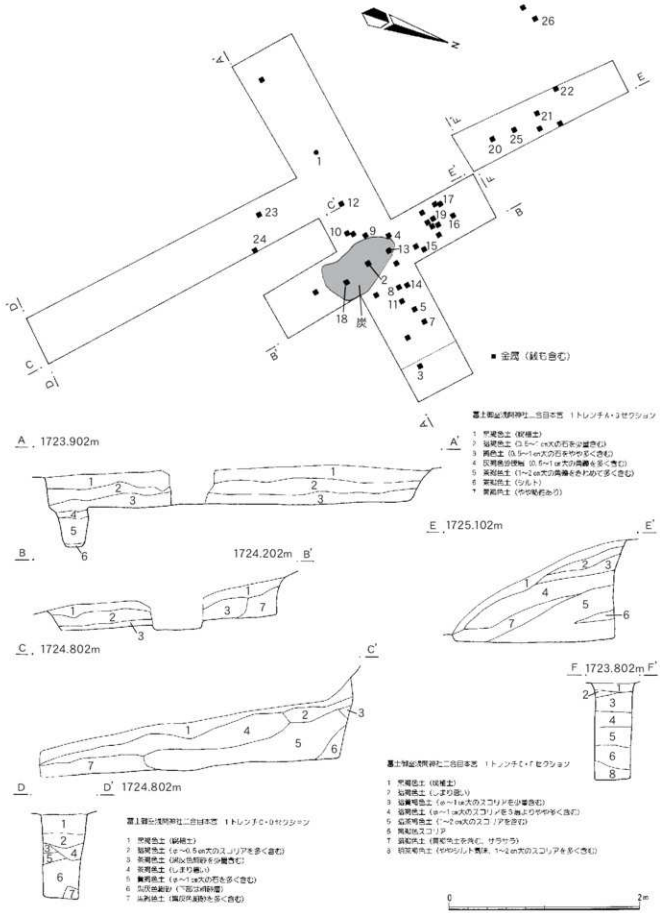
五合目には、かつて大日社・浅間社・稲荷社の 3 社が祀られており、また周辺には富士山中の役銭場のひとつである「中宮役場」が置かれており、この一帯は山中での重要な信仰拠点であったことが理解できる。しかしながらこれら主要建物は、雪代により流され跡形もなくなり、現在では富士守稲荷と、もとの富士守稲荷の跡地といわれる小テラスが残るのみである。このように山中での重要な信仰拠点であるにも関わらず、その跡地などよくわかっていないことから、周辺の地形および信仰拠点としての痕跡を確認することを目的として踏査を実施した。

その結果、富士守稲荷跡地の小テラスの西側で、旧道と考えられるＶ字状の凹みを確認した。さらにこの旧道沿いに大形の板状の石碑が倒れて埋もれているのを発見した。この石碑には茂木重蔵・家寿の記名があり、新井端氏（熊谷市立江南文化財センター）・金子正之氏（熊谷市立図書館）のご教示により、茂木重蔵氏は現在の埼玉県熊谷市で紙問屋を営んでいた方であることがわかった。この店は、戦前まで、関東でも大きな紙問屋として知られていたということである。また、重蔵氏の子孫にあたる茂木雄功氏の話により、「重蔵」名は名乗りで、雄功氏の祖父の代まで代々が名乗ったものであるという。石碑には残念ながら年号が確認できず、また「重蔵」名も代々の名乗りであることから、これがいつ頃奉納されたものであるのか正確な時期は出せないが、現在機能していない旧道沿いに設置されていることなどから考えると、明治時代まで遡ると考えてもよいのではないだろうか。この石碑は約 140㎝×約 80㎝とかなり大形で、これを五合目まで運んできた当時の人々の信仰心には驚かされる。

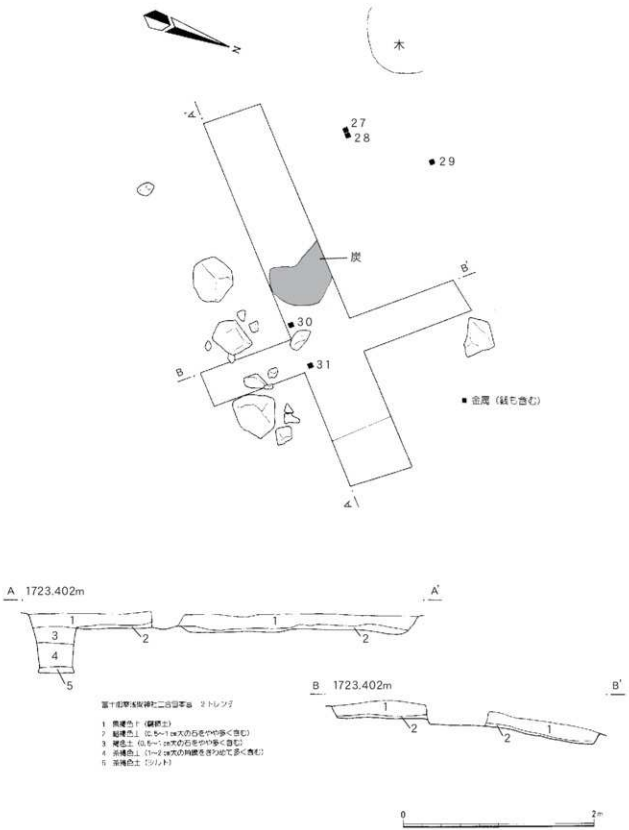
第 5 図　富士山二合目周辺図　　S=1/1,000



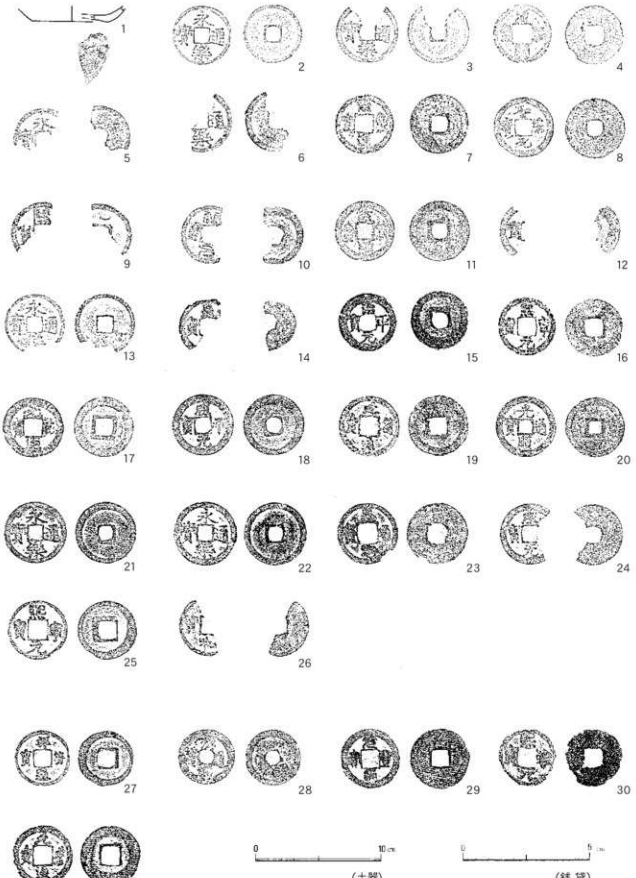
第6図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　トレンチ位置図



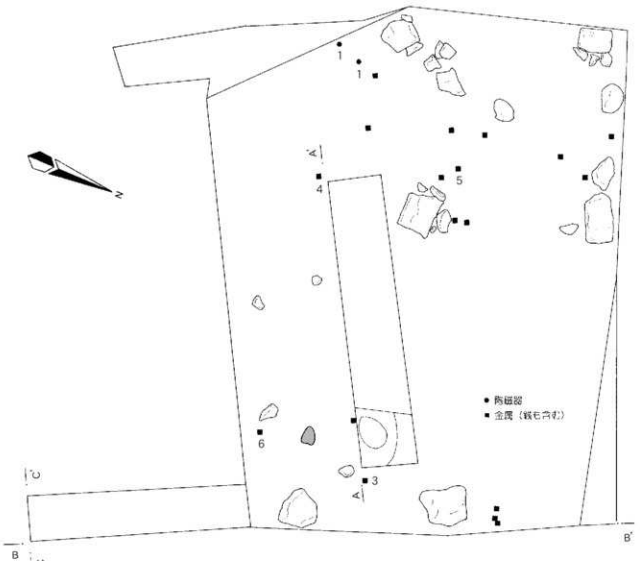
第７図　富士御室浅間神社二合目本宮（Ｈ２１）　１トレンチ 平面図・セレクション図

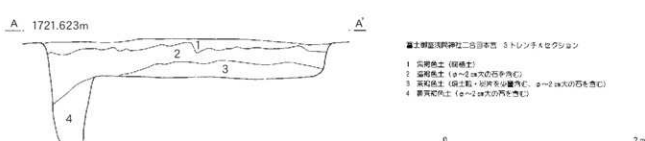


第8図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　2トレンチ 平面図・セレクション図

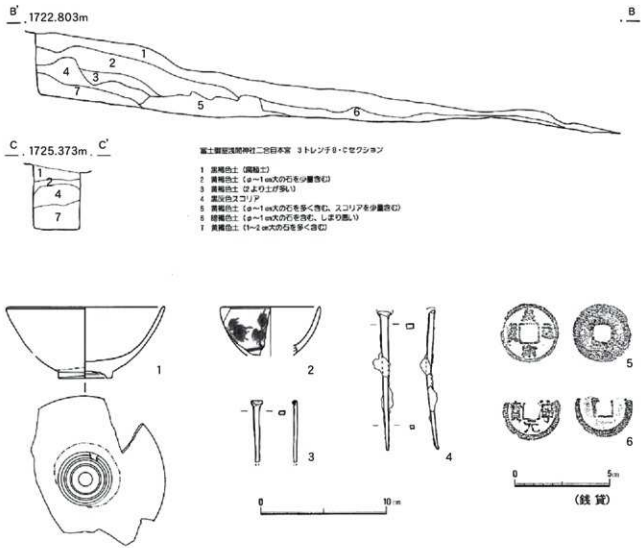


第9図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　1・2トレンチ　出土遺物

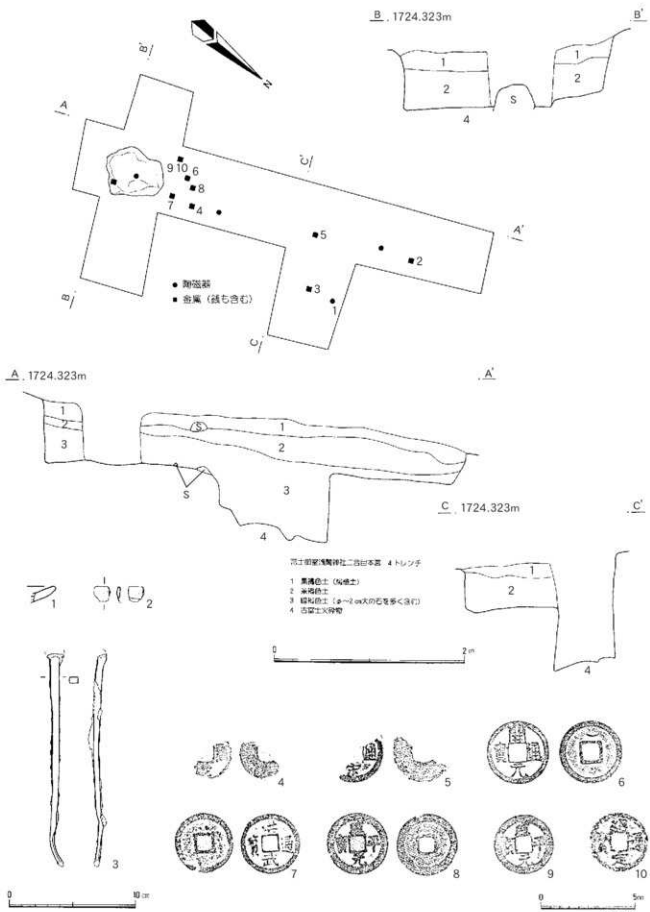




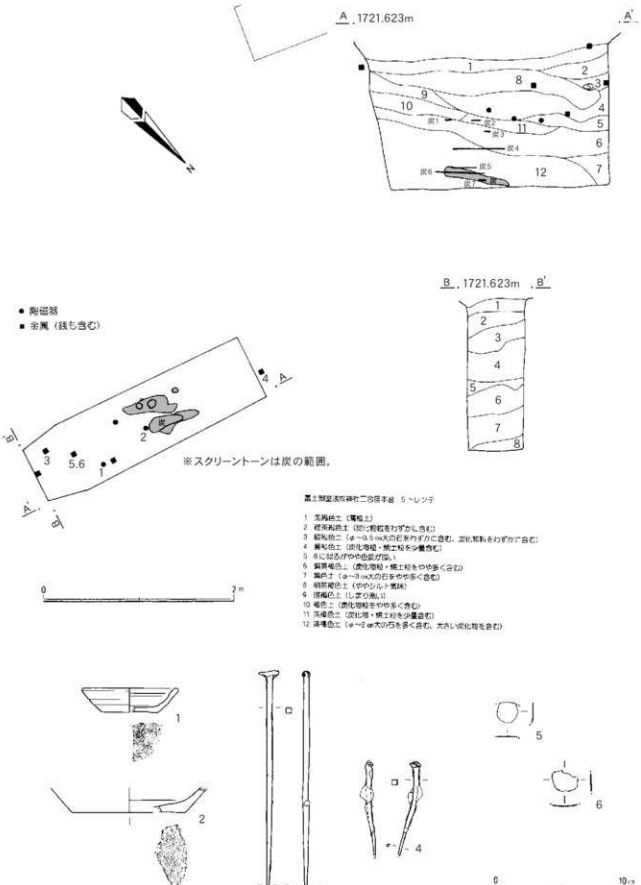
第10図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　3トレンチ　平面図・セクション図



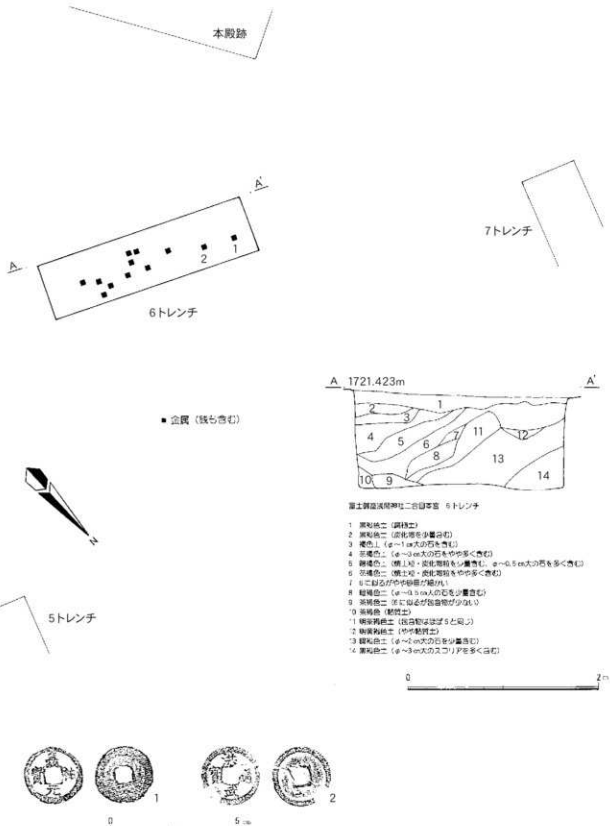
第11図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　3トレンチ　セクション図・出土遺物



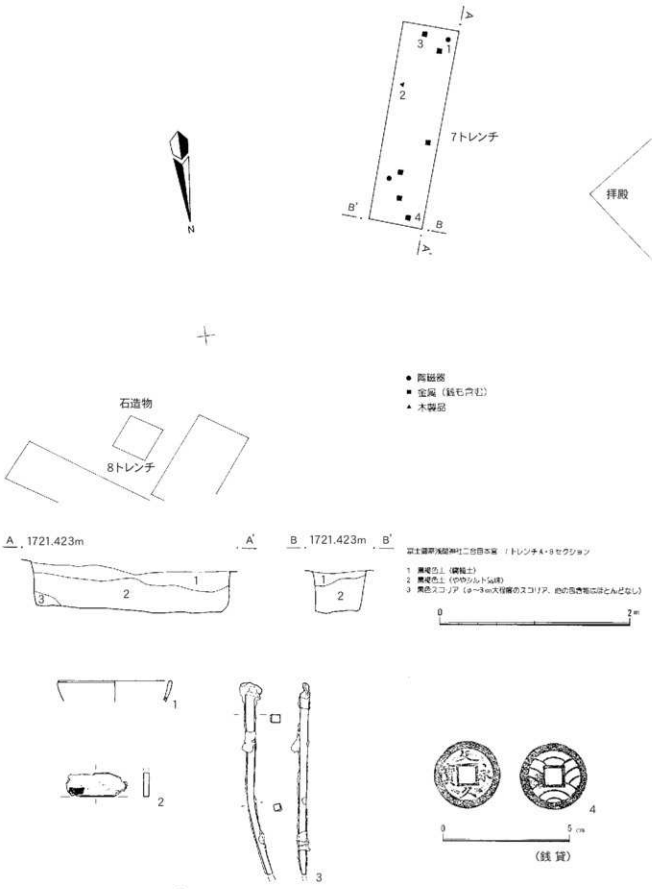
第12図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　4トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



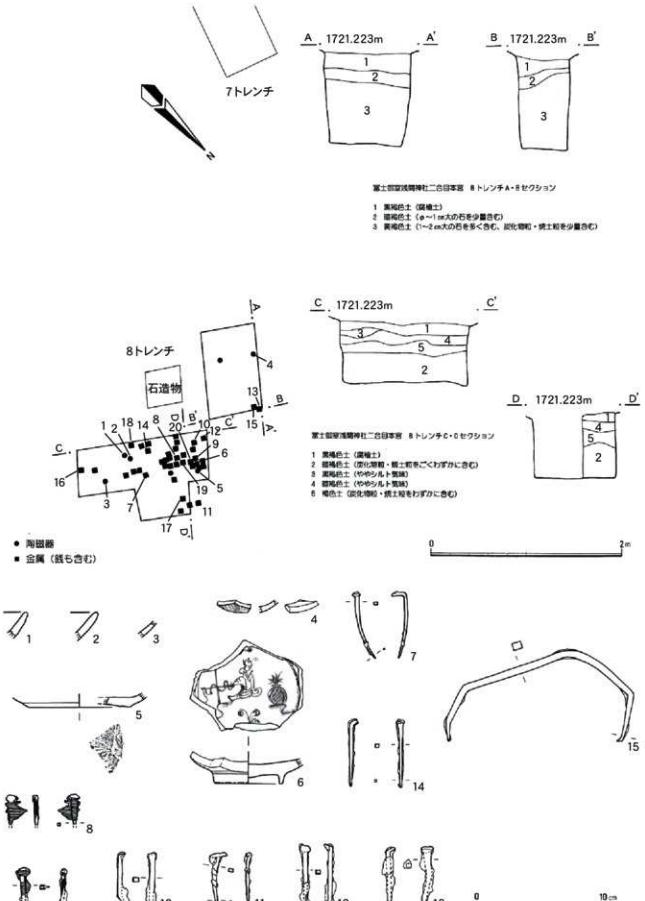
第13図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　5トレンチ　平面図・セッション図・出土遺物



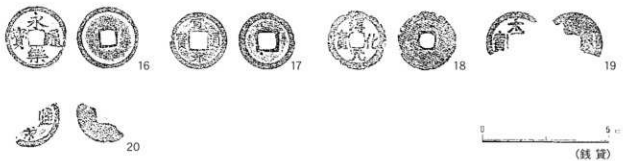
第14図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　6トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



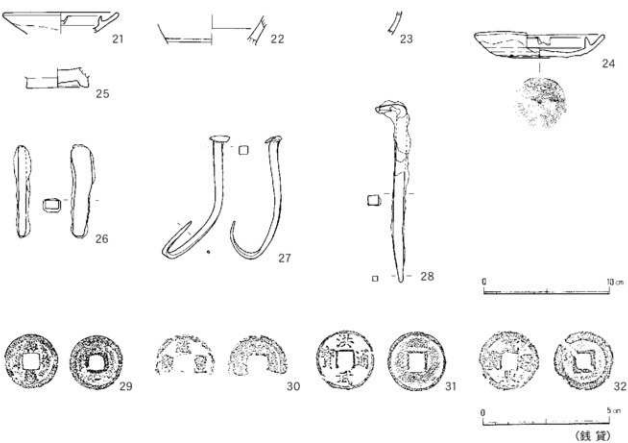
第15図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　7トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



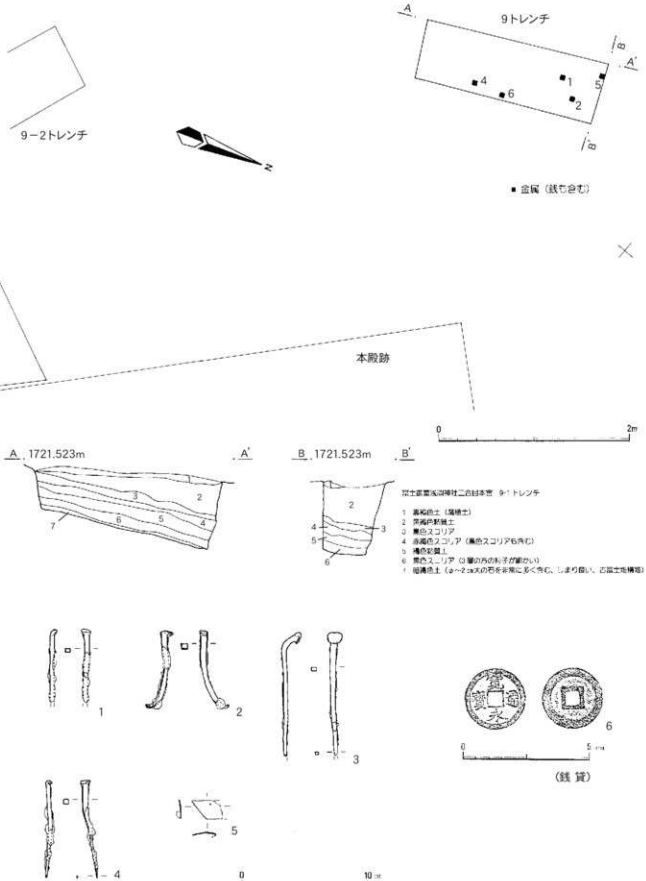
第16図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　8トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物(1)



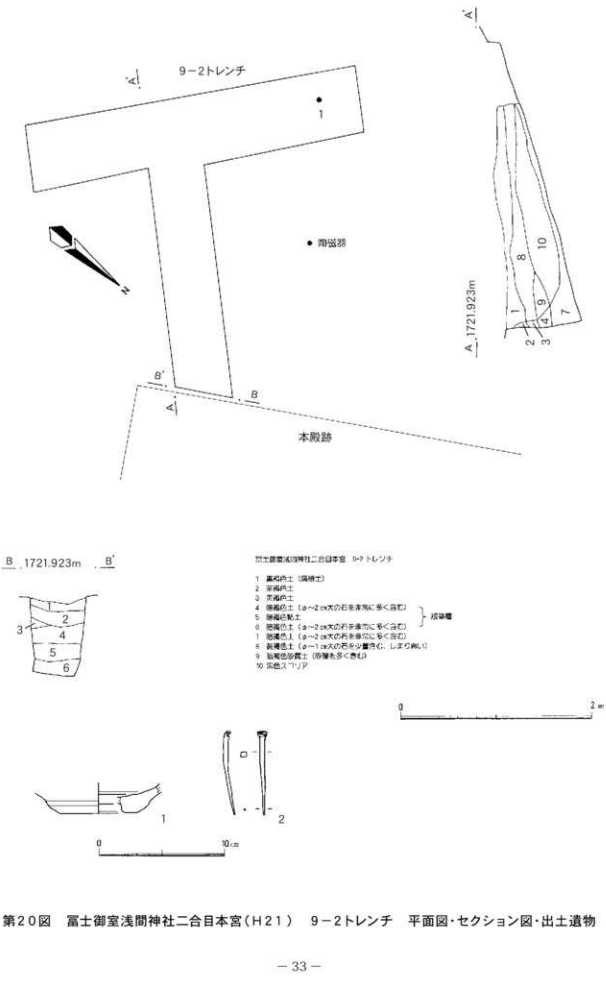
第17図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　8トレンチ　出土遺物(2)



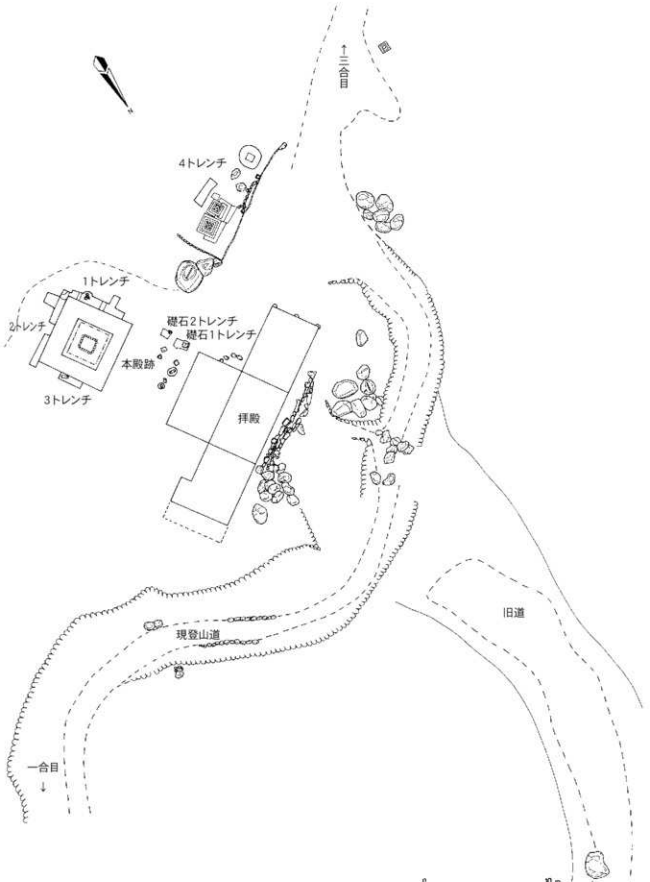
第18図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　表採遺物



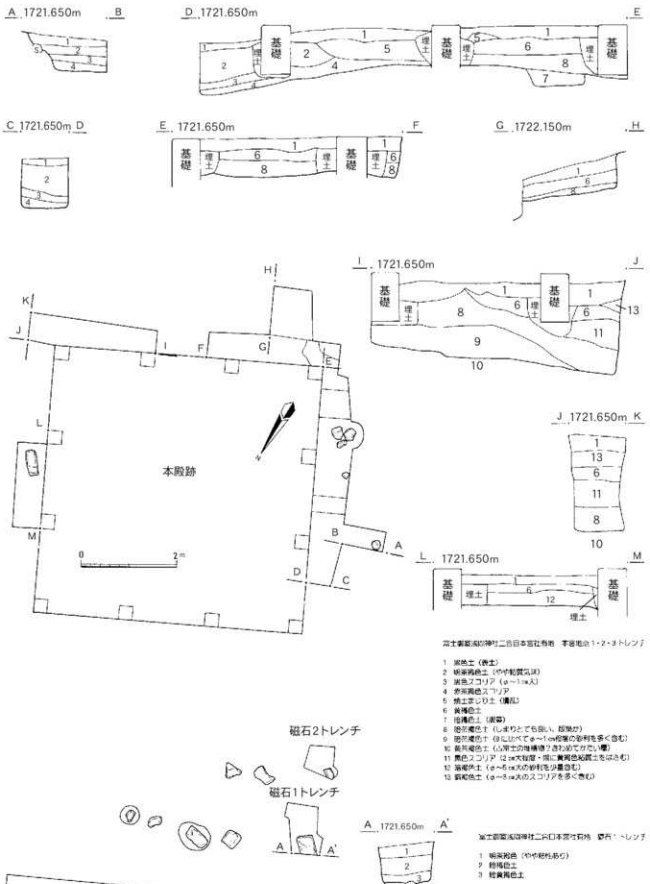
第19図　富士御室浅間神社二合目本宮（H21）　9−1トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



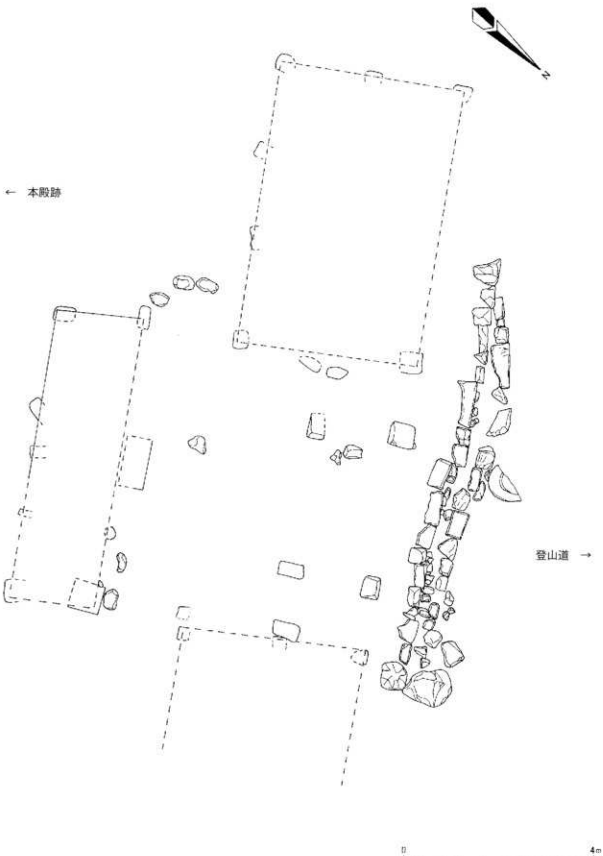
第２０図　富士御室浅間神社二合目本宮（Ｈ２１）　９−２トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



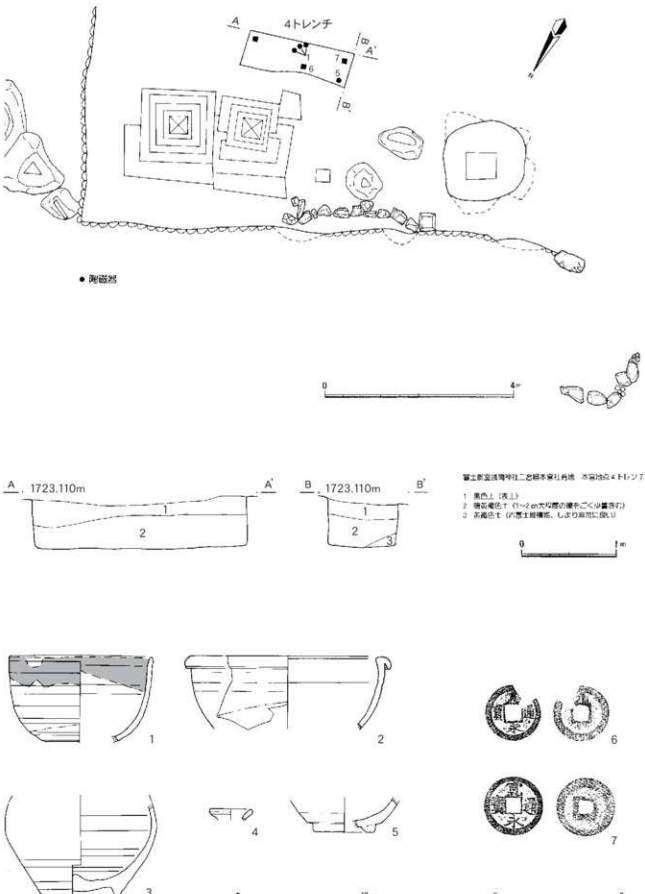
第21図　富士御室浅間神社二合目本宮（H22）　トレンチ位置図



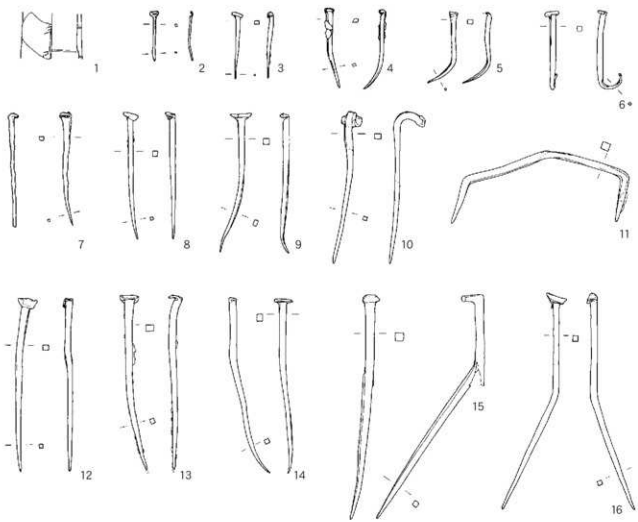
第22図　富士御室浅間神社　二合目本宮（H22）　本殿跡周辺　セクション図



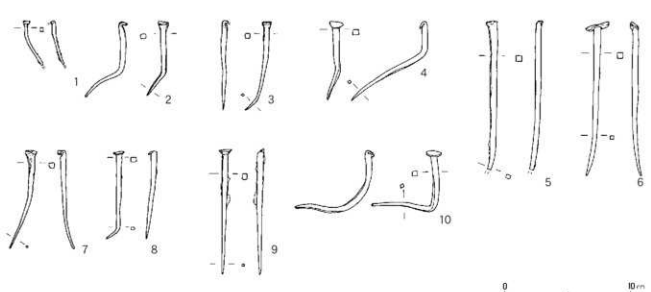
第２３図　富士御室浅間神社　二合目本宮（Ｈ２２）　拝殿周辺　礎石および石段　平面図



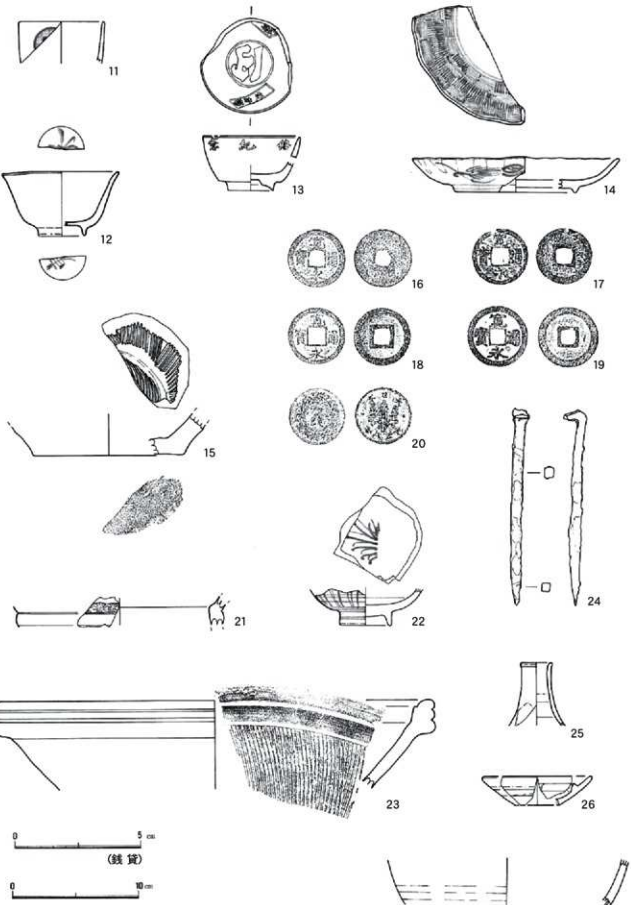
第２４図　富士御室浅間神社　二合目本宮（Ｈ２２）　４トレンチ全体図・セクション図・出土遺物



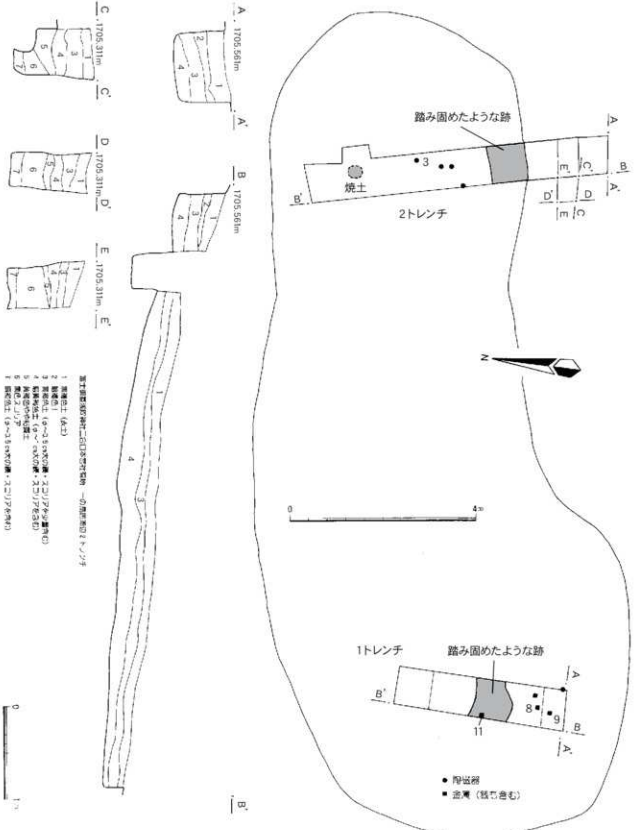
第２５図　冨士御室浅間神社　二合目本宮（Ｈ２２）　２トレンチ　出土遺物



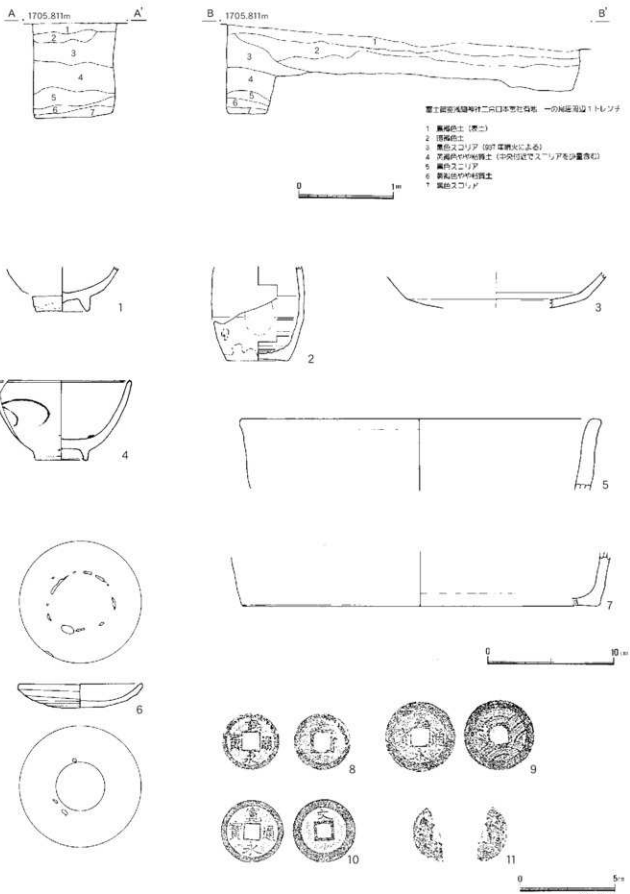
第２６図　冨士御室浅間神社　二合目本宮　表採遺物(1)



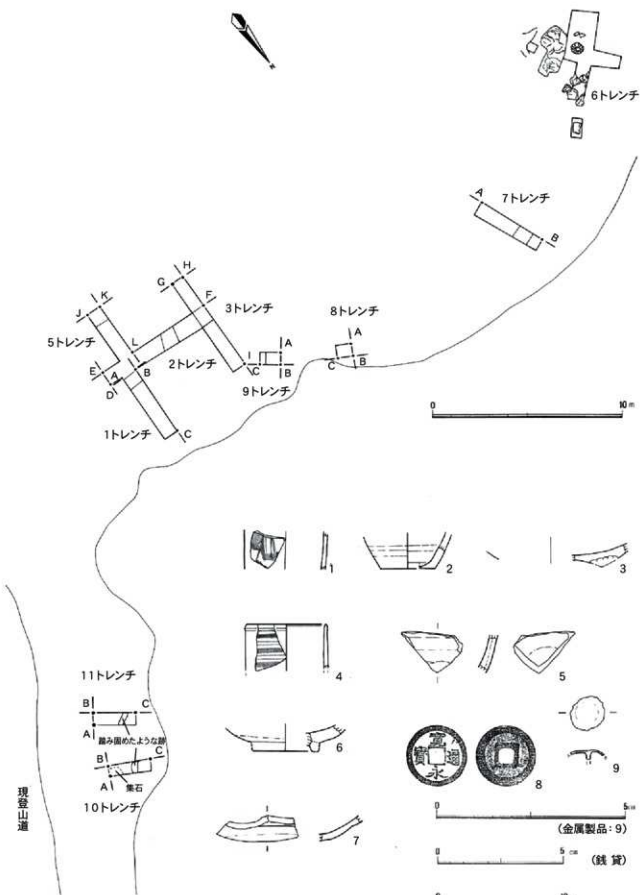
第27図　富士御室浅間神社二合日本宮　表採遺物(2)



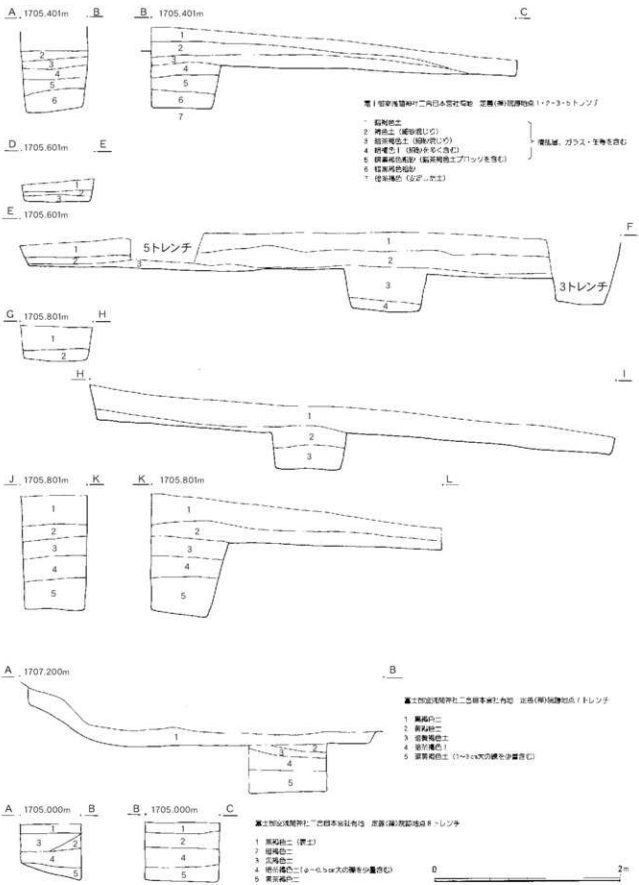
第28図　二合目　一の鳥居周辺のテラス　平面図・セクション図



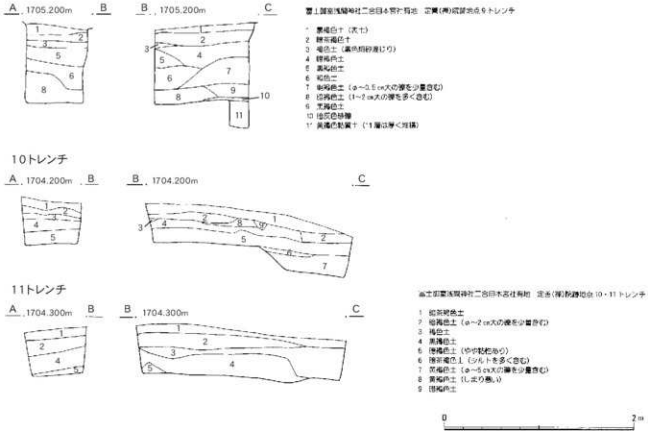
第29図　二合目　一の鳥居周辺のテラス　セクション図・出土遺物



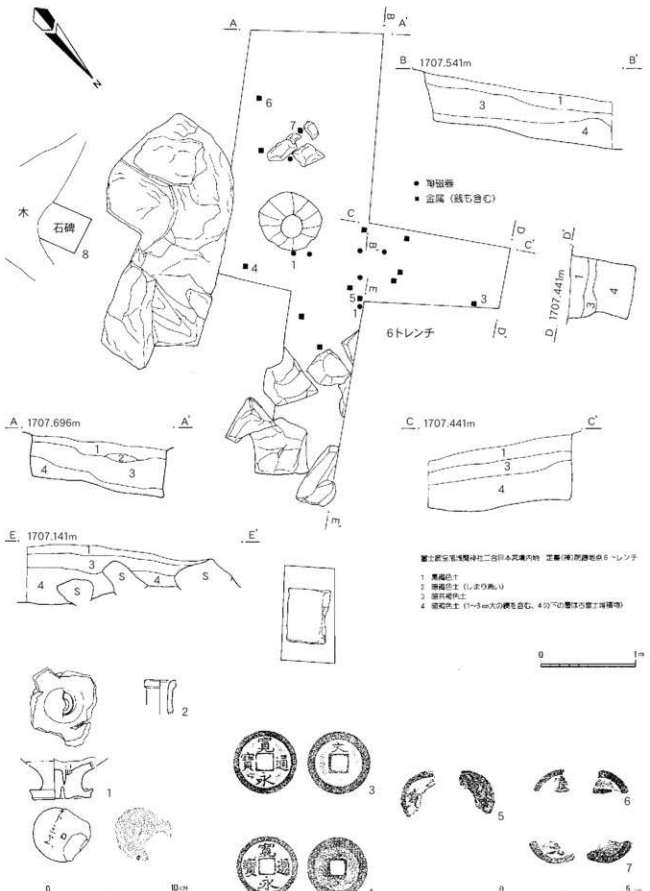
第30図　定善(禅)院跡伝承地　トレンチ位置図・出土遺物



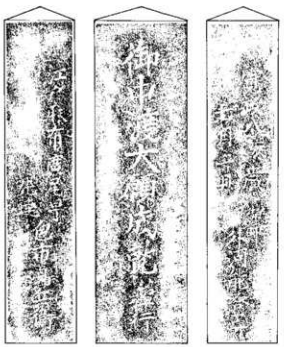
第31図　定善(禅)院跡伝承地　セクション図(1)



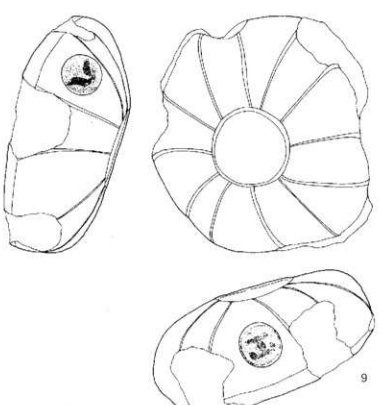
第３２図　定善（禅）院跡伝承地　セクション図(2)



第３３図　定善（禅）院跡伝承地　6トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



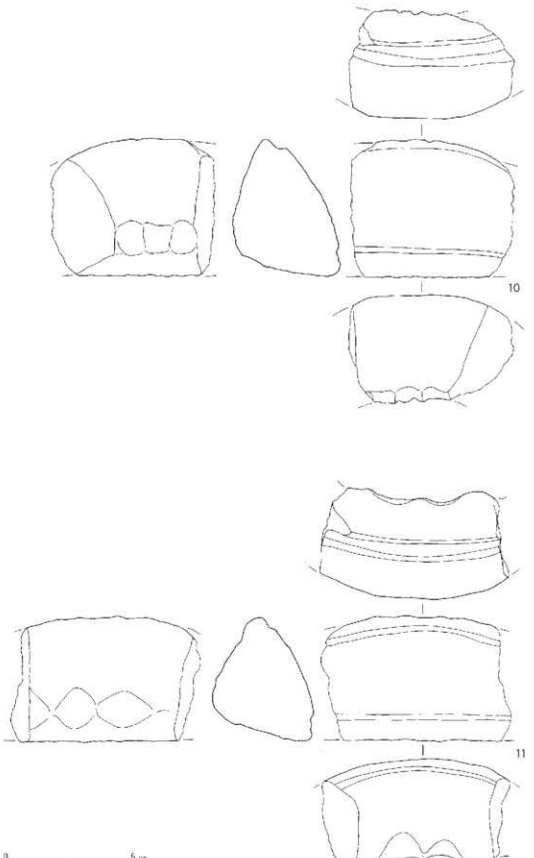
8



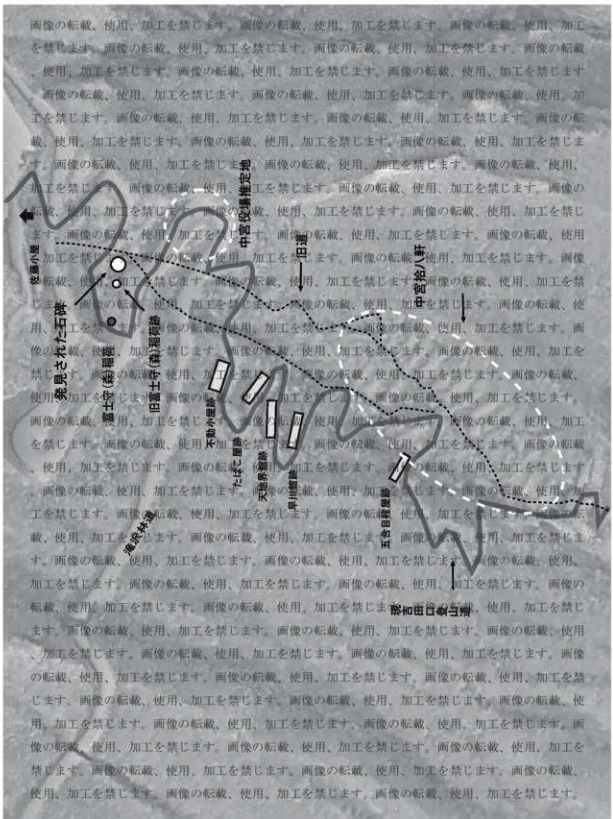
9

0 50cm

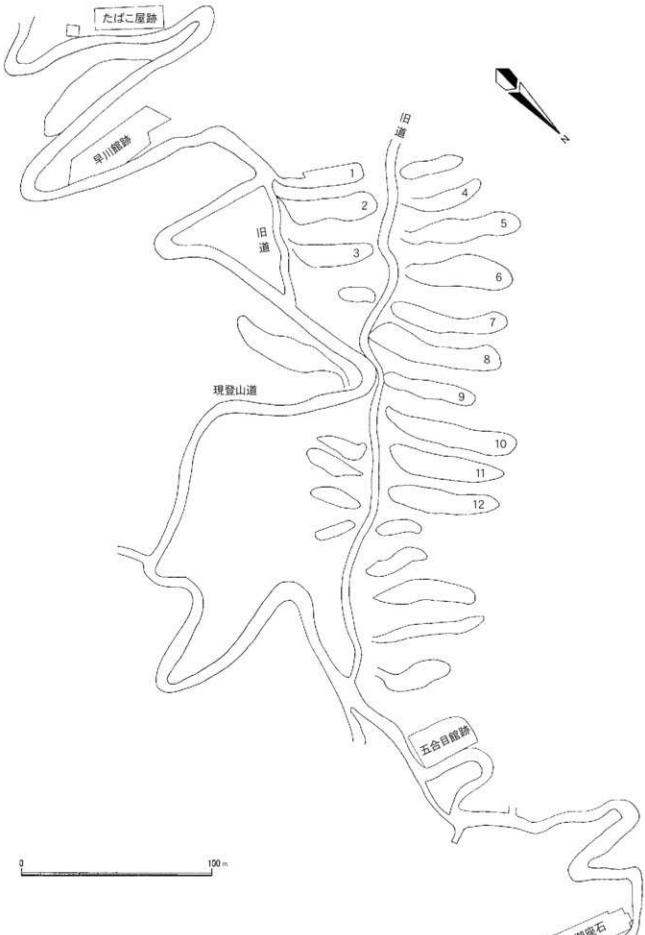
第３４図　定善(禅)院跡伝承地　６トレンチ　出土石碑および石灯籠の笠部



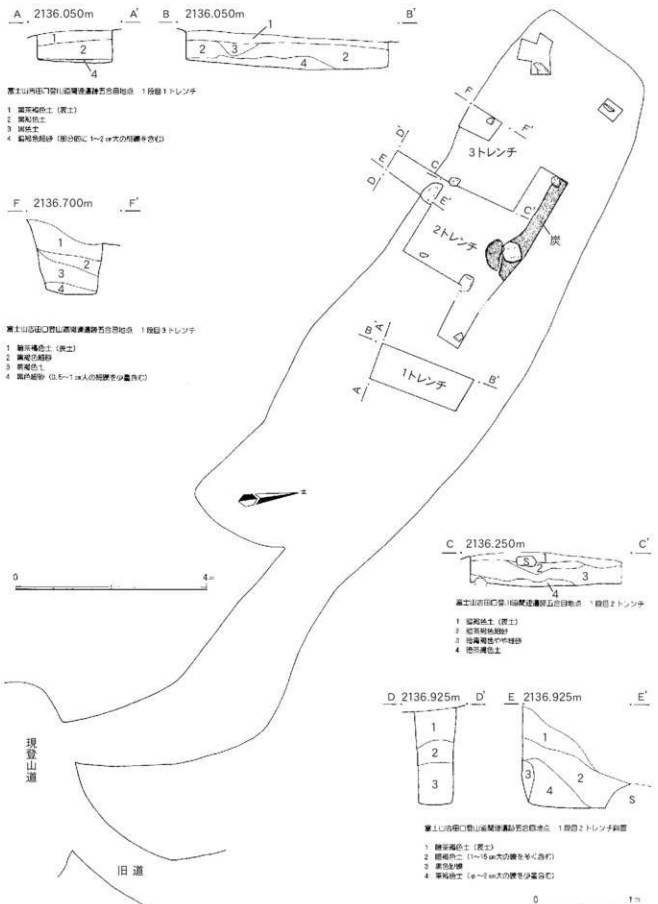
第35図　定善(禅)院跡伝承地　出土石造物



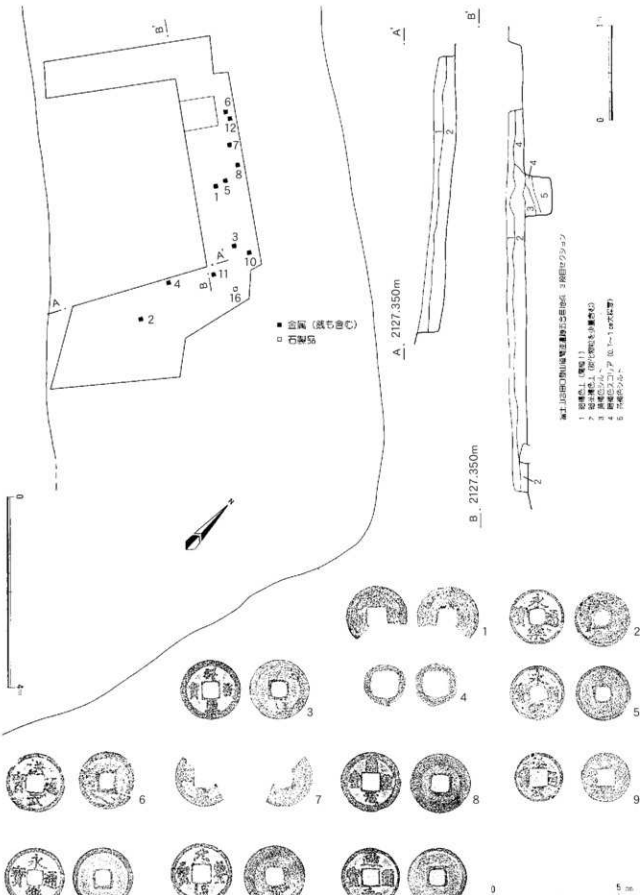
第36図　富士山五合目周辺　信仰拠点位置図（青果は赤色立体図）



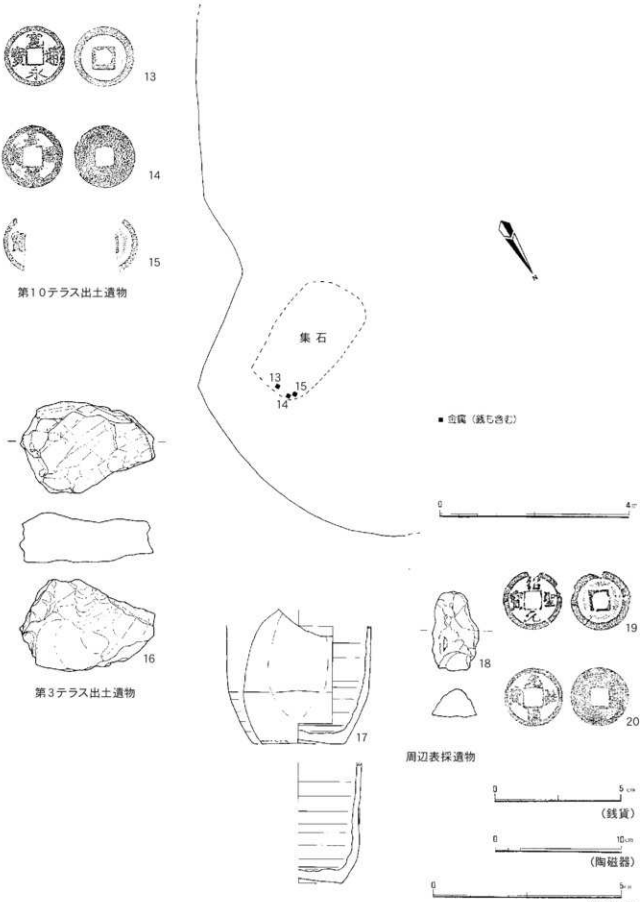
第37図　富士山吉田口登山道関連遺跡　五合目地点　ヒナ段状テラス　概況図



第38図　五合目地点　第1テラス　平面図・セクション図



第３９図　五合目地点　第3テラス　平面図・セクション・出土遺物（１）



第40図　五合目地点　第3テラス　出土遺物（2）、第10テラス　平面図・出土遺物、周辺表採遺物

第41図　旧富士守稲荷跡周辺で発見された石碑

第４節　富士山周辺の調査

第１項　北口本宮富士浅間神社社有地

（1）概要と調査に至る経緯

北口本宮富士浅間神社社有地は、浅間神社が勧請される前から諏訪神社が祀られ、古くから富士山を遥拝する神域であったと伝えられる。『社誌』によると、仁和３年 (887) 造社、貞応２年 (1223) 北条義時再建等の記録が見られる。また神宝として５体の神像の存在が記されているが、このうち２体には貞応２年 (1223) の銘があり、さらにそのうちの１体は女神像であるとされている。これらのことから鎌倉時代中期には何らかの画期があったものと考えられる。このほか史料として残るものでは『勝山記』の文明 12 年 (1480) の条にある「富士山吉田鳥居（取井）立」が、もっとも古い記事である。下って永禄４年（1561）に東宮本殿、文禄３年 (1594) に西宮本殿、元和元年 (1615) には本殿がそれぞれ建立されて、16 世紀半ばには浅間神社の社殿が整備されたといわれる。その後、享保年間の富士講の指導者である村上光清の大改修により、現在の境内の景観が成立した。このように、この地が古くから現在に至るまで、重要な信仰拠点として継続的に使われてきた信仰の場であることは明白である。しかしながらこの周辺については、これまで小規模な試掘調査が実施されたのみであり、実際に土地の履歴として時代的にどのくらい遡るのかは明らかになっていない。このため今回、３ヵ年に渡り、神社境内地、御鞍石周辺、大塚丘の各地点について調査を実施した。

（2）地中レーダー探査

大塚丘

平成 21 年度調査として平成 22 年１月 25 日に実施した（第 42 図）。日本武尊伝説をもつ大塚丘は、社叢を抜けてすぐの所にあり、ここは富士山を遥拝するための富士山信仰上重要な場であったと考えられている。塚の形状は、南北約 24 m、東西約 18 m、高さ約４mの方形台状である。塚の北側では方形が顕著であるが、南側では不明瞭になる。塚上部で足踏みをすると、塚の内部は付き固められていないような音がする。約４m四方の頂部には「浅間明神」をまつる石祠が残されており、四隅にはヒノキが植樹されているが、南東隅のものは残っていない。

このように大塚丘は、古くから富士山に対する重要な信仰拠点のひとつであると考えられてきたが、本格的な調査が実施されたことはなく、その構造等については全く不明であった。このことから、第一に塚自体が自然地形を利用して築造されたものなのか、人為的に造られたものなのか等、その構造について把握する目的で、第二に塚自体に埋納物等があるかを確認する目的で調査を実施した。

調査の結果、①くぼ地状の地形に塚が構築されていること、②塚頂部の中央あたりに掘り込みを示す波形を確認、③塚内部に小さなマウンド状の構築物がある可能性がある、という成果を得た。

境内地

平成 22 年度調査として平成 22 年 11 月 16 日に実施した（第 42 図）。神社に伝わる『境内指図』によれば、村上光清による江戸時代中期の大改修以前の社殿配置は、より小規模なものであったことが伺える。このことから、この指図による、旧建物配置の場所にその痕跡が残っているのかどうかを確認することを目的とする。その中でも特に「鐘楼堂」「護摩堂」の建物痕跡が地下に残されているかどうかを調査の目的とした。また併せて、神社境内の旧地形等の確認を行なった。

調査の結果、①鐘楼堂の痕跡（建物基礎か）は地中に残されている。②現拝殿・神楽殿周辺には旧建物の痕跡（柱跡？）が残されている可能性がある。③諏訪神社の前庭周辺は南北方向に谷状に窪んでいる地形だったと想定される。という成果を得た。この成果をもとにして、平成 23 年度に試掘・確認調査を実施した。

（3）簡易ボーリング調査

平成22年度調査として平成22年10月26日、平成23年2月22日に大塚丘の簡易ボーリング調査を実施した。これは径16㎜のサンプル管を塚頂部から人力で打ち込み、塚を構成する土壌を採取するというものである。

調査の結果、塚本体を構成するのは黒色粘質土であった。塚基底部では礫もしくは固結したスコリア層にあたり、それ以上のサンプリングは不可能であった。地中レーダー探査の成果を示すような塚内部での土質の違いは認められなかった。

（4）試掘・確認調査（第42～60図）

■平成21年度の調査

神社境内地

神社境内地と御鞍石周辺について、平成21年11月9日～11月30日にかけて調査を実施した。境内地については、現在社殿が建ち並ぶスペースは、享保の大改修の際に大きく改変されていることが想定されたため、あまり手が入っていないと考えられる本殿裏側の一段高くなった場所についてトレンチを設定した。その結果、この場所は放水銃の設置に伴い攪乱されおり、遺構・遺物は確認できなかった。また本殿東側の部分についてもトレンチを設定したが、特に遺構等は確認されなかった。遺物については陶磁器片が少量出土したのみであった。

御 鞍 石

ここは、「吉田の火祭り」の中で御鞍石祭の神事が行なわれる神聖な場所である。山林中に、馬の鞍の形をした巨石があって、その上に明神神輿を安置して神事が行なわれる（写真図版3）。ここで神事を行なった後、神輿は神社に還幸する。ここで行なわれる神事の際に、宮司によって読まれる祝詞には「ここに神輿のまたがりいます御鞍石はしもあが大神のしずまりましいしとも古くみゆかりあるあとにして御社のおこりはじまるみなもとなれば」との一節があるが、この中では、諏訪神社の旧地としての御鞍石の伝承が伝えられている。

このエリアについては、御鞍石を中心にトレンチを設定したが、銭貨など遺物の出土が見られたのは石の周りに限られており、この石こそが信仰の対象となっていたことが改めて認識された。また石周囲に入れたトレンチの土層観察により、御鞍石は人為的に設置されたものではないことがわかった。周辺の畑中等には巨石が点在して見られ、おそらくは御鞍石もこれらとともに流されてきたものと考えられる。その時期については鎌倉時代の吉田大沢の山体崩壊によるものと考えられている。石がのるマウンドについては上に粘土が貼られた石積が確認されており、現在のマウンドよりもひとまわり小さいマウンドが形成されていた時期があることがわかった。上述のように、この場所にはもとの諏訪神社があったという伝承もあり、また正福寺蔵の版木『八葉九尊図』（延宝8年（1680））には、「浅間神社」の右側に「明神の上げ松」が、その向こうに「すわ大明神」と描かれており、この「すわ大明神」が御鞍石周辺ともとれる配置になっていることから、建物跡などの検出も視野に置いて調査を進めたが、結果、建物の礎石や版築などは確認されず、常設の建物はなかったものと考えられる。

■平成22年度の調査

大塚丘近接地（第61～64図）

平成21年度に地中レーダー探査を実施し、塚が人為的な構造である可能性が指摘されたため、平成22年10月7日～同18日にかけて試掘確認調査を実施した。塚本体については、掘削を行うとそこから塚が崩壊する可能性があるため、塚自体には手を付けず、塚の南側（富士山側）の平坦地について7本のトレンチを設定し、調査を行った。

調査の結果、出土した遺物は、渡来銭1点、鉄製鋏残欠1点のみであった。遺構についても確認されなかったが、塚裾にかける状態で設定した第2トレンチにおいて、塚本体の構築土である黒色粘質土が検出された。これは、簡易ボーリング調査において確認された土壌と同一のものである。

■平成23年度の調査（第65～67図）

随神門周辺

平成22年度に実施した地中レーダー探査の成果をもとにして、実際発掘できる場所か等考慮に入れた結果、調査箇所を鐘楼堂に絞り込んで調査を実施した。調査の目的は、鐘楼堂の位置を確認すること、鐘楼堂が建立された時期を探ることである。調査期間は平成23年5月16日～同23日である。

調査の結果、基本的な層序は、地表下120㎝で地山層となり、これより上については江戸時代の遺物を含む層である。この盛土中には、享保年間の大改修による盛土も含まれているものと考えられる。表土に近い部分では明治時代以降の陶磁器片やガラス片等含まれていることから、新しい段階にも土の移動があったものと考えられる。鐘楼堂の跡であるが、地中レーダー探査の成果から、基礎等の遺存を想定して調査を実施したが、何も残されていないことが確認された。地中レーダー探査で反応があった随神門の近くで版築状の土層が検出されたが、この下部には捨てコンクリートが敷設されていることからごく新しいものである。社史によれば大正3年に随神門の大改修が行なわれており、この地業はこの際に行なわれたものと考えられる。

今回の調査では随神門の痕跡は確認されなかったが、享保の大改修の土盛等確認され、神社境内における土地履歴の一端を知ることができた。

第2項　富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）

(1) 概要と調査に至る経緯

富士山二合目に鎮座する富士御室浅間神社本宮に対する里宮であり、二合目では氏子らによる祭事の便が悪いことから、天徳2年（958）に村上天皇が里宮を創建したとされる。河口湖の南岸に鎮座し、熔岩が河口湖に流入する突端付近にあたる。この熔岩の一部は「しょうじんば」と呼ばれ、かつては禊所となっていた。近年まで、この場所で雨乞いの儀式が行われており、その際には、龍の彫り物がある蛙又を水に沈め、この龍神を痛めつけることにより、雨を呼んだという話を氏子総代から伺った。また、氏子総代によるとこの蛙又はかつて二合目本宮の本殿に使われていたものだという。

この里宮であるが、『甲斐国志草稿』には「此社ヲ里宮トイ云フハ小室ノ社ニ封シテ云事也　此古ハ舟津木立勝山大嵐成沢長浜大石七郷ノ産神ナリ」とあり、かつては河口湖を取り巻く地域で広く信仰されていた時期もあったことがわかる。この里宮と二合目本宮は「御室道」で繋がっており、二合目で神事が行われる際には、ここを通っていったといわれる。現在では廃れているが、一部たどれる部分もある。

今回の調査目的は、ここ里宮の地での神社の起源についてのデータを得ることである。また、二合目本宮の調査を実施する中で、山宮と里宮を山の祭祀・里の祭祀としてセットで捉える必要性があるとの指摘を指導者会議で得たことから、里宮についても調査を実施することとなった。周辺の埋蔵文化財の分布調査等では、神社創建期とされる平安時代中期の土師器片等が採取されている。調査期間は平成22年6月1日～同28日である。

(2) 試掘・確認調査（第68～75図）

調査は、本殿裏側（A区）と、神社に接する山林中（B～E区）について実施した。

A区では、本殿と反対側の、現在機能していない区画に伴う石列が確認された。このA区の範囲からは、微量ではあるが、土器片・陶磁器片が出土した。中には10世紀～11世紀の土師器片も混在している。山林中の地区からは特に遺構・遺物等は確認されなかったことから、ここは神聖な森として手付かずであったことが考えられる。

C区には大きな熔岩があり、この上は平らに加工されており、この面に35㎝×38㎝の孔があけられ、白い漆喰状のもので蓋がされていた。この中には小形の丸い川原石や熔岩片等が充填されており、その中には墨書石1点、朱書石1点や水晶の結晶片が含まれていた。これらを除去していくと上面より約17㎝のところで底となり、底には剣形鉄製品が1点、剣先をほぼ北に向けた状態で納められていた。神社宮司の話によると、この熔岩の上には、平成21年9月まで片山社の祠が鎮座していたそうで、現在、その祠は本殿裏側に新設した場所に移されている。この片山社は、もともとは神社の御神主家である小佐野家そばの勅使塚に祀られていたという。'片山(カ

タヤマ)' とは一帯の地名である ' 勝山(カツヤマ)' のもとの名であり、周辺一帯の産土神である。この片山社が、どのようないきさつで、いつ頃富士御室浅間神社里宮内に移されたのかについては不明である。出土した墨書石には「一切神力」、朱書石には左から「八神　大辨財天　宇賀(神)」と記されている。これら出土遺物の時期については、不明であるが、このような埋納形態からは江戸時代の所産である可能性が高い。

第3項　河口浅間神社

(1) 概要と調査に至る経緯

古代官道の東海道から甲斐国衙に向かう甲斐路に置かれた駅のひとつ「河口駅」は、この河口の地に比定されることが通説となっており、河口浅間神社が鎮座する川口は古代より交通の要衝であった。『日本三代実録』には、「貞観6年(864)に大噴火が起こり、富士山北麓に甚大な被害をもたらしたのをきっかけに、貞観7年(865)」に甲斐国八代郡に浅間神社がつくられた」と記されている。この甲斐国最初の浅間神社の所在地については諸説あるが、『甲斐国志』は河口浅間神社に比定している。本神社は貞観の大噴火を起こした富士山西麓の側火山群を一望できる位置に鎮座しており、またこの地が江戸時代以前は八代郡域に属していたことからも、河口浅間神社が甲斐国最初の浅間神社である可能性は高い。境内には根回り 30 mを超えるものを含む七本杉があり、県の天然記念物に指定されている。これらの巨木が鬱蒼とした森を形成しており、神社の歴史の長さを物語っている。

今回の調査目的は、現在の河口浅間神社が『日本三代実録』にいう甲斐国最初の浅間神社が建立された場所であるのかを検討するため、神社の創建時期にあたる遺構や遺物が現在の鎮座地周辺に残されているかを確認することである。地中レーダー探査は平成22年11月16日に、試掘確認調査は平成23年5月23日～6月6日の日程で実施した。

(2) 地中レーダー探査

神社境内については、平成22年度と同23年度の2回に渡り探査を実施した。

平成22年度については、調査箇所選定のためのデータを得る目的で調査を実施した。一説によると神社内の七本杉は、昔の神社参道の木立で、富士山の方向に向かって並んでいると言われる。このことから、杉の木周辺に参道等の痕跡が残っているか確認することを目的とした。また、本殿の背後にある尾根上の平坦地について、何らかの遺構の痕跡が見られるか確認することについても調査の目的とした。この平坦地上には根回り 3 m 50 cmほどの栃の大木(町指定)がある。七本杉周辺については、石畳のような明確な構造物は土中に存在しないが、締め固められた地盤である可能性を示すデータが得られた。本殿背後の平坦地については、明確な遺構等を示す反応はなかったが、データパターンから透水層的な反応も見られ、神社内に水を供給するような、自然の水道(みずみち)がある可能性もある。

平成23年度については、本殿周辺について、古い段階の遺構等が残されていないか確認する目的で探査を実施した。その結果、本殿前北西部分では土中に何らかの構造跡を示すデータが得られた。また本殿周辺で採取したデータの分析から、本殿直下はもと窪地状であった可能性を示すパターンが得られた。

(3) 試掘・確認調査(第76～80・82図)

今回、境内地について調査を実施した。その場所は、社務所より一段低い場所であるA区、本殿裏側の尾根上のテラスであるB区についてトレンチを設定した。なお、もとの社務所があった場所についても、七本杉の木立と軸を同じにする石段が残されている場所があったことから、清掃発掘を実施して図化した。

A区については、地表下約50cmまでは造成土が見られ、その下は、地表下約150cm以上砂礫層であることを確認した。この造成土中から平安時代の土師器片や中世～近世の陶磁器片が数点確認された。B区についてもトレンチを設定して掘り下げを行なったが、遺物については刀子状の鉄製品1点が出土したのみであった。その他目立った遺物は確認されなかったが、石を集めた集石状の遺構が1基確認された。周辺では石の出土はほと

んど見られないため、何らかの意図があって石を集めた可能性がある。B区の基本層序は、地表下約160㎝までが水平堆積、それより下部が地山であり、大きな改変等がなされていないと考えられる。またC区では一部石列が見える部分もあったため、清掃発掘を実施した。その結果、区画石列と石段、コンクリート敷きの方形区画石列が確認された。神社総代によるとこのコンクリート敷きの石列は、かつて使われていた社務所の跡だという。これが社務所跡とするとその周りの区画石列も、当然社務所に伴うものと考えられるが、少し気になるのがその軸である。この軸は七本杉の木立の軸と同一であり、富士山に向かう方向となっている。また石段は、かつての旧道（神社総代談）といわれる道に面している。さらに社務所跡の土台を構成する石の中には、鳥居等の台石とも考えられる石が転用されており、もともとこの区画の中には何らかの宗教的施設があり、それが廃絶したのち社務所として使われたという可能性もあるのではないだろうか。

今回の調査地では、神社に関わる遺構等を確認することはできなかった。神社の主要部分は別の場所にある可能性もあるが、七本杉のような巨木が残されているのは神社境内に限られており、ある段階で、この地に神社本体が置かれていたものと考えるのが自然であろう。

（4）神社に伝わる文化財の調査（第84・85図）

試掘・確認調査を実施する中で、神社に伝わる文化財について調査する機会を得た。今回調査を実施したものは、陶製こま犬阿形・吽形の1対、陶製猿像1体と神社拝殿前に鎮座する「美麗石（ヒイライ石）」から出土したと伝わる出土品（須恵器蓋破片2点・磨製石斧2点・管玉1点・白石4点）、美麗石である。陶製こま犬については、阿形が、火災による火を受けて（慶長段階の火災によるものという）、表面釉薬の艶が消失しているが、吽形には鉄釉の艶がよく残されている。これらについて神崎かず子氏（愛知県陶磁資料館）から室町時代の所産である可能性が高いというご教示を頂いた。中世段階の陶製こま犬については、生産地である瀬戸・美濃地域に加え、関東地方の神社等に伝来する例が散見される。神崎氏は、後の江戸時代のものは瀬戸・美濃地域に集中していることと比べると中世段階の分布は東国に広がる傾向があるとしている。関東地方に伝来するものとしては、鹿島神宮摂社（茨城県鹿島市）、香取神宮摂社又見神社（千葉県香取市）、玉崎神社（千葉県旭市）などの例が知られる。また東京都八丈島の優婆夷宝明神社では、こま犬の陶片が出土している。このように広範囲に分布する理由として、山岳宗教の修行者により各地に運ばれたとする説もある[註1]。河口浅間神社のこま犬の形態、顔のつくり等は八丈島の優婆夷宝明神社出土のものに類似する。

美麗石下から出土したと伝わる出土品については、出土品と一緒に古布に書かれた記録が伝わっている。それによると、明治20年4月に美麗石の下を掘ると、深さ1丈1尺（約3.3ｍ）の位置からこれら埋蔵物が発見されたとある。出土品については、須恵器蓋が奈良～平安時代の所産、磨製石斧2点は縄文時代、管玉は古墳時代のものである。様々な時代のものが混在していることから、ある段階で様々なものがまとめて埋蔵されたものと考えられる。美麗石については、この地に浅間明神をはじめて祀った石囲と伝えられている。現在は拝殿の向かって左に祀られており、「お宮の前のヒイライ石、踏めば草履の鼻緒が切れる」とうたわれるが、以前は「お宮の上のヒイライ石…」とうたわれていたという。このことから推察すると古くは本殿裏の柵の大木があるテラス（今回の試掘対象地B区）や山宮の辺りに祀られていた可能性もある。

この他にも、神社参道には'波多志神'として石棒が祀られている。

註1　愛知県陶磁資料館 2005『陶磁のこま犬百面相』P16～17

第4項　御墓（第76図）

(1) 概要と調査に至る経緯

河口浅間神社の北方の丘陵地に「御墓（ミハカ）」と呼ばれる場所がある。この場所から見渡すと正面に河口湖が広がり、さらにその向こう側には貞観6年（864）の大噴火で大量の熔岩を噴出した富士山の側火山である長尾山を望むことができる。

この場所は、『浅間神社正史』等によると、河口浅間神社の初代祝の伴真貞の墓所と伝えられる場所である。現在5m×3mほどの平坦地には方形の墓碑3基と笠付きの円柱形の墓碑1基が置かれている。前者には「神主宮下」、後者には「神主藤原布好霊爾」「寛政九年丁巳秋八月十有二日」の文字が記されている。数年前まではこれらがバラバラに散在していたそうで、近所の有志の方が整備して現在に至っている。「御墓」の性格については調査が実施されたことがないため不明であるが、寛政段階の地検帳等によると、当時は今よりもはるかに広大な境内地を有していたことから、「御墓」周辺ももとは境内地の一部であったものと考えられる。

(2) 地中レーダー探査

この平坦地について地中レーダー探査を平成23年7月13日に実施した。今回の調査の目的は、「御墓」という河口浅間神社に関わりの深い土地での、埋設物等や遺構の有無を確認することによって、この場所がもつ性格についての手がかりを得ることである。

探査は、平坦地の裏側も含めて8本の測線をかけて実施した。その結果、平坦地上の2箇所で何らかの埋蔵物を示すデータが得られた。また、その裏側についても何らかの埋蔵物を示す可能性のあるデータを得ている。

第5項　宮ノ上遺跡

(1) 概要と調査に至る経緯

「御墓」に続く東側の平坦地一帯である。「御墓」と同様にここからも河口湖および長尾山を見渡すことができる。このあたりも古くは河口浅間神社境内地であったものと考えられる。諸事情により、「御墓」の試掘確認調査ができないことから、同様の地形の近接地について試掘確認調査を実施することにより、河口浅間神社がもつ歴史についての手がかりを得ることを調査の目的とした。調査期間は平成23年6月28日・同29日である。

(2) 試掘確認調査（第81・83図）

調査は、80cm×2mのトレンチを1本設定し掘り下げを実施した。その結果、約10cmの表土を取り除くと、その下に①約30cmの暗褐色土、②約25cmの暗茶褐色土、③約40cmの暗褐色土の堆積が見られた。①層からは近世の陶器片が出土し、③層の下部からは内外面に二次的な被熱を受け、金の付着が見られる大窯期の陶器片および平安時代の土師器片、刀子状の鉄製品が出土した。この③層には焼土粒・炭化物粒が含まれていた。今回の調査はトレンチ1本の掘削であった為、遺構は確認されず、また出土した遺物量も少なかったが、金が付着する陶器片が出土していることから、遺跡の特殊性も伺える。また神社創建期にあたる平安時代の土師器片が出土していることから、周辺には該期の遺構が眠っている可能性が高い。

第6項　富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原下A地点（姥子）

(1) 概要と調査に至る経緯

調査地点は、富士山登山道のうち、富士吉田市の北口本宮冨士浅間神社に起点を発する吉田口登山道の中ノ茶屋から200mほど上の山林中に所在する（第102図－姥子）。このあたりは、'遊興（幽境）'と呼ばれ、「俗世界」と「山という神聖な世界」との境にあたると考えられてきた場所である。『八葉九尊図』（第1図）には、「うは子」「さいノ川原」という記載がみられる。『甲斐国志』によると、中ノ茶屋から二町上がった所が奪衣婆の小堂で、礫石が残ると記されている。現地では、旧道と考えられる道状の窪みに面してコの字状の石積みが残る場所があり、これが『甲斐国志』にいう奪衣婆の小堂の場所と考えられる。今回の調査は、この場所が『甲斐国志』に記された場所であるのかどうか確認する目的で行なった。調査期間は平成22年6月28日～7月15日である。

(4) 試掘・確認調査（第86～88図）

調査は、まず対象地の地表面を精査した後、露頭しているコの字状の石積を検出しながら掘り下げを行なった。

石積の規模は南北 1.8 m、東西 2.0 m程度であり、間口よりも奥行の方が若干長い。石積の高さは奥壁で 80㎝ほど、両袖の部分は 60㎝程度である。一部石積が崩れている部分もある。奥壁際では焼土や灰も検出された。礎石とも考えられる石も出土しているが、規則的には並んでいない。遺物については、床面と考えられる高さから、江戸時代後期の小坏と徳利の口縁部破片が出土したのみである。また、コの字状の石積の前面にある旧道についても、硬化面が確認された。

調査の結果、ここに残る石積は人為的なものであることが確認された。小堂があったことを直接示す遺構・遺物などは発見されなかったが、石積の規模や『甲斐国志』の「奪衣婆の像が納められていた小堂である」との記述からは、一間四方程度の建物があったとも考えられる。ただし、奥壁際から検出された焼土・灰は厚く堆積しており、長きに渡って火を焚いていたことを伺わせる。石積内に小堂があったと考えると、堂の裏側にあたる場所となり、堂と火を焚いた場が同時に存在したことは考えにくいため、小堂の廃絶後に残った石積内で火が焚かれた可能性もある。実際、『甲斐国志』が記された江戸時代後期には、小堂は廃絶しているが、今回床面から出土した陶磁器片はこの頃のものであり、これら陶磁器片の時期が火を焚いた時期を示しているものとも考えられる。箱根山の麓では石囲いの中で火を焚いて、山への手向けをする場所もあるというが、この場所が、俗世界と神聖な世界との境目にあたると考えると、火を焚くことで穢れを払い、また山の神への手向けをする場所としてはふさわしいようにも感じる。

今回の調査は、'奪衣婆の小堂'のみに焦点をあてて行なった。小堂に関する積極的な痕跡は確認されなかったものの、石積が人為的なものであることや、火を焚いた痕跡を確認することができた。すでに述べたように、この一帯は俗世界と神聖な山の世界との境界としての認識があった場所であるが、これらの成果から、この場所が富士山信仰上重要な拠点のひとつであることを再認識することができた。

第７項　行者平遺跡（御坂山中：大善寺行者堂跡伝承地）

(1) 概要と調査に至る経緯

甲府盆地から駿河方面に向かう鎌倉街道（鎌倉往還・御坂路）は、御坂山系から流れ下る金川を遡りながら御坂峠に向かっている。行者平は、この街道が藤野木から右に折れて支流の川沢側を遡って左岸から右岸に渡ったところに位置する。この場所はその地名が示すように、甲州市勝沼町にある名刹、柏尾山大善寺に伝わる鎌倉時代後期の役行者像を納めた行者堂があったと伝えられる場所である。一説によれば、武田信春によって、御坂山中から、現在の境内地内に移されたという。時期的には、信春の没年から考えると南北朝時代後期～室町時代初頭あたりのことだと考えられる。今回の調査は、甲府盆地から富士山に向かう信仰ルート上にあるこの場所に行者堂があったのかを確認すること、またその時期について探ることを目的とした。調査期間は、平成 23 年 6 月 8 日～同 14 日である。

(2) 試掘・確認調査（第 89 ～ 96 図）

現地は、旧鎌倉街道を挟んで 34 m× 18 mほどの平坦地が広がる場所である。平坦地の一部には自然石が露頭し、その上に役行者像、前鬼像、後鬼像の３基の石造物が祀られている。この自然石の前には、周りよりもわずかに高い平坦な部分があり、行者堂があったとすればこの場所ではないかと想定されたため、トレンチを設定した（A区）。掘下げると黄褐色細砂が 15㎝ほどの厚みで敷かれており、この細砂を除去すると、その下からは江戸時代の遺物のみを包含する層が現われ、礎石状の石等も残されていた。また、焼土や炭化物の堆積も部分的に見られた。ただし、礎石状の石や焼土等は原位置を留めていないことから、ある段階で小規模な土地の改変がなされたものと考えられる。次に、A区の奥側に設定したB区では、黄褐色細砂は見られず、またA区で見られたような面は確認されなかった。しかしながら、トレンチ断面でピット状の遺構が確認され、中には土師器片が１点含まれていた。さらにA区から若干下った位置にC区を設定して掘り下げを行なった。C区の上層では、江戸時代の陶磁器片を包含する層があり、この層を取り去ると、その下には中世のかわらけ片を包含する層が見ら

れた。この中世の包含層からは、15 世紀末頃を中心とするかわらけ片の他、古墳時代の S 字甕の破片や須恵器甕口縁部破片も出土した。この包含層を取り去ると、その下は一面の礫層であった。また周辺では江戸時代～明治時代の陶磁器片を表採したが、中には中世のかわらけ片や、古代に属する甕胴部の破片なども含まれていた。

今回の調査により、①周辺には江戸時代と中世という 2 つの時期の遺跡が存在すること、②礎石らしきものの存在や釘の出土などの状況証拠から、江戸時代には建物があったと考えられること、③中世のかわらけは、15 世紀末頃を中心とするものであること、出土遺物や表採遺物の中に古墳時代や古代という、行者堂の年代よりも古いものが含まれていることがわかった。伝承では、行者堂は南北朝時代後期～室町時代初頭の間に現在の大善寺境内に移されたと言われるが、この時期に該当する遺物は確認されなかった。古い時期の遺物が確認されたことについては、この御坂山中を通る旧鎌倉街道は、古くからの主要ルートであると考えられていることから、古墳時代等においても往来があったことを補強するデータのひとつになるのではないだろうか。実際、御坂峠を越えて河口湖側に下った所にあるドライブインでは、工事で山裾を切り崩した際に古墳時代の坏等が出土している（疱橋遺跡：第 3 図－ 2：第 85 図－ 10）。

第 8 項　行者屋敷遺跡（足和田山中：蓮華寺奥の院跡伝承地）

(1) 概要と調査に至る経緯

大同山蓮華寺は、富士河口湖町大嵐に所在する日蓮宗の寺院である。もとは真言宗であったが、日蓮により折伏され改宗したと伝えられている。今回の調査対象地は足和田山の山頂からやや下った場所の平坦地であり、ここにはかつて蓮華寺の奥の院があったと伝えられている。『甲斐国志』には「檀ノ山ノ内南乞山ノ上ニアリ少シ平地ナル所礎石存セリ其辺ニ小池アリ麗水常ニタタヘテ旱魃ニモ涸ルコトナシ往昔ハ山伏ドモ此山ニ参籠シ行法ヲ修シケルトゾ」と記載されている。大田和の集落から 40 分ほど山を登った尾根の鞍部に削平地があり、礎石が数個残存している所があるが、この場所が『甲斐国志』にいう場所と考えられる。この礎石がある平坦地から少し下った所には榛名池と呼ばれる湧水地点がある。現在では泥水が溜まったヌタ場状の水溜りであるが、川のない周辺地域にとっては、かつては貴重な水源のひとつであったと考えられる。ここでは近年も雨乞いの儀式が行われているという。

今回の調査目的は、第一に蓮華寺奥の院伝承地とされるテラスについて、残されている礎石の配置や規模を確認することである。また合わせて試掘確認調査を実施し、この場が使われていた時期について考えるデータを得ることである。榛名池については、祭祀遺物等がないか確認を行い、池周辺の地形の図化を行なった。

(2) 試掘・確認調査（97 ～ 99 図）

調査前から、奥の院伝承地のテラスには礎石状の石が確認されていたが、埋没しているものもあると想定されたことから、まずはこれらの石の並びについての確認調査を行った。その結果、猪等に荒らされて元位置を留めていないものもあるが、二間×二間程度の礎石の並びが確認された。さらに礎石の間にトレンチを設定し、掘り下げを行ったが、遺物・遺構等は発見されなかった。掘り下げの結果、地表下 20 ～ 40㎝で黄褐色の地山があらわれ、堆積土がそれほど厚くないことが確認された。遺物については、地表にごく近い表土から灯明皿が 1 点出土した。

調査の結果、礎石と近世の灯明皿が発見されたが、建物に使われているはずの釘などは全く出土していない。ただし周辺には、これほど石が集まる場所がないため、今回確認された石は、人為的に配置されているものと考えられる。また、地山までの堆積土も薄く、灯明皿も表土中より発見されていることから、礎石が機能していた時期から、それほど埋没していないものと考えられる。

榛名池と呼ばれる場所は尾根の途中から沢の際に向かって回り込んだ非常に分かりにくい場所に位置するため、地元の鳴沢村郷土史研究会の方々に案内していただき、現地を確認することができた。榛名池の現状は、直径 3.5 mほどで、ヌタ場状に泥水が溜まる窪みであった。調査はまず、泥水が溜まる窪みの中に祭祀遺物等がな

いかの確認を行なったが、特に遺物等は発見されなかった。また、池には「榛名池」の文字が刻まれた石があり、これをイノシシ等が沢へ転げ落とさないように池のそばの木の根元に差し込んである、という話を郷土史研究会の方々に聞いていたため、この石を取り出して確認したが、特に文字等は刻まれていなかった（第99図－1）。水の供給箇所については、窪みが山と接する部分からこんこんと湧いているのが確認された。

この池に関しては、雨乞いの場所であったという伝承があるが、数年前にも雨乞いが行われたそうである。雨乞いの際には、竜宮洞穴の水と水池白大龍王の水をこの池の中で合わせるという。竜宮洞穴とは西湖畔の青木ヶ原樹海内にある長さ約60mの洞穴で、かつては富士講八海巡りの霊場として栄えた場所である。一方の水池白大龍王は、富士山の側火山である天神山から西南約3kmの山中にある噴火口の跡で、傍には富士講の碑も建てられている。これら2箇所の水を持って、市民センターから直登するルートで山を登る。これが雨乞いのルートだという。この榛名池でそれら水を混ぜてかき混ぜると雨が降ると伝えられており、数年前の雨乞い時にも、その日の午後に雨が降り出したという。我々も案内して頂いた時と、調査時の2回、遺物の確認等で結果的に池中をかき混ぜることになったが（水は混ぜていない）、両日とも午後になって湿った風が吹き始め雨が落ちてくるという体験をした。

第9項　藤塚（南都留郡山中湖村）（第100図）

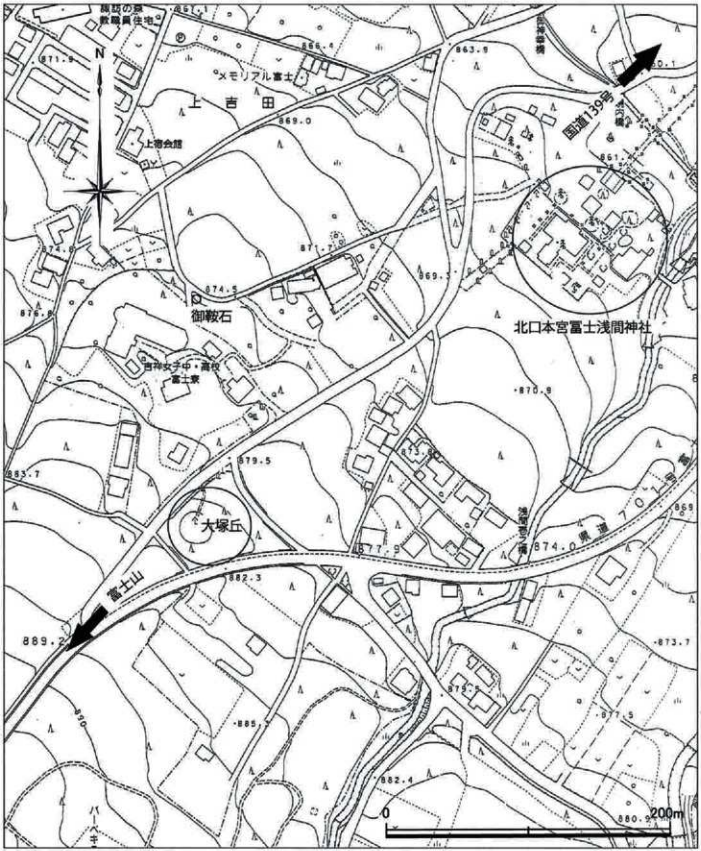
(1) 概要と調査に至る経緯

山中湖は、富士五湖の中ではもっとも南東に位置する湖である。山中湖の成り立ちについては、延暦19年（800）に起こった延暦の大噴火で流出した溶岩流のひとつである鷹丸尾熔岩が、宇津湖を分断して忍野湖と山中湖ができたとされていると言われてきたが、近年の調査では、この鷹丸尾熔岩の噴出年代については戦国時代以前と考えられている。例えば、北畠遺跡ではこの熔岩の下から12世紀中頃～後半に位置づけられる松鶴鏡とガラス玉が発見されていることから、やはり噴出時期については12世紀以降と考えるのが自然である。この鷹丸尾熔岩は、藤塚がのる熔岩丘で左右の筋に分かれている。この熔岩丘は鷹丸尾熔岩よりも古く、丘上には弥生時代のテフラがのっている。この丘は噴火口である可能性もあるという。この山中湖岸には古代官道が通っていたと考えられ、塚がある山中地区には「加吉駅」（加古の誤りか）が想定されている。以上のように、この藤塚については、2筋の鷹丸尾熔岩流に挟まれた、噴火口の可能性もある熔岩丘上に位置しており、特徴的な地形上に立地していると言える。塚の規模は直径約10m、高さ約2mの円墳状である。この塚は‘ふじづか’という名称で呼ばれているが、山梨県内では現在17基の富士塚が確認されている（第101図、第2表）。富士講の興隆と共に造られた富士塚は、関東圏など富士山から離れた場所に造られ、それを富士山の代わりとして信仰の対象とされた。このような富士塚の性格を考えると、藤塚は‘ふじづか’と呼ばれるものの富士山を眼前に立地し、富士山の代わりである必要性はないことから、所謂一般的な富士塚とは性格を異にするものと考えられる。またこの塚は、地元では、南北朝時代の南朝天皇である長慶天皇の御陵だという伝説もある。『山中湖の史話・伝説』によると藤塚が長慶天皇陵であるという刻印が施された鋼鏡・直刀が存在するという。

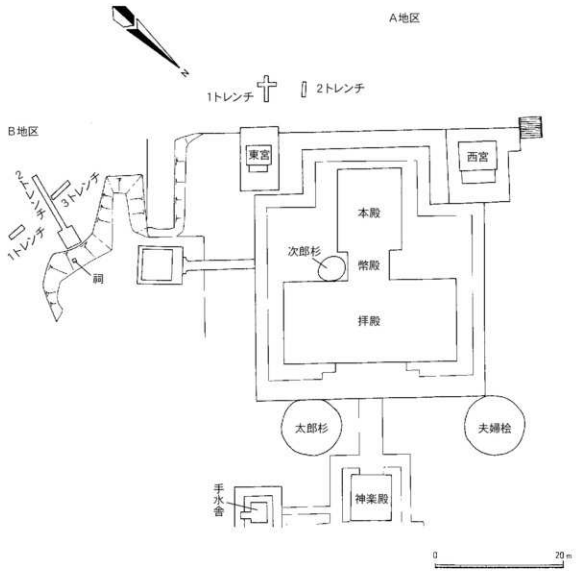
塚は丘上にあり、塚の前面にはテラス状地形や堀状地形が見られるが人為的なものではなく、熔岩流により形成された地形と考えられる。

(2) 地中レーダー探査

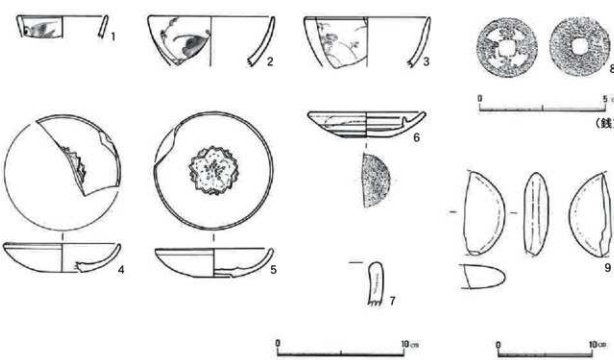
塚本体については、その構造を確認する目的で、また塚周辺については地形等を確認する目的で探査を実施した。塚本体については、塚内部の水平地形線よりも下部に墓室データに類似する反応が得られている。塚の頂部にはクレーター状のパターンが見られ、そこからほぼ一直線に規模の小さい縦穴が下部に延びていることが想定される。なおこの縦穴は、竪穴式墓坑に伴うものほど規模が大きくない。また塚周囲には周溝状の反応も見られる。また塚の南側では、ある一定の場所に限って平坦地盤を示すデータが得られており、これがある種の遺構を示す可能性もある。



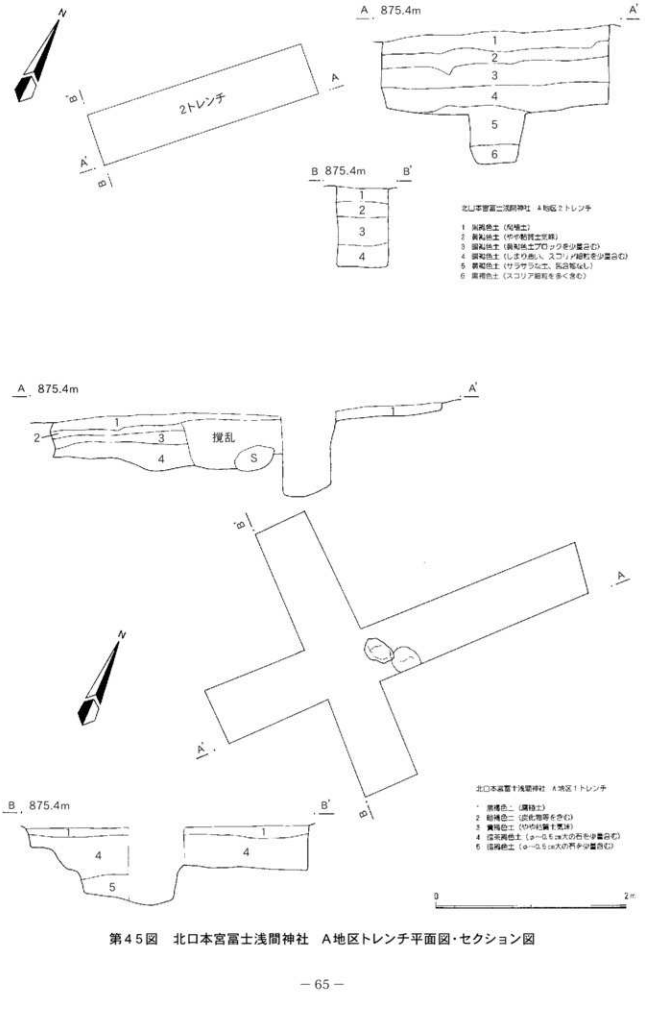
第 42 図　北口本宮富士浅間神社周辺図（1／2500）



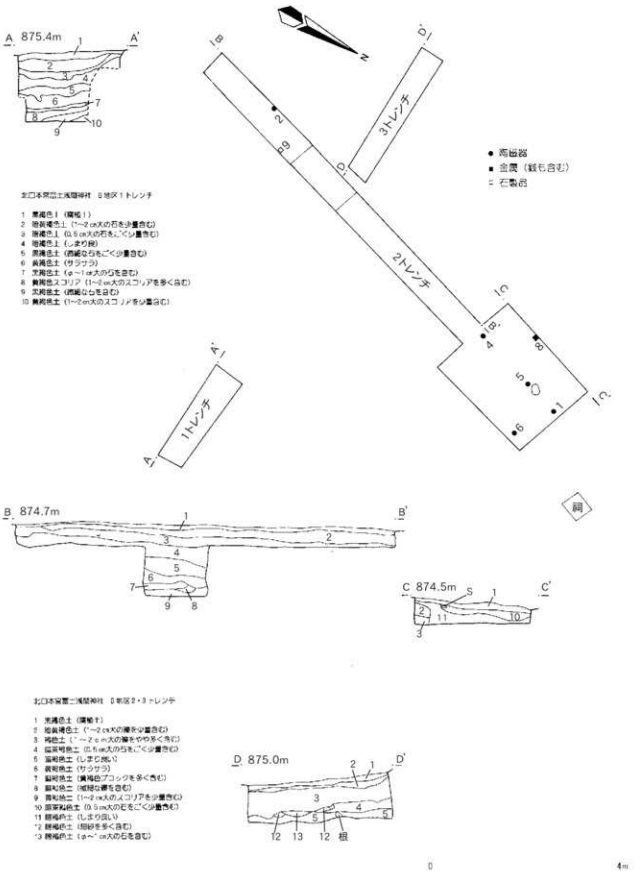
第43図　北口本宮富士浅間神社　A地区・B地区トレンチ位置図



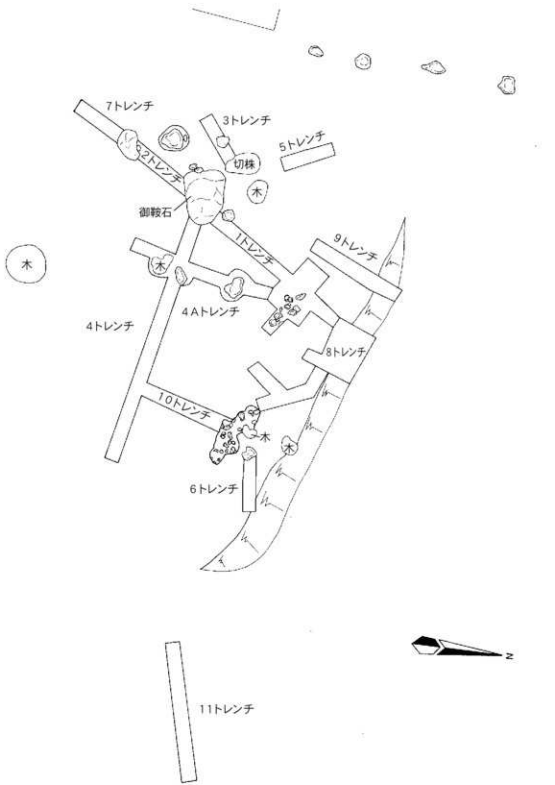
第44図　北口本宮富士浅間神社　B地区　出土遺物



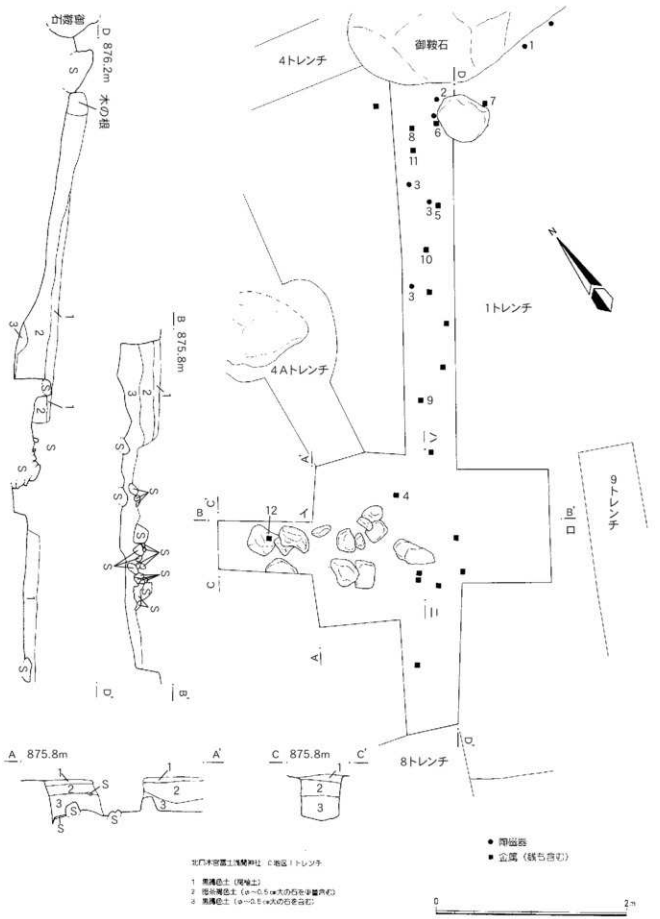
第45図　北口本宮富士浅間神社　A地区トレンチ平面図・セクション図



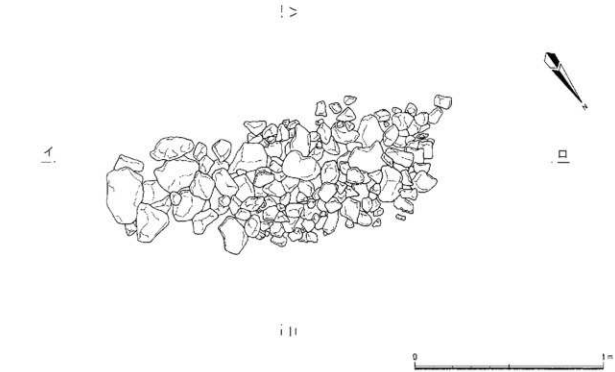
第46図　北口本宮富士浅間神社　B地区トレンチ平面図・セクション図



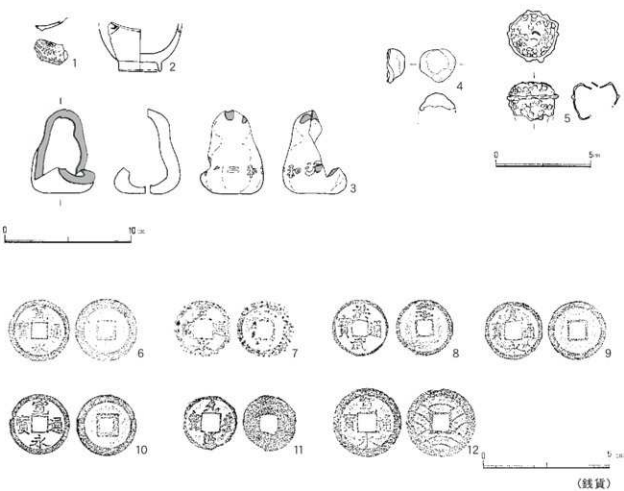
第47図　北口本宮冨士浅間神社　C地区　トレンチ位置図



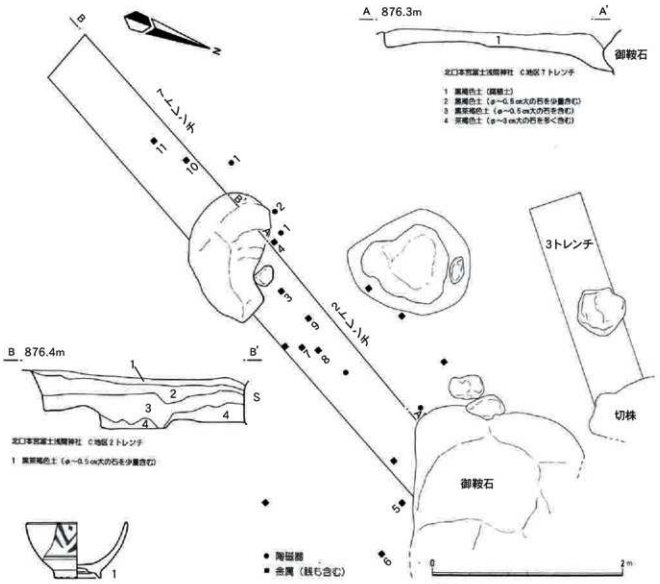
第48図　北口本宮富士浅間神社　C地区　1トレンチ　平面およびセクション図



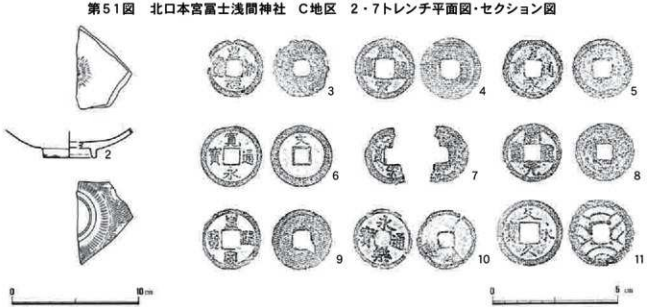
第49図　北口本宮富士浅間神社　C地区　1トレンチ　集石状遺構



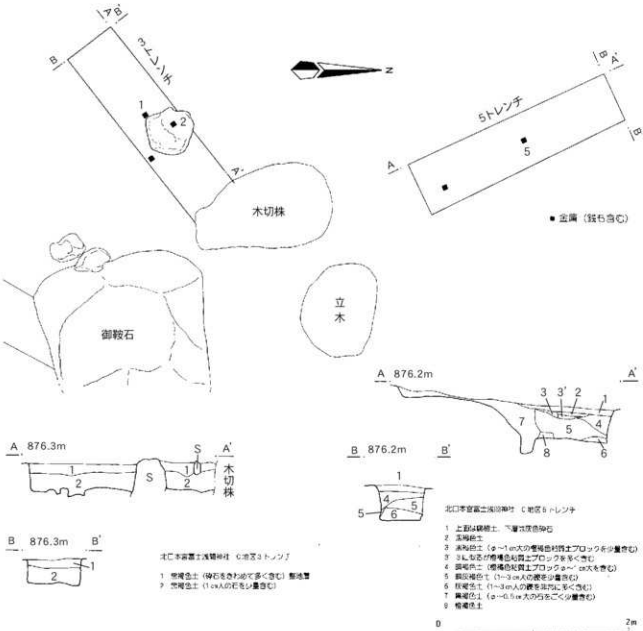
第50図　北口本宮富士浅間神社　C地区　1トレンチ出土遺物



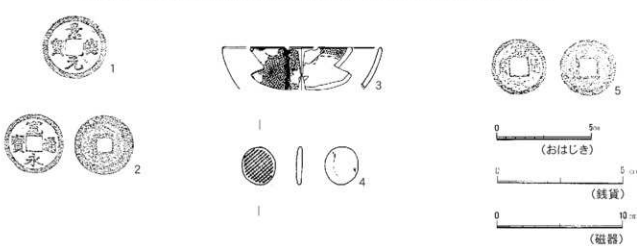
第51図　北口本宮富士浅間神社　C地区　2・7トレンチ平面図・セクション図



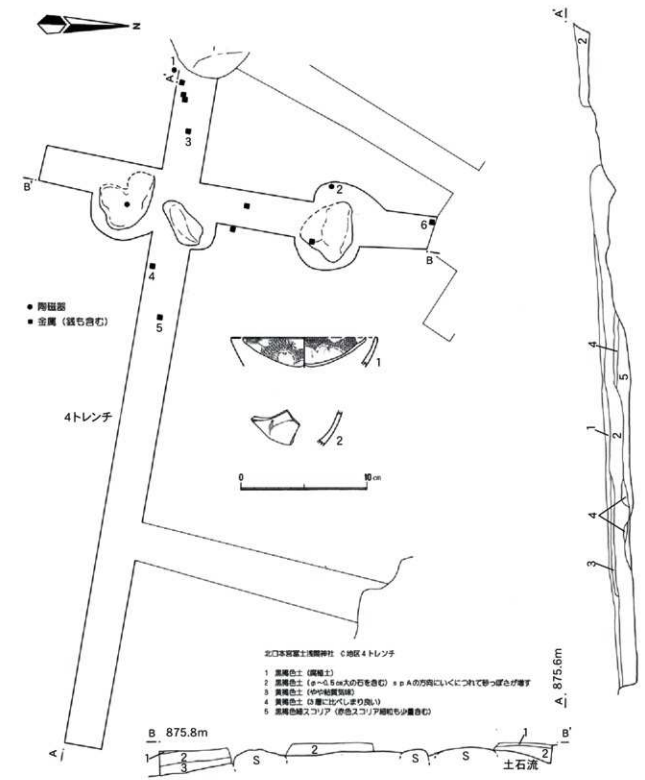
第52図　北口本宮富士浅間神社　C地区　2・7トレンチ　出土遺物



第53図　北口本宮富士浅間神社　C地区　3・5トレンチ平面図・セクション図

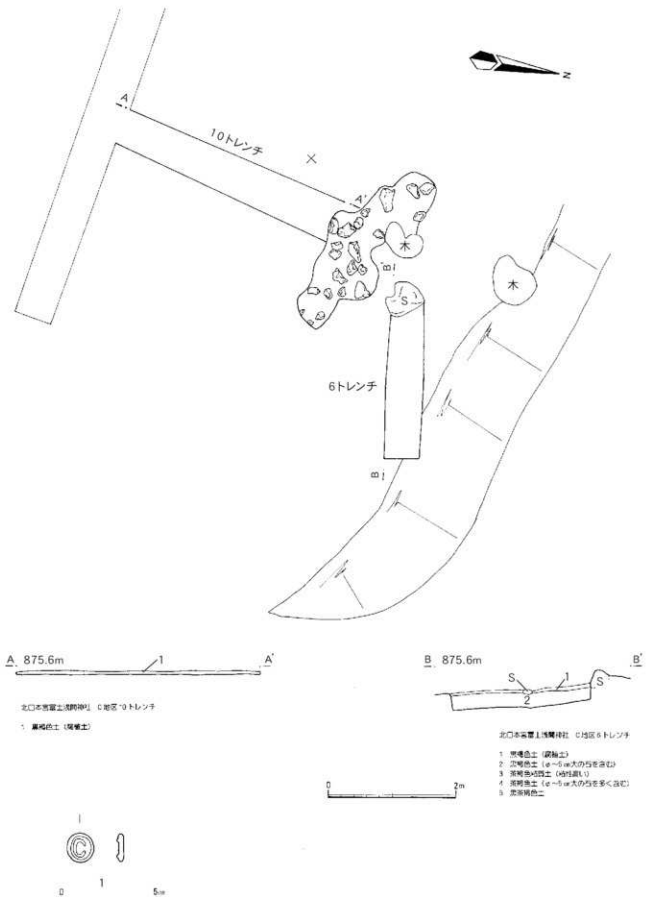


第54図　北口本宮富士浅間神社　C地区　3・5トレンチ　出土遺物

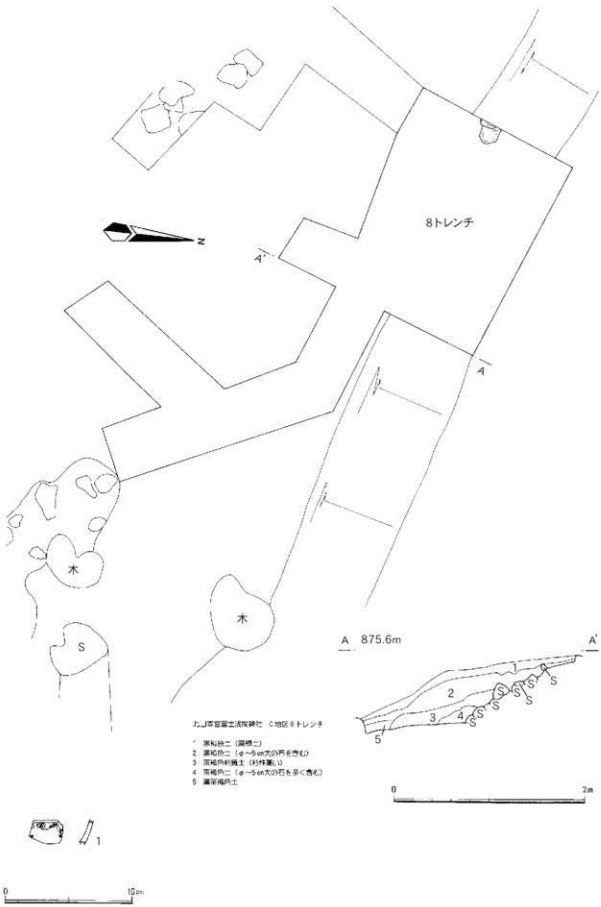


第５５図　北口本宮富士浅間神社　C地区　4トレンチ平面図・セクション図

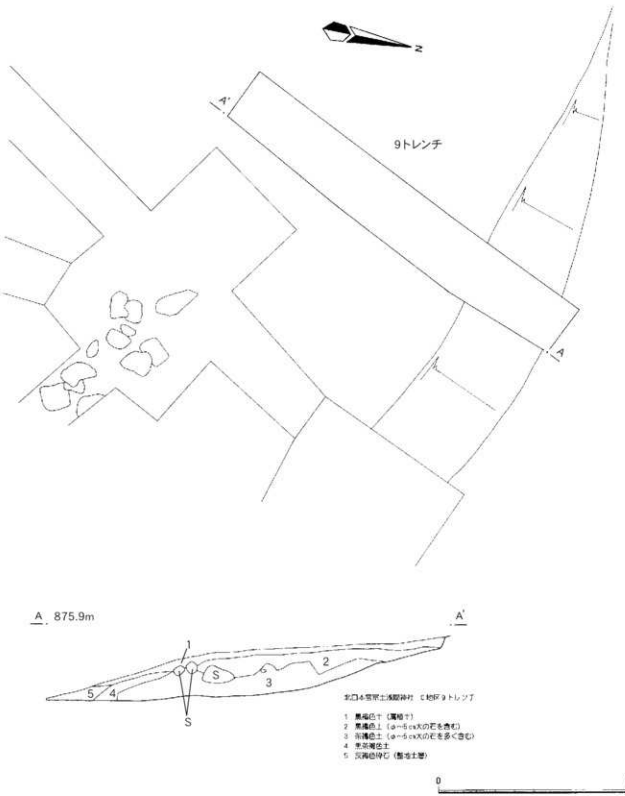
第５６図　北口本宮富士浅間神社　C地区　4トレンチ　出土遺物



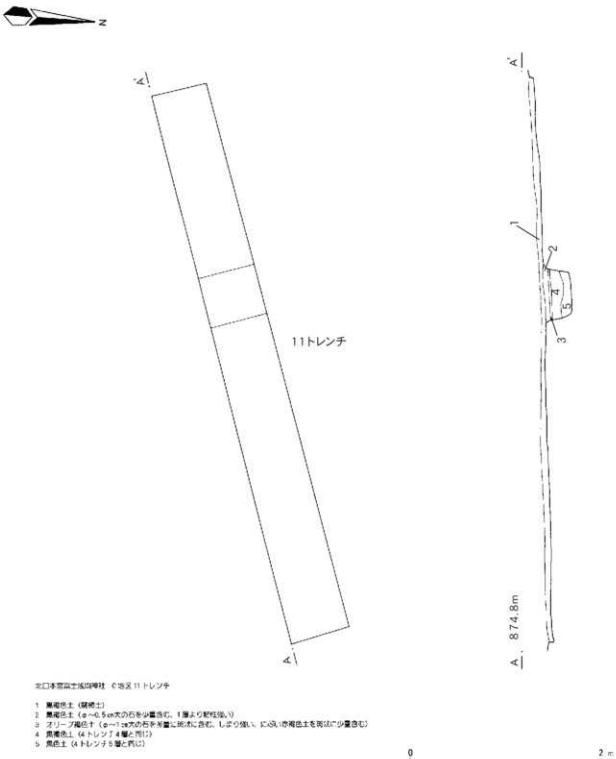
第57図　北口本宮富士浅間神社　C地区　6トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



第58図　北口本宮富士浅間神社　C地区　8トレンチ　平面図・セクション図・出土遺物



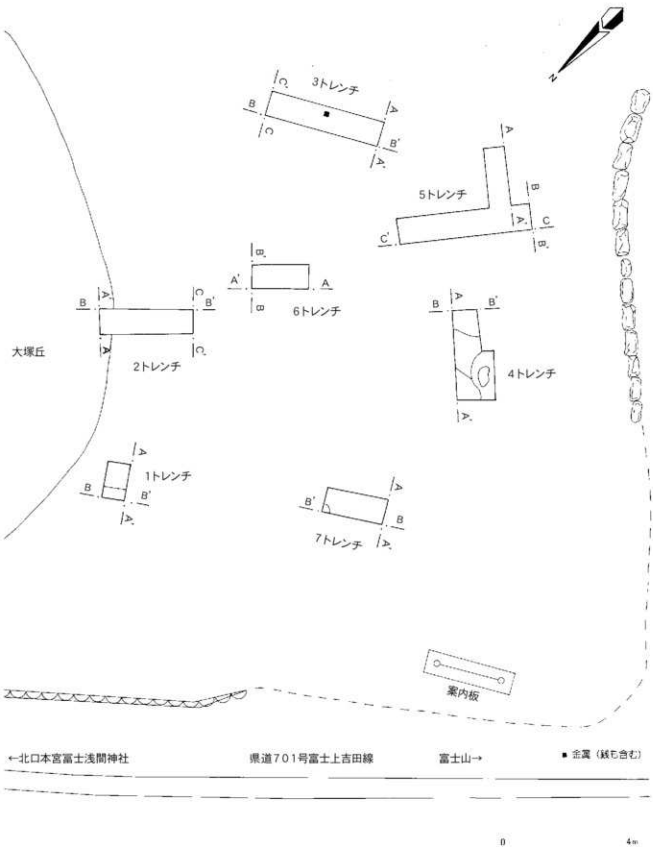
第５９図　北口本宮冨士浅間神社　C地区　9トレンチ　平面図･セクション図



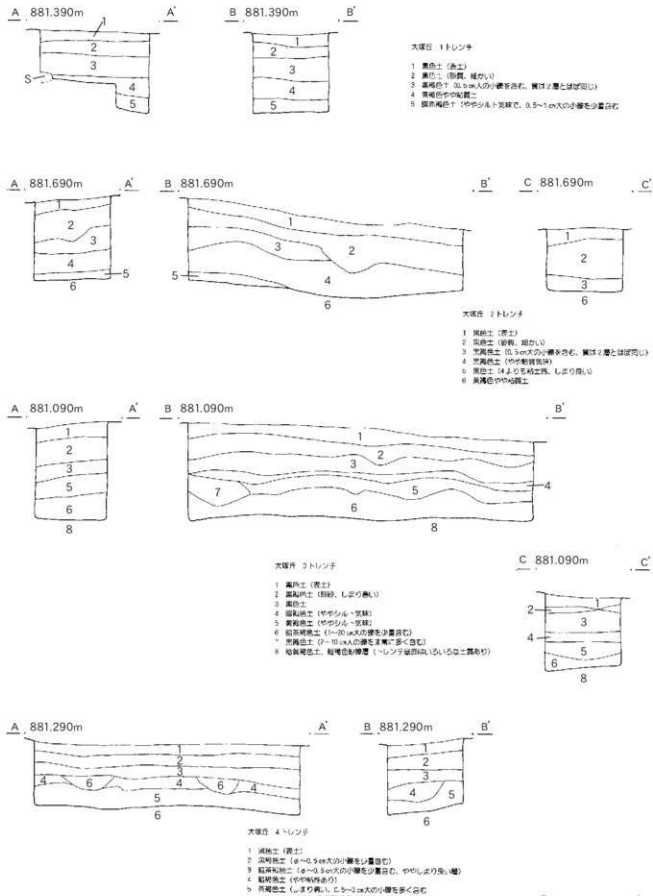
北口本宮富士浅間神社　C地区 11トレンチ

1　黒褐色土（現耕土）
2　黒褐色土（φ～0.5cmの石を少量含む。1層より粘性強い）
3　ブリーブ褐色土（φ～1cmの石を多量に均一に含む。しまり強い。にぶい赤褐色土を斑状に少量含む）
4　黒褐色土（4トレンチ4層と同じ）
5　黒色土（4トレンチ5層と同じ）

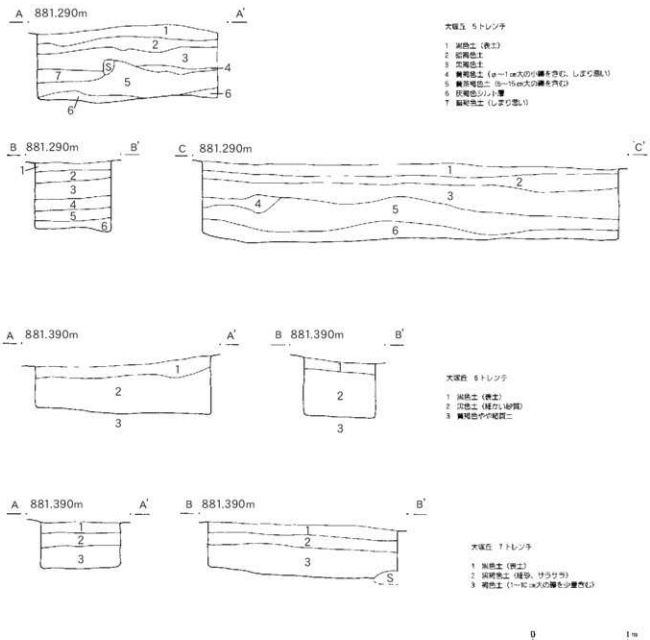
第60図　北口本宮富士浅間神社　C地区 11トレンチ　平面図・セクション図



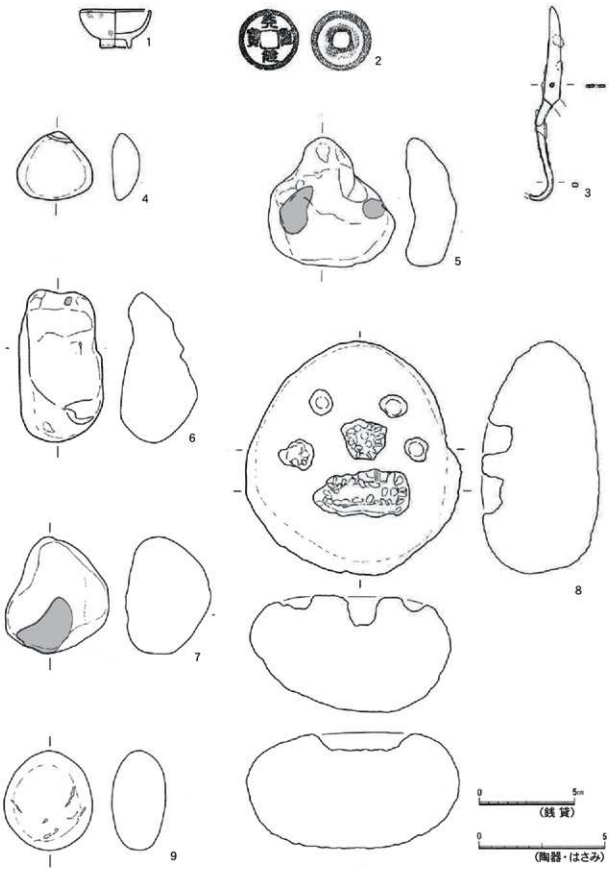
第61図　大塚丘　近接地　トレンチ位置図



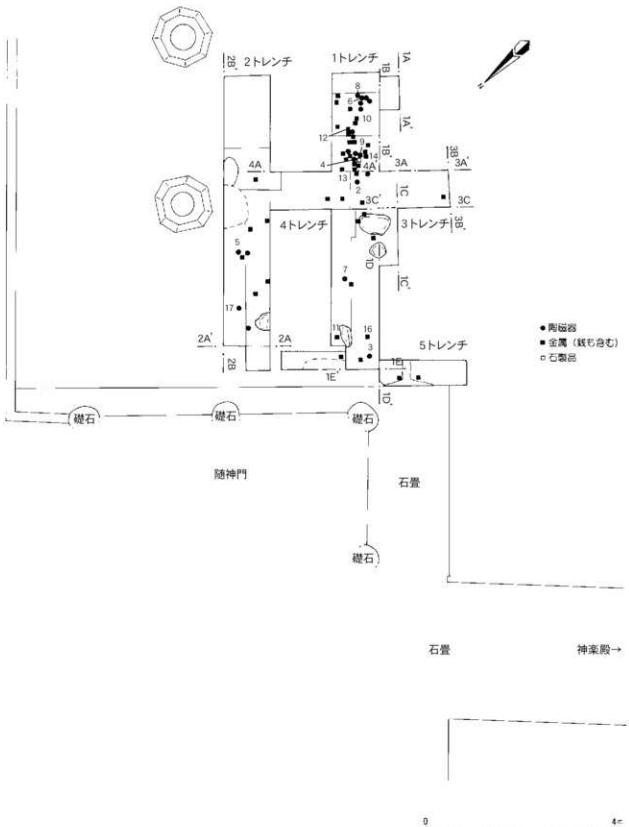
第62図　大塚丘　近接地　トレンチセクション図（1）



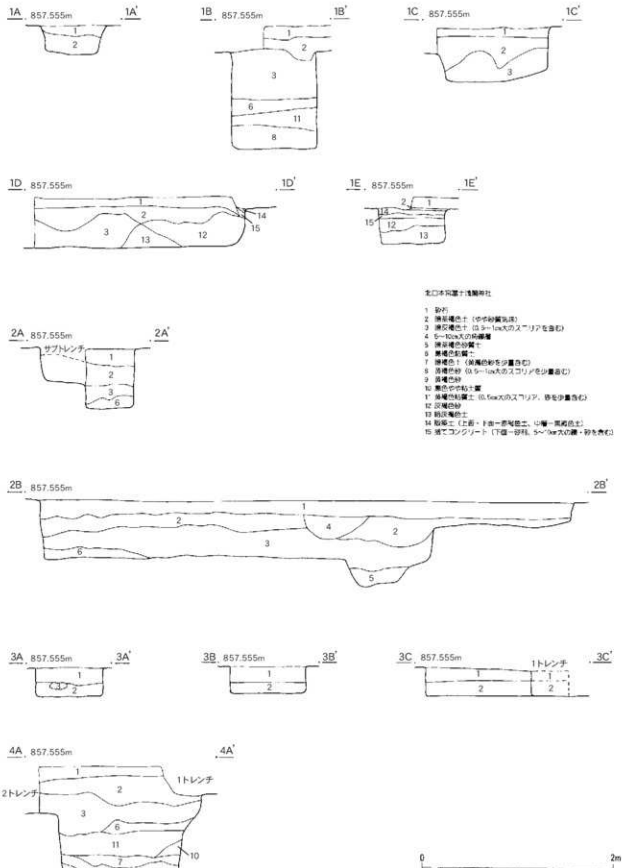
第６３図　大塚丘　近接地　トレンチセクション図（２）



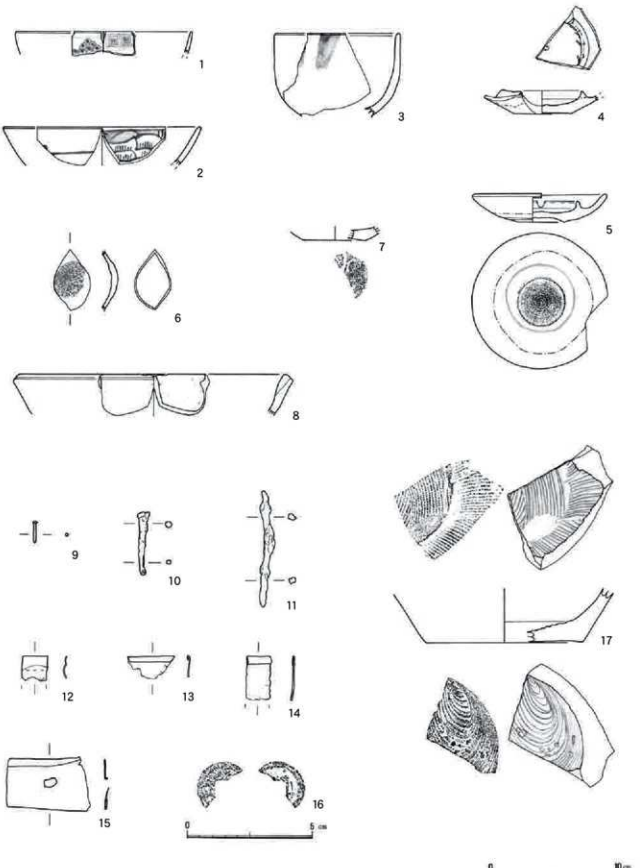
第64図　大塚丘　近接地　出土遺物・表採遺物



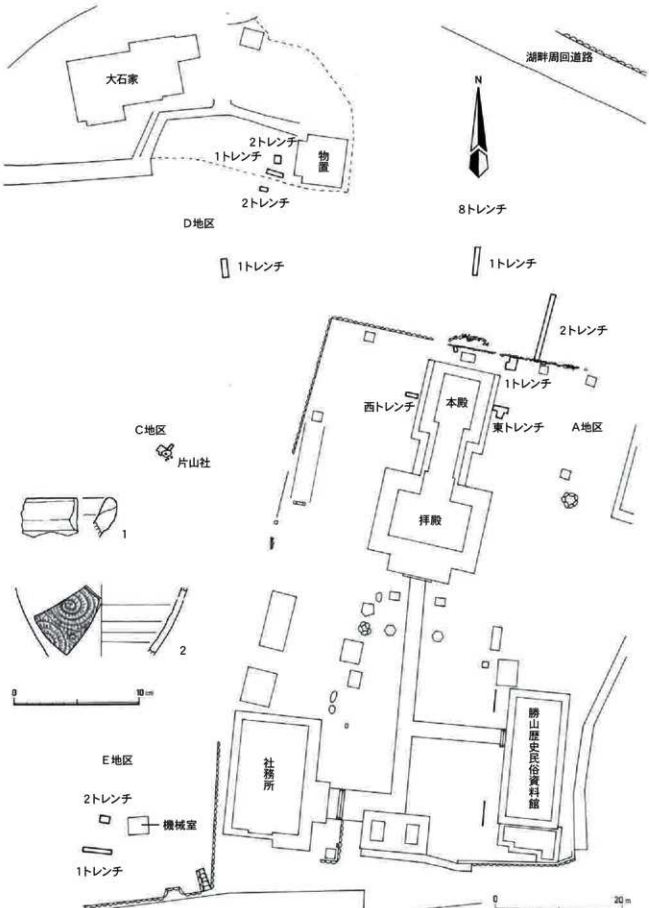
第６５図　北口本宮富士浅間神社（随神門周辺）　トレンチ位置図



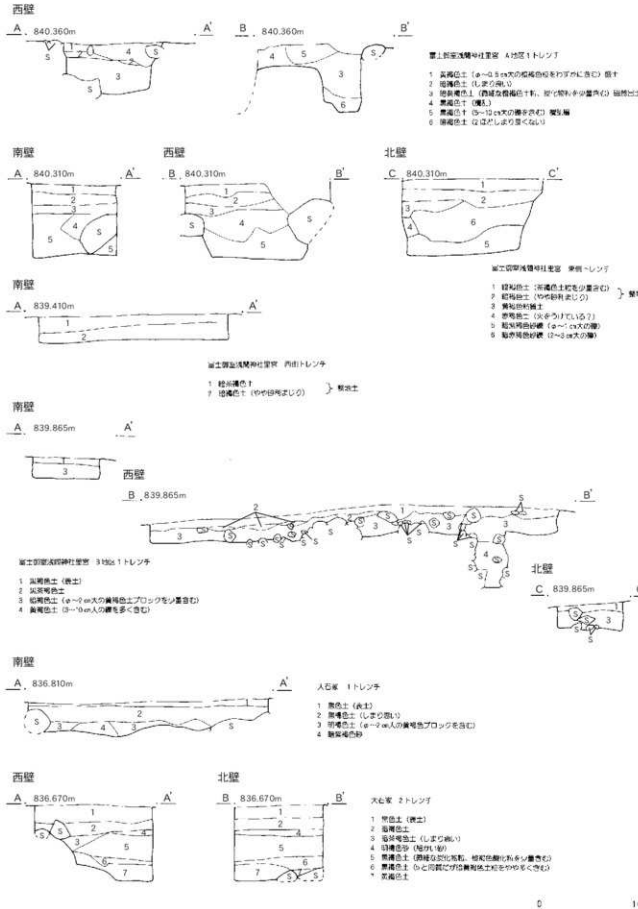
第６６図　北口本宮富士浅間神社（随神門周辺）　セクション図



第67図　北口本宮富士浅間神社（随神門周辺）　出土遺物



第６８図　富士御室浅間神社里宮　調査区・トレンチ位置図・出土遺物



富士御室浅間神社里宮　A地区1トレンチ

1　黄褐色土（φ～0.5cm大の橙褐色粒をわずかに含む）盛土
2　暗褐色土（しまりの弱い）
3　暗褐色土（黄褐色粒褐色土粒、炭化物粒を多量含む）暗褐色土層
4　黒褐色土（腐土）
5　黒褐色土（5～10cm大の礫を含む）礫層
6　褐褐色土（4ほどしまりは強くない）

富士御室浅間神社里宮　東側～トレンチ

1　暗褐色土（黒褐色土粒を少量含む）　} 盛土
2　暗褐色土（やや砂利まじり）
3　黄褐色粘質土
4　赤褐色土（火を受けている）
5　暗灰褐色砂礫（φ～1cm大の礫）
6　暗赤褐色砂礫（2～3cm大の礫）

富士御室浅間神社里宮　西側1トレンチ

1　暗黒褐色土
2　暗褐色土（やや砂粒まじり）　} 盛土

富士御室浅間神社里宮　3地区1トレンチ

1　黄褐色土（表土）
2　灰黄褐色土
3　暗褐色土（φ～2cm大の黄褐色土ブロックを少量含む）
4　黄褐色土（3～10cm大の礫を多く含む）

人石室　1トレンチ

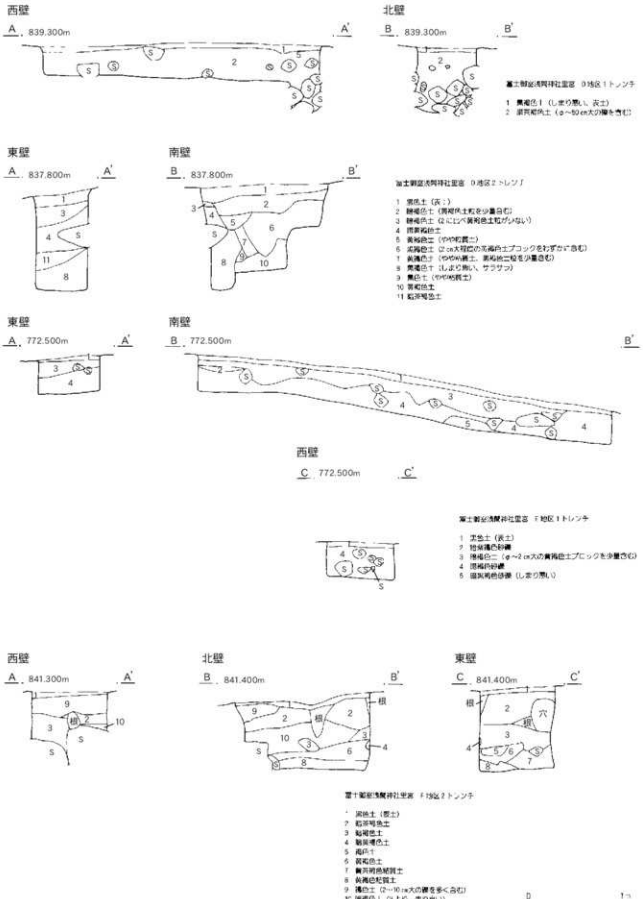
1　黒色土（表土）
2　黒褐色土（しまり弱い）
3　明褐色土（φ～2cm大の黄褐色ブロックを含む）
4　暗褐褐色砂

大石室　2トレンチ

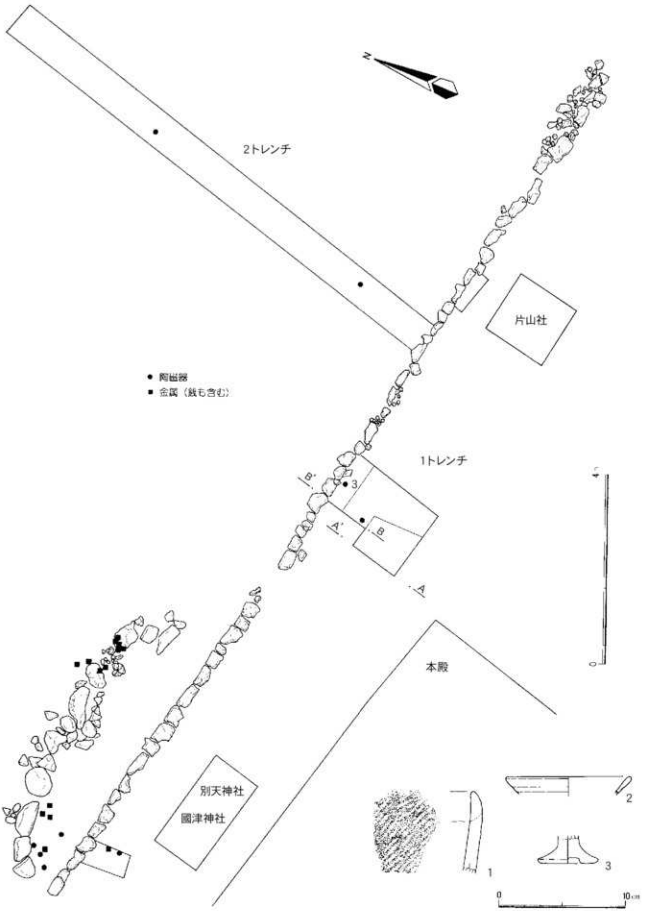
1　黒色土（表土）
2　暗褐色土
3　暗灰褐色土（しまり弱い）
4　明褐色砂（粘性強い）
5　黒褐色土（鉄錆な変化有り、暗褐色粘化あり）盛土
6　黒褐色土（5と同質だが黄褐色土粒をやや多く含む）
7　黒褐色土

0　1m

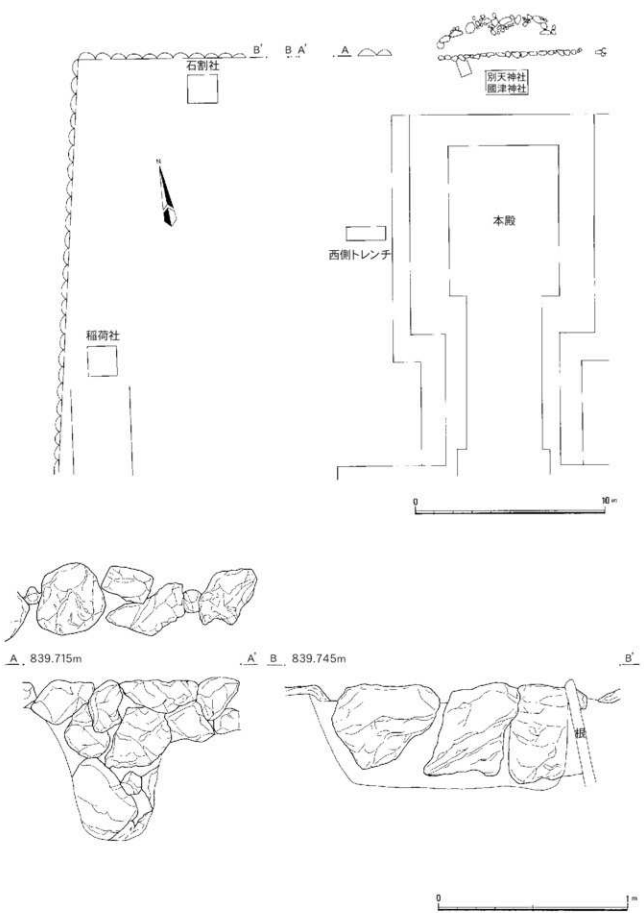
第69図　富士御室浅間神社里宮　セクション図(1)



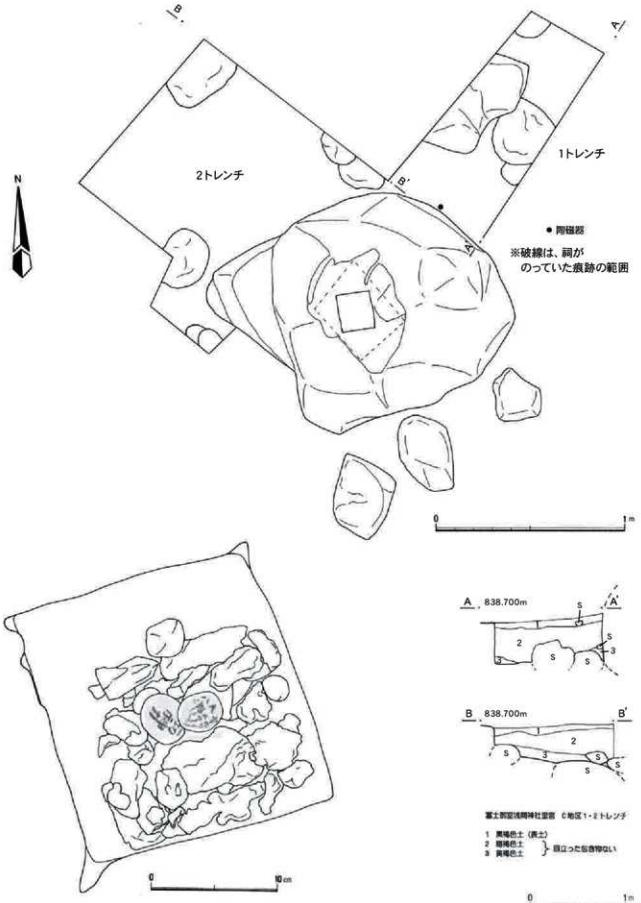
第７０図　富士御室浅間神社里宮　セクション図(2)



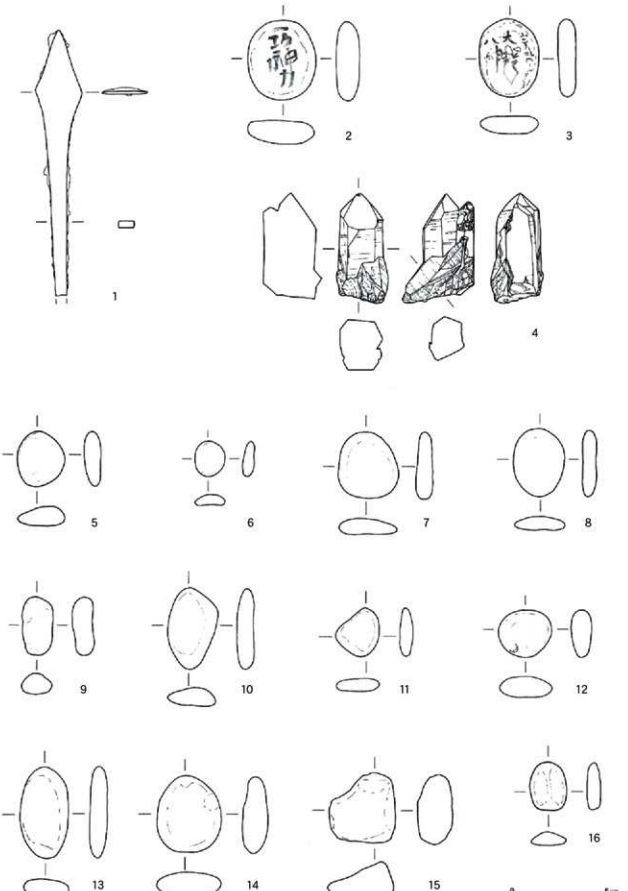
第71図　富士御室浅間神社里宮　A地区　石列検出状況・出土遺物



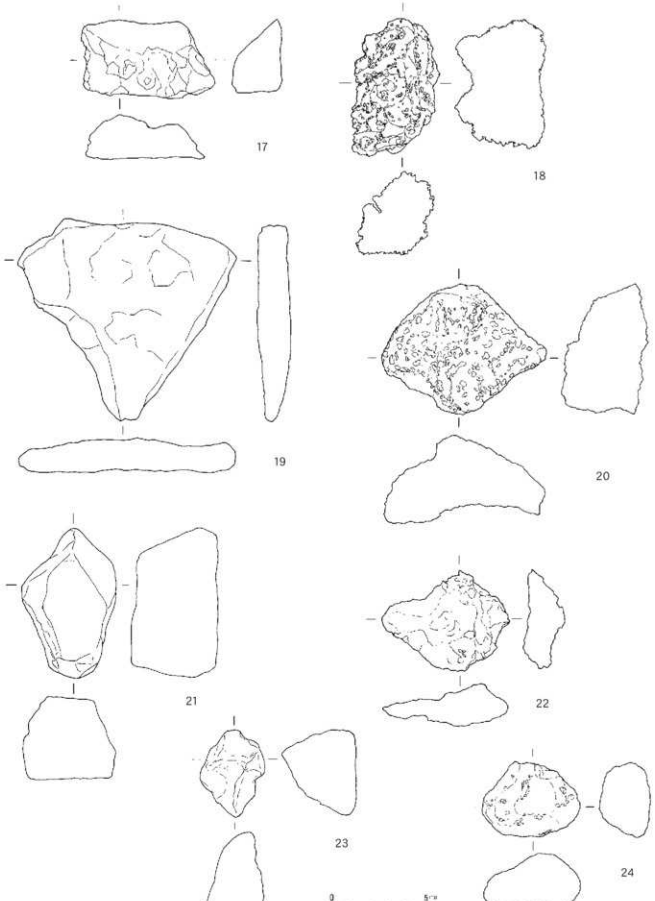
第72図　富士御室浅間神社里宮　石垣　エレベーション図



第73図　富士御室浅間神社里宮　片山社土台石　平面図・セクション図

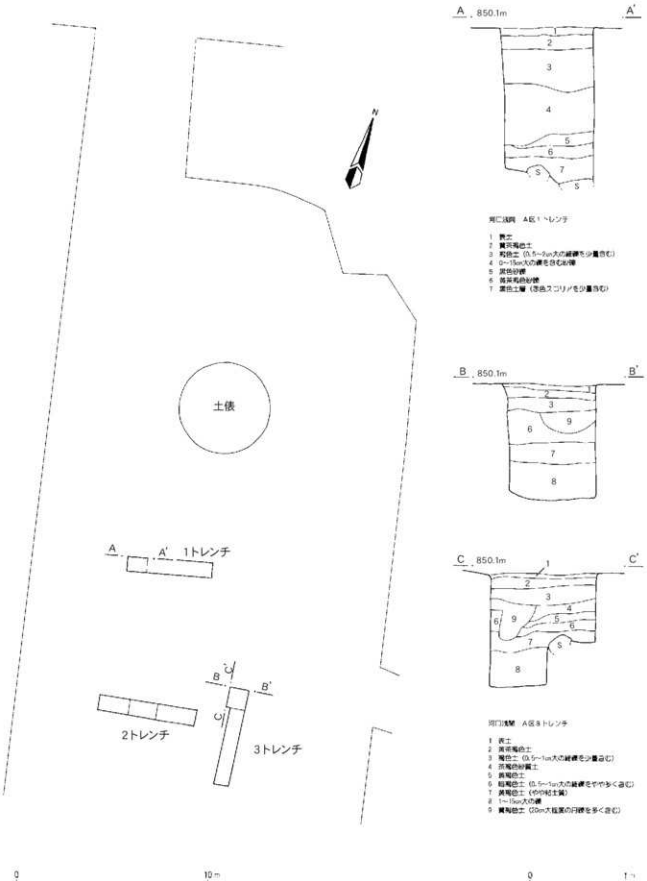


第74図　富士御室浅間神社里宮　片山社土台石　出土遺物(1)

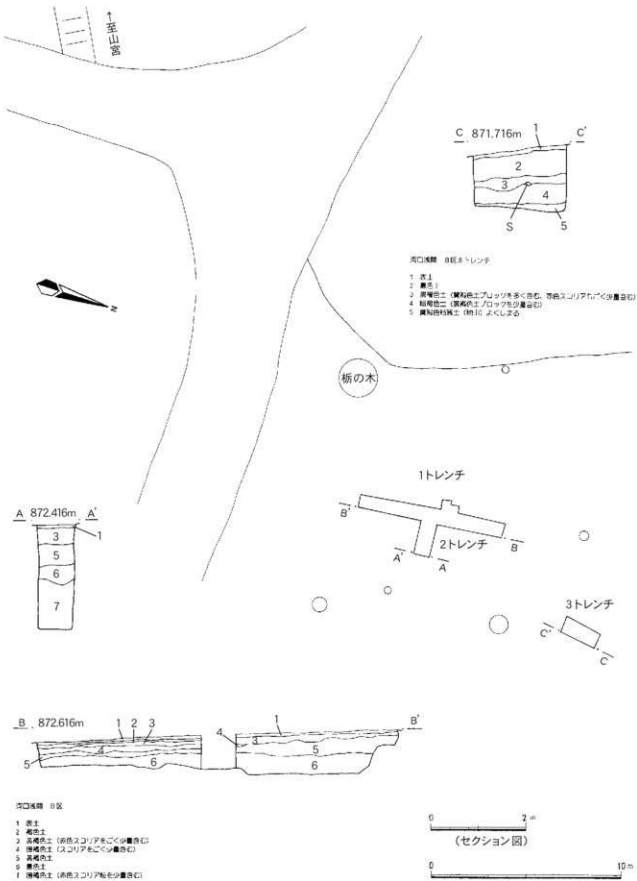


第75図　富士御室浅間神社里宮　片山社土台石　出土遺物(2)

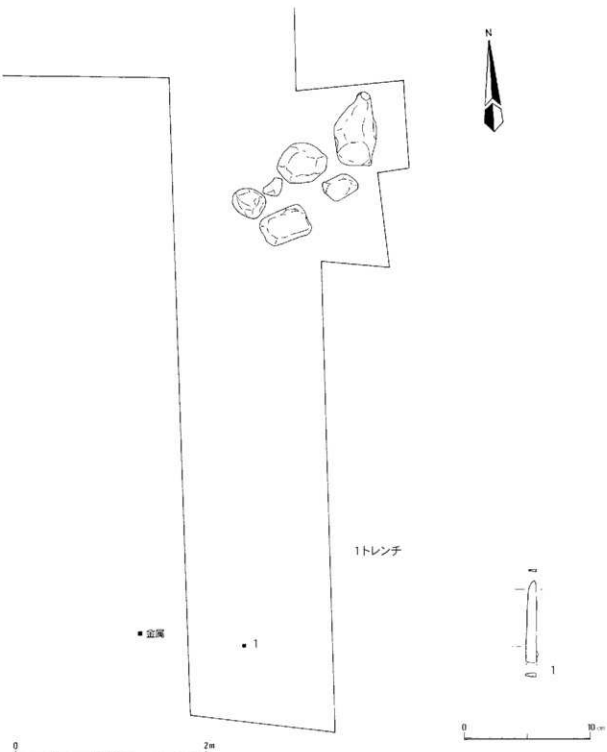
第７６図　河口浅間神社周辺図（Ｓ＝１／２０００）



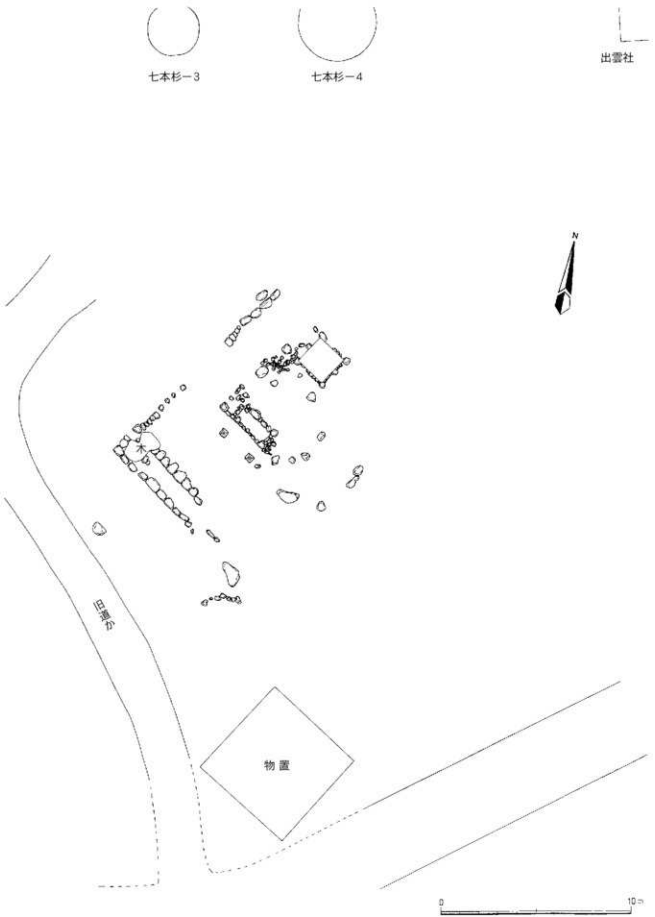
第７７図　河口浅間神社　A地区　トレンチ位置図・セクション図



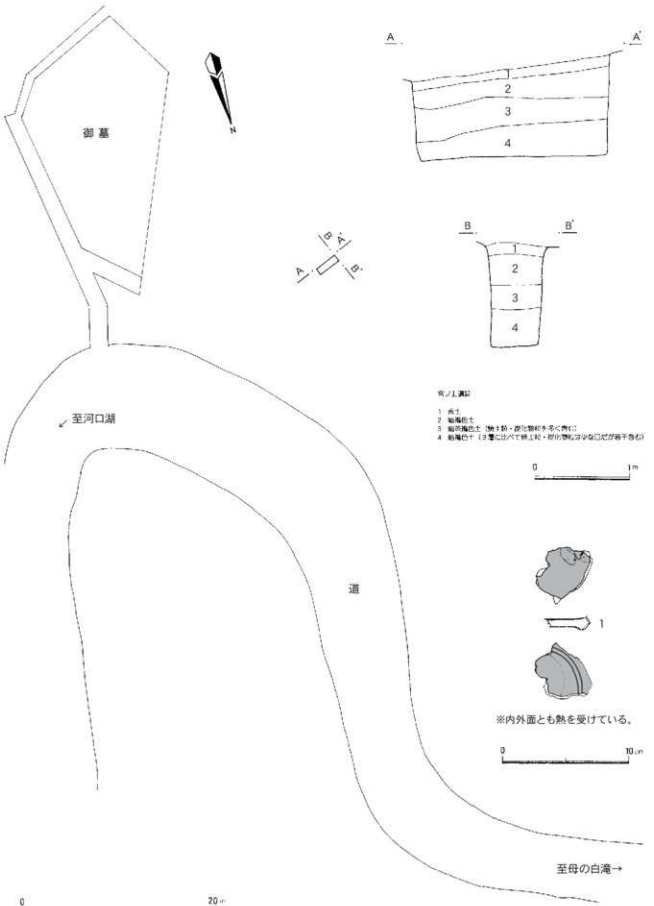
第78図　河口浅間神社　B地区　トレンチ位置図・セクション図



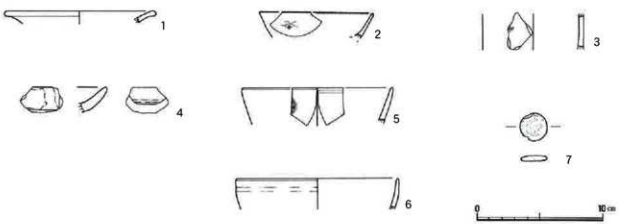
第79図　河口浅間神社　B地区　1トレンチ　集石状遺構・出土遺物



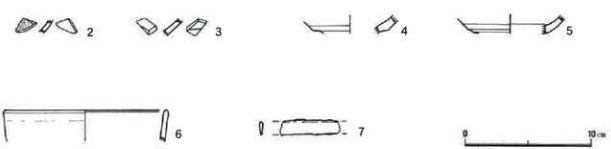
第80図　河口浅間神社　C地区　全体図



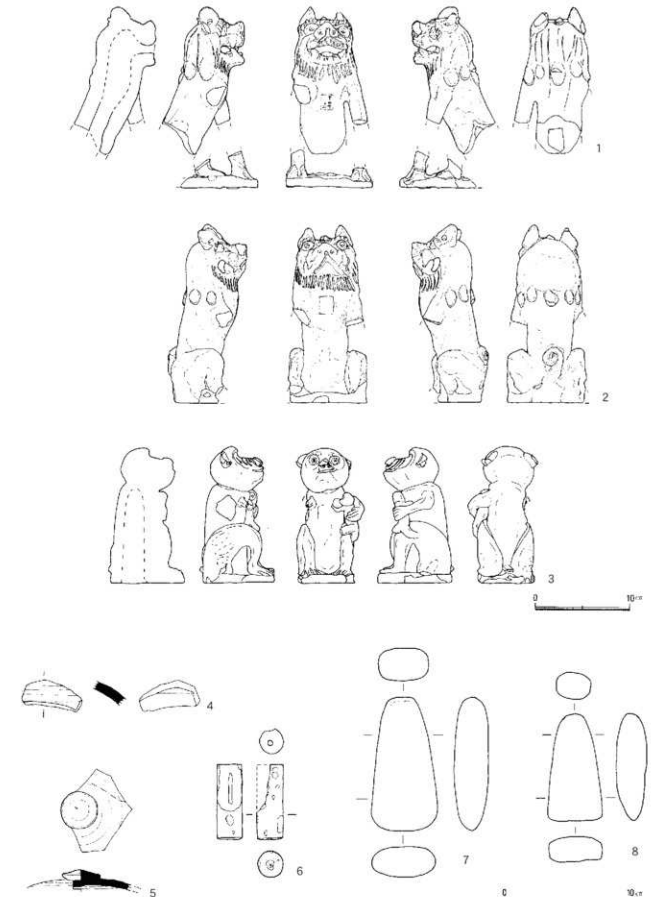
第81図　宮ノ上遺跡　トレンチ位置図・セクション図・出土遺物（1）



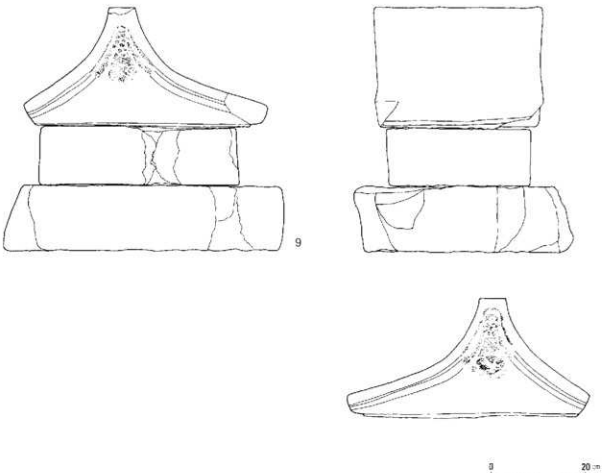
第82図　河口浅間神社　A地区　出土遺物

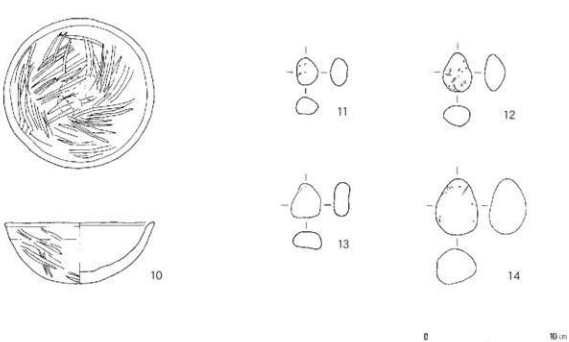


第83図　宮ノ上遺跡　出土遺物（2）

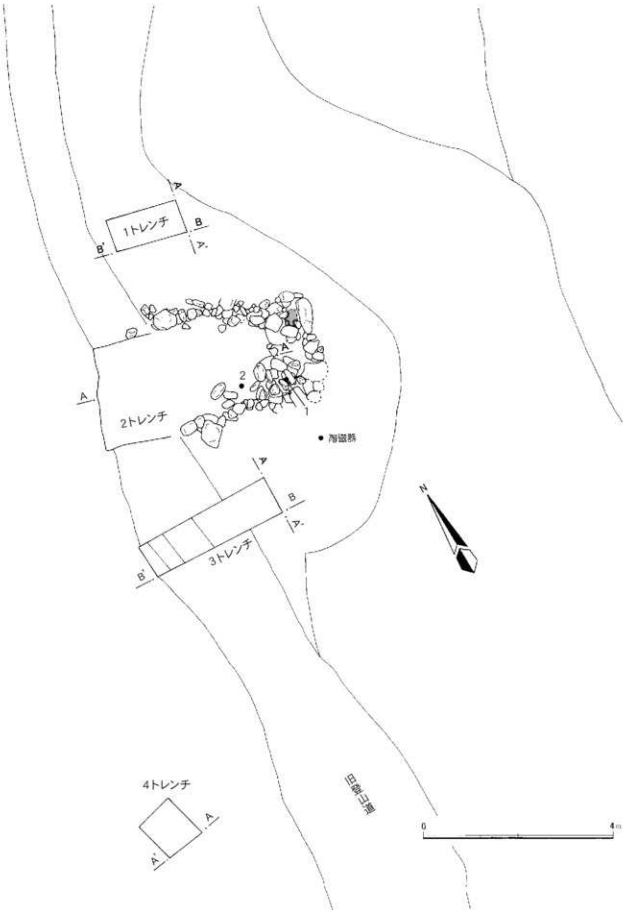


第８４図　河口浅間神社に伝わる文化財（１）

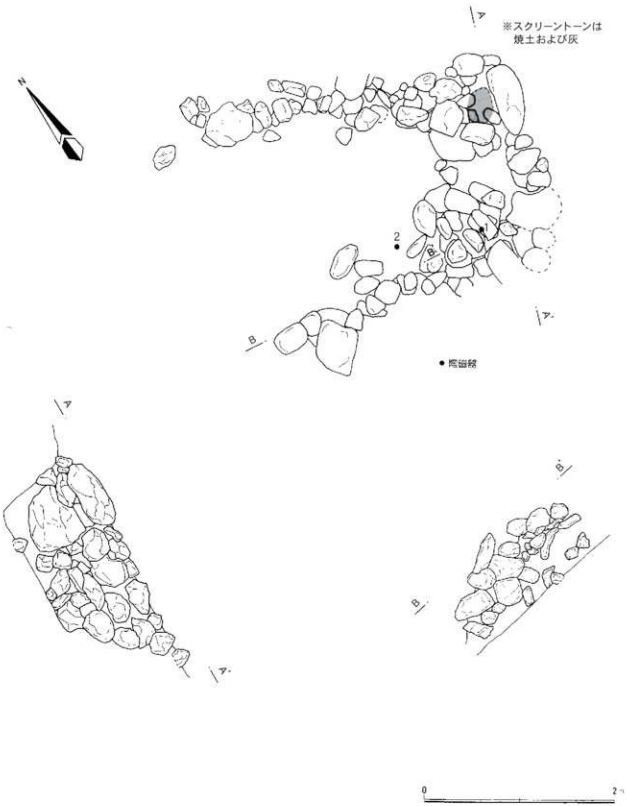




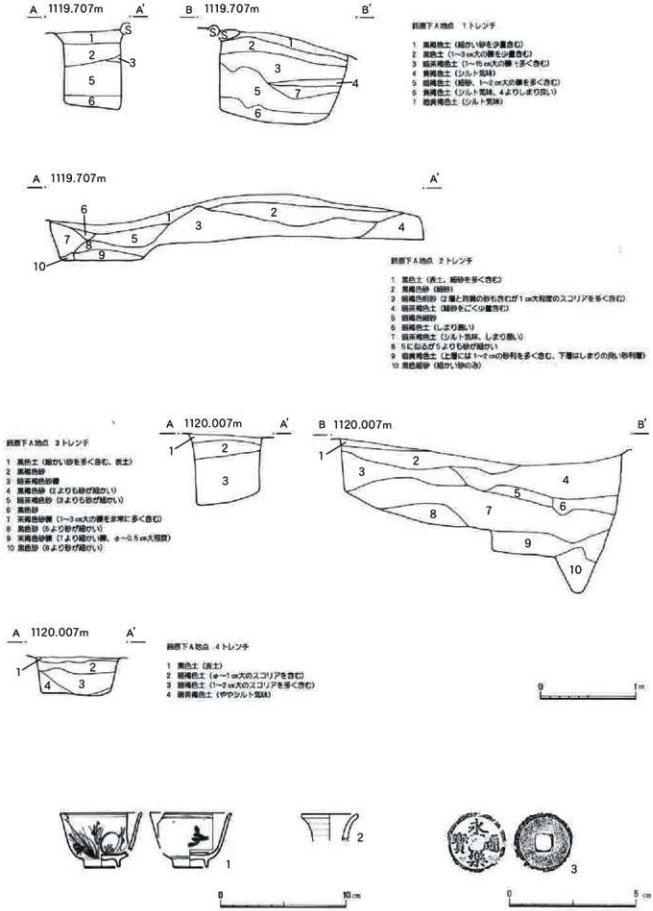
第８５図　河口浅間神社に伝わる文化財（２）・１０は疱橋遺跡出土遺物



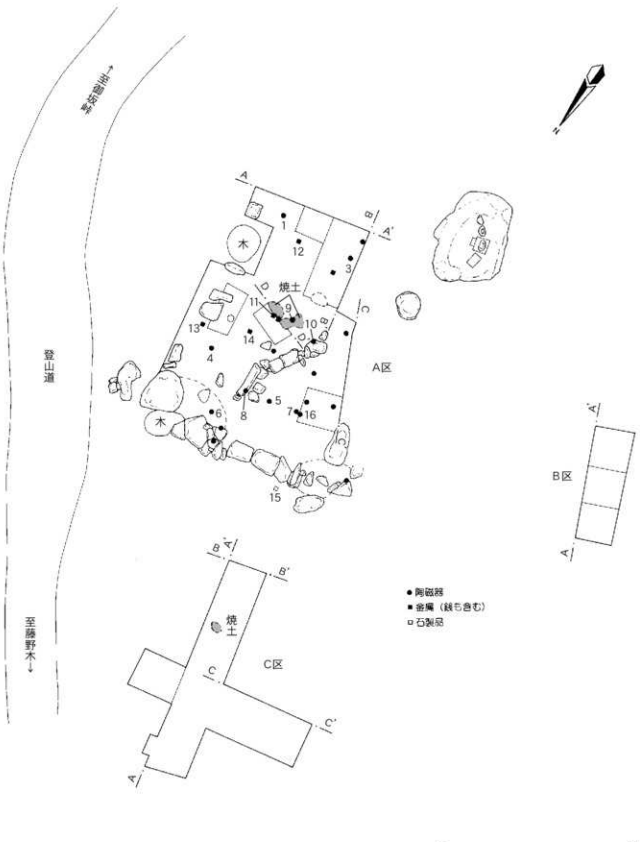
第86図　富士山吉田口登山道関連遺跡　鈴原A地点　全体図



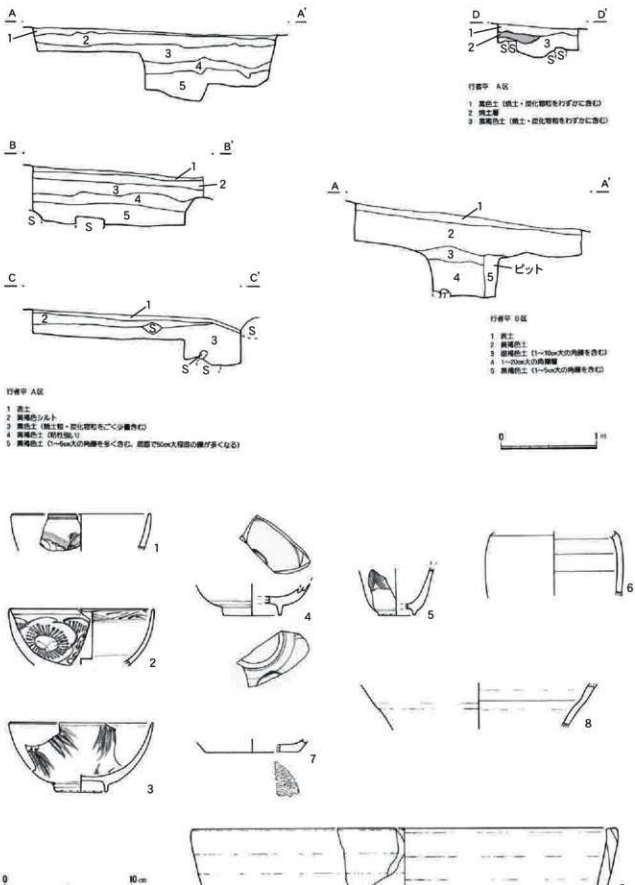
第87図　富士山吉田口登山道関連遺跡　鈴原A地点　コの字状石積　平面図・エレベーション図



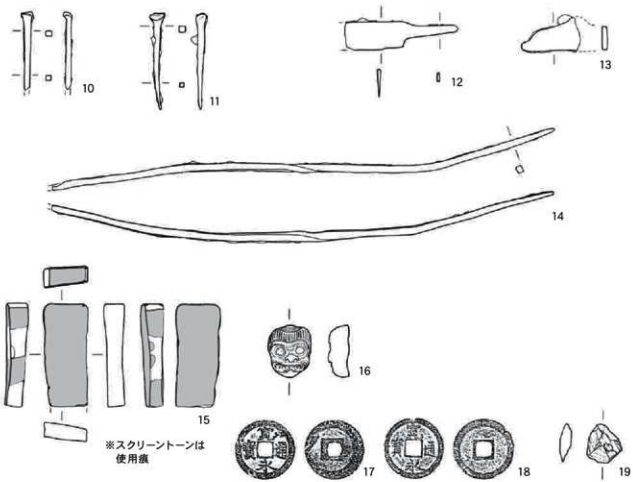
第８８図　富士山吉田口登山道関連遺跡　鈴原Ａ地点　セクション図・出土遺物



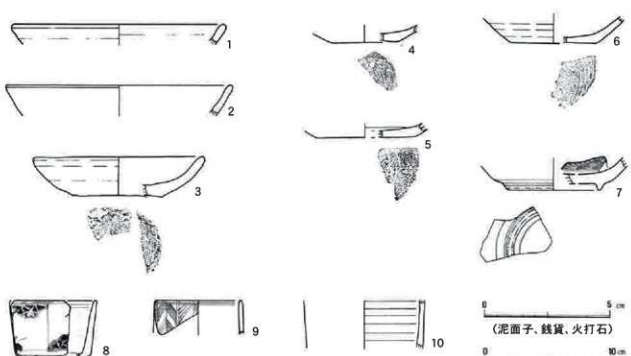
第89図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　全体図



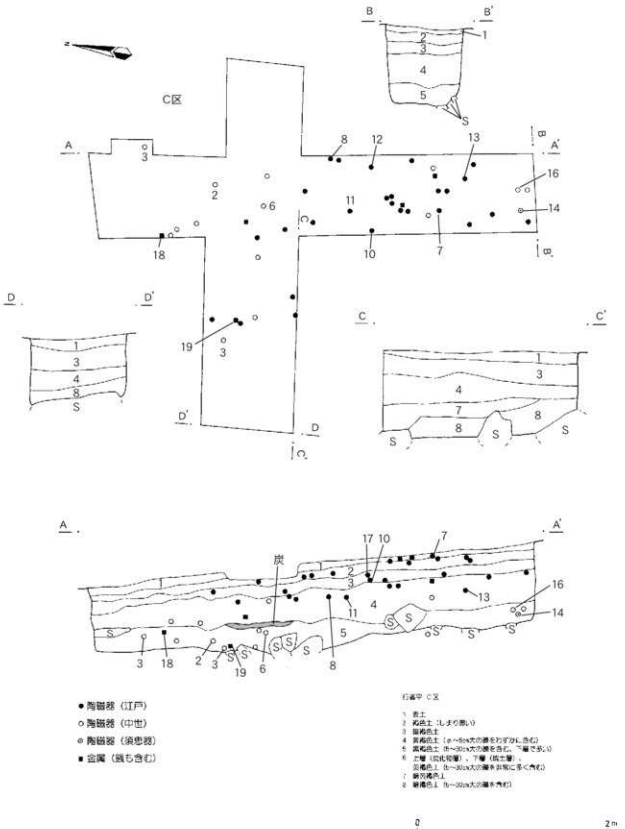
第９０図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　セクション図、Ａ区　出土遺物（１）



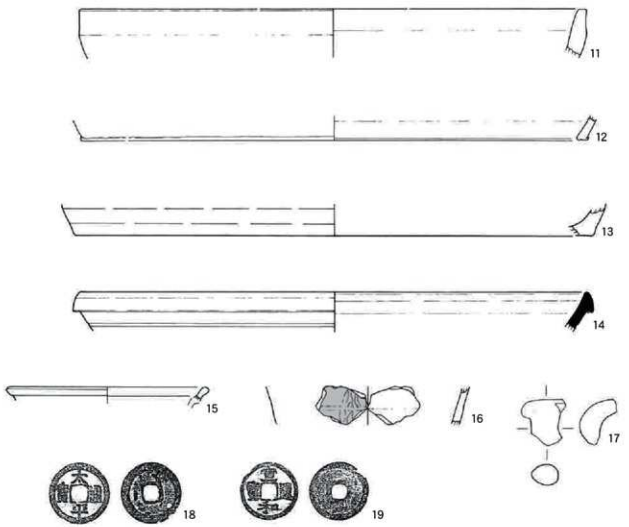
第91図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　A区　出土遺物（2）



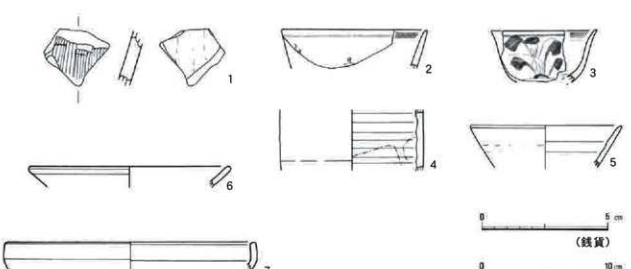
第92図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　C区　出土遺物（1）



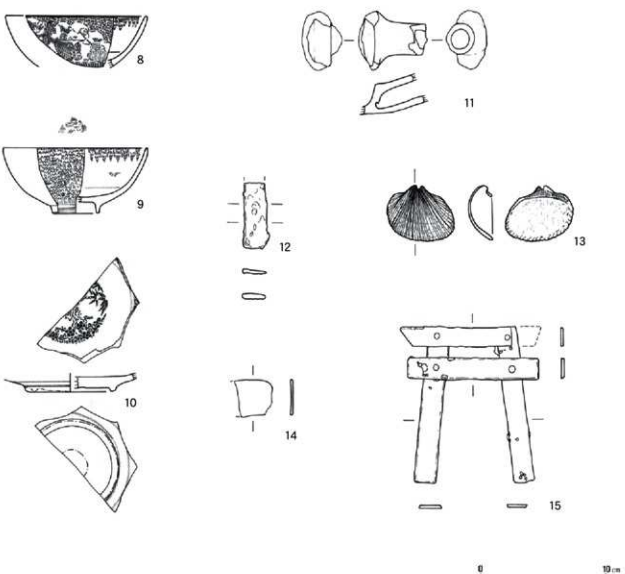
第９３図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　Ｃ区全体図・セクション図



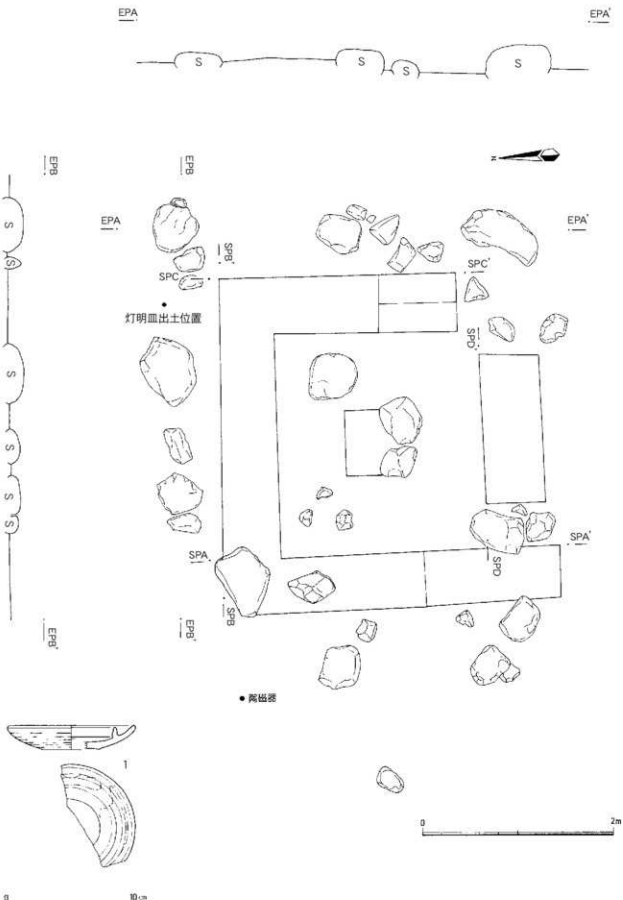
第９４図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）　C区　出土遺物（２）



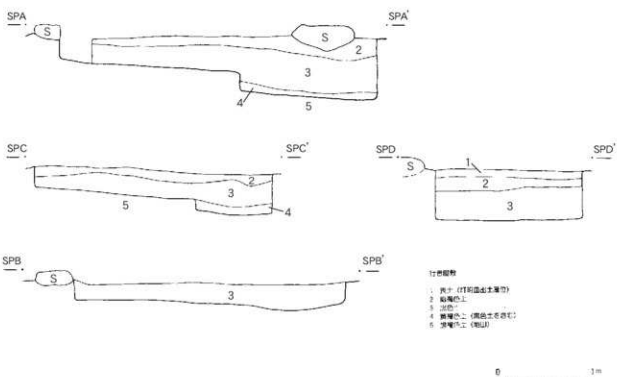
第９５図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地周辺）　表採遺物（１）



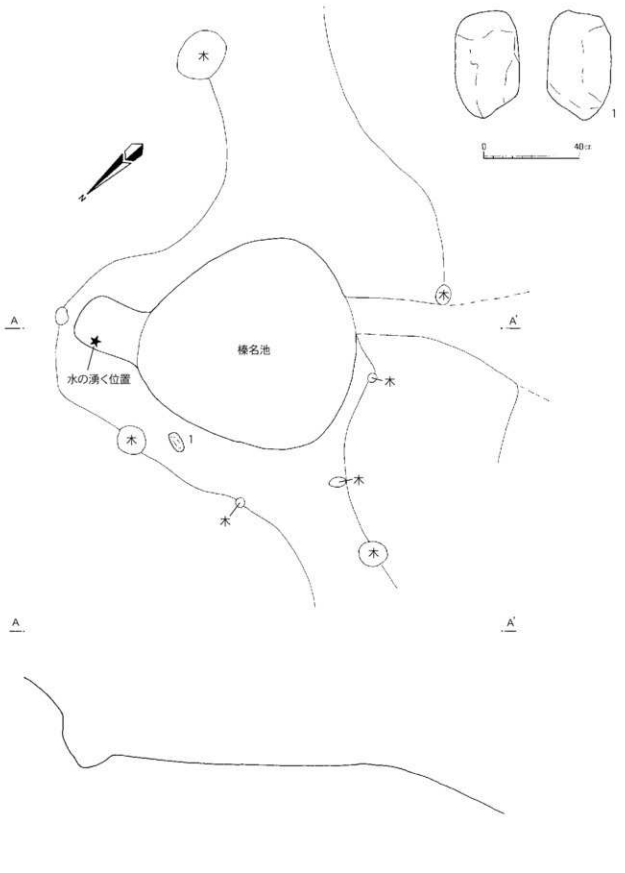
第９６図　行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地周辺）　表採遺物（２）



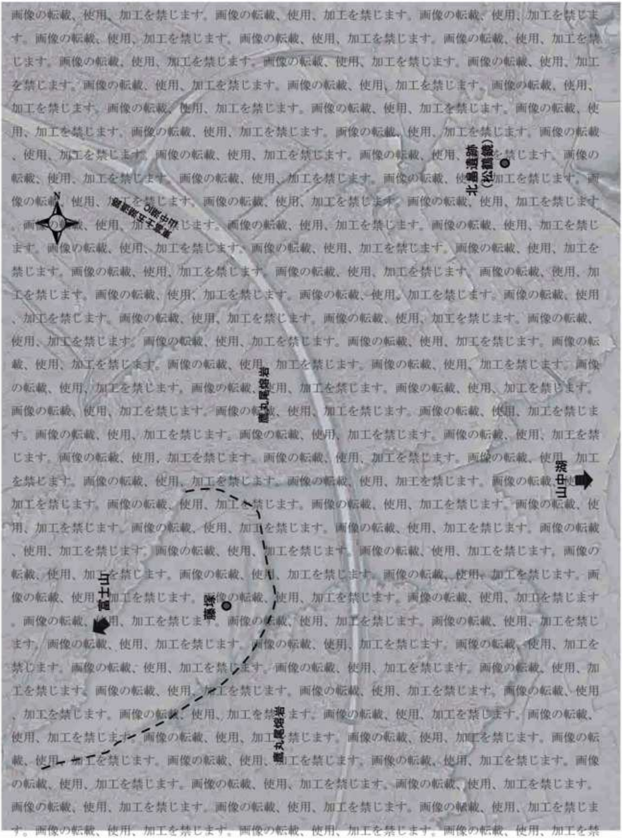
第９７図　行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）　全体図・出土遺物



第９８図　行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）　セクション図



第９９図　榛名池（足和田山中）　全体図・エレベーション図



画像の転載、使用、加工を禁じます。

第100図　藤塚（山中湖村）周辺図

第 101 図　山梨県の富士塚分布図

第２表　山梨県の富士塚一覧

No.	塚の名称	所在地	現状と特徴	街道筋
1	富士塚	上野原市日野	直径20m　円墳を利用して造られた　現在は耕作地になり大半が削平	甲州街道
2	浅間（アサマ）塚	甲州市塩山下萩原	直径15～20m　西から見た高さ3m　浅間大神と山神大神の碑	青梅街道
3	富士塚	甲州市塩山下小田原	北から南に突き出した尾根上に位置するが、ほとんど削平	青梅街道
4	浅間（センゲン）塚	甲州市塩山竹森	直径15～20m　西から見た高さ3m　高さ3m　富士浅間大神の祠　竹森川を東に望む	青梅街道
5	浅間塚	甲州市塩山三日市場	直径30m　高さ7～8m　かつて方四間程の神楽殿があった　木花咲耶姫命、大山祇命、栢瓊神など五柱が祀られる　富士塚とも呼ばれていた	秩父往還
6	富士塚	山梨市小原東字立石	塚は消滅　直径10m　高さ1m　円形の基壇　享保十三年（1728）の富士仙現参請願成就の碑が立つ	青梅街道
7	富士塚	山梨市万力字藤塚	直径23m高さ5m、頂部はやや窪んで石の祠があるが破損がひどい	青梅街道
8	ふじ塚	山梨市三ケ所字野田	20年ほど前に削平　六筆に分譲　当時は直径20～30m高さ5m程　キツネ山とよばれる　現在は跡地に富士浅間大神の碑が残る	青梅街道
9	富士塚古墳	笛吹市春日居町鎮目字日向	笛吹川を南東に望む山麓斜面　標高340m付近　直径10mの円墳　須恵器が散布　古墳から富士塚に転用されたもの　正面に大蔵経寺山の裾が伸びているため、富士山は見えない	青梅街道
10	富士塚	笛吹市御坂町下黒駒	黒駒勝造の墓の近くにある　頂部は削平　現高2m程　直径20m　社や祠はなくこの地の字名を「富士塚」という	鎌倉街道
11	迎富士浅間神社	笛吹市御坂町	直径30m高さ5m　表面に礫を石垣状に積み上げた三段築成の塚　頂上に社があり　木花開（咲）耶姫命、瓊々杵命、大山祇命を祀る　かつて「富士塚」と言われる	鎌倉街道
12	富士塚（富士塚古墳）	笛吹市八代町竹井字富士塚	直径25m、北側より高さ5～6m　頂上には浅間大神の碑を中心に稲荷神社、天照皇大神などの碑がある	若彦路
13	富士（藤）塚	北杜市小淵沢大笹屋	消滅して現存しない　60年ほど前には直径10m高さ2～3mの富士塚が存在した。ここからは富士山がよく見える	逸見道
14	藤塚	北杜市長坂町中丸字藤塚	直径10m　やや盛り上がる　江戸時代には家の守り神として社があったが、何を祀っていたかは不明　明治時代に曾祖父によってたてられた「富士見岡碑」が立てられている	逸見道
15	藤塚	北杜市長坂町夏秋	東に鳩川の作った低地に望む丘陵端にあり、直径10～15m高さ1.5mで碑や社は見当たらない。	逸見道
16	藤塚（富士塚）	北杜市長坂町字藤塚	直径20m高さ1.5m　中央がやや窪む　社や碑は見られない	逸見道
17	藤塚	山中湖村山中935	山中小学校から西へ500mほど鷹丸尾溶岩流に挟まれた場所にある　富士山を遥拝する施設か、南北朝時代の長慶天皇の墓という説もある　直径14m高さ2.9m	鎌倉街道

第３表　陶磁器類遺物観察表

図版No.	遺物No.	出土位置	種別	器種等	法量(cm)［現存値］(推定値) 口径	器高	底径	装飾技法 絵付・釉薬	装飾技法	文様	胎土	色調	刻印・銘	遺物注記No.	備考
9	1	1トレンチ	土師器	かわらけ	—	1.3	(6.0)	—	—	—	赤色、白色粒子含む、やや粗い			09オムロ１トレP1	ナデ、回転糸切痕
11	1	3トレンチ	陶器	碗	(12.4)	5.4	4.0	灰釉、透明釉	—	—		灰		09オムロ３トレP1 09オムロ３トレP2	
11	2	3トレンチ	磁器	小碗	(7.8)	3.8	—	染付、コバルト釉	手描き	草文	緻密	白		09オムロ３トレ一括	
12	1	4トレンチ	土師器	かわらけ	(6.6)	1.3	—	—	—	—	雲母含む、ナデ、回転糸切痕、やや粗い			09オムロ４トレP3	
13	1	5トレンチ	土師器	かわらけ	(7.4)	1.9	(4.4)	—	—	—	赤色、黒色粒子含む、やや粗い			09オムロ５トレP3	ナデ、回転糸切痕、焼きハゼあり
13	2	5トレンチ	土師器	杯	—	2.0	(9.0)	—	—	—	赤色粒子含、やや粗い			09オムロ５トレP1	ナデ、回転糸切痕
15	1	7トレンチ	陶器	碗	(8.9)	1.65	—	灰釉	—	—	密	浅黄橙		09オムロ７トレP2	
16	1	8トレンチ	土器	かわらけ	—	2.1	—	—	—	—	やや密、白色、赤色粒子微量、			09オムロ８トレP7	
16	2	8トレンチ	土師器	かわらけ	—	2.3	—	—	—	—	やや密、均一、赤色粒子含む			09オムロ８トレP4	ナデ
16	3	8トレンチ	土器	かわらけ	—	1.3	—	—	—	—	密、均一、			09オムロ８トレP1	
16	4	8トレンチ	磁器	碗	—	1.0	—	染付	手描き	—	緻密、均一			09オムロ８トレP3	
16	5	8トレンチ	土師器	杯	—	(1.1)	(8.0)	—	—	—	やや粗い、赤色、白色粒子含む			09オムロ８トレP9	ナデ、回転糸切痕
16	6	8トレンチ	磁器	碗	—	2.4	—	染付	手描き	人物	緻密、均一、			09オムロ８トレP6	貫入、釉切れあり
18	21	—	陶器	灯明受皿	(4.5)	1.6	—	暗褐色釉	—	—	密、均一			09オムロ	
18	22	—	磁器	碗	—	2.3	—	染付、白	—	—	緻密			09オムロ	
18	23	—	陶器	碗	—	1.8	—	灰釉	—	—	密、均一			09オムロ	
18	24	—	陶器	灯明受皿	10	2.1	4.2	褐釉	—	—	密、均一	灰色		09オムロうら山	
18	25	—	陶器	碗	—	1.5	4.9	明黄褐釉	—	—	密だが、細粒を含む			09オムロ	削出高台、貫入あり
20	1	9トレンチ	陶器	壺	—	2.3	(6.2)	—	—	—	密、均一			09オムロ9－2トレP1	貫入
24	1	4トレンチ	陶器	碗	(11.0)	6.9	—	褐釉の上に灰釉(透明)	—	—	ほぼ均一、やや密			10オムロ 4T1.3.4	口縁と体部下方に溶着痕
24	2	4トレンチ	磁器	鉢	14.4	5.75	—	灰釉	—	—	やや粗い			10オムロ 4T	
24	3	4トレンチ	磁器	捏鉢	口縁(3.2)	0.9	—	外：灰釉	—	—	緻密			10オムロ 4T	
24	4				体部 —	8.0	5.8	内：自然釉（底）							
24	5		陶器	碗	—	2.8	4.6	黒釉	—	—	粗い、かなり大きな小石を含む			10オムロ 4T	
25	1	2トレンチ	陶器	筒碗	—	3.6	—	茶褐釉	—	—	均一密		?巳	10オムロ 2T	汽車土瓶
27	11	一括	磁器	猪口	(6.6)	3.3	—	染付	手描き	丸紋	緻密			10オムロ	
27	12	旧道	磁器	小碗	9.2	5.1	3.6	染付、透明釉	手描き	—	緻密			10オムロ	底部：東
27	13	一括	磁器	小碗	7.6	4.3	3.6	上絵付透明釉	—	外：○納紀念 内：講社の紋（一山講）、坂本町、身	緻密			10オムロ	
27	14	一括	磁器	皿	16.4	2.7	9.2	染付	手描き	—	緻密			10オムロ	
27	15	一括	陶器	擂鉢	—	3.7	(11.8)	にぶい赤褐	—	—	やや密			10オムロ	砥石として使われた
27	21	表採	土器	—	14	2.3	—	黄灰色	—	花	密			11オムロ	
27	22	一括	磁器	碗	—	2.9	3.8	染付	手描き	外：格子 見込：草	均一、緻密			11オムロ	
27	23		陶器	すり鉢	34	7	—	—	—	—	密			11オムロ	
27	25	一括	陶器	捏鉢	2.3	5.0	—	灰釉（頸部）、鉄分の多い砂？をかけた	—	—	均一、やや密	灰色		10オムロ	
27	26	一括	陶器	灯明受皿	(8.4)	2.3	—	褐釉	—	—	均一、密	灰色		10オムロ	
27	27	表採	陶器	鉢	—	3.8	—	—	—	—	均一、やや密　白色粒微含	にぶい黄		11オムロ	
29	1	一括	磁器	碗	—	3.6	4.0	透明釉	—	—	緻密			10トリイ	
29	2	一括	磁器	捏鉢	—	7.4	4.9	外：灰色釉 内：釉なし	—	—		黄褐色		10トリイ	指痕あり
29	3	2トレンチ	陶器	皿	—	2.75	—	緑釉、蛇目釉剥ぎ皿	—	—	やや密			10トリイ 2T1	
29	4	一括	磁器	中碗	10.8	6.3	4.0	染付、透明釉	手描き	草		灰色		10トリイ	
29	6	一括	陶器	灯明受皿	9.6	1.9	3.8	褐釉	—	—	密			10トリイ	溶着痕あり
29	5	一括	焙炉	鍋	(28.5)	5.6	—	—	—	—		内：灰黄褐		10トリイ	
29	7				—	4.3	(27.8)								
30	1	2トレンチ	磁器	火入	—	2.9	—	染付	手描き	鹿、草	緻密			10定 2T22	
30	2	3トレンチ	陶器	捏鉢	—	—	(4.4)	褐	—	—		灰黄		10定 3T1	
30	3	3トレンチ	陶器	鍋	—	1.6	—	—	—	—	やや粗い	淡黄		10定 3T2	
30	4	3トレンチ	磁器	筒茶碗	(6.2)	3.7	—	染付	—	よこしま	緻密			10定 3T3	
30	5	3トレンチ	陶器	鉢	—	3.2	—	灰釉	—	—		浅黄		10定 3T19	
30	6	4トレンチ	陶器	碗	—	2.1	(5.2)	黄褐釉、透明釉	—	—	やや粗い			10定 4T2	付高台
30	7	一括	須恵器	碗	—	2.1	—	自然釉	—	—	密			10定	

図版No	遺物No	出土位置	種別	器種等	法量(cm)[現存値]（推定値） 口径	器高	底径	装飾技法 釉付・釉薬	装飾技法	文様	胎土	色調	刻印・銘	遺物注記No	備考
33	1	7トレンチ 10トレンチ	陶器	灯明具	—	3	(4.4)	黒釉	—	—	やや粗い、白色粒子微かに含む			10定7T3.5 10定10T1	底部に文字あり
33	2	一括	陶器	徳利	2.4	2.8	—	褐釉	—	—	灰黄褐、均一、やや密			10定	
40	17	旧道	陶器	徳利	—	10.7	(7.0)	外：褐釉 内：釉なし	—	—	緻密			10五3テラス旧道	
44	1	B2トレンチ	磁器	小碗	(7.5)	1.8	—	染付	手描き	鳥	緻密、均一			09北口B2トレP3	
44	2	B2トレンチ	磁器	中碗	(9.8)	3.9	—	染付	手描き	花	緻密	白、明オリーブ灰		09北口B2トレP5	
44	3	—	磁器	中碗	(9.8)	4.0	—	染付	手描き	花	緻密	灰白		09北口B表採	
44	4	B2トレンチ	陶器	皿	(8.9)	2.3	(3.0)	—	—	見込：桜、陽刻	緻密、均一、	灰白		09北口B2トレP1	
44	5	B2トレンチ	陶器	皿	9.3	2.3	3.0	—	—	見込：桜、陽刻	緻密、均一、	灰白		09北口B2トレP2	
44	6	B2トレンチ	陶器	灯明受皿	9.2	2.0	3.6	褐釉	—	—	密、均一			09北口B2トレP4	回転糸切痕あり、溶着痕
44	7	—	土器	焙烙	—	3.5	—	—	—	—	赤色粒子含、白色粒子微量、やや密、小石含む			09北口B一括	
50	1	C1トレンチ	磁器	紅皿	—	1.0	—	染付	手描き	蛸唐草	緻密	白		09北口C1トレP3	型作り
50	2	C1トレンチ	磁器	小碗	—	3.8	(3.2)	染付	手描き	—	緻密	白		09北口C1トレP1	
50	3	C1トレンチ C1トレンチ C1トレンチ	陶器	置物	5.0	6.6	2.9	にぶい褐釉	—	—		灰、	二、和、○	09北口C1トレP5 09北口C1トレP3	手づくね
51	1	C2トレンチ	磁器	小碗	(7.8)	4.4	(3.5)	緑釉、コバルト	手描き	—	緻密			09北口2トレP2	鋳込み蛇の目台
52	2	C2トレンチ	磁器	碗	—	2.35	(4.0)	染付	型紙摺絵	花	緻密	白		09北口2トレP3	
54	3	C3トレンチ C5トレンチ	磁器	大碗	(12.4)	3.3	—	染付	型紙摺絵	花	緻密、均一			09北口C3トレ一括 09北口5トレ一括	
55	1	C4トレンチ	磁器	碗	(11.4)	2.3	—	染付	型紙摺絵	花	緻密	白		09北口4トレP1 09北口C4トレ一括	
55	2	C4トレンチ	磁器	碗	—	2.7	—	染付	手描き	—	緻密	白		09北口4トレP3	
58	1	C8トレンチ	磁器	碗	—	1.9	—	染付	型紙摺絵	—	緻密、均一			09北口C8トレ一括	型作り
64	1	一括	磁器	小杯	5.4	3.05	2.2	染付、不透明釉	コンニャク判	小花散らし	均一、緻密			10大	口縁、底部に僅かな歪み
67	1		磁器	碗	14	2	—	染付	—	口縁：雷文	緻密			11北口	
67	2		磁器	碗	15.6	3.0	—	染付	手描き	内：花文	緻密			11北口1T9	
67	3		陶胎磁器	碗	10	7	—	内：灰釉 外：染付	手描き	—	密			11北口1T13	内外：貫入
67	4		陶器	灯明受皿	—	1.85	4.4	内外：灰釉 外底：無施釉	—	—	密			11北口1T8	
67	5	2トレンチ	陶器	灯明受皿	10	2	4	灰釉	—	—	均一、密			11北口2T2	内外：貫入
67	6		陶器	水滴	5	—	3	染付	—	牡丹か菊	均一、密			11北口1T11	布の上から指頭押圧
67	7	1トレンチ	土器	皿	—	1.1	(4.8)	にぶい黄褐	—	—	ほぼ均一、やや密、赤・白粒、雲母微含			11北口1T3	底部に余分な土塊が付着
67	8		土器	甕	(20.8)	3.2	—	外：黒褐 内：にぶい褐	—	—	やや粗い、白色粒含			11北口1T10	ヘラ状？工具で横調整
67	17		陶器	すり鉢	—	4	12	にぶい赤褐色 内外：褐釉	—	—	やや粗い			11北口2T4	回転糸切痕
68	1	一括	土器	甑	36.0	3.1	—	外：にぶい赤褐 内：黒褐	—	—	粗い、白色粒子含む			10サト大石2T1	
68	2	D区	磁器	徳利	—	5.6	—	染付	手描き	蛸唐草	緻密			10サトD2T1	
71	1	拝殿下	土器	甑	(36.0)	6.6	不明	—	—	—	粗、白色粒多く含む			10サト拝殿下3	
71	2	A区	土器	坏	—	1.5	—	—	—	—	ほぼ均一、やや密			10サトA12	
71	3	A区	磁器	仏飯具	—	2.3	4.0 (4.8)	—	—	—	緻密			10サトA1	
81	1		陶器	—	—	1.2	(6.5)	緑がかった透明釉	—	—	良いが火を受けたような跡			11宮ノ上	
82	1		土器	皿	(11.6)	0.9	—	—	—		均一、密			11河口A1T一括	
82	2	2トレンチ	磁器	碗	9	2	—	染付、口紅	手描き	—	緻密			11河口A2T一括	
82	3		陶胎磁器	碗	—	2.9	—	染付	—	—	やや粗、ほぼ均一	灰色		11河口A3T一括	内外：貫入
82	4		陶器	皿	(20)	2	—	緑釉、褐釉	—	—	均一、密、灰色			11河口A2T一括	織部？又は3色のかけわけ？
82	5		磁器	碗	(12)	3	—	染付	手描き	—	均一、緻密			11河口A1T一括	
82	6	1トレンチ	陶器	碗	(12.6)	2.5	—	褐釉	—	—	やや粗、均一	淡黄		11河口A1T一括	
83	2		土器	坏	—	—	1.1	にぶい黄橙	—	—	均一、密			11宮ノ上	
83	3		土器	坏	—	—	1.3	にぶい黄橙	—	—		にぶい黄橙		11宮ノ上	
83	4		陶器	碗	—	—	1.4	—	—	—	密、均一、石英粒含	淡黄		11宮ノ上	
83	5		陶器	仏供具	—	—	1.4	—	—	—	白色粒微含	灰色		11宮ノ上	

図版No.	遺物No.	出土位置	種別	器種等	法量(cm)[現存値](推定値) 口径	器高	底径	装飾技法 釉付・釉薬	装飾技法	文様	胎土	色調	刻印・銘	遺物注記No.	備考
83	6		陶器	椀	(12.7)	—	2.5				均一、密	浅黄		11 宮ノ上	内外貫入
88	1	2トレンチ	磁器	小碗	6.3	4.3	2.6	染付	手描き	草木	緻密			10 スズ2T	
88	2	2トレンチ	磁器	徳利	(4.5)	3.2	—	—	—	—	緻密			10 スズ2T2	
90	1		磁器	中碗	(10.8)	2.9	—	染付	—	—	緻密			11 行者平A 5	
90	2		磁器	碗	11.4	4.45	—	染付	手描き	花	緻密			11 行者平A・C 11	焼つぎ痕
90	3		磁器	碗	11.4	5.5	4	染付	手描き	草	緻密			11 行者平A 6	
90	4		磁器	碗	—	2.6	4.6	染付	—	—	緻密			11 行者平A 4	
90	5	A	磁器	小碗	—	3.7	3	染付	—	—	緻密			11 行者平A 2、A一括	
90	6		陶器	徳利?	—	5.1	—	にぶい黄、灰釉	—	—	均一、密			11 行者平A 16	
90	7		土器	かわらけ	—	1	(7.4)	明黄褐	—	—	ほぼ均一、やや密、赤色粒含む			11 行者平A 11	
90	8		土器	碗	—	3.5	—	にぶい黄橙	—	—	ほぼ均一、やや粗、白色粒子含			11 行者平A 3	
90	9		土器	焙烙	(33.6)	5.1	—	にぶい黄橙	—	—	ほぼ均一、やや粗			11 行者平A 17	
91	16		土製品	泥メンコ	2.1	1.7	0.85	—	—	—	均一、密			11 行者平A 10	
92	1	C	土器	坏	(16.6)	1.7	—	にぶい橙	—	—	ほぼ均一、やや密			11 行者平	
92	2	C	土器	坏	(17.4)	2.4	—	にぶい黄橙	—	—	やや粗、赤・白・雲母微含			11 行者平C 40	
92	3	C	土器	坏	13.4	3.2	7	—	—	—	均一、やや粗			11 行者平C 6.9.42 一括	
92	4	C	土器	皿	(4)	1.2	—	にぶい黄橙、内:黒い	—	—	均一、密、赤色粒、微含			11 行者平C 18	
92	5	C	土器	かわらけ	—	1.1	8	橙	—	—	密、金雲母			11 行者平C 39	
92	6	C	土器	坏	—	2.2	(6.8)	外:煤付着、黒色 内:赤彩、ところどころ煤付着	—	—	ほぼ均一、やや密、赤色粒含、白色粒微含			11 行者平C 25	
92	7	C	磁器	皿	—	2.6	(7.2)	染付	手描き	内:菊花文	均一、緻密			11 行者平C 1	外:三重圏線、高台内:圏線
92	8	C	磁器	猪口	6.6	4.5	—	染付	手描き	草木	緻密			11 行者平C 26	
92	9	C	磁器	筒碗	(6.6)	2.6	—	染付	手描き	矢羽文	均一、緻密			11 行者平C 16	
92	10	C	陶器	徳利	—	3.8	—	—	—	—	均一、やや密			11 行者平C 14	
94	11	C	土器	焙烙	(39.8)	3.8	—	にぶい褐	—	—	やや粗、白色粒・雲母・赤色含			11 行者平C 28	
94	12	C	土器	甑?	—	2	(39.8)	にぶい黄橙	—	—	やや粗、白色粒含			11 行者平	
94	13	C	土器	焙烙	—	2.5	(41)	明褐	—	—	ほぼ均一、やや粗、白色粒多含、赤色・雲母微含			11 行者平C 27	
94	14	C	須恵器	鉢	(40)	3.1	—	灰色、自然釉?	—	—	均一、密			11 行者平C 36	
94	15	C	土器	S字口縁	(15.4)	1.2	—	—	—	—	ほぼ均一、やや粗			11 行者平	
94	16	C	土器	甕	—	2.9	—	外:黒色 内:にぶい褐	—	—	1~2mmの砂粒含			11 行者平C 35	
94	17	C	土器	取手	2.6	1.6	3.5	—	—	—	ほぼ均一、赤・白色粒微含			11 行者平C 12	
95	1		土器	甕	—	4.4	—	明赤褐	—	—	均一、やや密、白色・赤色粒微含			11 行者平	径 30cm程か?
95	2		磁器	碗	(11.4)	3.1	—	染付	手描き	文字	緻密			11 行者平	
95	3		磁器	碗	8.4	4.1	—	染付	手描き	草	緻密			11 行者平	
95	4		陶器	徳利	—	4.8	—	にぶい黄	—	—	均一、やや粗、淡黄			11 行者平	
95	5	一括	磁器	鉢	11.8	3.4	—	灰釉	—	—	緻密			11 行者平	貫入
95	6		土器	皿	(15.6)	1.6	—	橙	—	—	均一、密、赤色粒・雲母微含			11 行者平	
95	7		土器	皿	(19.6)	2.3	—	にぶい褐	—	—	ほぼ均一、密			11 行者平	内外:煤付着
96	8		磁器	碗	11	4	—	染付	型紙摺り	唐草(蘭・菊) 口縁:瓔珞 内:圏線	緻密			11 行者平	
96	9		磁器	碗	11	5.2	3.6	染付	型紙摺り	微塵唐草 見込:環状松竹梅 口縁:瓔珞	緻密			11 行者平	
96	10		磁器	皿	—	1.4	(6.4)	染付	型紙摺り	見込:環状松竹梅 底:蛇の目高台 内面:微塵唐草	緻密			11 行者平	
96	11		土器	柄	5.4	3.2	4.7	全面煤付着	—	—	ほぼ均一、やや粗、赤色・白色粒含			11 行者平	
97	1		陶器	灯明受皿	(9.8)	1.9	(4.5)	褐釉	—	—	やや粗、ほぼ均一	灰色		11 行者ヤシキ	

第４表　金属製品観察表

図No.	遺物No.	出土位置	遺物注記No.	種別	器種等	法量（cm）			備考
						縦	横	厚さ	
11	3	3トレンチ	09オムロ３トレＫ５	鉄	鉄釘	4.8	－	－	巻頭釘
11	4	3トレンチ	09オムロ３トレＫ３	鉄	鉄釘	11.05	－	－	巻頭釘
12	2	4トレンチ	09オムロ４トレＫ１	銅	金具？	1.3	0.3	－	座金あり
12	3	4トレンチ	09オムロ４トレＫ２	鉄	鉄釘	16.8	－	－	巻頭釘
13	3	5トレンチ	09オムロ５トレＫ１	鉄	鉄釘	17.9	－	－	巻頭釘
13	4	5トレンチ	09オムロ５トレＫ２	鉄	鉄釘	7.4	－	－	角頭釘
13	5.6	5トレンチ	09オムロ５銅製品１	銅	－	1.5	2	－	薄板状、破片
15	3	7トレンチ	09オムロ７トレＫ１	鉄	鉄釘	15.1	－	－	巻頭釘
16	7	8トレンチ	09オムロ８トレＫ９	鉄	鉄釘	5.3	－	－	角頭釘
16	8	8トレンチ	09オムロ８トレＫ７	鉄	鉄釘	2.3	－	－	巻頭釘、木片付き
16	9	8トレンチ	09オムロ８トレＫ４	鉄	鉄釘	3.8	－	－	角頭釘
16	10	8トレンチ	09オムロ８トレＫ５	鉄	鉄釘	4.5	－	－	角頭釘
16	11	8トレンチ	09オムロ８トレＫ12	鉄	鉄釘	3.9	－	－	巻頭釘
16	12	8トレンチ	09オムロ８トレＫ６	鉄	鉄釘	5.01	－	－	角頭釘
16	13	8トレンチ	09オムロ８トレＫ２	鉄	鉄釘	4.6	－	－	角頭釘
16	14	8トレンチ	09オムロ８トレＫ３	鉄	鉄釘	5.4	－	－	角頭釘
16	15	8トレンチ	09オムロ８トレＫ１	鉄	鎹	14.9	－	－	角鎹
18	26	9トレンチ	09オムロ表採	鉄	火打金？	7.3	1.9	1.3	
18	27	9トレンチ	09オムロ表採	鉄	鉄釘	9.65	－	－	巻頭釘
18	28	9トレンチ	09オムロ表採	鉄	鉄釘	14.3	－	－	隅折釘
19	1	9トレンチ	09オムロ９トレＫ４	鉄	鉄釘	5.8	－	－	角頭釘
19	2	9トレンチ	09オムロ９トレＫ３	鉄	鉄釘	6.2	－	－	角頭釘
19	3	9トレンチ	09オムロ９トレ一括	鉄	鉄釘	9.7	－	－	巻頭釘
19	4	9トレンチ	09オムロ９トレＫ１	鉄	鉄釘	7.7	－	－	巻頭釘
19	5	9トレンチ	09オムロ９トレＫ２	鉄	？	1.5	2.5	－	薄板状、破片
20	2	9トレンチ	09オムロ９トレ表採	鉄	鉄釘	6.6	－	－	角頭釘
25	2	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	3.95	－	－	角頭釘
25	3	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	5.3	－	－	角頭釘
25	4	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	6.3	－	－	角頭釘
25	5	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	5.7	－	－	角頭釘
25	6	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	6.2	－	－	角頭釘
25	7	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	9	－	－	角頭釘
25	8	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	10	－	－	角頭釘
25	9	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	11	－	－	角頭釘
25	10	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	12	－	－	角頭釘
25	11	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鎹	14	－	－	角鎹
25	12	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	13.7	－	－	角頭釘
25	13	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	13.8	－	－	巻頭釘
25	14	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	13.7	－	－	巻頭釘
25	15	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	17.7	－	－	隅折釘
25	16	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	17.1	－	－	巻頭釘
26	1	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	3.5	－	－	角頭釘
26	2	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	5.9	－	－	角頭釘
26	3	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	7.1	－	－	角頭釘
26	4	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	6	－	－	角頭釘
26	5	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	11.8	－	－	角頭釘
26	6	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	12.2	－	－	角頭釘
26	7	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	7.8	－	－	角頭釘
26	8	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	6.9	－	－	角頭釘
26	9	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	9.9	－	－	角頭釘
26	10	2トレンチ	10オムロ２Ｔ一括	鉄	鉄釘	6.2	－	－	角頭釘
27	24		11オムロ	鉄	釘	15.5	1.4	0.9	角頭釘
30	9	7トレンチ	10定７７Ｋ１	銅	飾金具	0.9	0.9	0.25	
50	4	C区	09北ⅠC１トレ鈴１	鉄	鈴	2.1	2.75	0.1	
50	5	C区	09北ⅠC１トレ鉄製品１	鉄	鈴？	0.8	1.9	－	
64	3	3トレンチ	10大３Ｔ	鉄	鍬	15.4	－	－	半丁
67	9	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ	鉄	釘	1.7	0.3	－	小丸釘
67	10	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ鉄17	鉄	釘	5	1	1	角頭釘
67	11	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ銅11	鉄	釘	9.1	0.9	0.6	角頭釘
67	12	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ銅２	銅	？	1.9	2	0.1	板状
67	13	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ銅４	銅	？	1.7	3.6	0.1	板状
67	14	1トレンチ	11北Ⅰ１Ｔ銅11	銅	？	3.5	2	0.1	板状
67	15	4トレンチ	11北Ⅰ４Ｔ	銅	？	4.3	6.65	0.1	板状
74	1	C区	09オムロ	鉄	刷毛鉄製品	14	2.45	0.4	
79	1	B区	11河口	鉄	刀子	0.8	6.5	0.3	
83	7		11宮ノ上	鉄	刀子	1.1	4.8	0.25	
91	10	A	11行者平ＡＫ３	鉄	釘	6.2	1	0.4	角頭釘
91	11	A	11行者平ＡＫ７	鉄	釘	7.6	1.2	0.5	角頭釘
91	12	A	11行者平ＡＫ６	鉄	鞘刀？	9	2.2	0.3	
91	13	A	11行者平ＡＫ４	鉄	火打金	4.7	3	0.5	
91	14	A	11行者平ＡＫ２	銅	？	39.8	0.8	－	棒状
96	12	一括	11行者平	鉄	？	5.1	1.8	0.4	
96	14	一括	11行者平	鉄	？	2.95	3	0.2	
96	15	一括	11行者平行者櫛岩の上	鉄	鳥居型	11.2	12.3	0.4	

第５表　古銭観察表

図版No.	遺物No.	遺跡名	出土位置	遺物注記No.	銭種	時代	初鋳（西暦　年）	字体	残存率	備考
9	2	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭1	永楽通寶	明	1408	真	100	
9	3	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭2	永楽通寶	明	1408	真	70	楽・通・宝のみ残存
9	4	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭3	元・〇〇寶	－	－	－	90	元・寶のみ残存
9	5	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭4	永楽通寶	明	1408	真	30	破片、永・寶のみ残存
9	6	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭5	永楽通寶	明	1408	真	40	破片、楽・通のみ残存（銭４と同一個体）
9	7	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭7	○○○寶	－	－	－	98	判読不明
9	8	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭8	聖宋元寶	北宋	1101	行	100	
9	9	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭9	開元通寶	唐	621	真	30	破片
9	10	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭11	治平元寶？	北宋	1064	篆	60	
9	11	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭13	元符通寶	北宋	1098	篆	100	
9	12	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭14	○○○寶	－	－	－	25	破片
9	13	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭15	永楽通寶	明	1408	真	90	
9	14	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭17	皇宋通寶？	北宋	1038	真	50	皇・寶のみ残存
9	15	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭18	治平元寶	北宋	1064	真	100	
9	16	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭21	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	
9	17	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭23	元祐通寶	北宋	1086	行	100	
9	18	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭24	咸平元寶	中世	1350～1370	真	100	
9	19	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭26	元符通寶	北宋	1098	行	100	
9	20	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭31	光順通寶	後黎	1460	真	100	
9	21	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭32	永楽通寶	明	1408	真	100	
9	22	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭33	永楽通寶	明	1408	真	100	
9	23	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭36	皇宋通寶	北宋	1038	真	98	
9	24	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭37	熙寧元寶	北宋	1068	真	70	
9	25	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭38	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	
9	26	御室水宮	1トレンチ	1トレンチ銭39	○和○寶	－	－	－	40	
9	27	御室水宮	2トレンチ	2トレンチ銭1	祥符通寶	北宋	1008	真	100	
9	28	御室水宮	2トレンチ	2トレンチ銭2	○○通寶	－	－	－	95	
9	29	御室水宮	2トレンチ	2トレンチ銭3	元豊通寶	北宋	1078	篆	100	
9	30	御室水宮	2トレンチ	2トレンチ銭4	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	
9	31	御室水宮	2トレンチ	2トレンチ銭5	元豊通寶	北宋	1078	行	100	
11	5	御室水宮	3トレンチ	3トレンチ銭9	皇宋通寶	北宋	1038	真	95	
11	6	御室水宮	3トレンチ	3トレンチ銭1	熙寧元寶	北宋	1068	真	70	
12	4	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭2	天聖元寶	北宋	1023	篆	40	聖・元のみ残存
12	5	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭1	皇宋通寶	北宋	1038	真	40	宋・通のみ残存
12	6	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭7	開元通寶	唐	621	真	100	
12	7	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭3	洪武通寶	明	1368	真	100	
12	8	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭6	咸平元寶	北宋	998	真	100	
12	9	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭4－1	咸平元寶	北宋	998	真	100	3枚密着して出土
12	10	御室水宮	4トレンチ	4トレンチ銭4－3	紹定通寶	南宋	1228	真	95	
14	1	御室水宮	6トレンチ	6トレンチ銭2	嘉祐元寶	北宋	1056	真	98	
14	2	御室水宮	6トレンチ	6トレンチ銭3	洪武通寶	明	1368	真	90	
15	4	御室水宮	7トレンチ	7トレンチ銭1	文久永寶	幕末	1863	真	100	11.渡
17	16	御室水宮	8トレンチ	8トレンチ銭25	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
17	17	御室水宮	8トレンチ	8トレンチ銭24	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
17	18	御室水宮	8トレンチ	8トレンチ銭5	淳化元寶	北宋	990	真	100	
17	19	御室水宮	8トレンチ	8トレンチ銭1	太平通寶	南北朝後期	1350～1370	真	45	太・寶のみ残存
17	20	御室水宮	8トレンチ	8トレンチ銭7	皇宋通寶	北宋	1038	真	45	宋・通のみ残存
18	29	御室水宮	一括	神社前	祥符通寶	北宋	1008	真	100	
18	30	御室水宮	一括	表採	元豊通寶	北宋	1078	篆	60	
18	31	御室水宮	一括	2トレンチ土部の山	洪武通寶	明	1368	真	100	
18	32	御室水宮	一括	神社前	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	95	
19	6	御室水宮	9トレンチ	9トレンチ銭1	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
24	6	御室水宮	オムロ	オムロ4トレ銭1	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	90	
24	7	御室水宮	オムロ	オムロ4トレ銭2	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
27	16	御室水宮	オムロ	拝殿周辺一括	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
27	17	御室水宮	オムロ	拝殿周辺一括	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
27	18	御室水宮	オムロ	石碑群一括	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	99	
27	19	御室水宮	オムロ	拝殿周辺一括	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
27	20	御室水宮	オムロ	オムロ表採	嘲一錢	大正	1919	真	100	青銅貨
29	8	御室水宮	トリイ	トリイ1ト銭2	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
29	9	御室水宮	トリイ	トリイ1ト銭3	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	渡 11
29	10	御室水宮	トリイ	トリイ1ト銭1	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	入文
29	11	御室水宮	トリイ	トリイ1ト銭1	－	－	－	－	45	
30	8	御室水宮	定善院	旧道上部表採	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
33	3	御室水宮	定善院	定善院7ト1銭	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	入文
33	4	御室水宮	定善院	定善院7ト2銭	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
33	5	御室水宮	定善院	定善院7ト6銭	－	－	－	－	30	寛のみ残存
33	6	御室水宮	定善院	定善院7ト5銭	－	－	－	－	20	寛のみ残存
33	7	御室水宮	定善院	定善院7ト4銭	－	－	－	－	20	元のみ残存
39	1	五合目地点	3テラス	3テラス銭1	－	－	－	－	60	判読不明、鉄銭
39	2	五合目地点	3テラス	3テラス銭4	永楽通寶	明	1408	真	100	
39	3	五合目地点	3テラス	3テラス銭2	祥符通寶	北宋	1008	真	100	
39	4	五合目地点	3テラス	一括	－	－	－	－	35	鉄銭、
39	5	五合目地点	3テラス	3テラス銭8	永楽通寶	明	1408	真	100	
39	6	五合目地点	3テラス	3テラス銭5	洪武通寶	明	1368	真	98	

図版No.	遺物No.	遺跡名	出土位置	遺物注記No.	銭種	時代	初鋳（西暦　年）	字体	残存率	備考
39	7	五合目地点	3テラス	3テラス銭6	—	—	—	—	48	銭銭
39	8	五合目地点	3テラス	3テラス銭7	開元通寶	南唐	960	篆	100	
39	9	五合目地点	3テラス	一括	洪武通寶	明	1368	真	100	
39	10	五合目地点	3テラス	3テラス銭9	永楽通寶	明	1408	真	100	
39	11	五合目地点	3テラス	3テラス銭10	元豊通寶	北宋	1078	行	95	
39	12	五合目地点	3テラス	3テラス銭11	聖和通寶	北宋	1111	真	100	
40	13	五合目地点	10テラス	10テラス銭1	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
40	14	五合目地点	10テラス	10テラス銭2	嘉祐通寶	北宋	1056	真	100	
40	15	五合目地点	10テラス	10テラス銭3	—	—	—	—	45	寶のみ残存
40	19	五合目地点	表採	—	紹聖元寶	北宋	1094	行	98	
40	20	五合目地点	3テラス	一括	元祐通寶	北宋	1086	真	100	2テラスと3テラスをつなぐ旧道
44	8	北口	B地区	B2トレンチ銭1	祥符元寶	北宋	1008	真	100	
50	6	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭2	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
50	7	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭3	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	銭銭
50	8	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭7	洪武通宝	明	1368	真	100	背北平
50	9	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭9	寛永通宝	江戸	1636～1659	真	100	
50	10	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭11	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
50	11	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭12	元豊通寶	北宋	1078	行	90	
50	12	御室里宮	C地区	C1トレンチ銭13	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	裏：波
52	3	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭1	皇宋元寶	北宋	1054	篆	95	
52	4	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭2	皇宋通寶	北宋	1038	真	100	
52	5	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭6	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
52	6	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭7	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
52	7	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭8	皇宋通寶	北宋	1038	真	90	
52	8	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭9	開元通寶	唐	621	真	100	
52	9	御室里宮	C地区	C2トレンチ銭10	皇宋通寶	北宋	1038	真	95	
52	10	御室里宮	C地区	C7トレンチ銭1	永楽通寶	明	1408	真	100	
52	11	御室里宮	C地区	C7トレンチ銭2	文久永寶	江戸	1863	真	100	波11
54	1	御室里宮	C地区	C3トレンチ銭2	景徳元宝	北宋	1004	真	100	
54	2	御室里宮	C地区	C3トレンチ銭1	寛永通宝	江戸	1636～1659	真	100	
54	5	御室里宮	C地区	C5トレンチ銭2	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
56	3	御室里宮	C地区	C4トレンチ銭2	永楽通宝	明	1408	真	100	
56	4	御室里宮	C地区	C4トレンチ銭5	永楽通寶	明	1408	真	100	
56	5	御室里宮	C地区	C4トレンチ銭9	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	
56	6	御室里宮	C地区	C4トレンチ銭10	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	95	
64	2	大塚	3トレンチ	大3ト銭1	大型元寶	北宋	1023	篆	100	
67	16	北口	1トレンチ	—	—	—	—	—	50	
88	3	銅銭A	—	—	永楽通寶	明	1408	真	100	
91	17	行者平	A区	表採	寛永通宝	江戸	1636～1659	真	100	
91	18	行者平	A区	一括	寛永通宝	江戸	1636～1659	真	100	
94	18	行者平	C区	銭3	太平通寶	南北朝後期	1350～1370	真	98	
94	19	行者平	C区	銭5	宣和通寶	北宋	1119	真	98	

第６表　石製品観察表

図No.	遺物No.	出土位置	種別	法量（cm）			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
40	16	五合目テラス		3.5	2.5	1.3	10五３テラス１	
40	18	五合目	火打石	2.1	1.3	0.75	10五	
44	9	2トレンチ		8.8	4.3	2.5	09北ⅠB 2トレ1126	
64	4	大塚丘		3.6	4	1.45	一括	灰に白線
64	5	大塚丘		6.8	6	2.6	一括	明褐色、緑色の付着物
64	6	大塚丘		8	4.5	4.1	一括	灰赤に白筋
64	7	大塚丘		6.2	5.5	4.5	一括	黄に白い粒、緑色の付着物
64	8	大塚丘		12.3	11.3	6.2	一括	６カ所穴あり
64	9	大塚丘		5.3	4.6	2.85	一括	黒白
74	2	片山社	丸平石	4.2	3.6	1.25	10片７	墨書
74	3	片山社	丸平石	4.1	3.1	0.95	10片６	朱書、鉄分付着
74	4	片山社	水晶結晶	5.2	3.3	2.3	10片29	
74	5	片山社	丸平石	2.9	2.5	1.05	10片11	
74	6	片山社	丸平石	1.95	1.6	0.55	10片13	
74	7	片山社	丸平石	3.5	3.1	0.8	10片14	
74	8	片山社	丸平石	3.6	2.7	0.75	10片15	
74	9	片山社	長丸石	3.1	1.6	1.1	10片16	
74	10	片山社	丸平石	4.3	2.6	1	10片17	
74	11	片山社	丸平石	2.5	2.3	0.7	10片18	鉄分付着
74	12	片山社	丸平石	2.5	2.8	1.1	10片19	
74	13	片山社	丸平石	4.85	2.5	1	10片20	
74	14	片山社	丸平石	4	3.4	1.25	10片21	
74	15	片山社		3.7	3.5	1.8	10片22	
74	16	片山社	丸平石	2.6	1.9	0.7	10片23	
75	17	片山社		4	7	2.7	10片１	鉄?
75	18	片山社		7.3	4.7	4.9	10片２	溶岩
75	19	片山社		10.3	11.5	1.7	10片３	
75	20	片山社		6.9	8.7	4	10片４	
75	21	片山社		7.9	5	4.7	10片５	
75	23	片山社		4.7	3.4	4.1	10片８	鉄分付着
75	22	片山社		5.3	6.7	2	10片９	
75	24	片山社		4	5.2	2.9	10片12	
82	7	A1トレンチ	赭石	2.15	2.1	0.45	11河口A１T一括	黒
91	15	A	砥石	8.2	3.5	1.6	11行者平A	
91	19	A		1	1.3	0.45	11行者平A	石英　剥片

第７表　その他観察表

貝

図No.	遺物No.	出土位置	器種等	法量（cm）			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	

木製品

図No.	遺物No.	出土位置	器種等	法量（cm）			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	

ガラス

図No.	遺物No.	出土位置	種別	法量（cm）			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	
57	1	C地区	ガラス	1.55	1.4	3.5	09北ⅠC 10トレ一括	Cの文字、おはじき

第８表　河口浅間神社に伝わる文化財　遺物観察表

図版No.	遺物No.	種別	器種等	法量（cm）[現存値]（推定値）			装飾技法			胎土	刻印・銘	備考
				口径・縦	器高・横	底径・厚さ	絵付・釉薬	装飾技法	文様			
84	1	陶製	狛子（こま犬）	—	(19.0)	9.2	黒釉	—	—			十号ノ一
84	2	陶製	狛子（こま犬）	—	(19.0)	8	黒釉	—	—			十号ノ二、火を受けた痕跡
84	3	陶製	猿	—	14.6	6	黒釉	—	—			
84	4	須恵器	蓋	4.7	—	—	自然釉	—	—			美濃石中二号
84	5	須恵器	蓋	(9.2)	1.4	—	自然釉	—	—			美濃石中九号
84	6	石	管玉	1	3	1	—	—	—			美濃石中
84	7	石	磨製石斧	10.6	5.3	2.6		—	—			美濃石中
84	8	石	磨製石斧	8.5	4.3	2.4		—	—			美濃石中
85	11	石	—	2.1	1.7	1.3	—	—	—	黄褐色		美濃石４個中の１個
85	12	石	—	3	2.1	1.6	—	—	—	白に黒		美濃石４個中の１個
85	13	石	—	2.7	2.3	1.5	—	—	—	白		美濃石４個中の１個
85	14	石	—	4.4	3.1	2.8	—	—	—	黄褐色に白		美濃石４個中の１個

第９表　疱橋遺跡　出土遺物観察表

図版No.	遺物No.	種別	器種等	法量（cm）[現存値]（推定値）			装飾技法			胎土	刻印・銘	備考
				口径・縦	器高・横	底径・厚さ	絵付・釉薬	装飾技法	文様			
85	10	土器	杯	11.8	4.8	—	—	—	—	精、やや粗、小石まじり、赤白色粒		内外にミガキ、指頭押圧痕

第４章　富士山吉田口登山道の測量成果

第１節　吉田口登山道の歴史的環境

富士山の登山道としては、富士山本宮富士浅間大社に残る 13 世紀頃の文書に東口珠山（須山）、南口大宮（富士宮）、北口吉田（富士吉田）の３ルートが挙げられている。その他にも村山口、船津口、精進口などのルートがあったと言われるが、すでに廃絶しているものもある。

このように吉田口登山道は、古くから開かれていた登山道であるが、今回の調査および山梨県内中世寺院分布調査により、二合目で発見された 12 世紀末～ 13 世紀初頭の山茶碗片の存在や、富士御室浅間神社二合目本宮境内のトレンチ内から見つかった炭化材の年代（西暦約 1100 ～ 1200 年）等から考えると、吉田口登山道の歴史は現段階では、少なくとも平安時代末～鎌倉時代初頭に遡ることは確実といってもよい。この吉田口登山道は、食行身禄により登拝の本道とされたために富士講が隆盛を極めた江戸時代に多くの参詣道者で賑わった。特に関東方面からのアクセスがよかったため、この方面からの道者が多く集まった。

その後、馬返から五合目は、明治 40 年の改良工事により付け替えられ、現在では吉田口登山道は県道富士吉田線として管理されている。昭和 39 年にスバルラインが開通すると、五合目まで車で行けるようになったため、五合目以下の登山道は急速に廃れた。

第２節　吉田口登山道測量成果（第 102 図）

吉田口登山道のうち、中ノ茶屋から六合目までの現登山道および旧道、さらに道中に所在する信仰拠点についての測量を、昭和測量株式会社に委託して実施した。

第５章　成果と課題

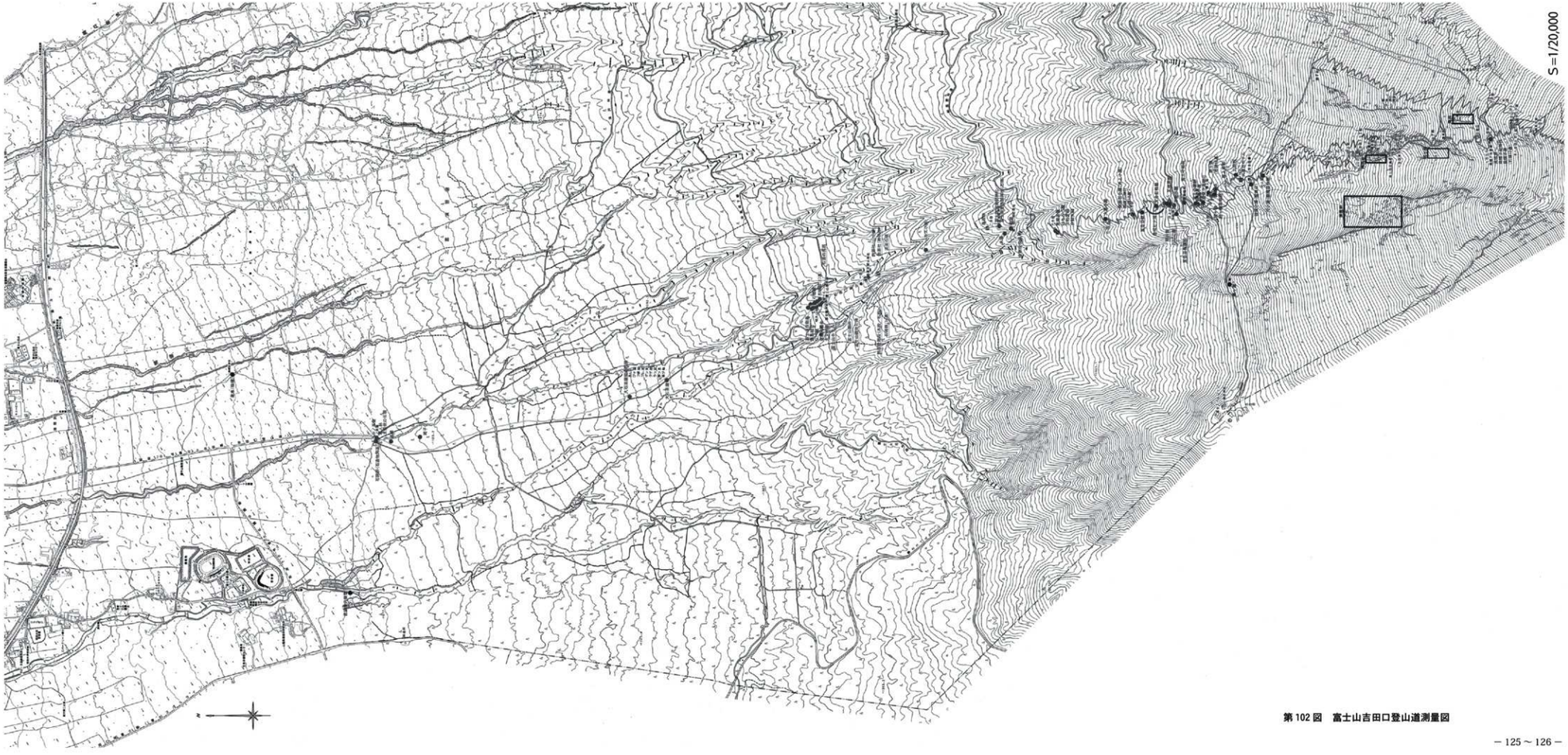
今回は、富士山とその信仰について、主として遺跡から読み解くという目的で調査を実施してきた。富士山を信仰対象とすれば、その範囲は、富士山が見える場所全てに拡大されるはずであり、山梨県内には到底収まりきらない。そのため調査箇所は、富士山の近接地ということで富士山中とその周辺地域に限定した。また各地点における調査目的は、その場所がもつ性格と、どの時期に機能していたのか、ということを主眼としたが、富士山に対する信仰全体として見た場合、一体信仰活動はどこまで遡れるのか、という事が調査にあたってのひとつの大きなテーマであった。従来言われているのは、平安時代には火山活動が活発であったため、富士山には近づけず、遥拝という形で遠くから富士山を仰ぎ見る信仰形態だったものが、噴火が収まってきた中世以降、まず宗教者が山中での活動を活発化させ、その後、一般民衆による登拝形態も盛んになっていく流れであるが、この辺りを念頭に置きながら、調査を振り返ってみたい。

第１節　富士山中の信仰活動

富士山中については、『八葉九尊図』（第１図）という江戸時代初期の版木に記された山梨県側の富士山の信仰世界を念頭に置きながら調査を実施した。調査地点としては、富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原Ａ地点、二合目の富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡と富士吉田口登山道関連遺跡五合目地点がある。ここでは富士山中での重要な信仰拠点である二合目と五合目の調査についてまとめたい。

第１項　富士山二合目

二合目は、富士御室浅間神社本宮をはじめとして、甲府市円楽寺の行者堂、富士吉田市に所在する時衆西念寺の塔頭定善（禅）院などの信仰拠点が集中するという山中でも特異な空間である。二合目に様々な信仰施設が集



第102図　富士山吉田口登山道測量図

まった理由として考えられるのは、まずひとつには山中としては下界からアクセスし易い場所である点、近くに水場があったという点、二合目一帯は、地質学的に見ると、古富士火山の堆積物が地表に出ているという山中でも数少ない場所であり、地盤の良さという面からも他場所に比べて優れている点、さらに調査時に感じたことであるが、非常に風が強い日でも、山の向き加減からか、周りと比べて風当たりが弱い場所である点などが挙げられる。先人もこのような地の利をよく心得た上で、信仰拠点の選地をしているのは明らかである。このように重要な信仰拠点である二合目における今回の調査で明らかになった事柄から伺える富士山信仰の一端について考えてみたい。まず今回の調査により、現在の富士御室浅間神社境内の裏側にも、かつては宗教活動の場が広がっていたことが明らかとなった。その時期については、出土銭貨から中世段階であることが想定される。また現在、拝殿が建てられているテラスについては、土層の観察により、土盛り造成されていることがわかった。現在二合目に残る拝殿および里宮に移された本殿は、江戸時代初期の慶長年間に建てられたものとされている。この時期に造成が成されて、広いスペースが確保された可能性もある。以上のことから、慶長年間の前と後とでは、景観が大きく異なっていた可能性もある。

また、富士御室浅間神社の下の比較的広いテラスには定善(禅)院跡があったものと想定されてきたが、今回の調査によって、このテラスでは建物の痕跡や定善(禅)院が機能していた時期の遺物が全く確認できなかったことから、実際は他の場所にあった可能性もでてきた。『甲斐国志』では一合五勺に定善(禅)院があったと記されるが、今回の調査地は、富士御室浅間神社二合目本宮のすぐ下であり、距離的に本宮と接近しすぎている感があることから、二合目一の鳥居よりも下である可能性もある。一方で、絵図等により、このテラスを回り込み、富士御室浅間神社拝殿前に登り上げる形での旧道ルートが想定されていたが、今回このルート上の調査を行うことにより、寛政8年(1796)の銘が入った富士講の碑が確認され、ここがかつての旧道であったことが確実となった。また周辺の旧道の調査と併せてこの一帯の旧道ルートが明らかとなっている。

二合目が信仰拠点としてどのくらいまで遡るか、という問題に関しては、富士御室浅間神社拝殿すぐ下の旧道沿いで、12世紀後半に位置づけられる山茶碗の破片が表採されている。以前に実施された行者堂跡推定地の調査時にも13世紀初頭の山茶碗片が出土していることと合わせて考えると、現在のところ、吉田口登山道が使われた時期として最も古い確実な年代として、この時期を提示することができると考える。この時期は、かつて神社に納められていたとされる2体の神像(現在は所在不明)に記された銘ー文治5年(1189)・建久3年(1192)ーとほぼ同時期にあたることも興味深い。また、現境内地のテラスの試掘確認調査で出土した炭化材の年代は西暦約1100～1200年を示しており、この年代観とも共通する。この時期には大規模な噴火の記録等はないことから、これらの木は人為的な要因で炭化した可能性が高い。これまでに富士山中で見つかっている信仰関係の遺物で最も古いものは、三島ヶ嶽経塚の遺物で、その規模等から久安5年(1149)の末代による埋経もしくは末代以降の埋経と考えられている。富士山中での本格的な祭祀行為がこの頃から始まったとすると、かつて二合目に納められていた神像や、二合目で発見されている山茶碗片は、山頂の埋経を皮切りに山中に信仰目的の人々が足を踏み入れていったことを物語っているようにも感じられる。

第2項　富士山五合目

富士山を植生で分けた区分に草山・木山・焼山という呼び名があるが、この植生による区分は宗教的なポイントをも示している。その境界にあたるのが一合目と五合目であるが、それぞれには富士山の神「浅間明神」の本地仏である「大日如来」が祀られていた。実際、一合目鈴原社には室町時代末頃の制作と考えられる「大日如来坐像」が伝えられている。一方の五合目には、現在「富士守稲荷」が残るのみであるが、かつては大日社・浅間社・稲荷社の3社が祀られており、このうち大日社には「大日如来」が祀られていた。またこの辺りには富士山中の役銭場のひとつである「中宮役場」が置かれており、山中での重要な信仰拠点であったことが理解できる。この五合目周辺の小屋については、永禄9年(1566)の武田信玄が記したとされる文書の中に「中宮之室」とあり、戦国時代にはすでにあったものと考えられている。ここでは、鐚銭改めのための小屋が設けられており、吉田・

河口の御師がここへ詰めて撰銭を行ったのが始まりとされる。

五合目周辺の調査としては、富士吉田市史編纂事業に伴ない実施された分布調査がある。かつて五合目における中心的な信仰拠点のひとつであった中宮役場跡は、滝沢林道により破壊されているものと推定されているが、この推定地付近から多量の銅銭が発見されている。今回の調査では、この場所の上方で旧道筋が確認されており、この旧道に面する位置から石碑が倒れた状態で埋もれているのが確認された。旧道の存在が明らかとなったことにより、かつては、中宮役場から直登するルートがあったものと想定される。今回の調査では『八葉九尊図』に記される「こやかす十八間」と推定される箇所の試掘確認調査を実施し、礎石や銭貨などを発見し、ここが何らかの場として機能していたことを確認することができた。また今回の調査では、富士山ハザードマップ作成にあたってつくられた富士山周辺の赤色立体図により地形の観察をしたが、このようなヒナ段状の地形を表わす場所は、山梨県側・静岡県側含めて、この地点の他には吉田口登山道一合目の禰所跡から鈴原社に至る旧道沿いにしか認められない。これらの成果を古記録等と付き合わせて考えると、この場所が中宮十八軒にあたるものと考えてもよいのではないだろうか。

また旧道に着目すると、小テラスの周りには、これらを繋ぐように旧道が巡っており、これを辿っていくと、中宮役場や今回の調査で発見された石碑が面する旧道に繋がっていたものと考えられる。

第２節　富士山麓の信仰活動

山麓の調査では、主として富士山信仰と関連の深い社寺有地の調査を実施した。調査地点としては北口本宮冨士浅間神社・同社有地である大塚丘近接地及び御鞍石周辺（いずれも富士吉田市）、富士御室浅間神社里宮（富士河口湖町）、河口浅間神社（富士河口湖町）、御墓（富士河口湖町）、宮ノ上遺跡（富士河口湖町）、行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）（鳴沢村）、行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）（笛吹市）、藤塚（山中湖村）である。ここでは、浅間神社について考えてみたい。

浅間神社は、富士山の荒ぶる神を鎮める目的で建立された神社であるため、その立地については、富士山信仰上重要な位置を占めている。まず、吉田口登山道の起点となる北口本宮冨士浅間神社、貞観の大噴火の際、甲斐国最初に浅間明神を祀ったと伝わる河口浅間神社は、河口湖の湖面のその先に噴火した側火山を望む場所に立地し、荒ぶる神（噴火活動）を鎮める儀式を行う場所としては好条件である上、「河口駅」があったと推定される河口の地という政治的・文化的な中心地という立地条件は、重要な神社の鎮座地としてはふさわしい。次に、富士御室浅間神社の本宮は富士山二合目に鎮座し、山中で最も古い神社であると伝えられる。その里宮は河口湖南岸に位置し、『甲斐国志草稿』によれば、「…此古ハ舟津木立勝山大嵐成沢長浜大石七郷ノ産神ナリ」とあり、河口湖を取り巻く地域で広く信仰されていた時期もあったという。

このようにそれぞれの神社の立地とその生い立ちを概観してみると、ある共通点を見いだせる。例えば、北口本宮冨士浅間神社は、もともと一帯の産土神である諏訪神社の神域内に鎮座しているし、富士御室浅間神社も、もともとは付近一帯の産土神であった。また神社内には現在でも「片山社」と呼ばれるこの地の産土神が鎮座している。'片山（カタヤマ）'とは、神社が所在する地名である'勝山（カツヤマ）'のもとの呼び名であったという。河口浅間神社については、慶長段階の火災により神社の由緒等が残っていないため、その歴史はよくわかっていない。

次に静岡県に目を移してみると、まず全国の浅間神社の総本宮である富士山本宮浅間大社（富士宮市）がある。こちらも現在の鎮座地には、もともとは一帯の産土神である富知（フヂ・フチまたはフクチ）神社という富士山自体を神とする神社が鎮座していたが、その後浅間大社に場所を譲る形で、少し離れた場所に遷っている。このように浅間神社を造営するにあたっては、在地の主要神社がある場所を選んで鎮座地を決定している傾向が見いだせる。その後の神社は、荒ぶる神（富士山の噴火活動）を鎮める国家祭祀の場としての役割と、地域の産土神としての役割という２層構造をもっていたと想定できるのではないだろうか。

今回の調査では、山梨県側の浅間神社の存在がいつまで遡れるかという点を目的のひとつとしてきた。北口本

宮冨士浅間神社社有地については、境内地、大塚丘、御鞍石という３地点についての調査を行ったが、境内地は大規模に造成されている痕跡が確認され、近世以前の遺物等は確認されなかった。大塚丘については、近隣にはない黒色粘質土で築造されていることが確認され、従来言われていたような流れ山を利用した構造ではなく、人工的に造られたものであることが明らかとなった。御鞍石はもとの諏訪神社の鎮座地であるという説もあったが、周辺に建物等の痕跡は確認されず、諏訪神社は現境内地にもともと鎮座していた可能性が高い。河口浅間神社では、神社創建期と考えられる平安時代の坏片が出土しており、神社に近接する宮ノ上遺跡からも同じく出土している。また宮ノ上遺跡では、金精錬の痕跡を示す中世段階の陶器片が出土している。該期にこの辺りで金の精錬が行われていた可能性があり、遺跡の特殊性を示している。冨士御室浅間神社二合目本宮社有地については、先の第１節第１項で述べた通りである。

また考古学的調査ではないが、河口浅間神社に伝わる‘陶製こま犬’に関する調査の機会を得た。‘陶製こま犬’は寺社に奉納された小形のこま犬で、もとは御簾の両側をおさえる為の鎮子としての性格を持っていた。中世段階には、生産地である瀬戸美濃地域に分布するほか、少数ではあるが関東・関西地方にも点在する。江戸時代に至ると、分布域は瀬戸美濃地域を主体とするものとなり、その数は急増し形態にも様々なバリエーションが広がる。奉納者の名前が入れられるものも多くなり、村や氏子、個人で様々な願いを込めて奉納する絵馬に近い性格であったと言われる。河口浅間神社伝来のものは室町時代の所産と考えられるが、この段階のものは関東地方では限られた寺社に伝来するのみである。伊勝八幡宮（愛知県）に伝来するものには「熊野　願主浄通」の銘が入れられているが、この浄通は熊野山天台宗系の行者と考えられており、一説には、これら小形のこま犬は、厨子に入れられ山岳宗教の修験者により各地に運ばれたものとも考えられている。そもそも山梨県側の修験は、熱海の走湯修験やそこから分岐して発展した村山修験と深い関係を持っていたことは、冨士御室浅間神社二合目本宮に伝わっていた神像銘にある「奉造立勧進走湯山住金剛仏子覚実」等にもあらわれており、富士山を取り巻く修験は伊豆半島やその近海の島々に加え関東地方も含めた広範囲なネットワークによるものだったとの考え方もある。そのような点では、河口浅間神社のものが八丈島の優婆夷神社のものと類似していることは興味深いと言える。今後このような視点から‘陶製こま犬’の分布や、また河口浅間神社に伝来した経緯等を考えていく必要性があるものと考えている。

第３節　山岳信仰遺跡調査の今後に向けて

第６章では、雑駁ではあるが今回の調査成果について概観してみた。今回の調査は山梨県側における富士山信仰遺跡に関する調査の第一歩であり、富士山信仰を理解するためにはさらに多くの調査や、調査に基づく課題の整理、再検証等が必要になると考える。また、山梨県は富士山をはじめとした多くの山々に囲まれた地域であり山岳信仰を考える上では、この上ないフィールドである。このような中で、富士山信仰についてより深く理解するためには、他の山々の信仰のあり方を含めた山岳信仰全体の枠組みの中で捉える事が重要であり、他の山々についての調査の積み重ねも必要である。また、これらの遺跡は山中などの人目に触れない場所に眠っていることが多く、突発的な開発により破壊される危険性を孕んでいる。これらの遺跡を守り、山梨県という地域がもつ独自の文化・歴史のひとつとして後世に伝えていくためには、引き続き地道な調査を積み重ねていく必要性があると強く感じる。

〈参考文献〉

山梨県立図書館　1969『甲斐国社記・寺記』第二～四巻
佐藤八郎編　1971『甲斐国志』大日本地誌体系第三・四巻　雄山閣
山中湖村史編纂委員会　1978『山中湖村史　第三巻』
伴泰　1983『浅間神社正史』
鳴沢村誌編纂委員会　1988『鳴沢村誌　第二巻』

勝山村史編纂委員会　1992『勝山記』勝山村史別冊
富士吉田市史編纂室　1991『上吉田の石造物』
富士吉田市史編纂委員会　1992『富士吉田市史』史料編　第2巻
堀内真　1993「富士参詣の道者道と富士道」『甲斐路76号』山梨郷土研究会
富士市立博物館　1995『富士塚調査報告書 ～富士山信仰と富士塚～』
富士吉田市史編纂委員会　1996『富士吉田市史』民俗編　第2巻
富士吉田市史編纂委員会　1997『富士吉田市史』史料編　第5巻
富士吉田市歴史民俗博物館　1997『富士山明細図』企画展図録
富士吉田市史編纂委員会　1998『富士吉田市史』史料編　第1巻
鈴木昭英編　2000『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書9　名著出版
富士吉田市教育委員会　2001『富士山吉田口登山道関連遺跡』富士吉田市文化財調査報告書第3集
富士宮市教育委員会　2002『村山浅間神社遺跡』富士宮市文化財調査報告書第29集
富士吉田市歴史民俗博物館　2002『富士の信仰遺跡』企画展図録
富士宮市教育委員会　2003『浅間大社遺跡Ⅱ』富士宮市文化財調査報告書第31集
富士吉田市教育委員会　2003『富士山吉田口登山道関連遺跡Ⅱ』富士吉田市文化財調査報告書第4集
伊藤裕久・串田優子　2004『富士山中宮小屋の成立と展開－富士山吉田口旧登山道における歴史的環境の形成と空間構成に関する研究(1)』日本建築学会学術講演梗概集(北海道)
愛知県陶磁資料館　2005『陶磁のこま犬百面相』
富士宮市教育委員会　2005『村山浅間神社調査報告書』
富士吉田市教育委員会　2005『吉田の火祭』国指定記録選択無形民俗文化財調査報告書
富士吉田市歴史民俗博物館　2006『富士を登る』富士山叢書第4集
串田優子・伊藤裕久　2006「北口本宮冨士浅間神社境内空間の変遷過程」日本建築学会計画系論文集　第604号
山梨県立博物館　2006『祈りのかたち－甲斐の信仰－』
山梨市教育委員会　2006『杣口金桜神社奥社地遺跡－山梨市牧丘町杣口地内の山岳寺社跡学術調査報告書－』
富士吉田市歴史民俗博物館　2008『富士の神仏 －吉田口登山道の彫像－』企画展図録
富士吉田市歴史民俗博物館　2008『富士山吉田口御師の住まいと暮らし－外川家住宅学術調査報告書－』
甲州史料調査会編　2009『富士山御師の歴史的研究』山川出版社
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡 －平成20年度富士山世界文化遺産登録事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等報告書－』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009『村山浅間神社遺跡 －平成20年度富士山世界文化遺産登録事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等報告書－』
山梨県教育委員会　2009『山梨県内中世寺院分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第260集
山梨県教育委員会　2011『史跡「富士山」(仮称)調査報告書』

第１節　富士山修験

清雲　俊元（山梨県文化財保護審議会会長）

奈良・平安期の修験

富士山は奈良時代末期から平安時代にかけて十数回の噴火の記録が史料にみられるが、永保２年(1083)を最後に休止期に入る(扶桑略記)。この頃から修験による富士山への登拝活動がはじまった。修験は山岳信仰の中の宗教活動の一つで、特に富士山との関わりについて捉えてみた。

一般的には修験道は日本古来の山岳信仰が外来の密教・道教・儒教などの影響のもとに、平安時代末期に至って一つの宗教体系を作りあげたものである。このような修験は特定の祖師の教えに基く宗教とは異なり、山岳修験の修行によって呪術を獲得した実践的儀礼を中心とした宗教でもある。

富士山修験者の最初にあげられるのは、後世修験の開祖として崇められた役小角である。役小角は葛城山で修行した山林修行者の一人である。富士山にも役小角の登拝伝説がある(『日本霊異記』)。小角は舒明天皇６年(634)正月元旦大和国葛城上郡茅原村に出生した。７歳にして仏法を信じ、30歳の時、葛城山の岩窟に入り二十年間孔雀明王の法を修した。文武天皇の時、葛西山中にて修行して金峰山と葛城山との間に橋を架け渡らせたとある。また韓国の連広足は、小角の妙術を妬んで天皇に讒訴し、そのため小角は伊豆の大島に流刑に処された。小角は昼は伊豆におり夜は富士で修行したという。このように小角は奈良時代から傑出した呪術者、験者として伝承化されていた。

富士山への登拝については、貞観17年(875)頃に著わした都良香の『富士山記』(『本朝文粋』)に「昔役の居士といふもの有りて、其の頂に登ることを得たりと」あるので９世紀末には役小角登拝伝説があったことは事実であり富士山には既に修行者による登拝がみられた証左でもある。やがて平安時代の末から鎌倉時代になって、大峯山や熊野、富士山などに修験者が入り修行の拠点となっていったと考えられる。役小角は、彼らの理想とする修験者として崇められ修験道の開祖役行者と呼ばれるようになった。後述するが、甲府市の円楽時所蔵の役行者及び前鬼後鬼像(鎌倉時代前期)や、甲州市大善寺所蔵の役行者像(鎌倉時代末期)は富士山との係わりがあり、富士山修験が平安時代後期から活躍をはじめていた一つの証左でもある。

初期富士山修験

富士山をめぐる縁起や記録に名をとどめている古い修験として伊豆国(熱海市)の伊豆山権現(現在の伊豆山神社)の修験があげられる。伊豆山神社の『走湯山縁起』(『群書類従』第２輯)によると承和３年(836)、甲斐国八代郡竹生の住人賢安が伊豆国に赴任していたとき、走湯権現の霊験を得て本地仏の千手観音像や仏堂を造営したのが同社のはじまりとされる。また彼は出家して賢安法師と称したといわれる。この神社の祭神は『延喜式』神名帳には火牟須比命にしている説と、『伊豆国神階帳』によれば正一位千眼大菩薩とあり、浅間大菩薩を祭神とする説がある。この神社は後に富士山修験として活躍する末代をはじめ村山修験の発生の地であり、富士山の祭神浅間大神は女神といわれるが、その女神像の造立にかかわってくる。

賢安について『甲斐国志』巻77の福光園寺の項をみると「保元年中(1156～58)賢安上人ヲ中興開山」とあり走湯山の賢安とすれば時代が符号しない。国志の年号が誤記であって平安時代とすれば注目すべき内容である。またこの『走湯山縁起』の末尾をみると「于時延喜四年甲子九月十八日　大教王護国院　定額僧阿闍梨豪忠記　延暦闍梨上綱良宣全」とあり、延喜４年(904)賢安は大教王護国院(東寺)に関係する真言宗の僧侶ではなかったかとも考えられる(『山梨県史』資料編３)。

また福光園寺は黒駒にあり、黒駒というと「富士山図」で最も古いもので奈良法隆寺東院絵殿の壁を飾っていた(現在、東京国立博物館収蔵)、延久元年(1069)制作の『聖徳太子絵伝』中に見られる太子像が、甲斐の国から献上された黒駒に乗って富士山頂に登ったという伝説が描かれている。この太子が乗ったという黒駒の産地が福光園寺の周辺である。甲斐国造の出した馬は中央で甲斐の黒駒と呼ばれて著名であった。この寺は、往古は駒岳山大野寺と称し黒駒牧の旧地(『甲斐国志』巻41古跡部第４)と呼ばれている。寺には聖徳太子伝説も伝えて

いる。この御坂の地は甲斐の国司の庁所である国衙が和名類聚抄によれば八代郡とみえ今日の笛吹市御坂町国衙の地を指すのが通説であり、その他にも一宮町国分説や、同市御坂町金川原の方八町の地に注目する説などがある。また福光園寺に現存されている「吉祥天及二天像」(重要文化財)は寛喜3年(1231)に仏師運慶により造立されたもので像内の墨書によると、大野寺(現福光園寺)の第3世良賢聖人が大勧進となり当時の国守と考えられる藤原定隆を中心に大檀越在庁官人の三枝氏が名を連ねていることから、大野寺は国衙に最も近い寺院であり、国司や在庁官人とのかかわりのある唯一の尊像である。また当時この黒駒一帯から名馬を産することから11世紀の初頭、富士山登拝が盛んになるに伴い聖徳太子伝説が生まれたのではないかと考えられる。また賢安の出生は10世紀の初頭で立証する資料はないが伊豆山権現縁起をみる限り、甲斐・伊豆・京都との関係をもった僧と考えられるが、ここでは次期の研究を待ちたい。ただ富士山信仰、とくに祭神である女神像の出自と登拝修行については賢安が初期の修験と考えられる。それは後の村山修験の登場をみても女神像さらには神仏習合から発展して村山修験の成立をみるにつけ伊豆山権現とのかかわりが大きい。

伊豆権現と修験

走湯山の修験と富士山への登拝は末代上人が有名であるが、伊豆山権現は承和3年(836)ごろ賢安によって創立してまもなく登拝が始まったと考えられる。それは都良香の『富士山記』をみても前述の通り役行者の登拝をあげているがこの時代すでに富士山登拝は行われていたことを指摘している。『本朝世紀』(藤原通憲編纂)によれば、金時(年次未詳)、賢薩(983)、日代(1059)など、村山修験が富士山の山頂を極めたことが見え。末代上人以前のことが明らかになった。これは西岡芳文著『興風』22号の「富士山をめぐる中世信仰」などに詳細があるが、この論拠は金沢文庫所蔵『称名寺聖教』の「浅間大菩薩縁起」によるものである。従って最初に富士山に修行の場を求めたのは末代に代表される走湯山に本拠を置く修験達である。

末代は『本朝世紀』久安5年(1149)の記事によると「富士上人」と称され、富士山への登拝は数百度に及び修行を繰り返し、一切経を書写して富士山頂に埋納することを発願した。その実現のために東海、東山両道の人々に勧進して4696巻の経を書写した。大般若経600巻が残ったので鳥羽法皇の結縁を獲得したことが伝えられている。末代は、頂上に大日堂を建立したことが『本朝世紀』(久安5年(1149))の条に見える。

これは奈良時代からすでに発生した日本固有の信仰と外来の仏教信仰との習合の思潮である「神は仏法を悦び擁護する」という「護法善神」の考え方がおこり、更に神は仏の化身(権現)とする本地垂迹思想があらわれ、平安末期には富士山にも入って来た。

富士山の御神体は浅間大菩薩で、その本地仏は大日如来と定められた。大日如来は摩訶毘盧遮那といい、太陽をあらわし、偉大なる光の如来ともいい、宇宙の真理を仏格化した仏である。大日如来には金剛界、胎蔵界の大日如来がある。金剛頂経に基づき仏の智徳、智慧を示したのが金剛界大日如来で、金剛界曼荼羅の中尊で智拳印を結んでいる。また理徳、慈悲の面を示していたのが大日経に基づく胎蔵界大日如来である。とくに胎蔵界は母胎を現すともいい、胎蔵界曼荼羅の中尊に位置し、法界定印を結んでいる。

末代が浅間大神の本地仏を大日如来とし、富士山を浅間大菩薩即大日如来とする神仏習合思想に基づく信仰を説くまでになみなみならぬ苦難があった。鎌倉末期成立の『地蔵菩薩霊現記』に伝えている。その内容を見ると「垂迹浅間大菩薩　法体は金剛界廬舎那の応作、男体に顕れ玉ふべきに、女体に現じ玉へり。然れば即本迹各別なれば末代に不信の衆生多くして　二仏の中間に迷い、済度も覚束なく思し奉る。

所詮我捨身の行を修め、後代の不審を晴さんと思立て、御舘の半上座して樹下石上にして百日断食して、正しく神体を拝み奉とぞ祈りぬ」。この『地蔵菩薩霊現記』で言っていることは浅間大菩薩の本地仏は金剛界毘盧庶那、すなわち金剛界大日如来であり男体(金剛界大日如来)であるはずなのに、女神を浅間大神として祭る浅間神社側とは考えが異なり女体(胎蔵界)の大日如来を本地仏としなければならなかった。末代はこの問題を解決するため富士山中で百日の断食行をおこなったが、大日如来の世界は男女を超越した世界であることを悟られたのである。そのため富士山に勧請された大日如来像は、金剛界、胎蔵界両部の仏像が造立されるが、末代が最初に富

士山頂に建立した大日堂の本尊については不詳であるが、南面の村山浅間神社の 13 世紀の胎蔵界大日如来をみるにつけおそらく胎蔵界にこだわったと考えられる。

また北面の内野浅間神社の鎌倉時代前期の制作と伝える大日如来をみても胎蔵界大日如来であることは、いかに浅間大菩薩が女神であることにこだわっていた證左ではないかと思う。中でも村山修験の拠点となった村山浅間神社 (静岡県富士宮市) に祀られた正嘉 3 年 (1259) 銘の大日如来は、総高 97.5cm の等身の像で法界定印を結んで坐す胎蔵界大日如来である。脚部裏に正嘉 3 年、仏師聖運造立の銘文がある。また異筆で天保 15 年 (1844) の修理墨書銘があるが『村山浅間神社調査報告書』(富士宮市教育委員会) によると躰幹部と脚部は別作の可能性があり、脚部周辺が正嘉 3 年で頭体幹部は平安時代後期の古様式が見られると指摘している。平安時代後期の作とすれば、南面の浅間神社の浅間大神の本地仏としては最も古い像と考えられる。また現在村山浅間神社の中尊として祀られている木造大日如来像は、文明 10 年 (1478) 渡邊行忠ならびに息子の作とある。本像は本地仏大日如来像で前記の胎蔵界大日如来と対になる金剛界大日如来像である。三躰目の木造大日如来像は法界定印を結ぶ大日如来像で室町時代末期の作 (『村山浅間神社調査報告書』) とみられる。

このように神仏習合時代の浅間大神の本地仏として平安時代から室町時代にかけての富士山信仰を如実に現わしている貴重な三躰の大日如来で村山修験者によって造立されている。

甲斐の富士山修験

富士山の南面 (駿河側) の村山に対して、北面の甲州側の修験の拠点となったのが富士山二合目の御室である。同所に鎮座する浅間神社は甲州側の山体にあって、最初に勧請された浅間神社と伝えられている (『甲斐国志』巻 71 ほか)。江戸時代後期には二合目神社を「小室浅間明神」、里宮を「富士浅間明神」(『甲斐国志』) という。江戸末期には二合目神社を「富士山北口本宮浅間社」、里宮を「里宮浅間宮」(『甲斐国志、社記・寺記』) と呼んでいる。現在では冨士御室浅間神社という総称で、本宮と里宮と称している (『勝山村史』下巻)。本宮の鎮座した地は、富士河口湖町勝山 3951 の 1 番地にあたる。周囲は富士吉田市であるが、現在ここは勝山の飛び地になっている。この一帯には、富士御室浅間神社を中心に円楽寺 (甲府市右左口) とかかわりのあった行者堂、西念寺の子院である定禅院などがあり、富士山登拝に係る信仰拠点の一つとして重要な役割を果たしてきた場所である。この二合目の地を「御室」と称するが、前述の通り『甲斐国志』は「小室浅間明神」とあり『勝山記』には「富士山北室」「山室」などと地名を呼んでいる。一般に「室」(むろ) というのは、山腹にある窟 (いわや) を指している。とくに修験の人達にとってムロは窟を意味し修行の場所である。山梨市の地名「室伏」は甲斐金峰山で修行する山伏の窟または洞穴のあったところであり、最近の調査では牧丘周辺にはその室といわれる洞穴が多く確認されている。

また、山梨県富士山総合学術調査研究委員会によると、この富士山二合目は、古富士火山体の地質が地表近くに現れる地に接し、地質学的にも安定した基盤に近い土地とみなされている。本宮境内地には古富士を形成する基盤に三方を囲まれた平坦地であるとともに、境内の西側に沿って浅い谷がある。岩盤を河床とする谷からは水を得ることができる。さらに岸部付近には湧水箇所もあり、飲料水として用いられていたという (『史跡富士山調査報告書』)。

このように安定した基盤と水の利便に恵まれた土地であり、伝承からもこの土地が湧水の限界であることが明らかである。

この御室浅間神社の境内には、それぞれ鎌倉時代の文治 5 年 (1189) と建久 3 年 (1192) の紀年銘をともなう日本武尊と女神の二像が伝わっていた (『甲斐国志』巻 71)。また国志によると両像ともに走湯山の覚実覚台坊により造立されており、北面における信仰拠点の開創にも伊豆山修験が関与していたことが明らかである。更に国志の記事をみると、日本武尊の像は 3 尺 2 寸 5 分で髪は左に垂れ、容貌は不動尊に似ていることが記されていた。一方の女神像は合掌した神像で 1 尺 6 寸 5 分であることが記されている。富士山に祀られた女神としては最も古い像であるが、現在両像とも行方不明である。御室浅間神社から出された安政 6 年 (1859) の江戸での

御開帳願いにこの像のことが記されており、更に慶応4年(1868)の段階でも神宝として日本武尊像は里宮に移されていることが明らかである(『甲斐国社記・寺記』)。

近年村山浅間神社における発掘調査では竪穴住居跡と溝が検出されたが、これにともなう9世紀後半から10世紀前半の甲斐型土器や灰釉陶器が出土して南・北両面にまたがる回峰ルートの存在にも疑いない。従って江戸時代に盛行した中道巡りの渕源もこのころからのものと考えられる。

富士御室浅間神社には「役行者堂」が存在し、前述した役行者像及び二鬼像が祀られていた(『甲斐国志』巻71)。また慶応4年の時点でこの御室の地に御本社・弊殿・拝殿が記されており、他に二ノ宮・末社・護摩堂の記載があった。護摩堂については「是ハ七覚山円楽寺古例ニテ出勤仕候」とあり、この社地は拾町四方というい広い境内地を有していたことを記している。この護摩堂というのは行者堂のことで役行者及び二鬼像を本尊とする御堂で円楽寺が兼帯し、6・7月は円楽寺の僧侶が護摩を修法していたことが記されている(『甲斐国志』巻72)。

この行者堂に祀ってあった「役行者及び二鬼像(現在円楽寺所蔵、県指定文化財)は坐高83cmで12世紀から13世紀の制作と考えられ、木像役行者像として現在最古の遺例である。作者については康慶周辺の南都系仏師とする指摘がある。また甲州側から富士山に向かう御坂峠の盆地側の鞍部近くに役行者像を祀る神変堂(行者堂)があった(『甲斐国志』巻24)。祭祀をつかさどったのは大善寺(甲州市勝沼町)で同寺に現存する鎌倉時代末期の役行者像(山梨県指定文化財)が安置されていたのを、武田信春の時代に大善寺に移したと伝えている(『甲斐国志』巻75)。大善寺には毎年四月十四日(現在五月八日)「藤切り祭」という修験による会式が伝わっている。役行者を祀る六所明神堂の前で修験によって修行されている。また甲府市右左口の七覚山円楽寺にも『甲斐叢記』によると江戸時代まで「真切」と呼ばれる藤切り祭が伝わっていたが、現在は途絶している。両方共に富士山の行者堂と係わりがあり修験者による富士山信仰に起源をもつ貴重な民俗行事とみてよい。

富士河口湖町大嵐に所在する蓮華寺(日蓮宗)は大同山御堂寺と称する真言宗寺院として創立。弘法大師創造といい役小角は此の山に来りて修法する山といい、背後に聳える「だんの山」(櫓山足和田山)の頂上は奥院と呼ばれた(『甲斐国志』巻90)。平成23年度の蓮華寺奥の院跡伝承地の調査で二間二間程度の礎石の石が確認され、他は燈明皿が1点出土した。この一帯が修験の行場であったことを伝えている。『甲斐国志』の編纂に際して作成された大嵐村の絵図には、櫓山の山頂に「法印塚」を記すとともに門前を横断して東方の富士山へと延びる道に「富士山とうしや(道者)道」と注記している。この道が『甲斐国志』が「七覚山」の頂において「相伝テ云、昔役小角富士登山ノ時、此処ヨリ発シ、迦葉。阿難ノ二嶺ヲ踰テ、精進・西海・長浜・大嵐・大田和・成沢数村ヲ経テ直ニ御室ニ達ス」とあるが甲府盆地南東辺と富士山二合目を直結する通路である(『富士山』小学館)。途上にある十二岳にも役行者にまつわる伝承もある(『甲斐国志』巻26)。

このように富士山周辺には役行者伝承が多くあり、また二合目・御坂峠に伝わる役行者像をみるにつけ修験による登拝が早く平安時代の初めからみられたことを物語っている。

富士山の北面甲州側の忍野村には、忍草浅間神社と内野浅間神社の別当は、当山派又は本山派の修験であったと考えられる。両社には大日如来像が伝わる。忍草浅間神社には、鎌倉時代正和4年(1315)造立の女神像(仏師丹後国住人石見坊)を含む3軀の神像がある。仏像は忍草浅間神社の別当東円寺(現天台宗)に文保4年(1320)仏師静存造立の聖観音坐像と2軀の浅間大菩薩の本地仏である金剛界大日如来像を伝えている。1軀は天正6年(1578)造立の金剛界大日如来で、像高33.1mの智拳印を結んだ像である。もう1軀の金剛界大日如来は平安時代に遡る。像高34.5cmの像で、智拳印を結んでいる。東円寺は鎌倉時代初頭までは真言宗で、南泉寺と称した。その後、正治元年(1199)に天台宗東円寺となった。これらの仏像は、明治初年の廃仏毀釈により浅間神社から移された仏像である。大日如来もその時に移されたと考えられる。また『甲斐国志草稿』(柏木本)によれば、浅間神社には大日堂が存在したことが記されていることなどから、平安時代末期から明治時代初年まで浅間神社には大日如来が祀られていたことは明らかである。また、内野浅間神社の別当寺は、現在は臨済宗である承天寺の前身であった本山派修験の光学院が別当寺であった。その内野浅間神社に像高10.7cmの蓮華座まで含

む一木造の大日如来坐像が伝わっている。本来は懸仏の本尊であったと思われる。仏像は法界定印を結ぶ胎像界大日如来で、鎌倉期に造立された像で、現在でも木花咲耶姫命と呼ばれ、本社の御神体として祀られている。

甲州の富士山修験の特徴

国中で富士山にかかわる修験の寺院は円楽寺(甲府市右左口)、円楽寺の末寺大福寺(中央市)、大善寺(甲州市)そして福光園寺(笛吹市)などが数えられる。共に真言宗寺院であることから、一般には甲州側の富士山修験は当山派、駿州側の富士山修験は本山派と言われてきたが、実際には分けることは難しい。

甲州国中の富士山修験の寺の特色は、鎮守に五社権現・七社権現があるが必ず伊豆権現がお祀りしてあることである。円楽寺も大善寺にも五社権現があり伊豆権現をお祀りしている。とくに大福寺の鎮守七社権現は平安時代後期11世紀の尊像である。その尊像は熊野三所、金峰、白山、伊豆、箱根の七社をお祀りしているが、神像は雨乞いに用い、やっと原形をとどめている。

また郡内では岩殿山円通寺がある。この寺は天台宗で常楽院・大坊が修験の大きな権力をもった本山派修験道である。この寺の鎮守である七社権現(県指定文化財)は、15世紀初頭のもので、伊豆権現を合祀している。また、文明19年(1487)に聖護院門跡道興が入峡して岩殿山円通寺、柏尾山大善寺、右左口の円楽寺など伊豆権現とかかわりをもった寺を巡行していることが道興の紀行文『廻国雑記』にみえるが、これまた富士山修験の寺院を巡錫しているように考えられる。甲州における富士山修験は伊豆山からの村山修験の影響を受けて発達したように考えられる。

第２節　山岳信仰遺跡調査の課題

坂詰　秀一

１山岳信仰遺跡研究の回顧

日本における「山」の考古学的調査・研究は、古来、信仰との関わりで展開してきた。その対象は、信仰の痕跡としての遺跡（遺構）であり遺物の存在であった。これら形而下の資料は、信仰の実態を具象的に顕在させることが可能であるため考古学的研究の課題として注視されてきた。

現在、山岳信仰の考古学は日本の考古学において発展が著しい分野として関連分野からも注目されている。そこで当該分野の進展を、当面する課題に沿って逐次的に概観することにしたい。ここで当面する課題とは、所謂「歴史時代」の山岳信仰遺跡とそこから派生する事項及び展開についてである。考古学的方法による山岳信仰の調査・研究を逐年的に整理すると Ⅲ期にわけて展望することが出来る（１）。

第Ⅰ期（揺籃期）

山岳信仰に関わる遺跡・遺物の存在が認識され、表面採集による遺物の確認が進んで当該分野の先駆的報告・論文が発表された時期。

丸山瓦全・古谷清 (1924) による日光男体山、鳥居龍蔵 (1926) による筑波山、樋口清之 (1927,28) による三輪山、大場磐雄 (1935,36) による大山・日光男体山（二荒山）・箱根山・伊豆山・赤城山・榛名山などの調査結果が報告された。また、大場 (1943) の総括的見解が集成された。大場は、石器時代～歴史時代の遺跡・遺物を資料として「神道考古学」（２）を提唱し、山岳信仰と修験道との関係について論及し、以後における研究の方向性を具体的に論じた。さらに、大場は「祭祀遺跡ノ研究」(1947，國學院大學提出学位論文。1970 公表）において「自然物〈山嶽・巌石・湖沼・池泉など〉」を対象とする祭祀遺構を分析し“神奈備式霊山”の存在を指摘すると共に祭祀遺物の諸相について具体的資料を挙げて論じた。他方、山岳信仰は、山林仏教（経塚）、修法関係遺跡さらには峠の神に対する祭祀の痕跡なども加えて考察すべきことを論じた。かかる問題の提起は、石・水の信仰ともども「神道に関する諸現象を考古学上より考察し」て、「日本考古学の中に、神道を中心とする一分科を樹立」する構想のもとに体系的に主唱したものであったが、山岳信仰の考古学的研究の方向性を示したものであった。

第Ⅱ期（確立期）

考古学の視点で各地の山岳信仰についての関心が高まり、山岳山頂遺跡の発掘調査が試みられ、他方、山岳信仰に対する諸分野の研究成果が総括された時期。1959 年に日光、1960 年に大山・宝満山、1964 ～ 65 年に戸隠、1975 ～ 77 年に求菩提山などにおいて計画的な発掘が実施された。

日光男体山の山頂 (2,484m) から仏法具の出土が知られていたが 1959 年に組織的な調査が行われた。山頂の遺跡は、男体山頂をはじめ大郎山頂、女峰山頂、大真名子山頂、小真名子頂にわたって認められたが、なかでも男体山頂から鉄鍚杖・密教法具（独鈷杵・三鈷杵・羯磨など）・鏡鑑・鉄火打鎌・武具・農工具・懸仏・土器類・銅印などの多種多様の優品が検出された。古代から近世にわたるこれらの遺物は巨岩の岩裂を中心として見出され、儀礼のあり方を彷彿とさせる。

大山（神奈川）の山頂 (1,252m) に存在する遺跡が 1960 年に発掘された。修法跡などが発掘され、1879 年に出土した経塚関係の遺物のほか、小仏像（懸仏か）・土器類・銭貨などの出土が知られ、12 ～ 15 世紀頃に比定される。

宝満山の山頂 (830m) とその付近の調査が実施され、上宮岩壁の中腹の棚状部分及びその直下から銅鐘・銭貨・石製祭具・土器類が見出され古代の信仰の実態が明らかにされた。

戸隠山 (1,911m) の奥社の講堂跡・院房跡と修行窟などの調査が行われ、前者から仏具・土器類、後者から金銅仏・仏具類が検出された。出土遺物の観察から 13 ～ 14 世紀の信仰の痕跡が顕現された。

求菩提山 (782m) は修験の道場として知られているが、3 年間にわたる発掘によって多くの経塚が検出された。山頂の巨岩付近と岩窟内より見出された経塚は 12 世紀代のものであり、営造の実態が明らかにされた。

考古学的発掘が実施されたこれらの諸山は、古来、信仰の対象として遺物の出土も知られていたが、発掘の結果、

その事相の一端が明瞭にされたのである。このような山岳信仰遺跡の発掘の実施に呼応するかのように、山岳信仰に関する文献史学・宗教学・民俗学など諸分野の成果を集成した「山岳宗教史研究叢書」全 18 巻が刊行された。1974 ～ 84 年にかけて刊行された主要霊山編 (1 ～ 6) 地方霊山編 (7 ～ 13) 文化・伝承・史料編 (14 ～ 18) には、山岳信仰をめぐる研究の到達点が示されている。とくに、地方の諸霊山を修験道の視点において展望すると共に修験道の美術・芸能・文学・伝承文化を開示した諸編と修験道史料が収録され、修験道研究の指針的役割を果たすものであった。また、1985 年に奈良国立博物館で開催された春季特別展「山岳信仰の遺宝」は、1983 年から着手された大峯山寺の本堂解体修理に際しての発掘品・小黄金仏 2 軀などを展観され、まさに「時宜相応の企て」として注目された。それは「山岳信仰に焦点をあてた最初の企画」であり、山岳信仰の実相を遺物を通して総覧したものであった。山頂遺跡の考古学的発掘の兆し、山岳信仰研究諸分野の論文集成、山岳信仰遺品の展望は、山岳信仰の実態を考古学的方法で究明する方向性が確立されたことを示したのである。

第Ⅲ期 (形成期)

山岳信仰遺跡の新たな研究視角は、1983 年に着手された大峯山本堂の解体修理に伴う発掘調査が一の契機となって進展していく。1986 年に國學院大學考古学資料館によって行われた白山 (2,702m) 山頂遺跡の発掘調査が改めて注目の的となり、1991,92 年に実施された「大峰奥駈道の考古学的調査」を課題とする「山岳信仰遺跡の踏査とその測量を中心」とした大峰山岳信仰遺跡の調査研究の方法ともども、山岳信仰遺跡の考古学による調査の方法が具体的に提示され、分布調査と発掘調査の必要性が求められるようになった。

大峰山の調査は「奈良山岳遺跡研究会」(研究代表：森下恵介) が組織され、大峰奥駈道の分布調査、参籠窟 (笙ノ窟) の測量・発掘調査、深仙宿跡の測量調査、小篠宿跡の測量調査 (1999 ～ 2001) が実施された。調査の成果は『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』(2003) として発表され、大峰山の開山が奈良時代後半であることが示されたのである。ついで、2003 年には「吉野山金峰山信仰の考古学的研究」(研究代表：茂木雅博) として、吉野山南部遺跡群 (安禅寺跡とその周辺の測量) の調査が、2005 年には吉野山南部遺跡群「金照坊」地区・上岩倉遺跡の測量と周辺の悉皆調査が「山岳信仰の考古学的研究」(研究代表：橋本裕行) の一環として実施された。因みにこれらの研究は (財) 由良大和古代文化研究協会及び (独) 日本学術振興会の科学研究費 (基盤研究 B) に関わる研究調査であった。

大峰山寺における発掘調査が触発となって「山の考古学研究会」が 1987 年に発足した。山岳信仰の考古学的調査研究が関連分野の研究ともども全国的に行われるようになっていったが、その間、山の考古学研究会は、遂年、調査成果の発表と情報交換の研究会を企画し、奈良 (大峰山) 栃木 (日光山) 滋賀 (比叡山) 神奈川 (大山) 富山 (立山・剱岳) 山梨 (金峰山) 石川 (白山) 奈良 (大峰山・笙ノ窟) 山形 (出羽三山) 奈良 (吉野山) 茨城 (筑波山) 大阪 (高尾山頂遺跡) 福島 (飯豊山) 鳥取 (大山) 和歌山 (高野山) 群馬 (赤城山) 福岡 (宝満山) 長野 (戸隠山) 滋賀 (伊吹山) 島根 (大船山) 山形 (出羽三山) 奈良 (深仙窟・玉置山) 山梨 (乾徳山) などで研究集会をもった。このような動向は、各地域に山岳信仰遺跡についての関心を醸成する契機となり、刺激となって同好の士が増えていった。

2003 ～ 05 年に福井で開催されたシンポジウム「山の信仰を考える」(朝日町) 及び「山と地域文化を考える」(第 20 回国民文化祭越前町実行委員会) は圧巻であった。2003 シンポで越前 5 山の越知山と山頂遺跡 (大谷寺遺跡) に着目し、2005 プレシンポで山岳信仰の考古学、本シンポでは「北部九州・近畿・関東・北陸と中国及び朝鮮」の諸霊山の基調報告があり、山岳信仰遺跡の調査の現況が示された。とくに 3 回のシンポジウムの資料集には、「全国の主要な霊山」「福井県内の主要な山と主な宗教施設」「山岳寺院データベース」などが収録された。2009 年には「中世北陸の山岳信仰」(北陸中世考古学研究会) が開催され、越前、加賀、能登・越中、越中・加賀、越中にそれぞれ存在する諸霊山についての報告があり、考古資料による研究の状況が総括された。

山岳信仰遺跡のなかで、古来、調査の眼が向けられていたのは仏教及び修験道に関する寺 (「山寺」) についての関心であった。広義の信仰遺跡に対する調査が進展するのに伴い山寺についても注目されたのは当然であった。

2004 ～ 06 年にかけて実施された「忘れられた霊場をさぐる」講演・報告会 (栗東埋蔵文化財センター講座)

は、栗東と近江南部に残る「山寺」をテーマに開催され、報告集には紙上報告・調査資料集が収められた。また、2010年には「三遠の山寺」(三河山寺研究ミニシンポ、三河考古学談話会)が開催され、三河、遠江、駿河における古代末～中世の山寺についての知見がまとめられたことは有用であった。

「山寺」をめぐる総括的研究は、2008～11年の4年間、全国的に実施された「日本中世における「山の寺」(山岳宗教都市)の基礎的研究」((財)日本学術振興会・科学研究費(基盤研究B)、研究代表:仁木宏)が注目される。その総括シンポジウム「中世「山の寺」研究の最前線」が2011年に開催され、各地の「山の寺」調査の現状が報告された。この研究は、文献史学分野の研究者が「山の寺」を山岳宗教都市のあり方と関連して位置づける方向性をもつやに窺われるものであるが、その基礎資料は考古資料を一の前提とする。したがって、古代末～中世にかけての山寺跡の悉皆調査の実施が将来に向けて求められるにいたった。

山の考古学研究会の『山岳信仰と考古学』(2003)『山岳信仰と考古学Ⅱ』(2010)に収められた30余編の論文は、山岳信仰遺跡研究の基礎となり、調査の方向性の指針をも含むものであった。かかる動きは、各地において山岳信仰遺跡を考古学の方法によって明らかにする方向を惹起し、山の遺跡の分布調査、伝承廃寺跡の再検討が行われるようになった。加えて、従来、さして調査の対象として意識されることなく等閑視されてきた山の遺跡の発掘が試みられるような気運が地域ごとに横溢するにいたったのである(3)。

それに伴って地域史の研究目標に山がクローズアップされ、山の信仰に対する伝承などが文献史学分野の調査とあいまって展開していくようになっていった。それは地域における信仰の史的背景を闡明にする役割を果たすこととなり、考古学の有用が改めて注目されたのである。

以上、山岳信仰遺跡の研究を考古学の視野から揺籃・確立・形成とⅢ期に区分して展望してきた。素より粗略な独善的な区分であり管見に過ぎない。

2 山岳信仰遺跡の諸相

「山」の山岳信仰は、「山容」と関連づけて研究が進められてきた。それは、富士山を代表とする浅間型と三輪山を典型とする神奈備型である。この二者は、峻険的な前者、秀麗的な後者であり、集落(里)と遠隔の浅間型、指呼至近の神奈備型である。換言すれば、登拝修行の「山」は浅間型、仰ぎ尊び祈念する「山」は神奈備型である。神奈備型は、耕地と平面的に連続し人知の及ばぬ「山」としての存在である。山岳(山嶽)の信仰遺跡(4)と言えば、主として浅間型の「山」と感覚的に捉えられるが、神奈備型をも包括する場合もある。浅間型の遥拝祭祀遺跡、神奈備型の山裾祭祀遺跡をも対象として、それぞれの信仰遺跡として理解する方向も認められている。ここで対象とするのは、すでに研究の回顧において展望したように浅間型の「山」の信仰遺跡である。山岳信仰に関する遺跡は、大別すると遥拝の遺跡と登拝の遺跡となるが、一般的には、山(山岳)に存在する遺跡を連想する。山は、古来、生産の場であり信仰の空間であった。山における生産の様態は多岐にわたるが、その多くは信仰意識と暗喩裡に密接な関係を保持してきたことが知られている。山岳における信仰の場は、山頂、山腹、山裾と自然的環境によって分けられ、一方、山中に存在する洞窟・岩石・池などの自然物、祠・伽藍・埋経地(経塚)・宿坊などの人工施設による対象として認識される。これらの場は、自然条件の相異と信仰者の時代差によって一様ではないが、総じて認められている。

山岳信仰遺跡として広く意識されるのは、山頂に存在する遺跡(遺物存在地)である。周知の羽黒山(山形)信夫山(福島)筑波山(茨城)日光男体山(栃木)武甲山(埼玉)大山(神奈川)箱根駒ヶ岳(神奈川)富士山(山梨・静岡)金峰山(山梨・長野)妙高山(新潟)白山(石川・岐阜・福井)大峰山(奈良)宝満山(福岡)は、古代～近世の代表的な山頂信仰遺跡である。なかでも発掘調査が行われ日光男体山では太郎山神社の祠付近の岩の隙間などから鑑鏡(160面以上)、仏像、懸仏、鉄鐸(130)、鉄刀子(450以上)、鉄火打鎌(44以上)、銅印、銭貨(1300以上)、武器・武具類、馬具、農工具、仏法具(独鈷杵、三鈷杵、羯磨、鏡、高坏、花瓶、鰐口ほか)、経筒、禅頂札、種子札、陶磁器など多種多様な遺物が検出された。古代～近世に及ぶこれらの遺物は、男体山上において修験道の信仰事相が行われていたことを示している。また、白山においては、鑑鏡、懸仏、仏法具(独鈷杵など)、火打鎌、経筒、陶磁器など、古代～中世の遺物が検出されている。さらに、大峯山上の大峰山寺本堂の解体修理

に伴う発掘によって、黄金仏、鏡像、御正体、鑑鏡、仏法具、銅板経、銭貨、陶磁器(青・白磁)などが出土し、10～12世紀における事相が知られた。大峰山頂には、湧出岩付近に営造された経塚、大岩の至近地に設定された護摩壇施設が検出されている。一方、宝満山の山頂遺跡は、山頂の岩壁の下方から、銅儀鏡、銭貨(和同開珎、万年通宝、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝)、陶磁器(二彩、三彩、緑釉、灰釉)類、石製模造品など8～9世紀代の遺物が見出されている。

山頂遺跡の発掘が行われた2～3の例を見ると、修験的事相と非修験的事相の信仰様態を窺うことが可能である。ただ、かかる修験の行法には仏教的な事相の痕跡を内包混在していると考えられ、一方のしからざる例と対照的である。例えば仏教的な事相は、四度加行(十八道法・金剛界法・胎蔵界法・護摩法)行法の痕跡とも考えられ、その場として頂上の空間が求められていたことは明らかである。また、儀鏡、石製模造品、銭貨を中心とする他例は、非創唱宗教の祈りの一類として理解すべき可能性を示しているとすべきであろう。

山頂には、経塚の営造が認められている。寛弘4(1007)年に藤原道長が奉納した金銅経筒を主体とする大峰の金峰山経塚はその代表的な遺例として知られている。計画的に発掘調査された朝熊山経塚(三重)求菩提山(福岡)横尾山経塚(大阪)武蔵寺経塚(福岡)は、山頂～山腹に営まれた代表的な例である。経塚は、経典埋納の遺跡で北海道を除き全国的に認められているが、その多くは経筒と施設を伴う平安時代のものであり、中世末～近世にかけての礫石経とは性格を異にする。書写経典を埋納する目的のもとに形成された古代と中～近世の経塚が共に山頂とその近くに見られることは、山に認められる遺跡として注意される。

多く山腹に平場を造成し営まれている山寺(山岳寺院・山林寺院)は、以前から考古学の対象として注目されてきた。その多くは法燈の跡絶えた廃寺跡であり、堂宇が存続している例は、建築史・美術史分野の主対象として調査研究がなされてきた。考古学で対象としてきた山の廃寺跡については、かつて「山地区画伽藍」と「山地任意伽藍」に2大別し、平地に営まれた「平地方形区画伽藍」と「平地任意伽藍」と対比したことがある(5)。山地の2者は坐禅修行、平地の2者は都邑修学を目的とした造営と考えたのである。また、小さな山寺の多くは阿蘭若処として設営されたものであろう。その選地は閼伽水が絶えることのない場、あるいは巨岩・奇岩の存在する場、石窟であった。したがって、限られた時間の法灯の場であったと推察され、小規模かつ短期間内の施設として阿蘭若処の存在が推考される。それは小さな「山寺」であり、「山地区画」と「山地任意」に加えて「阿蘭若処」(6)的な性格を有する遺例が認められると推定される。

石窟は、他方、修験道の修行窟としても利用されたことが知られている。阿蘭若処であるか、修行窟であるか、石窟内における検出物の検討が必要であることは言うまでもない。

池中納鏡遺跡は修験道、池中経典投入遺跡は仏教的作善業の痕跡として把握される。前者は、羽黒山(山形)鏡ヶ池(600面以上)、赤城山(群馬)小沼(13面)、後者は、榛名山(群馬)榛名湖、などの諸例が知られている。

山頂、山腹、山裾に岩場・巨石の存在が認められる場合はそれ自体が信仰の対象とされている。山頂における岩場、山頂・山腹に見られる磐座としての巨石である。箱根駒ケ岳(神奈川)の山頂には3箇の磐座があり、周辺より土師器坏が銭貨(宋銭片)とともに出土している。また、赤城山(群馬)の尾根上の「櫃石」は至近の4巨石と共に磐座群として知られ、周辺より石製模造品・手捏小型土器・玉などが採集されている。山頂近くと山腹の岩場には修験の行場が設定されていることもあるが、多く地名・伝承の場であり、考古学的資料を、見出すことはほとほと困難である。

山中には、修験の結界と考えられる巨石の存在が認められるが、結界標識となる整形痕、文字表現が認められるものはほとんどない。また、釘類の遺存による祠施設の存在を推察することはできるが、その確認には発掘調査が必要であることは言うまでもない。

仏教・修験における仏像は多種多様であるが、修験にとって不動明王・蔵王権現、役行者の崇拝対象は特有である。修法の対象である阿弥陀・薬師・虚空蔵・普賢・文殊・観音などの造形、山伏の諸道具(十二、十六)類にも配慮される。それは諸山において見出される多くの仏法具ともども遺跡の特性を考える重要な遺品となっている。

3 富士山信仰遺跡調査の意義

富士山は、浅間聖山岳信仰の代表的霊山として有名であり、古来、信仰史をめぐる研究業歴は、まさに汗牛充棟の感がある。しかし、その考古学的事相は隔靴掻痒であり不鮮明である。1930 年に山頂の三島ヶ嶽 (3,734 m) の北東部 (3,713 m) から発見された経塚は、一切経の埋納経塚として唯一孤高な作善堂の仏教遺跡であるが、不時発見のため、その全容は必ずしも明瞭ではない。三島ヶ嶽で発見された経塚 (7) は久安 5 年 (1149) に富士上人末代により一切経 5,296 巻などが、見仏悟道、仏法興隆を願い、鳥羽法皇ほか京洛、東海・東山両道の結縁者を得て駿河国富士山の山頂に営造したとされている。蓋し、未曾有の遺跡であり、仏教考古学とくに経塚研究者にとって不可避の経塚であった。この経塚の実態解明を意図した三宅敏之は 1959 年以来、関係史・資料を渉猟した。また、勝又直人 (8) は、2008 年に富士山世界文化遺産推進事業に伴い現地調査と現存資料の確認調査を行い、現在的所見を総括した。富士山には (9)、三島ヶ嶽経塚のほか、吉田口五合目経ヶ嶽 (日蓮聖人宝塔の根元から「自然ニ地中ヨリ発掘」) より出土したと伝えられている室町時代の版経 (法華経・序品) の残片が東京国立博物館に所蔵されている。また、1924 年に日蓮聖人関係堂宇の増築工事中に出土したと伝えられる青銅鋳製の経筒 (現存高さ約 21.3㎝、直径約 13.5㎝、厚さ 1 ～ 2㎜) 納入の紙本経 (朱書の観普賢経などで 10 巻、縦 22㎝、17 字詰、46 行) とともに 2002 年 8 月に富士吉田市歴史民俗博物館の企画展「富士の信仰遺跡」で展観紹介された。経ヶ嶽には、伝資料の出土地点を肯定すれば、平安時代後期及び室町時代に経塚の営造がなされたことが知られる。伝経ヶ嶽の平安時代写経は、朱書であり三島ヶ嶽経塚 50 巻中、3 巻の墨書以外は朱書であったことが想起される。

富士山における埋経は、平安時代後期に山頂 (三島ヶ嶽) において末代上人によって行われたほか、末代上人又は有縁の勧進者により吉田口五合目 (経ヶ嶽) おいてなされたことも考えられる。山頂のほか木山と焼山の境における経塚の営造は、営造選地として首肯されるであろう。しかし、山頂の三島ヶ嶽経塚、吉田口五合目の伝経ヶ嶽経塚は、不時発見及び伝承資料であることに問題点が残されている。今後、「天地境」一森林限界ライン付近の計画的調査によってかかる問題解決の緒が見出せる可能性があろう。

富士山頂に大日寺と号する仏閣が末代上人により建立されたのは久安 5 年頃のことであった (『本朝世紀』第三十五)。この大日寺については位置など不詳であるが、三島ヶ嶽経塚より「承久」墨書銘の経筒が出土しており承久年間 (1219 ～ 1222) の埋経次第は大日寺との関係が考えられ、その位置は、後世「表大日」と通称された大日堂の近くであろうか。山頂は、経年自然環境の変容に加え、廃仏毀釈により仏教的施設などの解体除去、関係文物の破壊と遺棄が行われており、古代に限らず中世～近世における遺跡も同断である。かかる状況に対応するには、考古学的調査の実施が期待される。

中世の修験者及び道者の登拝の実際は、村山口の中心であった富士山興法寺〔村山浅間神社〕(駿河) と村山三坊 (大鏡坊・池西坊・辻之坊) の故地調査、大日堂 (興法寺) に保管されている下山仏の調査の必要がある。吉田口二合目の御室浅間神社には、かつて、文治五年 (1189) 七月二十八日銘の木造不動明王 (?) 像、建久三年 (1192) 四月九日銘の木造女神像が祀られ、他方、伊豆の走湯山との関係も推察されて浅間信仰及び富士山修験の拠点的位置を占めていた。吉田口二合目については、すでに発掘調査が試みられ注目されてきた。

近世については富士講関係の石造物が吉田口の登拝道 (道者道) 各拠点に存在している。吉田口一合目の発掘は、登拝道の考古学的調査として先駆者的な試みであり、関係諸分野から注目された。近世は、富士講による富士信仰が隆盛をきわめ、中世における道者の道を用いた登拝道のほか、八海巡り、角行終焉の人穴への道程、さらに碑塔の建立が認められているが、まだ不分明のことも多く残されている。近世における富士信仰の実相は、甲斐・駿河の浅間神社の展開ともどもより将来の究明が求められている。

以上、富士山の「歴史時代」信仰遺跡について瞥見してきたが、それにつけても考古学的方法による調査と研究が等閑視されていることであった。勿論、若干の先駆的な研究が認められるにしても、発掘調査の事例はまさに稀有であった。

2009 年から 2011 年にかけて山梨県埋蔵文化財センターが実施した「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査」は、

2004年～2008年の「山梨県内中世寺院分布調査」の成果に立脚し、とくに山梨県南東部地域の「富士山信仰に関る遺跡」が対象とされた。この度の調査の特性としてとくに注目されるのは、(1) 浅間神社の境内地及び周辺の関連地、(2) 伝承地、(3) 富士山五～六合目の石室などの試掘確認調査である。

御室浅間神社本宮・里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社に対する考古学的調査は、はじめてのことであった。御室浅間神社本宮の周辺においては吉田口登拝道二合目の往時の環境を示唆する資料が検出され、また、五合目～六合目の石室の実態把握に関する手掛かりが得られた。御室浅間神社里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社における境内地の試掘は、それぞれ浅間信仰の歴史的事相を考察する資料が得られたことは大きな成果であった。さらに、富士山遥拝の地と伝えられてきた大塚丘は、地中レーダー探査により人工と推察されたことも注目すべき成果であった。また、大善寺行者堂跡の伝承地、蓮華寺奥の院の伝承地にも、はじめて考古学的調査が試みられ、相応の結果が得られたのである。

富士の信仰を考古学的方法で調査する動きは、駿河側では、例えば富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社・大日堂などにおいて試みられてきた。甲斐側の吉田口登拝道の発掘、二合目の御室浅間神社とその周辺地の発掘、そして石室(五合目～六合目)の確認調査は、赤色立体図を有効に活用した悉皆調査に立脚して実施されたものであり、富士山の考古学的調査の必要性を具体的に示すことになったのである(10)。

註

(1) 日本における山岳信仰の研究は、宗教史・文献史学・民俗学・国文学など多くの分野にわたって積み上げられて膨大であるが、考古学の分野においては、大場磐雄による神道考古学の業歴が知られている。以下、ここで触れるのは「歴史時代」の考古学分野の展望の一つとして、私なりの回顧に過ぎない。

(2) 大場磐雄『祭祀遺跡 - 神道考古学の基礎的研究 -』(1970)『神道考古学論攷』(1943)は、その総括的な著作であり大場編『神道考古学講座』6巻(1972～81)には、大場の主張が収められている。

(3) 東北・関東・中四国・九州などにおける活発な研究は、各地で山の考古学のシンポジウムが開催されていることによって知ることができるが、遂一については省略した。

(4) 以下、山岳信仰遺跡について概括的に述べる。時代性については、あえて捉われることなく概観することにしたい。

(5) 坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」(『立正大学文学部論叢』63.1979)

(6) 坂詰秀一「阿蘭若処を伴う伽藍」(『日本仏教史学』14.1979)

(7) 三島ヶ嶽経塚について真正面から取り組んだのは三宅敏之である。三宅は、1959年3月の歴史考古学研究会の例会で発表して以来、「富士山における一切経の埋納供養について」(『歴史考古』4.1961)、「富士曼荼羅と仏典埋納」(山岳宗教史研究叢書14『修験道の美術・芸能・文学』1.1980)において総括した。

(8) 勝又直人「三島ヶ嶽経塚小考—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—」(静岡県埋蔵文化財研究所『研究紀要』17.2011)

(9) 富士山の経塚については篠原武の研究が本書に収められている。研究の現状と問題点については篠原論文を参照。以下は、私見の現在的略述である。

(10) 本書所収の野代恵子の報告を参照。

第３節　富士山の古代祭祀とその背景

―火山活動・災害と古代の神観・祭祀―

笹生　衛（國學院大學）

1. はじめに

富士山は、日本列島の中で最も高い山であると同時に、秀麗な山容から、古くから信仰の対象となってきた。しかし、その信仰の内容は一様ではない。中世以降、仏教や修験道との結び付きは盛んになるが、古代には全く異なった信仰が展開していた。

神道考古学を提唱した大場磐雄氏は、日本の山岳に対する信仰を、「神奈備型」と「浅間型」の二類型に大別している。いずれも、山容が円錐形で美しく、神霊が籠る場所と想定するが、「神奈備型」は、奈良県桜井市の三輪山を典型例とし、里に近い形の良い山を信仰対象とする古墳時代以来の古い形とする。これに対し、「浅間型」は、その名からも分かるように、浅間つまり富士山や、日光男体山といった高山・火山を対象とする信仰で、高山という性格から、仏教の山林修行や修験道との密接な関係を認めている（註１）。

では、富士山の信仰とは、この「浅間型」に見られるような、修験道など山岳信仰と関連する形だけなのだろうか。古代の文献史料を見ると、決してそうではない。既に大場氏も指摘しているように、古代においては、むしろ活発な火山活動に対する祭祀や信仰を中心としている。そこで、ここでは、古代の富士山に対する祭祀・信仰について、特に火山活動との関連に焦点を当てて、文献史料と考古資料から考えてみようと思う。

2. 文献史料に見る富士山の古代信仰

古代における富士山の神の存在、それへの信仰は、東国に唯一残る古風土記『常陸国風土記』で確認できる。

> 昔、神祖の尊、諸神たちのみ處に巡り行でまして、駿河の國福慈の岳に到りまし、卒に日暮に遇ひて、遇宿を請欲ひたまひき。此の時、福慈の神答へけらく、「新粟の初嘗して、家内諱忌せり。今日の間は、冀はくは許し堪へじ。」とまをしき。是に、神祖の尊、恨み泣きて詈告りたまひけらく、「即ち汝が親ぞ。何ぞ宿さまく欲りせぬ。汝が居める山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒重襲り、人民登らず、飲食な奠りそ。」とのりたまひき（註２）。

８世紀初頭のこの説話では、富士山の神「福慈の神」は、新粟の初嘗の日に、祖先神「神祖の尊」の宿りを断ったため、富士山を、冬も夏も雪・霜が降り人々が近付かない山として描いている。しかし、８世紀の末期から９世紀にかけて、富士山の火山活動が活発化すると、その細かな状況と、関連する祭祀の記録が正史等に度々残るようになる。主な記事をみてみよう。

- 天応元年七月癸亥（七日）。駿河國言す。富士山の下とに灰を雨らす。灰の及ぶ所は、木葉彫縮すと。『続日本紀』（註３）
- 延暦十九年六月癸酉（六日）。駿河國言す。去ぬる三月十四日より四月十八日まで、富士山の嶺自ずから焼けぬ。書は則ち烟気暗昧にして、夜は則ち火光天を照らしき。其の聲雷の如く、灰の下ること雨の如し。山の下の川水は皆紅色なりきと。
- 延暦廿一年正月乙丑（八日）。是日、勅すらく。駿河國言す。駿河國富士山、晝夜焱燎し、砂礫は霰の如しとてへり。之を卜筮に求むるに曰く。ここに疫さむと。宜しく雨國をして鎮謝を加へ、ならびに經を讀み以て灾殃を攘はしむべしと。以上、『日本紀略』（註４）
- 貞観二年五月五日甲寅。駿河國言す。富士山の上に五色の雲見ゆと。
- 貞観六年七月十七日辛丑。甲斐國言す。駿河國富士大山、忽ちに暴火有り。岡巒を焼砕し、草木を焦煞す。土を鑠し石を流し、八代郡本栖、幷に剗の両の水海を埋む。水熱くして湯の如く、魚鼈皆死に、百姓の居宅、海と共に埋れ、或いは宅有りて人無きもの、其の數記し難し。両の海より東にまた水海有り。名づけて河口の海と曰ふ。火焔赴きて河口の海に向ひき。本栖、剗等の海の未だ焼け埋れざるの前、地は大いに震動して

雷電暴雨あり、雲霧晦冥にして、山野弁ち難く、然る後に此の災異有りきと。

・貞観六年八月五日己未。甲斐國司に下知して云ひけらく。駿河國富士山に火ありて、彼の國言上す。之れを蓍龜に決するに云はく、淺間名神の祢宜祝等、齋敬を勤めざるの致しし所なりと。仍りて応に鎮謝すべきの状、國に告知し訖んぬ。宜しく亦幣を奉りて解謝すべきなりと。

・貞観七年十二月九日丙辰。勅して、甲斐國八代郡に淺間明神の祠を立てて官社に列ね、即ち祝祢宜を置き、時に随いて祭を致さしめたまひき。是より先彼の國司言へらく、往年、八代郡に暴風大雨、雷電地震あり、雲霧杳冥して、山野を辨へ難く、駿河國の富士大山の西峯、忽ちに熾火有りて巖谷を焼き砕きき。今年、八代郡の擬大領無位伴直眞貞、託宣して云はく、我は淺間明神なり。此の國に齋き祭らるを得むと欲し、頃年、國吏の爲、凶咎を成し、百姓の病死を爲す。然るに、未だ曾て覚悟せず。仍りて此の椎を成せり。早く神社を定め、兼ねて祝祢宜を任じ、宜しく潔め奉祭るべしと。眞貞の身、或いは伸びて八尺ばかり、或いは屈みて二尺ばかり、體を變へて長短をなし、件等の詞を吐きき。國司、之を卜筮に求むるに、告ぐる所、託宣に同じかりき。是に於て明神の願に依り、眞貞をもって祝と爲し、同郡の人伴秋吉を祢宜と爲し、郡家以南に神宮を作り建て、且つ鎮謝せしめき。然りと雖も異火の變今に止まず。使者を遣りて検察せしむるに、剋の海を埋めること千許町、仰ぎて之を見るに、正中最頂に社宮を飾り造り、垣四隅に有り、丹青石を以て其の四面に立つ。石の高さ一丈八尺許、廣さ三尺、厚さ一尺餘なり。石の門を立つると相去ること一尺、中に一重の高閣有り。石を以て搆り営み、彩色の美麗言ふに勝ふべからず。望請はくは、齋き祭り、兼ねて官社に預らんと。従したまひき。以上『日本三代実録』(註5)

これらの記事によると、富士山は天応元年（781）の噴火以降、延暦年間の末期と貞観年間に大規模な噴火を起こしており、それに伴う火山灰の降下や溶岩噴出は多くの被害をもたらした。このような火山の働きを、当時の人々は神の力の発動とみなして一定の方法に基づき祭祀を行っている。それは、卜占・託宣により神意を判定し、それに対して鎮謝・奉幣するというものである。『日本紀略』延暦21年（802）の記事に「卜筮に求む」「兩國をして鎮謝を加へ」とあり、その祭祀の形は既に9世紀初頭には確認できる。9世紀後半、『日本三代実録』貞観6・7年（864・865）の記事も基本的に同じ脈略で、富士山の噴火活動を神の怒りによる神意発動とみなし、奉幣し祭祀を行い鎮謝するという形をとっている。これは、富士山の祭祀に限ったことではない。類似の事例を、出羽国大物忌神社・鳥海山と薩摩国開聞神・開聞岳で確認してみたい。

・貞観十三年五月十六日辛酉、是より先、出羽國司言しけらく、従三位勲五等大物忌神社、飽海郡の山上に在り。巌石壁立し、人跡到ること稀に、夏冬雪を戴き、秀げて草木無し。去る四月八日、山上に火有りて土石を焼き、又聲有りて、雷の如く、山より出づる河は、泥水泛溢して其の色青黒く、臭気充満して人間ぐに堪へず。死魚多く浮き、擁塞して流れず。雨の大蛇有り、長さ十丈ばかり、相流れ出でて海の口に入り、小蛇の随ふ者、其の数を知らず。河に縁へる苗稼の、流れ損ふもの多く、或は濁水の臭気に染み、朽ちて生たず。古老に聞くに、未だ嘗て此の如き異有らず。但し弘仁年中、山中に火見れ、其の後幾くならずして、兵杖の事ありきといふ。之を蓍龜に決するに、竝びに、彼の國の名神禱りし所に未だ賽せず、又塚墓の骸骨、其の山水を汚ししに因り、是れに由りて怒を發して山を焼き、此の災異を致す。若し鎮謝せずば、兵役有るべしと云ふと申しき。是の日、國宰に下知して、宿禱に賽し、舊骸を去り、幷せて鎮謝の法を行はしめき。

・貞観十六年七月二日戊子。地震りき。大宰府言しけらく、薩摩國従四位上開聞神の山頂に火有りて自ずから焼け、煙薫りて天に滿ち、灰沙雨の如く、震動の聲百餘里に聞こえ、社に近き百姓震恐して精を失ふ。蓍龜に求むるに、神封戸を願ひ、及び神社を汙穢せるに仍りて此の祟を成すなりと。勅して封二十戸を奉りたまひき。以上『日本三代実録』(註6)

ここに見られる火山活動への対応は、基本的に富士山の場合と同じである。古代日本では、火山活動を神意の発動とみなし、卜占によりその原因となった神意を明らかにし、それに対処するために奉幣・祭祀を行うという流れが確認でき、律令政府は列島内の北から南まで、このような祭祀で火山活動に対処した。この祭祀構成は、古代における神の祟への対応と同じもので（註7）、火山活動とそれに伴う災害・異変を、神の怒り「祟」と考

えていたのである。9世紀後半、貞観年間の富士山の火山活動と、それに対処した祭祀は、その最も細かな記録が残る典型例ということになる。

貞観7年、富士山噴火を契機に官社となった「浅間明神の祠」は、富士河口湖の河口浅間神社の起源と伝えられるが、その鎮座地周辺は、富士山そのものよりも貞観年間に噴火した富士山西麓の側火山を一望できる場所である（註8）。つまり、火山活動に対する祭祀は、神の力が発動した場所、噴火した地点を望む形で祭祀を実施していた可能性が高い。富士山西麓の貞観の噴火口と河口浅間神社との位置関係は、それを如実に表わしているのではなかろうか。

では、このような祭祀の形は、上記の史料以外にも確認できるのか、また、それは何時ごろから行われていたのだろうか。次に考古資料をもとに検討してみよう。

3. 考古資料から見た火山活動の祭祀

(1) 天武天皇13年の造鳥記事と東京都大島町和泉浜遺跡C地点

まず、火山活動に対する祭祀について、文献史料と考古資料から言及できる例から見ていこう。

> 天武天皇十三年冬十月、壬申（十四日）、人定に逮りて、大いに地震る。国挙りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て數ふべからず。是に由りて、人民及び六畜、多に死傷はる。時に伊豫湯泉、没れて出でず。土左国の田苑五十餘萬頃、没れて海と為る。古老の曰く、「是の如く地動ること未だ曾より有らず」といふ。是の夕に、鳴る聲有りて鼓の如くありて、東方に聞ゆ。人有りて曰く、「伊豆嶋の西北、二面、自然に増益せること、三百餘丈。更一の嶋と為れり。則ち鼓の音の如くあるは、神の是の嶋を造る響なり」といふ。『日本書紀』（註9）

この記事は、四国で大規模地震が発生し多くの被害が生じ、地殻変動により広大な水田が陥没したのと時を置かずに、伊豆諸島周辺で火山活動が活発化したことを伝える。伊豆嶋の西北の海域で海中火山が噴火して新島が出現し、その火山・造島活動を神の仕業とする。この伊豆嶋が現在の伊豆大島とすれば（註10）、大島の西北海域で、7世紀後半の天武天皇13年（684）に大規模な火山活動があったことになる。

伊豆大島内で、この天武天皇13年の記事と関連すると考えられる祭祀遺跡が発掘調査で明らかになっている。東京都大島町に所在する和泉浜遺跡C地点である。この遺跡は、伊豆大島の北西海岸に立地しており、天武天皇13年に火山活動があったとされる海域を正面に望む場所である。

ここでは、昭和61年から平成7年にかけて、海洋信仰研究会・國學院大學考古学資料館が3次にわたり発掘調査を行い、東西10m、南北15mほどの範囲で第1～第5ブロックまで、5カ所の遺物集積を確認している（註11）。いずれのブロックからも、土師器・須恵器の他、鉄製刀剣類、鉄鏃が出土している。須恵器の多くは湖西産と考えられ、破砕された状態のものを含む。各ブロック中で第1と第4ブロックでは豊富な遺物が出土している。第1ブロックからは、須恵器杯類50点以上、土師器高盤2点・杯5点とともに、鉄製大刀・刀子片20点、鉄鏃19点、有孔短冊形金製品（金幣）2点、有孔短冊形銀製品（銀幣）2点、ガラス小玉1点が出土し、第4ブロックからは、須恵器杯類70点以上、土師器杯類8点・甕3点の他、鉄製直刀・刀子21点、鉄鏃29点、鉄矛1点、銅製六鈴鏡1点、銅製鈴1点、ガラス小玉28点・丸玉14点、石製紡錘車1点が出土した。また、第2ブロックでは、伝統的な滑石製の勾玉と丸玉が集中して出土している。

出土した須恵器の型式は、湖西窯編年の第Ⅲ期第2小期から第3小期後葉で、報告は7世紀後半から8世紀初頭までの年代を想定しており、7世紀後半、40年程の時間幅で祭祀が継続したと推定できる。また、多くの遺物が出土した第1ブロックの湖西産須恵器は、「660年代に製作されたものを含み、680年代に収まるように思われる」としている（註12）。

鉄製品には刀剣・鏃・鉾の武器類、刀子の工具があり、紡織具の紡錘車が含まれ、武器・工具に紡織具から推定できる布帛類が加わる供献品のセットを復元でき、5世紀以来の伝統的な幣帛のセットが供されていたと考えられる（註13）。伊豆大島の北西海岸で、多量の須恵器に神饌・神酒を盛り、鉄製品と布帛類を中心とした幣帛

を供えたと推定でき、祭祀の後、これらの品々を遺棄した形で、この遺跡は残ったと推定できる。特に、第1ブロックでは金・銀幣が加わっている。この金・銀幣は、祭祀遺跡から出土する例は極めて稀で、特に丁重な幣帛として捧げたものと考えられる。そうすると、これを含む第1ブロックの祭祀は、特別な意味を持っていたと推定できる。出土須恵器の年代は、660年代から680年代となり、天武天皇13年（681）を含む時期となる。この遺跡の西北海域で、火山活動が活発化し新島が出現した時期と一致する。海中火山が噴火し、新島が形成されつつある海域を望む海岸で、幣帛を捧げて祭祀を継続的に行っていたと考えられ、多数の鉄製武器・工具と布帛類に、金・銀の延板（金幣・銀幣）を加えた供献品の内容は、この火山活動に対する祭祀に朝廷が供与した、丁重な幣帛の具体的な内容を示していると言えよう。

（2）榛名山の噴火と群馬県渋川市宮田諏訪原遺跡

火山活動を対象としたと考えられる祭祀の事例は、考古資料では、さらに年代を遡る。5世紀代の明確な事例として、群馬県渋川市宮田諏訪原遺跡がある（註14）。この遺跡は、赤城山の西麓、利根川上流域に面する標高250 mほどの台地上に立地する。遺跡内では、複数の火山灰層を検出し、5世紀末期～6世紀初頭の榛名渋川火山灰（Hr-FA）で埋没した祭祀跡13カ所、6世紀中頃の榛名伊香保火山灰（Hr-FP）で埋没した祭祀跡6カ所を確認している。榛名渋川火山灰（Hr-FA）で埋没した祭祀遺構からは、TK23～TK47型式の須恵器が出土しており、5世紀後半から末期の時期に集中して祭祀を行ったと考えられる。

榛名渋川火山灰（Hr-FA）層直下の祭祀遺構の中で、Ⅰ区1号祭祀跡からは最も豊富な遺物が出土している。鉄製品は74点が出土し、鏃、小札、刀子、U字形鋤先、曲刃鎌がある。蛇紋岩製石製模造品は166点が出土し、有孔円板、剣形、勾玉形の他、刀子形、斧形があり、これに臼玉482点が加わる。さらに、銅製小形変形乳文鏡1面、碧玉製管玉3点も出土しており、初期須恵器の双耳杯、土師器の高杯・杯・甕、ミニチュア土器等、多量の土器類が伴っている。

Ⅰ区1号祭祀跡の出土遺物は、5世紀代の祭祀遺跡の典型的な供献品、鉄製武器、農・工具に、小形銅鏡と小札から推定できる甲冑が加わる点に特徴があり、ここでも丁重な供献品（幣帛）を供えていると言える。その豊富な出土遺物と、榛名渋川火山灰（Hr-FA）で埋没したという層位から、Ⅰ区1号祭祀跡で最も活発に祭祀を行った時期は、5世紀末期から6世紀初期までに限定できる。また、宮田諏訪原遺跡の西、利根川を挟み直線距離で26kmほどに二ツ岳の噴火口があり、Ⅰ区1号祭祀跡の祭りの場からは、榛名山二ツ岳の火山活動を望むことができたと推測できる。つまり、祭祀の執行者は、榛名山二ツ岳の火山活動が活発化し溶岩ドームが成長する姿を望みながら、噴火の直前まで丁重な幣帛を供え祭祀を行っていたと考えられる。この祭祀は二ツ岳の噴火と降灰で一時中断する。その後、6世紀代に祭祀は再開するものの、6世紀中頃、再び榛名山が噴火、榛名伊香保火山灰（Hr-FP）で埋没し祭祀は終息する。宮田諏訪原遺跡では、5世紀から6世紀にかけて榛名山の火山活動に対処するため、その火山活動を望む場所で継続的に祭祀を行っていたのである。そして、そこで供えられた多量の鉄製品には、甲の小札、当時最新のU字形鋤先、曲刃鎌があり、大和王権が供与した品であった可能性が高いだろう。

4. まとめ―古代祭祀と火山災害―

以上、古代の富士山への信仰と火山活動への祭祀について、文献史料と考古資料から見てきた。9世紀後半、貞観6年の富士山噴火では、噴火を神の怒りの発動、祟と見なし、浅間明神の祠を立て奉幣し官社に列するといった丁重な祭祀が行い、火山活動の沈静化を願った。

『日本三代実録』は、貞観6年7月17日の富士山噴火を伝える記事の直後、7月25日条に以下の内容を含む勅を記している。

> 國家を鎮護し災害を消伏するは、尤も是れ神祇を敬ひ、祭禮を欽むの致す所なり。是の以に格制頻りに下り、警告慇懃なりき。今聞く、諸国の牧宰制旨を慎まずして、専ら神主編宜祝等に任せ、神社を破損し祭禮を疎慢ならしめ、神明其れに由りて祟を發し、國家此れを以て災を招くと（註15）。

ここからは、災害を防ぐ上で神々への祭祀が最も重要であり、その執行には律令政府と地方国司は一定の責任を持つという考え方が、9 世紀代には存在していたことが窺える。そのために、災害が発生すれば、その原因となった神意を卜占で判定し、朝廷からの幣帛を捧げ丁重な祭祀を執行したのである。これと同じ構造は、7 世紀後半の和泉浜遺跡 C 地点や 5 世紀後半の宮田諏訪原遺跡の祭祀でも窺える。和泉浜遺跡 C 地点の金・銀幣と鉄製武器・工具、宮田諏訪原遺跡の鉄製武器・武具、農・工具は、大和王権からの供与を推定でき、東国で発生した火山活動・災害に対しても、大和王権は幣帛を供与し、地方首長は祭祀を執行するという責務を負っていたと考えられる。結局、9 世紀代に富士山などで確認できた、火山活動とそれに伴う災害に対処する祭祀の構造と系譜は、7 世紀後半の和泉浜遺跡 C 地点や 5 世紀後半の宮田諏訪原遺跡の事例から、7 世紀後半代、さらには 5 世紀後半まで遡及すると考えてよいだろう。

5 世紀後半という時期は、大和王権の中で国家領域の意識が明確化した時期と考えられる。埼玉県行田市稲荷山古墳出土鉄剣銘の辛亥年は A D .471 年と考えられ、その銘文には「大王」と「治天下」の文字を刻んでいる（註 16）。つまり、この段階には、大王が統治する天下という国家の領域意識が形成され始めていたと考えてよい。この国家領域内で発生する災害に対しても、大王は地方首長とともに一定の責任を負い、地方首長が執り行う祭祀に、大王（大和王権）は供献品（幣帛）を供与する構造が形成されていたのではなかろうか。少なくとも、火山活動とその災害に関しては宮田諏訪原遺跡の事例から、5 世紀後半には、そのような祭祀の形が存在した可能性が高い。古代、富士の神、浅間明神は噴火を繰り返し、災害をもたらす祟る神としての側面を顕著に見せるが、それに対処する祭祀は、ここで見たように 5 世紀以来の伝統を背景としていたと言ってよいだろう。また、その信仰は、自然に恵まれる一方で、多くの自然災害も発生する日本列島で、人々が自然災害をどのように見て、いかに接してきたのかを如実に物語っていると言える。

続く 10 世紀以降、古代祭祀の形は大きく変容する（註 17）。恐らく富士山に対する信仰も同様だったのだろう。山林修行の僧侶などが直接、富士山に分け入るようになり、13 世紀には山頂の三島岳経塚が築かれ（註 18）、富士山は新たな信仰の形態を築いていくことになるのである。

註・参考文献

註 1）大場磐雄『祭祀遺跡』角川書店　1970
大場磐雄『まつり　考古学から探る日本古代の祭―＜解説付新装版＞』学生社　1996（1967 版の再版）

註 2）秋本吉郎校注『日本古典文学大系　風土記』岩波書店　1958

註 3）新訂増補國史大系『續日本紀　後篇』の原漢文を筆者が読み下し。

註 4）新訂増補國史大系『日本紀略　第二（前篇下）』の原漢文を筆者が読み下し。

註 5）武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し　日本三代実録〈上巻〉清和天皇』戎光出版株式会社　2010

註 6）註 5 に同じ。

註 7）岡田荘司「天皇と神々の循環型祭祀体系―古代の祟神―」『神道宗教』第 199・200 号　神道宗教学会　2005

註 8）河口浅間神社の周辺では、奈良・平安時代の墨書土器「川」や製塩土器を含む遺物が多数出土しており、古代官道の駅、「河口駅」と関連する遺跡である可能性が指摘されている。
杉本悠樹「富士河口湖町河口　西川遺跡の調査成果について（報告）」『山梨県考古学協会誌』第 19 号　2010
杉本悠樹「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」『山梨県考古学協会誌』第 20 号　2011

註 9）坂本太郎・井上光貞他校註『日本古典文学大系　日本書紀　下』岩波書店　1965

註 10）註 9 文献の頭注では、「伊豆大島か」としている。

註 11）國學院大學考古学資料館和泉浜遺跡 C 地点学術調査団「伊豆大島　和泉浜遺跡 C 地点―第 2 次・3 次調査の概要―」『國學院大學考古学資料館紀要』第 12 輯　1996

註 12）註 11 に同じ。

註 13）笹生　衛「古墳時代における祭具の再検討―千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に―」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第 2 号　2010

註 14）『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ　平成 13・14 年度緊急地方道路整備（A）下久屋渋川線道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書―榛名山噴火軽石・火山灰に埋没した古墳時代祭祀遺跡―』群馬県勢多郡赤城村教育委員会　2005
小林　修「東国における古墳時代祭祀の一形態―宮田諏訪原遺跡Ⅰ区 1 号祭祀跡の検証―」『日本考古学』第 27 号　日本考古学協会　2009

註 15）註 5 に同じ。
註 16）『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会　1980
　　『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』埼玉県教育委員会　1982
註 17）岡田荘司編『日本神道史』吉川弘文館　2010
註 18）関秀夫編『経塚―関東とその周辺』東京国立博物館　1988

第４節　山梨県の山岳信仰遺跡

櫛原　功一（帝京大学山梨文化財研究所）

１　はじめに

本稿は山梨県内の山岳信仰遺跡を概観し、富士山信仰との関わりを考えるものである。富士山については、従来の研究成果の蓄積と今回の山麓各地での試掘の成果に委ねることとし、富士山を除く県内の山岳信仰遺跡の分布、内容、地域的な傾向を整理したい。

ところで、「山岳信仰遺跡」とはどのような遺跡を指すのであろうか。一般的に「山」は平地よりも高く隆起した地形、谷と谷に挟まれた凸起部を指し、「山岳」とは山の複合的な状態をいい、著しく隆起した山という意をもつが、「山岳信仰遺跡」の場合の山岳とは、自然地形としての「山」全般を指し、山麓から山頂までの山に存在する信仰遺跡、と理解したい。「山岳信仰遺跡」の用語には、山岳信仰に関する遺跡、あるいは山岳に所在する信仰遺跡、と２通りの捉え方ができるが、ここでは後者の立場をとる。

「信仰遺跡」認識の基準としては、信仰・祭祀に関する遺構、遺物の存在を第一義とし、磐座や経塚、山岳寺院跡などが該当する。副次的には山中の場に信仰関連地名、祠や寺社、信仰に関する史料・伝承・石造物、信仰の場にふさわしい自然要素（巨石、奇岩、窟、滝、池、川、湧水、温泉、樹木など）などが存在し、山容・地形・景観・眺望などその場の雰囲気が神聖を帯びるとき山岳信仰遺跡として認識可能で、山中の遺構、遺物と密接な関わりをもつことが明らかなとき歴史性に鑑み、総合的に判断して山岳信仰遺跡と呼びうる。つまり山中でテラス群などの遺構、生活廃棄物などの遺物が発見されただけでは信仰遺跡と認定することは難しく、副次的な要素を伴う場合に信仰遺跡とすることができるだろう。また山岳信仰では山を神聖視して人為的な造成痕跡（遺構）を残さないことがあり、通常の遺跡とは異なる判断基準を要する。

山岳信仰遺跡は山中の遺跡が単独、自立的に存在したのではなく、遺跡の性格にもよるが、周辺山中のいくつかの関連遺跡からなる遺跡群として存在する事例や、いくつかの異なる要素が遺跡群のセットとして存在する事例があり、それらは山麓の山口から山頂に至る山道の中に意味をもって配置する。時期的に限定的な遺跡もあるが、たいていは遺跡として時間幅をもつ場合が多い。麓に目を転じると、信仰心を寄せた人々の居住、生活域が山麓から平地、川の流域に存在し、山中での活動を通じて里と山とが結びつき、山での宗教活動を支える経済基盤となる。視覚的には里から山を望むことができ、逆に山から里を見下ろすという可視性を認めうることが多い。山麓に里と山との仲立ちをする寺社や御師の存在をみることがあり、山宮、奥の院が山中に残ることがある。また、一定の地域内の信仰遺跡が関係をもつという指摘もあり、広域的な関連性にも目配りする必要もある。

山梨県内の山は、甲府盆地を取り囲むように連続的に存在し、県西部に南北に連なる南アルプス（赤石山脈）、県北部の奥秩父、北西にある八ヶ岳、静岡県境の富士山を主とし、奥秩父から南にのびる大菩薩連嶺、笹子峠以西の御坂山地、本栖湖付近以南の天子山地、郡内方面の道志山塊などが分布するが、ここでは北巨摩方面、南巨摩方面、甲府盆地北東部、御坂山地・郡内方面にわけて説明する（遺跡番号は図１の番号と対応する）。

２　北巨摩方面の山岳信仰遺跡

赤岳（2899 m）を主峰とする八ヶ岳の**権現岳**（2715 m　１　櫛原 2003）は、八ヶ岳信仰の中核的な山である。山頂には檜峰神社の石祠を祀り、周囲に胎内くぐりなどの行場がある。昭和 57 年に社殿遷座のため石祠を移したところ、石祠台石下から薙鎌３、剣形鉄製品２、不明鉄製品３、北宋銭４が発見され、さらに同地点の石祠脇の崖より和鏡１、薙鎌１、開元通宝１が採集された。八ヶ岳信仰は近世以降、南麓を中心に八ヶ岳講として地域的な発展をみたもので、和鏡、薙鎌、銭貨の存在から中世段階の様相を権現岳の遺物に見出すことができる。

南アルプスの**地蔵ヶ岳**（2764 m　２　韮崎市 2011）は、山頂のオベリスクとも呼ばれる三角錐形の特徴的な岩塔が特徴的で、北側には石空川、東側にドンドコ沢が流下して多数の滝を形成し、川の源流、滝、岩塔を山岳信仰の構成要素とする。現在、地蔵ヶ岳、観音岳、薬師岳の三峰を総称して鳳凰山（三山）と呼ぶが、近世には現在の地蔵ヶ岳のみを鳳凰山といい、岩塔をくちばしに見立て、翼を広げた鳳凰に擬す説のほか、大日岩、地蔵

図1　山梨県の山岳信仰遺跡分布図

岩、オオトンガリ、烏岩という呼び名をもつ。大日岩という名称は岩塔そのものを胎蔵界の中心、大日如来とみるもので、地蔵岩とは岩塔の容姿から生じた名称であるが、岩塔西側には花崗岩の風化した砂礫地「賽の河原」に地蔵石仏群があり、岩塔が近世以降、地蔵信仰と結びついたことを示している。『役行者本記』に役行者開山として記載されることから、室町期にはすでに修験系霊山であったらしい。高さ約 20 mの花崗岩の岩塔南面には「鳳凰山大神」等の石龕を祀り、「天文云々、大日云々と刻された小石龕と仏像六体を見た」とあるが（辻本 1908）、現在文字は判読できない。また『峡中紀行』には山頂の祠に掛鏡（懸仏）があったと記すが、現在、岩塔直下の鳳凰小屋周辺で採集された直径 30cmの大日如来懸仏が個人蔵として知られている。鳳凰小屋は「北御室小屋」と呼ばれ、山岳寺院があったといわれるが、甲府市桜井町の鳳凰山東禅寺は武田信虎が鳳凰山の山頂から下したと伝える鎌倉期の宝冠釈迦像を本尊とする。岩塔及び賽の河原では、薙鎌 10 のほか剣形鉄製品などの鉄製品、銭貨等の信仰遺物が発見されている。銭貨は岩塔南側に主に分布し、中世段階で奉賽銭を伴う岩塔参拝が岩塔南面を中心に行われたことを示す。また賽の河原では 18 世紀後半代とみられる寛永通宝鉄銭に限られ、場の形成時期を示している。

甲斐駒ケ岳（2966 m　3　櫛原 2003）は南アルプス北端の独立峰で、将棋頭形の山容を特徴とする。大武川上流の横手駒ケ岳神社、尾白川上流の竹宇駒ケ岳神社の 2 箇所を登山口とする黒戸尾根ルートを正式な登拝ルートとし、山頂には駒ケ岳神社本宮・奥の院を祀り、文政年間に弘幡行者によって駒ケ岳講が成立し、今日に至るまで盛んに信仰登山が行われた結果、山中には夥しい数の比較的新しい講関連石造物や剣形鉄製品などの奉納品を祀る。昭和 63 年に山頂の三角点設置場所付近で採集された土器は無文で、時期は定かではないが胎土・色調から縄文後期と推定され、日本最高地点発見の縄文土器かと話題になった。また平成 14 年には、同地点で先に採集された土器と同一個体とみられる台付土器の脚部片を得ている。文様が明確でないが、古墳時代台付甕の可能性が高く、山頂への意図的な土器の置き去り、遺棄とみなして山岳信仰の初期の例として扱われている。

富士山に次ぐ高さを誇る**北岳**（3193 m　4）は「白峯三山」のうち北側にあることから北岳といわれ、『役行者本記』には役行者開山の霊山とされるが歴史的には新しい。寛政 7 年（1795）に白根大日如来を祀り、明治 2 年に芦倉の行者、名取直衛が官許を得て登山道を開き、甲斐ヶ根神社を祀ったという。芦安芦倉には高さ 9.5

cmの銅製大日如来像があり、明治中頃までは山頂石祠内に祀られていたといわれる。懸仏の鏡板に付けられた半肉彫りの本尊像で、室町以前に遡る資料である。

苗敷山（1037 m　5　韮崎市 2011）は韮崎市旭山にあり、麓には武内社比定の穂見神社里宮が鎮座し、山頂に奥宮がある。奥宮までの参道には元禄 4 年（1691）に整備された丁石が立ち、十三丁目には寛文 4 年（1664）の石鳥居が立つ。山頂境内は穂見神社奥宮と廃仏毀釈により消滅した苗敷山宝生寺の神仏混合した宗教空間で、山門跡、随神門跡、鐘楼跡、客殿・庫裏跡の礎石群やテラスが残る。平成 13 年、奥宮裏手から北側の山頂付近で行われた林道建設の際に斜面で竪穴断面が見出され、発掘調査の結果、10 世紀後半を主とする重複した竪穴住居 6 軒分が検出された。出土遺物には燈明痕をもつ土師器が目立つほか、墨書土器、緑釉陶器碗がある。現在残る奥宮は元文元年（1736）の社殿を明治・昭和に修復したもので、礎石群は出土陶磁器類から 19 世紀中頃をピークとするが、いくつかのテラスに 10 世紀代の土師器片が分布し、奥宮拝殿床下で採集された三筋壺片は 12 世紀後半、奥宮にあった推定三宝荒神の明王形立像は 13 世紀前半で、応安 2 年（1369）、永正 6 年（1509）銘の石灯籠竿の存在から、10 世紀後半以降、中世から近世にかけて山岳寺院として成立、発展したと考えられる。苗敷山の山容には大きな特徴がないが、甲府盆地の開拓と稲作伝播に関する六度仙人の伝説をもち、甲府盆地の湖水伝説に関連するほか、背後の棋池や湿地祭祀との関連性が指摘されている。また苗敷山は鳳凰三山の前山として修験ルートの起点となる山と考え、甘利山、千頭星山、天狗岩の岩屋（窟）、薬師岳磐座下の岩屋などをルート上に置く説がある（山本 2011）。

苗敷山周辺の標高 1000 m付近の山中にはいくつかの池が信仰の場となっているが、御勅使川支流の御庵沢の水源にあたる**大笹池**（6　斉藤 2011）は、御勅使川流域の原七郷と呼ばれる地域の雨乞いの池であった。原七郷から大笹池に向うルート上には善応寺があり、観音堂に祀られている一木作りの平安仏は池中から出現したという伝説をもち、境内では経塚が見つかっている。同様に雨乞いの池と知られる事例に御坂山地の事例ではあるが市川三郷町の**四尾連湖**（7）があり、祈雨祈願に牛馬骨を投げ込んだといわれる。

山岳信仰に含めうるかどうか微妙だが、八ヶ岳の泥流が釜無川の浸食により断崖を形成した七里岩先端には**韮崎窟観音**（仏窟山雲岸寺）がある（370 m　8　櫛原 2006）。南向きの断崖をえぐって二つの四角い窟を設け懸造の拝殿としていて、富士山の眺望がよい。天長 5 年（828）の創建と伝え、現在の建築は寛正 6 年（1465）に懸造として造られたのち、正徳 5 年（1715）以降、修復が繰り返されたといわれる。そのほか七里岩にはいくつかの窟状の穴があり、例えば**烏帽子岩**は「方三歩許リノ岩窟アリ昔一禅僧アリテ此ノ窟ニ座禅シ遂ニ此ノ潭ニ身ヲ投ジテ滅ヲ取リ」（『甲斐国志』）と記すように修行窟として利用された窟が存在する。

山中の窟としては北杜市須玉町黒森の**岩屋観音堂**（1250 m　9　櫛原 2008）が知られる。幅 10.1 m、奥行 7.6 mの自然窟を利用し、逆Ｖ字形の窟を軒として開き戸をもつ一面の板壁を設置し、窟全体を堂に見立て、窟奥に如意輪観音を祀る。板壁裏には幕末（天保、弘化、安政等）の参拝記念墨書が多数残り、参拝者の来歴を知ることができる。この窟で注目されるのが窟上部の岩が高く降起することで、窟を陰、突出した岩を陽として陰陽合体した岩場を一周し観音石仏を巡礼しつつ、岩場に取り付いて頂に至る禅定体験の場となっていて、甲府市岩窟観音と同様、近世に栄えた観音霊場の一例といえる。

3　南巨摩方面の山岳信仰遺跡

身延山（1153 m　10）は文永 11 年（1274）、南部（波木井）実長の招きで鎌倉から入った日蓮が庵室を構え居住した地で、弘安 4 年（1281）に大坊を建立して久遠寺と命名した。当初、西谷にあった堂宇は、十一世日朝上人が文明 6 年（1474）に身延山中腹を造成して現在地に移し、伽藍整備を行ったといわれる。その後、近世になると紀州・水戸家や加賀前田家等の帰依で繁栄し、東谷、西谷などに多くの子院が成立して今日に至るまで日蓮宗総本山として大いに降盛した。境内から山頂奥の院思親閣に至る参詣道沿いには丈六堂、大光堂、法明坊を配した、道沿いには三十六、三十七、三十八丁目に寛永 13 年（1636）建立の板碑型丁石が残り、七面山や苗敷山の丁石造立に影響を与えたものと思われる。久遠寺裏手にあたる「上の山」には各地の大名供養塔や、信徒の数千基もの石塔類が存在し、寛文期に本堂の諸堂宇が移転した地区として本地堂、鬼子母神堂などがあり、

その一帯を中心に多数のテラス群が存在し、坊院群の変遷をうかがうことができる。

身延山の奥の院として控える**七面山**（1982ｍ　11　七面山2011）は、早川支流、春木川上流に登山口があり、対岸には白糸の滝、雄滝の2つの名瀑が存在する。身延山山頂の奥の院から感歎坊を経て赤沢宿に至り、滝でのの禊ののち七面山を目指すのが正式とされ、急な尾根道を約3時間かけて登ると、山上の七面大明神を祀る敬慎院に至る。その間五十丁で、初丁目から敬慎院山門までの間に1丁ごとに丁石が立ち、途中に神力坊、肝心坊、中適坊、晴雲坊がある。敬慎院の建物群は一の池の東側に配置し、その東側の一段高い位置に建つ随身門前方には真正面に富士山がそびえ、富士山からの御来光を遥拝する場となる。彼岸の中日には富士山頂から随身門を通って敬慎院の本堂に光が差し込む仕組みとなっていて、背後の池を祭祀の中心としつつ、富士山遥拝を強く意識した計画的、意図的な空間構成を示す。また北方には七面大明神出現の伝えをもつ影向岩を祀る奥の院があり、やはり富士山遥拝の場となっている。このように山岳信仰の典型的な構成要素としての白糸の滝、雄滝、一の池、影向岩に加え、富士山遥拝という要素を加えたところに大きな特徴がある。

七面山信仰はもともと山上の池を祀る水神信仰に起源をもつ山岳信仰とみられるが、身延山信仰に組み込む過程で、日朗上人が波木井実長の案内で永仁3年（1295）9月19日に登ったという開山伝承が生まれ、とくに徳川家康の側室、養珠院（万）が七面山参詣を行い女人禁制を解いてから日蓮宗信者の登拝が急増したという。慶安4年(1651)の七面山の所有を巡る赤沢と雨畑の境争論ののち久遠寺管理下となると山上堂社の整備が進み、万が承応2年（1653）に亡くなり本遠寺に葬られたのち、七面山の登拝道沿いには結緑を求めた人々が供養塔の題目塔や、供養塔を兼ねた丁石を各丁目に建立し、登山道が急速に整備された。七面山参道の供養塔としては承応3年（1652）例を最古とする板碑型町石が出現し、元文3年（1738）には角柱型丁石に立て替えが行われ、文政年間（あるいは文化年間）に石灯籠型町石へと大きく変身し、それを受け継ぐように平成21年に真新しい石灯籠型丁石を設置している。山中には中世に遡る石造物が存在しないが、登り口の明浄院裏の墓地に承応4年（1653）以降の多数の石塔類とともに青石（緑色片岩）製の武蔵型板碑が存在する。長さ70㎝、幅20㎝、厚さ2.5㎝で、梵字キリークの下に「正和元年十一月日」（1312）と陰刻する。開山伝承に合致する資料として重要視すべきではあるが、県内では板碑が富士川以西で本発見なうえ、国中地域に数例知られる事例については由来が疑問視されていて、本事例に関しても確認時の状況から後世の持ち込みの可能性が指摘されている。ただ赤沢集落にある妙福寺はもと真言宗妙福庵といい、建治3年（1277）に日朗上人により日蓮宗に改宗したと伝え、また祭神、子安八幡大菩薩像には天福元年（1233）の銘があるとされ、早くから七面山が開かれていたと考えられることから検討を要する。

篠井山（1394ｍ　12　山梨県2003）は富士川右岸の南部町にあり、山頂からは富士山を東に望む景勝地で、甲斐国司の従四位凡河内躬恒にちなんで「四ノ位山」ともいわれる。山麓には南部町御堂、楮根、成島の3集落に登山口があり、山頂には各集落が祀る篠井（四ノ井）大明神の社が3つあり、かつては雨乞い祈願が行われ、成島の登山口にある要行寺と定隆坊は篠井山信仰の拠点であった。明治24年（1891）、楮根集落が管理する祠の下から経塚が発見され、12世紀中頃の渥美窯の藤原顕長・惟宗遠清銘短頸壺のほか、12世紀後半の渥美甕、13世紀中頃の常滑甕および「唐銅ノ蓋」が木炭を充填した礫郭内から見つかり、少なくとも2基の経塚が存在したと考えられている。藤原顕長は正五位下三河守で仁安2年（1167）に没し、三河国では国司写経を行ったことが知られるが、顕長銘の壺は三島市の錦田村経塚、伝鎌倉出土例、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡例があり、富士山を取り巻く分布から富士山遥拝地での埋経とみる説がある。そのほか、山頂東の満願寺跡には「妙法蓮華経石」（元禄7年　1694）の石塔が立ち、周辺から一字一石経石が見つかっている。『篠井大明神縁起』（宝永7年　1710）によれば、山中の寺平に龍扇禅師が住み、一字一石の法華経埋納を行ったという。

4　甲府盆地北東部の山岳信仰遺跡

甲府盆地の北、長野県境をなす奥秩父山塊の主峰が**甲斐金峰山**（2598ｍ　13　柳原2010）で、甲府盆地からは「五丈岩」の突起が目印となる。五丈岩は山頂近くにそびえる高さ約20ｍの花崗岩岩体で、太平洋側へ注ぐ笛吹川支流の荒川と日本海へ注ぐ千曲川の「水ノ元種」といわれ、磐座祭祀と水源が結びついている。五丈岩

には、かつて南側に金桜神社本宮があり、文武天皇２年（698）年に金峯山蔵王権現を勧請し、開山については役行者の入山縁起、智証上人円珍による弘仁７年（816）４月８日または仁寿元年（851）３月11日の開山縁起をもつ。五丈岩の名称は「蔵石」、「御影石」、「御像石」と変遷し、「五丈岩」となったのは昭和以降のようである。

五丈岩の本宮（山宮、奥の院）をめざす登拝道、「御岳道」は甲斐国内に東・南・西口の九口があり、別に信濃側（川上村）に北口がある。主な山口には里宮として３つの金桜神社（仙口金桜神社、万力金桜神社、御岳金桜神社）があり、とくに南口を統括する**御岳金桜神社**（14）は中世以降、御岳信仰の中心として栄えた。摂社、末社は120ともいわれ、山中には滝尾社、飛化頭社、湯谷社、荒川社など水に関わる祠が多い。御岳金桜神社にはかつて３つの宮が並び、境内の鐘は中世以来、「起請の鐘」「秘訣の鐘」として広く知られ、近世には御岳講、御岳代参講で賑わい、「祈願場」と呼ぶ配札圏は信州・武州・駿河・伊豆などに広がっていた。昭和30年に焼失した中宮は室町期の建築で、江戸中期の修復が著しく、東宮は室町期の建築で、内陣に江戸期の厨子を置く仏堂風の建築、神楽殿は1854年に再々建された建物である。境内東側の南北軸線上に仁王門、東宮（弥勒堂）、鐘楼、西側の南北軸線上に随神門、神楽殿、庁屋、里宮本社などを配し、仁王門と随神門が東西に並び、東を仏堂空間、西を神社空間とする神仏混合の軸線構造を採用している。

境内には修験の流れをくむ弥勒寺（上之坊）をはじめとする６坊があり、社僧、神主、社人で三派組織を構成したといわれるが、東の仏堂空間が弥勒寺である。記録によれば境内「弘法堂」という空海滞在を伝える地に永禄２年（1558）一寺を設け、慶長年中に「弥勒寺」となった。神主家が享保年間（1716～35）に吉田・白河家から神道裁許状を得て急速に神道化すると次第に社僧の姿は消え、弘化３年（1846）頃には無住となり、弥勒寺の坊舎は大破、荒廃した。その後の廃仏毀釈で弥勒寺の仏像・仏具を集めて残らず焼き捨て、天井、板戸、障子、板敷の類、門塀、石敷まで売り払ったという。『甲斐国志』によれば６月15日はかつて行なわれた峯入りの初日で、役行者が水無月（６月）16日に開山したという縁起にちなんでいるが、修験の詳細は不明である。なお神社境内で10世紀前半代の墨書「上」をもつ土師器皿が採集されている（櫛原・岡野1994）。

金峰山では五丈岩南側（本宮跡）、五丈岩北側（「甲斐派美」）、五丈岩西側（千代の吹上）、薬師岳周辺、金峰山小屋（長子の番所、山宮奥の院牛頭天王社跡）のほか、勝手社跡、御室小屋周辺などに遺物が分布する。五丈岩周辺では刀子・火打ち金・鉄製馬形・御正体・鉄鏡片・銭貨・灰釉陶器瓶子、壷、土馬、水晶数珠玉、土製容器片、中世陶器褒片などがあり、とくに五丈岩北側の「甲斐派美」と呼ばれる岩陰から発見された蹴彫り宝相華文をもつ金銅製円板は特筆される。直径12.7cmの円板で、縁に２つの孔を穿ち、真ん中で強く折り曲げており、12・13世紀の何らかの金属製品の鏡板への転用品である。10世紀代の灰釉陶器については経塚以前、五丈岩祭祀の初期段階の遺物である。経筒外容器片と思われる土師質土器片や中世陶器片があることから、12世紀頃に埋経の場であったことは確実で、水晶玉も経塚遺物であろうか。中世段階の遺物には北宋銭を中心にした銭貨が各地点で発見されており、富士山と同様に撒き銭行為が認められる。土馬については時期が不明確ながら中世～近世初頭の祈雨祭祀に関わる遺物と推定でき、鉄製馬形も同様な性格であろう。**勝手社跡**（2200m　15）は「弁慶の片手回し」と称する高さ15mもの卵形の巨岩を御神体とした磐座の脇にある祠跡で、土鈴２、鉄製刀子１、古銭37が発見され、その内訳は天聖元宝１、古寛永２、新寛永34で、18世紀代前半をピークとする。

御岳金桜神社周辺には窟が多い。甲府市猪狩の昇仙峡ロープウェー乗り場のある城山南麓には複数の窟があり、『官遊紀勝』（功刀2003）にも「左り谷の山ぎしに穴のあきたる所あり」とある。八王子嶺に登る途中の窟では鉄鉾の寛永通宝が見つかった例がある。**羅漢寺山**にある旧羅漢寺跡の裏手、南面の山腹には３箇所の大きな岩陰があり、「一の岳」「二の岳」「三の岳」と呼ばれている（850～900m　16）。自然の岩陰で、内部に壇状の構築を施し、多量の五輪塔、卵塔を主とした石造物を配置する。羅漢寺所有の五百羅漢像は、以前は岩陰の堂に祀られていたとみられ、像の墨書には応永３年（1423）から元亀３年（1572）までの年号、参拝者名等を記す。五輪塔内に焼骨が残る例があり、納骨所的なあり方を呈している。そのほか御岳金桜神社の東側、天狗山の西面に巨大な岩陰があり、岩庇の内側には金桜神社周辺の末社のひとつ、**白山社**が鎮座する（940m　17　櫛原2006）。

山梨市牧丘町の**柚口金桜神社奥社地遺跡**（1000 m　18　山梨市 2006）は柚口金桜神社旧社地で、笛吹川上流、東御殿（1487 m）西麓に位置し、御岳道、柚口ルートに近い。現在、柚口の米沢山雲峯寺境内に柚口金桜神社、勝手・子守社があり、社記等によれば山中の旧社殿は天正年中火災により諸堂の大半を焼失、一説には天正 10 年（1582）織田勢の川尻秀隆により焼失したのち、吉野平（二本松）を経て正徳 2 年（1712）に現在地に移転したといい、寺記に智証上人円珍を開山とするのは『金峯山縁起』と同じである。奥社地遺跡には南に開けた緩斜面に大小 23 面のテラス群が存在し、南北方向を軸線とする 2 つの遺構群が展開する。西側には 3 棟の礎石建物群をコの字状に配置したテラス南側に細長い石段がのび仏堂域を構成するが、三堂配置は天台寺院に特有な中堂・法華堂・常行堂の三塔配置の系譜を引く。また東側には近世の割拝殿跡から最上段の奥社までの間に石段を整備し、神社域と寺院域が東西に並列した空間構造と推測でき、近世御岳金桜神社の空間構成と共通する。発掘調査の結果、10 世紀前半の土師器を最古の遺物とし、11 ～ 13 世紀前半に山寺が営まれ、15 世紀以降、東側の神社域のみが維持されたようである。なお奥社地遺跡の南側にはテラス群が存在し、それらも関連遺構の可能性がある。

奥社地遺跡と関連するのが**柏尾山経塚**（19）出土の康和 5 年在銘経筒である。昭和 37 年、甲州市勝沼の大善寺東の白山平で偶然発見された経筒には 783 文字 の銘文があり、山城国乙訓郡石上村出身の勧進聖寂円が 63 歳で出家し、康和 2 年（1099）正月頃から「甲斐国山東郡内牧山村米沢寺千手観音宝前籠居」し、如法経書写を発願、康和 5 年（1103）4 月 22 日「同山東土白山妙里之峯」に埋納するまでの経緯を記している。文中「山東郡内牧山村米沢寺」は、山梨東郡内の牧山村の米沢寺という意ではあるが、「中」を「ウチ」とも読むことから「中」の誤字とみるならば「中牧山村米沢寺」となる。柚口雲峯寺は山号を米沢山といい、柏尾山大善寺を「柏尾山寺」というように「米沢寺」を米沢山寺と換言すると、雲峰寺の故地、金桜神社奥社地遺跡が中牧山村米沢山寺に比定できる可能性が高い。

山梨市三富町の**乾徳山**（2031 m　20）は夢窓国師の一夏面壁の地といわれる。応長元年（1311）に龍山庵（浄居寺）に隠棲し、のちに恵林寺を創建するが、その頃乾徳山で修行したといわれ、山頂西側の岩場に国師座禅窟と伝える窟がある。また道満尾根、国師ヶ原、賽の河原、極楽平などの地名、座禅岩、雨乞岩、月見石などの巨岩が点在し、登山口には明和 8 年（1771）勧請という乾徳神社、山頂に石祠の奥宮がある。山腹にはヒュッテ裏の登山道沿いに石垣を伴うテラスがあり、細長く石段がのびている（1680 m）。テラス中央には磐座とみられる巨岩「子抱き石」があり、以前には山小屋があって「**前宮**」と呼ばれ、昭和初期まで萱葺、籠堂形式の山小屋があり、夢窓国師の木造を祀っていた（原 1935）。磐座をもつ山岳寺院と思われる。登山道脇には役行者の石像があり、付近には錦晶水という水場がある。

笛吹市・山梨市境にある**兜山**（913 m　21　兜山 2005）は、推定甲斐国府の北側背後の山並みに構える神奈備形の山で、山腹を巻く岩場に窟、水場、山房跡をもつ小規模な山房跡である（730 m）。窟は南向きの断崖にある円い人工窟で、間口幅 2.8 m、高さ 2.2 m、奥行き 4.1 mを測り、窟前面に小テラスを伴う。窟内には炭化粒を多く含む黒色土が堆積し、その表面に 10 世紀代の土師器片が見られ、時期がわかる人工窟としては最古級である。西側尾根上には水場の窟をはさんで小テラス 3 面があり、最上段のテラスには礎石が存在する。水場の窟と山房をつなぐ岩場には明らかに人工的に削出した通路があり、テラス周辺から山の斜面直下を中心に 10 世紀前半～中頃の細片化した多量の土師器坏類、少量の甕類が分布する。窟からは甲府盆地東部一帯を一望に収め、御坂山地から頭を出した富士山は視界の右端に位置する。

兜山東側には夕狩沢をはさんで妙見山があり、山腹に**妙見社**（櫛原 2006）がある。妙見山は兜山よりひとまわり小さいが、神奈備形の山容を呈している。登拝道には丁石が 11 丁まで配置され、山腹には巨大な岩場に懸造の拝殿が建つ（585 m）。甲府盆地を一望する拝殿からの眺めは良好で、御坂山地越しの富士山を視野中央に配し、富士山の眺望、遥拝を明らかに意識している。断崖状の岩場上方には磐座状の巨石がある。拝殿西側の道の痕跡を辿ると前面にテラスをもつ南向きの窟が存在する（566 m　22）。窟内には炭混じりの黒色土が堆積し、内部で火を燃した跡がある。

妙見社東に隣接する大平山（櫛原 2006）には、山麓に御天狗様とも呼ばれる八嶽神社里宮があり、祭礼時に雨乞い儀礼の呪文唱和が行われるという。そこから山道沿いに上ると山腹の巨岩南面に土蔵造りの奥宮社殿(542 m　23）があり、典型的な巨岩祭祀の神社といえる。

山梨市西の**大石神社**（24）は、巨石の点在する大石山を境内とし、頂上の磐座とみられる巨岩の岩陰に本殿がある。岩手明神ともいい、武田信昌の子、四郎縄美が岩手氏を名乗り、その子能登守信盛が神社を建立したというが、式内社物部神社に比定する説があり、社殿改修の際に中世土器片が採集されている。

山梨市牧丘町の隼地区には国道沿いに石灯籠が立ち、**隼穴観音窟**(25　櫛原 2006)がある。『甲斐国志』には「龕ノ大土ノ窟横ハ七間深さ十間、大黒ノ窟ハ方二間許リ」とあり、２つの窟が存在する。**大土の窟**（480 m）は南東向きで前面にテラスがあり、間口が半円形で、幅 4.7 m、高さ 3.3 m、奥行き 7.5 mと大きく、窟内に石仏などがある。自然窟で、壁面の一部に手を加え、四角いほぞ穴を穿つことから、窟内に堂社があったことがわかる。**大黒の窟**は軟質の岩盤に幅 4 m、高さ 1.8 m、奥行き 4 mの四角い彫り込みを行い、奥壁には高さ 80cm、奥行き 55cmのベンチ状の壇を彫り残したもので、形態的には「やぐら」に類似するが、本来は小諸市布引観音堂に見るような建物を伴う構造であろう。大黒の窟の類似例には山梨市万力の福聚山**霊岩寺**があり（350 m　26）、平地の集落に近い崖面に大きな四角い人工窟を穿ち本堂とし、ノミで削ったままの壁面を室内空間とし屋根をかけている。穴観音として親しまれ、創建は慶長 8 年（1603）以前とされる。

山梨市牧丘町の小楯山南側の妙見山には**上人岩窟**（27　櫛原 2006）があり、この窟で西源寺の観音像 133 体が彫られたと伝える。現在、妙見山の東斜面（1150 m）の岩場には石積をともなう小テラスが数面あり、岩陰に祠を祀る。宝暦 2 年（1752）に金剛院が祀ったとされ（山梨教育会 1916）、祠には「金剛坊大徳院」による文化 13 年（1816）の奉納札、文政 2 年（1819）遷宮札を納める。大徳院は山号金峰山で廃寺だが、もとは修験系の寺院で役行者堂があり、役行者像を保管している。

小楯山の南面にある山梨市牧丘町の戸谷山（1382 m）東斜面には**鳥谷観音窟**（1205 m　28　櫛原 2006）がある。開抱山光暾大和尚が窟で 21 日間の断食行をなしたのち、西保の洞雲寺を開いたといわれ（牧丘町 1980）、急崖の中間に幅 30 m、奥行き 8 m、高さ 8 mほどの岩陰があり、奥壁寄りに西国三十三番の観世音菩薩の石仏を祀る。天正 12 年（1582）、西国の六郎源右衛門が相州三浦郡より来て断食行を修め、同 15 年までに観世音像等を安置したというが、今日見られる石仏は近世の作で、近世の観音霊場のひとつといえる。

灿口金桜神社奥社地遺跡に近い**大烏山**（1855 m）は、山頂近くの南斜面に雛岩、サンゴウ岩と呼ぶ大きな岩場が巻く特徴的な山である。『奥秩父』によれば山梨市牧丘町室伏の日吉山王神社奥社としてサルタヒコを祀るとあり、サンゴウ岩は山宮（サングウ）、あるいは山王（さんのう）からの転訛と思われる。雛岩からわずかに下った岩場に南向きの窟があり（1624 m　29　櫛原 2006）、間口幅 0.65 m、高さ 3.2 m、奥行き 5.5 mを測る。窟の入り口付近に炭混じりの黒色土が厚く堆積し、窟内右手の壁面には水が滴っている。窟前面には明確なテラスはないが、窟の周辺で鉄鍋片 1 点を採集した。

甲府市横根の**光福寺**は盆地中央にせり出した八人山の先端に位置し、現在寺の脇に「下の堂」、石段を上り詰めた岩陰に近年改築された「**上の堂**」がある（340 m　30　櫛原 2006）。上の堂は横根岩堂ともいわれ、庇の出が浅い南向きの岩陰前面に建ち、以前の建物は懸造で伝行基作の十一面観音を祀り、側に行者堂を設けていた。甲府盆地を見下ろす景勝地で富士山の眺望もよい。手前に六角石幢があり、「上下観音再建天文十二年三月廿九日」との刻銘があるというが風化が著しい。

甲府市の要害山奥にある**岩窟観音**（760 m　31）は深草観音として有名で、軟質の岩場にいくつかの窟を作出し、露天の窟内に木造の仏像を安置し、多数の石仏を配している。その中で、岩場の高いところに長い鉄の梯子を掛け、内部に拝殿を設けた窟があり、背後には石段状の通路を削り出し、参拝の便宜をはかっている。文化文政期の観音像が多いことから近世大いに隆盛した観音霊場といえ、『官遊紀勝』にも紀行文がある。

そのほか甲州市菱山の三光寺は現在浄土真宗だが、もとは天台で創建は推古天皇 3 年（595）、秦河勝開基といわれ、大滝山中に存在した。**大滝山**には男滝があり、現在大滝不動尊を祀っているが、滝と結びついた山岳寺

院といえる。また『甲斐国志』によれば「雁坂」（**雁坂峠**）には「嶺頭ノ土中ニテ古銭ヲ掘リ得ル事アリ昔時往来ノ人山霊ニ手向セシ所ト云フ」、「大菩薩坂」（**大菩薩峠**）には「峠ニ明見大菩薩社二社アリ（中略）峠ヨリ東ニ下ルコト一里半ニシテ狩場山神ニ至ル小祠アリ神体ハ十一面観音ノ銅像ナリ相伝ヘテ弘安中長根ノ山上ヨリ掘リ出ス所ナリト云フ」とあり、峠祭祀にも注目したい。

5　御坂山地および郡内方面の山岳信仰遺跡

釈迦ヶ岳（1641 m　32　櫛原 2003）は笛吹市御坂・芦川境に位置する御坂山地の主稜で、山頂付近は岩峰をなし、西側は屏風岩の崖壁となる。御坂山地の中では比較的険しく、山頂が尖った山容は、甲府盆地側から目を引く存在である。北側山腹には式内社櫛峰神社があり、山頂周辺は甲府盆地と富士北麓をつなぐ御坂山中の尾根筋にあたる。山頂では底部片に綱代圧痕をもつ縄文時代後期の深鉢形粗製土器２個体以上のほか、土師器片が採集され、甲斐駒ケ岳の土器同様、信仰的な側面を考慮せざるを得ない。

また甲府市上九一色に同名の**釈迦ヶ岳**（1271 m　33　畑 1993）がある。清涼寺式釈迦如来立像で有名な古関永泰寺がかつて釈迦ヶ岳山頂にあったと伝えられ、山頂周辺には釈迦屋敷の地名をもつ平地がある。また釈迦ヶ岳の南北には阿難坂、迦葉坂の地名があるのも釈迦にちなむとされる。礎石が残るというが、それらを認めることはできない。

富士河口湖町の**十二ヶ岳**（1681 m　34　畑 1993）は西湖北側にあり、役行者が富士山に入るのに精進湖で斎戒沐浴をしたのち開いたという山である。『甲斐国志』には東面に役行者の小祠、西面に十二ヶ岳権現の小祠があり、「中古山伏ノ役ノ小角ノ跡ヲタヅネ此ノ峯ニ参籠シ石上ニ端坐シ柴燈護摩修法シテ百日ノ修行セル山ナリトゾ」と記し、護摩修法に使われたらしい平らな石があること、「太刀或ハ陶器ノ破レタル又目ナレヌ壊損シタル古鏡ナド打チマジリテ木葉ノ下或ハ岩石ノ間ナドニスタレテ有ルコト数多シ」と遺物散布にも言及する。十二ヶ岳山頂には石祠があり、周囲では剣形、鏃形鉄製品が採集されている（図２）。

西桂町の**三ツ峠山**（35　西桂町 1992）は、開運山、御巣鷹山、毛無山の三峰の総称で、巨大な屏風岩の存在を特徴とする。富士講信者で富士信仰に強い影響を受けた天台宗弾誓派の木食修行僧、空胎上人を中興開山とし、天保６年（1835）に参道開削、一字一石経の完成と経塚供養塔の設置、本社、護摩堂などの再建などの山内整備が集中的に行われた。山頂に３つの峰をもつこの山を富士山に擬して山中の窟、岩場での修行が重視されたといわれる。それ以前の山岳信仰は明確ではないが、**岩屋観音窟**には延享３年（1746）の石仏があるほか、山麓の白糸の滝の存在も大きい。富士山の眺望に優れ、七面山などと同様に、富士山遥拝の山であり、富士山信仰の一側面を見出すことができる。また峠という山名が示すように交通路としての機能をもち、甲斐から武蔵、国中から郡内に至る脇道的な存在である。山頂周辺には平安時代の土師器片が採集でき、山岳信仰の視点での検討を要する。

都留市にある**御正体山**（1681 m　36　紙谷 1992）は道志山塊の最高峰で、桂川をはさんで三ツ峠山と対峙する信仰の山である。登拝口には道志口、鹿留口、細野口の３口があり、山頂に御正体権現を祀り、細野口と鹿留口に里宮がある。雨乞い、日照り乞いに霊験があるとされている。

大月市**岩殿山**（634 m　大月市 1998）は巨大な岩体を山体とし、山上に岩殿城跡がある。山体自体が神聖を帯びることから信仰対象となったことが考えられ、山上の調査ではわずかに土師器片が見つかっている。東側に七社権現窟、北側に新宮窟があり、東側山腹には**円通寺七社権現跡**がある（545 m　37）。七社権現窟は自然窟で、延享２年（1745）の絵図には懸造の建物を描き、真蔵院に安置する 15 世紀初頭の七社権現像（箱根・伊豆・日光・蔵王・白山・山王・熊野）はもと七社権現堂内に祀られていた。また**新宮窟**（404 m）は自然窟で、幅 35 m、奥行き 16 mあり、延享２年（1745）の絵図には妻を正面にして屋根に滝のように水が落ちる懸造の拝殿を描く。真蔵院の十一面観音像２体のうち１体は 11 世紀の作で、傷みが著しいことから新宮窟本尊と推測されている。14 ～ 15 世紀には熊野信仰の拠点として隆盛し、文明 19 年（1487）には聖護院道興が訪れた名利である。

6　まとめ

山岳信仰の場に伴う構成要素として磐座（金峰山、地蔵ヶ岳、妙見山妙見堂、八嶽神社山宮、三ツ峠山、七面

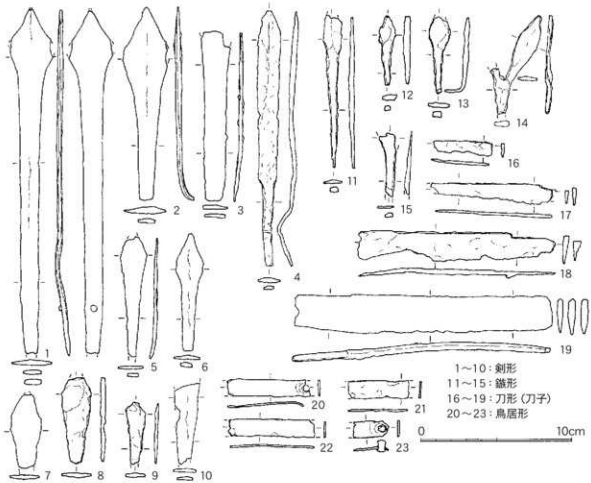


図2　十二ヶ岳山頂鉄製品（1～3・5～7・10・19は畑1993を改変、他は2006年柳原および篠原武による採集試料）

山奥の院影向岩等）、窟（兜山、岩殿山七社権現窟・新宮窟、千頭星山天狗岩の窟、大烏山の窟、隼大士の窟・大黒の窟、御岳金桜神社白山窟等）、滝（大滝山、七面山、地蔵ヶ岳、三ツ峠山等）、池（大笹池、椹池、四尾連湖等）で分類することは可能であり、さらに立地、標高などを指標に細分することもできる。地域的には甲府盆地北縁の盆地に面した山々に窟が分布し、金峰山信仰、御岳道との関連がうかがえ、韮崎市周辺の南アルプス山麓に点在する池には雨乞い信仰が認められる。

信仰遺物で特徴的なのは権現岳、地蔵ヶ岳の薙鎌で、『甲斐国志』によれば金峰山山宮宝物に「焼鎌」とあることから金峰山での薙鎌の存在が推定でき、山梨県内では長野県境に近い北西域に薙鎌分布が認められる。薙鎌は各地の諏訪神社での御柱祭に伴い神木選定の際の依り代として用いられているが、南アルプス市上今諏訪の諏訪神社宝物に２点の薙鎌がある（白根町 1967）。薙鎌は諏訪信仰圏の祭祀具で、雨乞い、風祀りなど多様な願意のもとに用いられた依り代で、その分布圏は日本全国に及び、長野県東信地域を分布の中心とし、基本的には諏訪信仰の広がりの中で理解できる遺物である。長野県川上村御陵山では剣形、容器形、剣形、弓矢形などの鉄製品とともに薙鎌が存在し、地蔵ヶ岳にも薙鎌とともに剣形が存在することから鉄製品を用いた同様な祭祀・信仰形態を想定できる。川上村では雨乞い祭祀の際、山上の祠の剣形、刀形を借用し、集落内の河原で祭祀を行った後、同じものを作って祠に戻す、という地蔵ヶ岳の地蔵信仰に似た行為の結果、形態が類似した製品が多数存在すると考えられる。剣形、刀形鉄製品については全国各地に分布し、とくに山岳信仰に限らず神社、祠の奉納品として普遍的に存在する信仰遺物であり、十二ヶ岳にもまとまって存在する。

七面山、三ツ峠山で重要視される富士山遥拝については、山梨市妙見山、乾徳山、篠井山等で認められ、富士山を擁する本地域独自の一種の信仰のかたちといえる。この視点については紙谷威廣氏がすでに指摘するところであり（1992）、富士山信仰の古い信仰形態はその姿を遠方から望む遥拝にあり、中世以降に発達した富士山登

拝行の成立以前、修行者が正式に行う行とは別に富士山遥拝を重要視し、日蓮宗でも日蓮が太陽崇敬したことに重ねて、七面山で御来光遥拝を重視するのではないかと推測されている。甲府盆地の乾徳山の恵林寺跡禅窟や兜山の窟については、悟りを得るため富士山に向き合う一種の修行窟とみることもでき、富士山を拝む遥拝行が窟と結びついて変化した宗教行為とも考えられる。

山岳信仰の変遷を時期的に整理すると、縄文後期、古墳前期の土器をもつ釈迦ヶ岳、甲斐駒ヶ岳については検討の余地があるが、10 世紀代には金峰山五丈岩において山岳信仰と磐座祭祀の融合が認められる。10 世紀前半に兜山、11 世紀には岩殿山に窟を伴う山岳寺院の存在があり、10 世紀後半には苗敷山で宗教活動が始まり、11・12 世紀には柚口金桜神社奥社地遺跡で天台系山岳寺院が建立された。12・13 世紀には金峰山五丈岩のほか各地の山岳寺院周辺で経塚造営が行われ、それらの中には篠井山のように富士山を意識した場の選定が行われている。15・16 世紀には羅漢寺、御岳金桜神社などへの参拝が盛んとなり、地蔵ヶ岳などの高山にも登拝者が増加する。その背景には守護武田氏の庇護、一般民衆の山岳登拝に対する関心の高まりを指摘でき、15 世紀以降に隆盛する富士山登拝との関連がうかがえる。近世には三ツ峠山に富士講の影響が現われるほか、岩屋観音、岩堂観音、烏谷観音など観音霊場として発展した窟が多い。

ところで甲州市塩山藤木から山梨市小原東、勝沼休息の立正寺方面に至る道は「道者道」、「道者街道」と呼ばれ、河口湖周辺にも断続的に存在する。富士道者が往き来した道といわれ(堀内 1993)、金峰山北口、川上村内にも「道者道」、「行者道」と呼ぶ道がある。『甲斐国志』には柚口蔵王権現(雲峰寺)より金峰山へ至る道、および黒駒への道を「道者海道」と記しているが、このことについて若干の推論を述べておきたい。

大善寺東の白山平で発見された経筒は米沢山寺で写経され、今日の柚口金桜神社奥社地遺跡を写経所の山岳寺院跡と推定したが、柚口(米沢山寺)から大善寺(柏尾山寺)まで埋経に際して通ったルートを想定すると御岳道の柚口ルートと一部重なる。このルートは秩父方面からに道者が雁坂峠を越えて富士山参詣のため通過したルートであり、また柚口から金峰山に至る道でもあり、各地の山を巡礼する道者にとって、道者街道沿いの立正寺とともに甲州きっての名刹大善寺が重要な巡礼地、結節点となっていたことを示している。

大善寺には今日、御坂峠にあったという役行者像を武田信春のときに境内の六所明神に移したという行者堂があり、5 月 8 日(古くは旧暦 4 月 14 日)に藤切会式の祭礼を行う。『甲斐国志』によれば「庭上ニ三丈許ノ柱ヲ建テ藤蔓ヲ縄トシ纏ノ修験者一人柱ノ上ニ攀テ修法シ終リテ剣ヲ以テ其ノ縄ヲ両断トナシ地ニ墜スヲ香花群集ノ人嘆ギ立テ左右ニ之ヲ引キ勝負ヲ争フコトヲ旧式トス之ヲ柏尾ノ藤切ト謂フ」とあり、高さ三間半の御神木から七尋半の大蛇を象った藤の根を切り落とすという修験系の柱松行事で、修験における春の峯入り儀礼を意味し、富士(藤)山入峯を暗示する。『勝沼古事記』には、享保 20 年(1735)に「四月十四日山伏祭り木登等当年より休」とあり(山梨 2008)、少なくともそれ以前には 4 月 14 日に行われていた。また大善寺の対岸にある上岩崎権現平では 8 月 22 日に浅間神社の火祭り(柱松行事)が行われ、大正以前には 4 月 3 日にも行われていた。吉田の火祭りにならったものといわれ、富士浅間神社との結びつきを示している(勝沼町 1962)。

大善寺と同様の祭礼は甲府市七覚の円楽寺にもかつて存在し、4 月 15 日に五社権現祭礼として「真木伐り」と称した。『甲斐国志』には「役ノ行者富士入峰ノ鞋ナリ真木トテ長二丈八尺ノ柱ヲ建テ柴ヲ附ケ藤ニテ二十八所結ヒ先達修験一人攀上リ寺宝ノ百足丸ト云太刀ヲ以テ伐ル七覚ノ真木伐トテ州人為群衆ナリ」とあり、二丈八尺、二十八所にみる 28 という数字は富士山への宿(拝所)の数を示唆する。円楽寺は富士山二合目の役行者堂を兼帯し甲州側の富士山修験を統括した寺院であった。

大善寺の藤切会式では、役行者が金峰山の蛇に見立てた藤の根を切る行為を演じるが、これは吉野金峰山での役行者の大蛇退治の故事に基づくといわれる。この点について想起されるのが『金峯山縁起』(由井 1983、櫛原・岡野 1994)の中で甲斐金峰山の五丈岩を蛇体として、大日如来の化身とみなすこと、『甲斐国志』に五丈岩北側の岩あるいは五丈岩そのものを「甲斐派美」と呼び水の元種と認識していることで、「派美」とは蛇を意味する。藤切会式では本堂(薬師堂)前の白峯三山に見立てた三石を踏み越え(三山渡り)、藤切りの柱に行者が取り付くことから、甲斐に入った役行者が甲斐金峰山の大蛇を退治して入峯の道を開いたいう縁起を祭礼化したと考え

るのが自然で、大善寺が富士山方面から金峰山方面に向う経由地点であるのも示唆的である。大善寺は別名「三枝寺」で、在庁官人三枝氏の氏寺と考えられているが、大善寺が甲斐国の北鎮とされた金峰山と宗教的な紐帯を有した証左ではないだろうか。

さらに荒唐無稽かもしれないが、祭礼の開催日と埋経の行われた月日に近似性がある点を指摘したい。藤切会式の中世以前の経緯については不明だが、大善寺最大の年中行事として4月14日に行われてきたと考えると、康和5年の埋経を4月3日の叡山学者堯範の開講演説ののち、やや日を置いて4月22日を埋納日としたのは、柏尾山寺の行事に合わせて、あるいはそれを避けて埋経を実施したと想像できる。経筒銘の「立並る結縁衆路頭ニ无隙かりき」という文言は、まさに祭礼時の賑わいそのものといえるであろう。大善寺はもと天台寺院で、『金峰山縁起』によれば智証上人が金峰山を中興開山したのが卯月（4月）8日であり、4月8日の天台宗の潅仏会、14日の山王祭との関連も考えられる。ただし今日、大善寺と金峰山信仰との関連、入峯や修験についての史料はなく、康和五年銘経筒にも金峰山、蔵王権現に関する記載がないことから、あくまでも仮説に留めざるを得ない。ついでながら『夫木和歌抄』（12世紀末）の「題知らず、梁塵秘抄」の歌に注目しておく。

「甲斐にをかしき山の名は、白根波埼塩の山、室伏柏尾山、篠の茂れるねはま山」

「ねはま山」とは根場山、つまり根場集落背後の十二ヶ岳から王岳を指し「室伏」とは山梨市牧丘町室伏のことで、「室伏」を山と認識し、室伏と柏尾山をセットとする点に注目すると、一方の柏尾山が甲州での天台の拠点であることから、「室伏」はやはり天台色の濃い日吉山王神社から米沢山寺一帯を指すとみられ、室伏が米沢山寺そのものを指した可能性があるのではないか。柚口金桜神社社記に米沢山雲峰寺の前身寺院を「米澤山大禅寺」と記しているのも、大善寺との関連を暗示して興味深い（山梨市 2006）。

本稿は筆者がいくつかの小論、報告に記載した内容を引用し、県内山岳信仰遺跡の分布調査という主旨にもとづき整理したものであるが、富士山信仰から逸れて金峰山信仰に偏った考察になった点をお詫びしたい。

参考文献

大月市教育委員会・岩殿山総合学術研究会　1998『岩殿山の総合研究』
荻生徂徠『峡中紀行』　1703（宝永3）　1981『甲斐志料集成三　日本紀行篇』
兜山遺跡群調査研究グループ　2005「笛吹市春日居町兜山遺跡群の調査」『山梨県考古学協会誌』15
勝沼町　1962『勝沼町誌』
紙谷威廣　1992『富士信仰と木食僧集団』『三ツ峠山の信仰と民俗』　西桂町教育委員会
清雲俊元　1978『甲斐金峰山と修験道』『富士・御岳と中部霊山』　山岳宗教研究叢書9
櫛原功一・岡野秀典　1994『甲斐金峰山の信仰』『丘陵』14
櫛原功一　2003「山岳遺跡での考古学的調査－甲州での近年の調査事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所報』46
櫛原功一　2006「甲斐の窟の諸相－修行窟を中心に－」『山梨県考古学協会誌』16
櫛原功一　2007「柏尾山経塚の復元」『山梨県考古学協会誌』17
櫛原功一　2008「頂から窟へ」『山の考古学研究会会報』20
櫛原功一　2010「甲斐金峰山と金桜神社」『山岳信仰と考古学Ⅱ』　同成社
功刀利夫　2003『渋江長伯著　官遊起勝　注釈と余話』
校訂佐藤八郎　1971『甲斐国志』　大日本地誌体系
斉藤秀樹　2011「大聖池の雨乞い信仰」『笛敷山の総合研究』　韮崎市教育委員会・笛敷山総合学術調査研究会
七面山石造物調査グループ　2011「七面山の武蔵型板碑－明浄院墓地と丁石の調査－」『山梨県考古学協会誌』20
白根町　1967『白根町誌』
辻本満丸　1908「履歴山第二回登山記」『山岳』2－3号
西桂町教育委員会　1992『三ツ峠山の信仰と民俗』
韮崎市教育委員会・笛敷山総合学術調査研究会　2011『笛敷山の総合研究』
畑大介　1993「芦川村周辺の山居信仰遺跡」『甲斐路』77　山梨郷土研究会
原全教　1935「奥秩父　続」
堀内真　1993「富士参詣の道者道と富士道」『甲斐路』76
牧丘町　1980『牧丘町誌』
山梨教育会東山梨支部　1916『東山梨郡誌』
山梨県　2003『山梨県史　資料編7　中世4 考古資料』
山梨歴史美術研究会　2008『大善寺』　山梨歴史美術シリーズ2
山梨市教育委員会　2006『柚口金桜神社奥社地遺跡』　山梨市文化財調査報告書　第10集
山本義孝　2011「笛敷山周辺の山居信仰」『笛敷山の総合研究』　韮崎市教育委員会・笛敷山総合学術調査研究会
由井澄　1983「金峯山縁起」『修験道史料集（Ⅰ）東日本編』　山岳宗教研究叢書17

第５節　富士山二合目をめぐる修験の活動

堀内　亨（山梨県立山梨園芸高校）

はじめに

一是富士山中最初勧請社也、

『甲斐国志』が伝える「小室浅間明神」（富士御室浅間神社、富士山二合目）の由緒は、こうした文言で始まっている（巻71）。本項では、この記載の検証を手始めに、富士山二合目を中心とする修験の活動について考えてみたい。

１　修験の活動

富士山内に営まれた宗教施設には、数多くの仏像や神像が奉納されている。このうち「山室」あるいは「北室」とも称された御室の浅間社には、それぞれ文治５年（1189）、建久３年（1192）の紀年銘をともなう日本武尊と女神の二像が伝わっていた。いずれも「走湯山住金剛仏子覚実覚台坊」により奉納されたものと記録されている（『甲斐国志』巻71）。これに続く奉納物が、乾元２年（1303）に山頂初穂打場に奉納された銅造地蔵菩薩立像（1）であることを勘案すれば、両像が早期の遺品であることは疑いない。また、御室社周辺を対象とした一連の発掘調査では、12世紀後半の所産と考えられる山茶碗片も出土していて、この頃には当地に何らかの施設が存在していたことが確認される。後述するように、富士への登拝が一般化するのは早く見積もっても14世紀、登拝路の整備が進んだのも15世紀以降とみられることから、冒頭に引いた『国志』の記述も、案外認められてよいだろう。

さて、『扶桑略記』の記す永保３年（1083）の噴火（巻30）を最後に、富士山の火山活動は休止期に入る。これを待っていたかのように、修験がこの山を舞台に活動し始める。諸種の記録や縁起に名をとどめる者としては、富士へ登ること数百度、山頂に大日寺を構えて富士上人と呼ばれた末代が名高い。久安５年（1149）に一切経の書写と富士山への埋納を企図すると、関東から東海・東山の衆庶を勧化し、さらには鳥羽法皇の結縁を獲得したと伝えられる（『本朝世紀』）。

近年見出された縁起にしたがえば、同人は駿河の出身で伊豆の走湯山（伊豆山神社、静岡県熱海市）にあって修行を重ね、天承２年(1132)に初登頂を遂げたという。この縁起は、末代以前にも金時（年次未詳）、覧蔵(983年)、日代（1057年）といった上人たちが山頂を極めたと記している(2)。すでに９世紀後半成立の都良香の『富士山記』に、山腹や山頂の様子が具体的に描写されており、末代に先行する登頂者があったことは大いに想定される。金時・覧蔵の両名については、走湯山の開創伝承に登場する金地・蘭脱の両仙人の名に類似するとの指摘もある(3)。いずれにせよ、最初に富士山に修行の場を求めたのは、末代に代表される走湯山に本拠を置く修験たちであった。日本武尊・女神の両像を御室に奉納した覚実覚台坊も、その末派に属す修験であろう。御室は、富士北面におけるかれらの根拠地として開かれたと考えたい。

一方、末代が山麓における拠点として伽藍を構えた地として知られるのが、南面の村山（静岡県富士宮市）である(『地蔵菩薩霊験記』)。江戸時代の絵図面の多くは、ここに浅間社・大日堂・大棟梁権現の三宇とともに池西坊・辻之坊・大鏡坊の三坊を描いている。付された注記からは、前三宇を興法寺と総称し、その別当を修験の三坊が務めたことが知られる。伊豆山権現の別当密厳院の寺領を書き上げた応永５年(1398)の文書には「富士村山寺」の記載があり（「醍醐寺文書」）(4)、興法寺は古くは村山寺とも称したようだ。

この村山を拠点に行われた富士山内の回峰行を「富士峰修行」と呼んだ。役行者以来の行法と伝え、江戸時代には先の三坊が年番により配下の修験たちを率いて実践したという。宝永山や愛鷹山、さらには三島明神（三島大社、静岡県三島市）など、富士山南面の山腹および山麓を全26日の行程で巡った（『駿河志料』巻57）。村山は、南面からの登拝拠点として、また回峰行の基点として、こののち発展を遂げていくこととなる。近年の村山における発掘調査では竪穴住居跡と溝が検出されたが、これにともなって９世紀後半から10世紀前半所産の甲斐型土器が出土していて(5)、南・北両面にまたがる回峰ルートの存在さえ想定されよう。

２　甲斐の修験

二合目御室には、浅間社とともに役行者堂があった。『甲斐国志』が浅間社の西方に所在すると記述するほか(巻35)、『富士山真景之図』や『富士山明細図』も浅間社に並べてこれを描いており、19世紀後半までは、ここに

堂宇が存在していたことは疑いない。これを兼帯していたのが甲府市右左口町の円楽寺（真言宗）である。役行者による創建と伝え（『国志』巻80）、同寺に伝存する12世紀末期の作と推定される役行者像（山梨県指定文化財）は、御室の行者堂に安置されていたものともいう。

富士山の北麓と甲斐国の中心をなす甲府盆地の間には、御坂山地が横たわっている。古代の官道に起源する御坂峠越え（鎌倉街道、国道137号）や平家追討に向かう甲斐源氏軍が進撃した大石峠越え（若彦路）などの諸道が両地域を結んでいた。このうち御坂峠には、盆地側の鞍部近くに役行者像を祀る堂宇があった（『国志』巻24）。その祭祀を担ったのが大善寺（甲州市勝沼町）で、同寺に現存する役行者像（山梨県指定文化財）は、その本尊であったと伝承されていた（『国志』巻75）。また、富士河口湖町大嵐に所在する日蓮宗寺院蓮華寺は、大同山御堂寺と称する真言宗寺院に起源すると伝える。背後の「だんの山」（檀山、足和田山）の頂上は奥院と呼ばれ、寺伝ではここを役行者修法の地とするなど（『国志』巻90）、一帯は修験の行場であったことを伝えている。文化3年（1806）、『甲斐国志』編纂に際して作成された大嵐村の絵図は、檀山の山頂に「法印塚」を記すとともに、同寺の門前を横断して東方の富士山へと延びる道に「富士山とうしや（道者）道」と注記している。この道は、『国志』が「七覚山」の項において、「相伝テ云、昔役小角富士登山ノ時、此処ヨリ発シ、迦葉・阿難ノ二嶺ヲ踰テ、精進・西海・長浜・大嵐・大田和・成沢数村ヲ経テ直ニ御室ニ達ス」（巻26）と述べる甲府盆地南東辺と富士山二合目を結ぶ通路に該当するとみられる。円楽寺は七覚山の足下に所在する。この道こそ、円楽寺の住僧が御室との間を往き来した道に他ならまい。

大善寺や円楽寺は、ともに甲府盆地を代表する修験の拠点的な寺院であり、盆地東辺から御坂山地、さらには富士山へと連なる回峰ルートの存在が想定される。こうした巡錫路をたどった修験にとって、御坂山地直下に所在する蓮華寺は格好の中継地点であったに違いない。「浅間大菩薩御宝前」に奉納したと刻む享禄元年（1528）鋳造の鰐口が同寺に伝存するのも、同寺と御室の結びつきを物語ろう。二合目御室は、甲斐の修験の根拠地のひとつであった。

3　登拝の大衆化と修験の退潮

御室に納められた二躯の神像と山頂初穂打場の地蔵菩薩像一。12世紀末と14世紀初頭、その造立時期には百有余年の隔たりがある。この間の信仰実態の変化には、大きな関心を寄せるべきだろう。地蔵菩薩の背面には、「富士禅定」の4文字、および「益頭庄沙弥光実・同比丘尼」と施主の名が刻まれている。登拝の成就が叶ったことを記念して光実夫妻が奉納したものとみられる。ちょうどこの頃、富士への登頂を果たした者として、仏教史書『元亨釈書』の著者として知られる禅僧虎関師練をあげることができる。師練は、応長元年（1311）に34歳で山頂を極めたが、登拝に際しては「導引者」を必要としたこと、「衆人」はその命にしたがって隊列を組んだことを記録されている。山頂付近の氷の残る泉（コノシロ池か）では、身を浄めることが求められたという。ガイドや登拝の作法までが存在したことが知られる（『海蔵和尚紀年録』）。12世紀、富士は修験の行場、すなわち限られた宗教者のものであった。14世紀まで降ると、登拝は衆庶のものとなった。登拝者の増加にともなって、登拝路の整備も進んだと推定される。『勝山記』には15世紀の後半以降、登拝路に沿って多くの施設が整備されていく様子が記録されている。二合目についても、浅間社の社殿や行者堂・護摩堂の修造にかかわる記事が散見される（永正5年〈1508〉条ほか）。そうしたなか、御室の地では、いつしか浅間社を所管する別当小佐野氏の勢力が増していったようだ。永禄6年（1563）には、「小屋」の帰属をめぐって武田氏のもとで円楽寺と争論に及び、これに勝訴している（「富士御室浅間神社文書」）(6)。二躯の神像が別当側に伝わったこととともども、修験の勢力の減退を示すものであろう。

(1) 富士吉田市・勝俣信彦氏所蔵（『山梨県史』資料編7〈中世4・考古資料〉第3部88号）
(2) 神奈川県立金沢文庫展示図録『金沢文庫の中世神道資料』（1996）
(3) 西岡芳文「中世の富士山」（峰岸純夫編『日本中世の再発見』吉川弘文館、2003）
(4)「密厳院領関東知行地注文案」（『静岡県史』資料編6〈中世2〉1232号）
(5)「浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡」（『静岡県埋蔵文化財研究所調査報告』第201集、2009）
(6)「有賀勝慶・跡部昌長連署書状写」（『山梨県史』資料編4〈中世1〉1614号）

第6節　伝経ヶ岳出土資料について

篠原 武（富士吉田市教育委員会）

1　はじめに

富士山の吉田口登山道（山梨県富士吉田市）五合五勺に位置する経ヶ岳で大正13年（1924）に発見された経筒と経巻が、初めて世に知られたのは、昭和10年（1935）7月3日付けの山梨日日新聞の記事（参考資料1）による。記事をみると、大正13年の6月中に経ヶ岳で行われた工事の際に経筒と法華経10巻が出土したことや、その9年後となる昭和10年になって専門家へ鑑定を依頼した経緯とともに、当時これらの出土品が、日蓮上人が写経し埋納したものとの認識があったことが分かる。また、鑑定人の中に、経塚研究の第一人者である石田茂作氏の名がみえるように、経塚出土資料との認識も一方であったことが分かる。その後、これらの資料は、塩谷家により代々大切に守り伝えられ、富士信仰研究者により、その概略が紹介される[1]こともあったが、平成14年（2002）に開催された富士吉田市歴史民俗博物館企画展「富士の信仰遺跡」及び企画展図録『富士の信仰遺跡』[2]で、展示公開及び報告されるまで、考古学も含め各分野で学術的評価が行われることはなかった。

資料自体は第一級資料と評価されながら、60年以上にわたって雌伏の時を過ごさざる得なかったその遠因には、発見時に現地の学術調査がなされなかったことや、その発見から報告までに9年の空白期間があったことにより、これらの資料が、確かに経ヶ岳出土であるという客観的証拠が残されなかったことがある。そのため、後になると経ヶ岳ではなく富士山頂から出土したものであるという指摘もなされる[3]というように、その評価は未だに定まっていないため、本論中では「伝経ヶ岳出土資料」と呼称したい。

このような現状を踏まえ、今回の報告では、未図化であった伝経ヶ岳出土資料の図化を行い、基礎データを提示し今後の評価に備えると共に、経ヶ岳の歴史を文献資料等を用いて紐解きつつ、未解決となっている伝経ヶ岳出土資料の出土地の問題を中心にその課題を提示したい。

2　伝経ヶ岳出土資料について

(1) 経ヶ岳と伝経ヶ岳出土資料の出土地点（図1）

詳しくは後述するが、富士山中にはいくつか経ヶ岳と称する場所がある。今回紹介する資料が出土したとされる吉田口の経ヶ岳は、富士山北面の枝尾根先端で標高2,306mを測る小ピーク（以下、経ヶ岳山頂）を中心とした地のことで、剥き出しの岩が聳えていることから江戸時代には「岩嵓」[4]と称されている[5]。吉田口登山道はその経ヶ岳山頂に南進しながら近づき、その手前で迂回のため南西へ折れ、途中でU字状に折返して北東へ進みながら経ヶ岳山頂の北側を回り込こんで、また南西へ登り上げていく。この内の北東へ向かう登山道の南西側に、小屋と昭和28年（1953）に建築された八角堂（常唱殿）[6]があり、現在ではここが経ヶ岳の中心地と認識されている。周辺は樹林のため眺望を遮られているが、枝尾根の先端部のため、樹高が低ければ、富士山麓を一望することも可能な地であろう。また、南を望めば、富士山頂が眼上に聳えており、山中の景勝地といえる。なお、現在の登山道のうち、馬返～五合目は、明治40年の登山道改良工事[7]により一部付け替えられているが、五合五勺の経ヶ岳周辺についても、江戸時代後期の富士山中の記録である『富士山明細図』[8]や『富士山真景之図』[9]に描かれる経ヶ岳の様子とは大きく異なっている。これらの絵図中には、経ヶ岳山頂ではなく、登山道を挟んで北に位置する姥ヶ懐という岩穴へと直登するように登山道が描かれており、やはり五合目から経ヶ岳までの登山道も、近代になって付け替えられたものと考えられる[10]。そのため、小屋と八角堂がある地も、過去の登山道から離れていることになるが、遠藤秀男氏によると「経ヶ岳のお堂背後に開かれた小道をすこし行ったところ、けずりとられた崖面にボツリと古銭が頭をのぞかせていた」とし、宋銭・明銭を合計15枚発見した[11]とあるため、近代以後の歴史しかないと断言はできない。

なお、この現在の経ヶ岳と姥ヶ懐については、近世の記録との差異が他に2点ある。まず、『甲斐国志』[12]及び『甲斐国志草稿』[13]によれば、経ヶ岳の南（上）に姥ヶ懐があったとされ、現在の位置関係と南北が逆転している。次に、『富士山明細図』及び『富士山真景之図』によれば、現在では、別々の地と認識している経ヶ岳と姥ヶ懐を、同一地と認識しているようにみえる。具体的には、まず『富士山明細図』の「経ヶ嶽日蓮上人百日行場」[14]と題す

図1　経ヶ岳周辺図

参考資料1

埋蔵の経筒から国宝的日蓮手写の経文十巻
昭和十年七月三日

埋蔵の経筒から国宝的日蓮手写の経文十巻　鷲尾博士等が真物の折紙

南都留郡福地村上吉田塩谷平内左衛門氏は、大正十三年六月中富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮増築工事の際、青銅製の経筒を発掘、所蔵していたが、日蓮主義を鼓吹して日本精神を明徴にしやうと経ヶ嶽奉讃会を組織し昨年参籠所を建築したが、六月二十五日所蔵の経筒を携帯して上京し、徳富蘇峰翁に鑑定を請うたところ、翁は史料編纂官文学博士鷲尾順敬、渡邊□祐、岩橋小弥太、帝国博物館溝口禎次郎、石田茂作氏等を紹介、史資料編纂所で展観、権威の五氏が鑑定の結果、経筒は鎌倉時代のもので中に蔵された十巻の経文は、法華経八巻、開結経二巻で日蓮が文永六年相州から駿州路に入り吉田着、初代塩谷平内左衛門氏方に宿り、富士に登山、中腹の景勝地に手写の法華経を埋め一百日の行を終へて下山した史実に合致する得難き宝物である事、裏書され博物館から国宝に等しい物故寄託を切望されたが奉讃会の事業達成まではと持ち帰った。この経筒は六百七十年前に埋蔵したものなので、腐食し中の経文は純日本紙の事とて一束となり、一巻を解くに半日もかゝつた今後真空硝子壜に保蔵する【写真は塩谷氏】

る絵図中には、お堂とそれに隣接する題目が刻まれた大岩が、『富士山明細図』の数年後を描くとされる『富士山真景之図』の「文永六年妙経一部ヲ埋テ　経ヵ嶽」[15] と題する絵図中には、「姥ヵ懐」とある岩穴とそれに隣接するやはり題目が刻まれた大岩が描かれている。このうち、『富士山明細図』のお堂は、『富士山真景之図』の「五合五勺小御嶽横吹一ノ鳥居」[16] と題する絵図中に「弘化二巳年ヨリ日蓮祖師堂経ヶ岳ヨリ引テ立ル」と記して一ノ鳥居手前に描く日蓮堂と同一建物で、経ヶ岳から一ノ鳥居前へ移築されている可能性がある。従って、『富士山明細図』中のお堂は、『富士山真景之図』に描かれる姥ヶ懐を覆うように建てられているのであり、その数年後に一ノ鳥居前に移築されたとも解釈できる。その場合、両絵図とも姥ヶ懐及び題目碑を含む地を経ヶ岳と認識していることになり、経ヶ岳と姥ヶ懐を別個のものとする現在の認識とやや差異が出てくる。ここでは、これ以上この問題に立入らないが、近世と現在の経ヶ岳と姥ヶ懐の位置や認識に大きな相違があるのは確かであり、踏査等により再検討を行う必要がある。

では、伝経ヶ岳出土資料は、これらのうちのどこで出土したとされるのであろうか。参考資料1によれば、「富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮」の増築工事中に出土したとされるが、その仮宮の位置は現在特定されていない。ただ、昭和10年時点で、「日蓮上人の遺跡」という認識があるのは、経ヶ岳山頂・経ヶ岳山頂下・姥ヶ懐の3ヶ所であり、今後、現地調査や文献調査を通じて、この場所についても特定する必要がある。

(2) 伝経ヶ岳出土資料の内訳

経筒1点、経巻9点、既に開かれた経典1点で構成される。

経筒（図2・写真1） 全体に緑青を吹くとともに、体部外面については、制作時か後の劣化により生じたとみられる直径1㎜以下の気泡状の空隙が全面にあるが、底部には、そうした空隙は一切みられず、平滑な面となっている。上部は部分的に欠けているが、上端部は1/3周分残存しており、その先端はやや細まり尖頭状を呈している。底部は完存しており、底面側がやや丸みを帯びている。底部周縁部は1.8cmほど折返され、その中に銅鋳製の体部を入れ込んで接合[17] しているが、内面をみると、底部と体部端部に約5㎜ほどの間隙があり、完全に

表1　経巻一覧表

	最大高（経巻）	最大径（経巻）	最大高（経軸）	最大径（経軸）	重量
軸1	20.0	2.6	21.0	4.0	15.2
軸2	20.4	2.7	—	—	19.9
軸3	20.4	3.0	—	—	22.4
軸4全体	20.0	6.9	—	—	96.1
軸4－1	20.0	2.8	—	—	—
軸4－2	19.6	2.9	—	—	—
軸4－3	19.5	3.5	—	—	—
軸4－4	20.0	3.0	—	—	—
軸5全体	19.7	4.6	—	—	28.1
軸5－1	19.7	2.1	—	—	—
軸5－2	18.7	2.4	—	4.0	—
平均	19.8	2.8	21.0	4.0	20.2
合計					181.7

※単位はcm、重量のみg

表2　経紙一覧表

No.	縦幅	横幅	行範囲	行数	行数／横幅
1	(8.3)	(17.1)	巻末	—	—
2	(14.9)	51.4	0394a06～0394b11	36	0.70
3	(14.5)	48.2	0393b27～0394a06	37	0.77
4	(11.1)	41.0	0393a11～0393b27	32	0.78
5	(11.3)	50.2	0392c02～0393a11	39	0.78
6	21.1	49.5	0392a21～0392c02	40	0.81
7	21.1	49.5	0391c12～0392a21	42	0.85
8	21.1	49.5	0391a29～0391c12	43	0.87
9	21.1	49.3	0390c16～0391a29	44	0.89
10	21.1	49.4	0390b01～0390c16	44	0.89
11	21.1	49.4	0389c14～0390b01	45	0.91
12	19.2	49.1	0389b26～0389c14	17	0.35
平均	20.8	48.8		38.1	
合計		536.5		419	

※単位はcm。（ ）は、欠損のあるもの。行範囲は、大蔵経テキストデータベースにより作成。テキスト名は、法華部・華厳部 Vol.9 佛説観普賢菩薩行法経（0277. 雲無蜜多譯）。この他に、下段部のみのもの3点、中段部のみのもの3点あり。いずれも計測不能・位置不明。

一体化はしていない。なお、底部の折返し先端部も実頭状を呈している。外寸は、最大高21.6cm・口縁最大径12.7cm・底部最大径13.5cm、内寸は最大高20.8cm・口縁最大径12.5cm・底部最大径12.5cmで、器壁厚は1.5～2㎜、重量は1,250gである。

経筒の時期であるが、『富士の信仰遺跡』では、後述する経巻・経紙も含めて、三島ヶ岳出土とされる浅間大社所蔵資料との類似を指摘するとともに、平安時代後期と推定している[18]。型式学的な検討による時期や制作地の特定まで今回はその考察が及ばないが、経筒の最大高21.6cm、経巻の最大高20.4cm、経紙の最大縦幅21.1cmというやや大型の法量から12世紀後半と考えたい[19]。なお、劣化が著しかったため、平成14年度に帝京大学山梨文化財研究所に委託し、ベンゾトリアゾールエタノール溶液及びインクララックの減圧含浸等による保存処理が行われている。

経巻（写真2～4・表1）　紙本経で、紙質は維持しているが、癒着と変形が著しいだけでなく、先細りしていることから腐食も進んでいるようである。単独のもの3巻以外に、癒着しているものが2組あり、それぞれ4巻と2巻で構成される。この癒着した4巻と2巻は出土時の状態のままと考えられるが、4巻のものは軸頭側からみると縦2巻、横2巻で癒着しているため、全体で四角形を呈している。9巻のいずれも外装がなく、経紙が露出して経文らしきものが透けてみえるため、9巻全てが朱書と分かる。単独もののの内の1巻は、直径4㎜の円柱状の棒を半割したものを軸に用いている。また、2巻癒着したものの内の1巻も、やはり直径4㎜の円柱状の棒と思われるものの末端が確認できるが、同じく半割されている。これらの軸は、植物質で竹に似るが、種名については鑑定する必要がある。なお、他の7巻については軸を確認できず、当初からなかったのか、経紙で覆われて見えないのか、残念ながら判然としない。また、それぞれの法量は表1のとおりで、最大高は18.7～20.4cm、最大径は2.1cm～3.5cmであるが、経巻の多くは変形してやや扁平化しているため、特にその影響が著しい最大径は、あくまでも参考値である。ただ、その法量から、経筒内にこの経巻9巻と開かれた1巻が納まることは確かである。

最後に注目すべき事実として、経巻の隙間に火山噴出物である直径1～5㎜のスコリアが入り込んでいることがある。これは、富士山起源のものと考えられ、経ヶ岳も火山灰で覆われているため、経ヶ岳出土を裏付ける有力な証拠の1つとはなるであろう。但し、富士山中でも五合目以上はどこでもスコリアに覆われているため、経ヶ岳以外の地で出土した可能性も排除はできない

経紙（写真5・表2）　開かれた1巻の経典名は、法華三部経の結経である「仏説観普賢菩薩行法経」と判明している[20]。現在、この経典のうち遺存状態が良好で、継ぎ紙ごとに整理されているものは、11枚ある。また、そ

の他に、上端部を含む上段部のみのもの１点（№１）、下端部を含む下段部のみのもの３点、上下端部のない中段部のみのもの３点がある。この内、№１については、巻末部分であり、奥書らしき文字が１文字半みえるが、判読は困難であった。また、他の６点は、残存し判読できる文字数が少ないため、11 枚のいずれと組み合わさるか特定することはできなかった。

次に、11 枚の経紙の法量及び大正新脩大蔵経テキストデータベース[21]上の行数であるが、表２のとおりである。各継ぎ紙は、№12～№２の順でつながり、行数の照合結果から、経典の全行が書写されていると考えられる。なお、初行までに 31cmの余白があることから巻頭部分と分かる№12については、その初行に「佛説□□□□薩行法経」とあり、判読困難で判然とはしないが、「佛説観普賢菩薩行法経」と記されていると考えられ、経典の照合が確かであることが傍証される。経典の法量は、経紙が完存しているものの平均で、縦幅 20.8cm、横幅 48.8cm であるが、中心となる法量は、縦幅 21.1cm、横幅 49.5cmである。文字は縦書きで、１枚あたりの行数は、巻頭の№12 が 17 行、それ以外は 32 ～ 45 行で、平均 38.1 行となる。１行あたりの文字数は、約 17 文字で、罫線はなく、字は朱書でやや乱雑に記されている。注目されるのは、巻頭を除く№11 ～№２の行数が、№２、３で微増するものの漸減傾向にあることで、これは 1cmあたりの行数にするとより明瞭であり、№11 の最大値 0.91 行から№２の最小値 0.70 行へと途中で微増することなく漸減していく。この巻頭から巻末へかけての行数の減少から、継紙ごとに一定の行数で書写するといったことを顧慮することなく、最初はやや行を詰めて書写しながらも、全体の経紙幅に余裕があることから、行数を減少させていったと考えられる。こうしたことや字体が全体を通して一定であることから、この経典については１名のみで書写した可能性が高い。また、№12 の余白が経軸への取りつけ部分とすれば、№12 から№１にむけて順に写経しつつ、経軸へ巻きこんでいき、文末の№１を経巻の巻頭にしたと考えられる。

最後に、未開封の経巻の経典名であるが、他の埋納事例では、法華経８巻に開経「無量義経」とこの結経「仏説観普賢菩薩行法経」の 10 巻を埋納することが多いことから、昭和 10 年の新聞報道以来、残り９巻の経典名は不明ながらも、法華経８巻に開結経２巻で構成されていると認識されてきたようである。しかし、あくまでも推測であり、これらの経典名を解明するとともに、各経典に記されている可能性の高い奥書からその奉納人名や奉納年を特定するためにも、その開巻が望まれる。

(3) 三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝経ヶ岳出土資料の関係

伝経ヶ岳出土資料は、その出土地が確定されておらず、これまでに富士山中で発見された経典資料のうち、三島ヶ岳出土資料か浅間大社所蔵資料と同一資料である可能性があるため、ここでその比較検討を行いたい。

まず、昭和５年（1930）に発見され、現在その所在が不明となっている三島ヶ岳出土資料については、経筒の器高が推定 51.5 ～ 54.5cm、底径が約 28cm と格段に大きく、開かれた経典も重複せず、経巻についてもその経軸が杉や竹を二つ割したものである点は類似するが、その法量が直径 5.4㎜、長さ 24.2cm と、直径で 1.4㎜、長さで 3.2cm ほど伝経ヶ岳出土資料より大きいなど相違点が多く[22]、資料が残らないことから断言はできないが、同一資料である可能性は低いと考えられる。

次に、富士山本宮浅間大社所蔵資料であるが、経巻 10 巻の内の開かれた５巻の経紙については、伝経ヶ岳出土資料と同じ法華経というだけでなく、『富士の信仰遺跡』も指摘するように、その法量が縦 21.5cm、継ぎ幅 48.3cmで、字は朱書きでやや乱雑である[23]という点も伝経ヶ岳出土資料と類似する。ただ、この経巻 10 巻自体の来歴が不明であり、三島ヶ岳出土品であるかのみならず、富士山頂で出土したものであるかも確定はしていないため、浅間大社所蔵資料については、まずはその出土地を特定する必要がある。

このように、三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝経ヶ岳出土資料を比較検討するためには、それぞれの資料の所在や来歴の調査がまずは必要であり、今後の課題としたい。

３　経ヶ岳の歴史（表３）

(1) 吉田口経ヶ岳の由来

伝経ヶ岳出土資料の出土地の比定を試みるにあたって、出土地として想定される富士山中の各所に存在する

表3　富士山経ヶ岳に関する年表

№	和暦（西暦）	登山口	場所	内容（【】は原文。他は概要のみ）
1	久安5年（1149）	村山口	三島ヶ岳	富士上人と号する末代が、鳥羽法皇の援助を得て、一切経5296巻を埋納する。（『本朝世紀』久安五年四月十六日の条・『本朝文集』巻五十九「鳥羽天皇写大般若経発願文」参照）※註48 三宅1983
2	建長3年（1251）	村山口	三島ヶ岳	【末申峯ハ冠ノ嶽也、前ニ有リ石室、金時上人安ス種々ノ仏具等ヲ】※註51 大高2010
3	延宝8年（1680）	吉田口	不浄ヶ岳	【ふちやうかたけ】※註25
4	延宝8年（1680）	吉田口	姥ヶ岳	【うはかたけ】※註25
5	延宝8年（1680）	吉田口	不浄ヶ岳	【不浄峯】※註25
6	延宝8年（1680）	須走口	経の峯（山頂）	【観音之嶽　此所に、八つヲうちば、きやうのみね、せいしがくぼ】※註35
7	延享4年（1747）	吉田口	経ヶ岳	日蓮が妙経を書写し富士山不浄ヶ嶽に奉納した地は、今は経ヶ嶽と呼ばれている。その碑も砂に埋もれてしまったため、改めて塩屋平内左衛門が金銅宝塔を奉納する。※註24
8	宝暦14年（1764）	吉田口	上行寺・経ヶ岳	【南無妙法蓮華経　富士山　経嶽　□皆皈妙法後五百歳中廣宣流布　元祖日蓮大菩薩柴庵霊地上行寺（以下略）】註59
9	安永8年（1779）	吉田口	経ヶ岳	本文【大士如クニ甲州吉田ニ一　手ラ筆シテニ経王全帙ヲ一以テ瘞ミニ富嶽ノ半腹ニ一以テ為ニ後世流布ノ之苗根ト一世／＼名クニ経窩ト一】註【如甲州　続紀曰、久本房語ニ甲州山水之美ヲ一大士幸ニ得テニ小暇ヲ一使ムニ久本房ヲシテ擔レ裡ヲ一　註【吉田　在ニ鶴郡、大士遊ニ化其地一一百日、後建レ寺號ニ吉祥山上行寺一、大士手書本尊一幅、書一本為ニ寺珍一、大士嘗嘱ニ書ヲ吉田鹽屋某ニ一以テレ故ヲ今兹シ受戒ス、其書干レ今蔵スニ鹽屋家ニ一】※註28
10	安永9年（1780）	吉田口	経ヶ岳	【左り経か岳日蓮上人読経せし所と伝ふ　是中宮の上に当る】※註55
11	天明5年（1785）	吉田口	経ヶ岳	経ヶ岳に石室を建て、塩谷家で毎年夏中は兼帯してきたが、高祖五百遠忌以前に、この石室が風雨で破壊されてしまい、再建できずにいることや、近年になって、上行寺が経ヶ嶽上行寺と新規に名乗ったことについて、塩谷家が兼帯する経ヶ嶽への権利を侵害するものであると、本山の光長寺へ主張する。※註60
12	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【五合五勺　道ヨリ南ノ岩崛ヲ経ガ岳ト云フ　相伝フ昔僧日蓮此ノ地ニ於テ法華経読誦セシ地ナリトゾ　堂一宇アリ其ノ内ニ銅柱ニ題目ヲ鋳付シアリ　但シ日蓮参籠ノ地ハ少シ上ニ巖穴アリ　今姥ガフトコロト称ス　是レ日蓮風雨ヲ凌ギシ所ナリトゾ　其ノ時塩屋平内左衛門ガ家ニ宿シ彼ガ案内ニテ登山シ此ノ処ヲ執行ノ地ト定メケルトゾ」】（以下に日蓮年譜の経ヶ岳の抜粋が続く）※註5『甲斐国志』
13	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【五合五勺　法華経ヶ嶽　道ヨリ南ニアリ　小屋一宇其内ニ唐銅ノ宝塔有リ　宗祖日蓮大菩薩安置　文永年中日蓮大菩薩此所ニテ一百日行法ノ霊地也其時塩屋平内左衛門カ家ヲ宿トシテ彼者郷道トシテ此地ヲトセリト云　但端座ノ地ハ此ヨリ少シ上ニ一ノ巌穴アリ姥カフトコト云　此巌中ニ風雨ヲ陵キシト云　此地今ニ塩谷平内左衛門進退ス】※註5『甲斐国志草稿』
14	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳	日蓮が塩屋平内左衛門宅で百日読経をした後、富士山に登り、その中腹に妙経を埋めた。上行寺は元は塩屋の内庵であるが、日蓮の時にあったかは分からない。（日蓮年譜の上行寺に関する抜粋あり）※註61
15	文政6年（1823）	吉田口	経ヶ岳	【経ヶ嶽　宗祖大聖人　文永六巳己　一百日行法所也。南無妙法蓮華経　斯の如く巌に彫付有り。大岩のこし路の方に日蓮聖人一百日籠り玉ふ小堂有しが、古朽してたおる。】※註62
16	天保2年（1831）	須走口	山頂	天保2年に浅間神社神主小野大和が豆州君沢郡法華宗玉澤上人（日桓）の協力を得て、宝経搭を山頂に奉納。※註32
17	天保3年（1832）	須走口	須走	浅間神社神主小野大和の妻、幾曽女の名で版木「題目勧進」が制作される。※註36・39
18	天保3年（1832）	須走口	須走	浅間神社神主小野大和の敷地に富士山開会堂を建立し、日蓮大菩薩の大像を安置。※註34
19	天保3年（1832）	村山口	経ヶ岳（山頂）	村山浅間神社所蔵の富士山縁起の刷物。山頂の経ヶ岳への参詣と中宮女人堂の再建によるご利益を唱える。奥書に信解院日冲とある。※註43
20	天保4年（1833）	須走口	各合目と山頂	各合目の石室に神仏を安置し、日桓が開眼供養を行う。※註34
21	天保5年（1834）	村山口	経ヶ岳（山頂）	【頂上東の方に経ヶ岳といふ所あり、一切経を納し所なりと云は此末代が関東の民庶に勧進し仙洞に調進せし一切経を納し所なり】・【当南有大日堂　絶頂之表口也　此処称雷鳴岳　西有経塚塚井浅間岳 道雄云、此経塚は上にいふ末代上人一切経を納るの所、吉田口なる経岳と異也】※註53
22	天保9年（1838）	須山口	—	須山口御師土谷平太夫が発願主となって祖師像を造立。安置した場所は不明。※註45
23	天保12年（1841）	須走口	山頂	浅間神社神主小野大和・同妻の喜埜女・織右衛門が発願主、江戸伝馬町講中が本願主となって、唐銅の祖師像を造立し、富士山頂へ安置する。※註42
24	嘉永元年（1848）	吉田口	五合五勺	【五合五勺　小御嶽横吹一ノ鳥居】と題する絵図中に【日蓮堂　弘化二巳年ヨリ日蓮祖師堂経ヶ岳ヨリ引テ立ル】とある。※註9 文献中
25	嘉永元年（1848）	吉田口	経ヶ岳	【経ヶ嶽　道より南の岩崛を云う、庚申の歳には女も此処迄のぼるなり　是より中道巡りみち有り】※註9 文献中
26	嘉永元年（1848）	吉田口	姥ヶ懐	【姥ヵ懐】とある絵図中に【文永六年妙経一部ヲ埋テ　経ヵ嶽】とある。※註9
27	嘉永元年（1848）	吉田口	山頂	【法華トウ】（「吉田須走拝所」絵図部分）・【日蓮】とある石室と祖師像（「頂上薬師嶽」絵図部分）※註9 文献中
28	万延元年（1860）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【経ヶ嶽　是ハ道より南の岩窟を云　此所ハ文永六年日蓮上人妙法蓮華経一部を手写し不二山の半腹に埋て経が嶽といふと年譜に見えたるハ則是也　又この地は日蓮上人参籠の地にして草庵ありしが、弘化三年少し下の地へ移す　　姥ヶ懐　これハ日蓮が風雨を避し所と云】※註63
29	万延元年（1860）	吉田口	山頂	【題目銅塔　初穂打場の少し下にあり】※註63
30	万延元年（1860）	村山口	五合目	祖師堂を建立し、祖師像を祀る。※註45
31	万延元年（1860）	村山口	五合目	【南無天拝顕満日蓮大菩薩】と題する絵札。上段に【如日月光明能除諸幽冥　斯人行世間能滅衆生闇】【ひさの法乃八葉の蓮華谷　ひらけし不二の経王嶽】、下段に祖師の絵像と【日法上人御作祖師主御影　奉安置富士山表口五合目　野中村　大泉寺】とある。（その内容から万延元年発行と考えられる。）※註45
32	慶応4年（1868）	吉田口	経ヶ岳	文永6年（1269）に経ヶ嶽で百日の大行をした際に、当山へ草庵を造営した。※註64
33	明治35年（1902）	吉田口	経ヶ岳	慶応3年（1867）の火災で、塩谷家の祖師堂は焼失し、明治5年（1872）の廃仏毀釈で、経ヶ岳の宝塔は廃絶させられた。開宗650年遠忌である当年を機に、これら祖師堂と宝塔を明治38年までに再建立すること目的に、富士経ヶ岳宗祖霊蹟再興会を組織し全国から寄付を募ることを、内務省及び福地村へ願い出る。※註65
34	大正13年（1924）	吉田口	経ヶ岳	富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮増築工事の際、経筒・経巻を発見。※参考資料1
35	昭和4年（1929）	山頂	山頂	夏、銅仏の破片及び一石経石を発見。※註46
36	昭和5年（1930）	山頂	三島ヶ岳	8月初旬、頂上奥宮の参籠所建設用の砂礫採取のため、三島ヶ嶽の麓を削ったところ、経巻軸の入った木郭や経巻の入った経筒を発見。※註46
37	昭和6年（1931）	村山口（富士宮口）	経ヶ岳	①五合目室主後藤又次郎が宝塔周囲の石垣を修理して日蓮生誕650年の記念塔を造ろうとした際に、地下3尺より、直径1寸長さ3寸位の水晶軸と経巻物が発見された（静岡新報他）。②五合目経ヶ嶽の日蓮上人宝塔の根元から経巻1巻とそれを包む布1枚が発見された。経巻は、法華経巻一序品第一で、版経である。経巻ならびに包布から判断して、おそらく室町時代に埋められたと考えられる。※註49
38	昭和9年（1934）	吉田口	経ヶ岳	参籠所の建築。※参考資料1
39	昭和10年（1935）	吉田口	経ヶ岳	大正13年に経ヶ嶽で発見された経筒・経巻の初報。※参考資料1
40	昭和18年（1943）	吉田口	頂上奥宮	【日蓮の場合も経巻が経ヶ岳から出たのでなく、昭和18年ころ、頂上奥宮の物置きをつくるため富士吉田や河口湖町の三人の石割屋に大石を割り、取り除かしているとき、三島ヶ岳と同じく、ぎっしり経巻がつまったものが出てきた。そのうち経筒にはいって風化していないものを、日蓮署名の経巻と曼荼羅を三人が一巻ずつ持ち帰ったのが、吉田の塩谷平内右衛門家に一部渡り、経ヶ岳から出土したという伝承と結びついたのが事実である。】※註1
41	昭和28年（1953）	吉田口	経ヶ岳	常唱殿（八角堂）建立※註6
42	昭和42年（1967）	吉田口	経ヶ岳	けずりとられた崖面で、15枚の古銭発見。皇宋通宝・治平元宝・聖宋元宝・淳祐元宝・洪武通宝・永楽通宝が確認された。※註11

経ヶ岳の由来と歴史を辿りたい。

まず、吉田口の経ヶ岳であるが、その初見は、管見の限りではあるが、延享4年（1747）に吉田の御師である塩屋平内左衛門が経ヶ岳に宝塔を奉納する際に、本山である光長寺（現、静岡県沼津市岡宮）住職の日泰が記した供養文[24]中である。この文書中には、日蓮が不浄ヶ岳に経典を埋納したことから、今は同地が経ヶ岳と称されていると記されており、その初見当時から、経ヶ岳は日蓮による経典埋納伝承と不可分であったことや、経ヶ岳の地が不浄ヶ岳と同一若しくはその一部と認識されていたことが分かる。この不浄ヶ岳であるが、延宝8年（1680）の富士山中を描いた八葉九尊図[25]や月旺御身抜[26]が初見であることから、経ヶ岳より古い地名であることは確かであり、両図中に記される位置から現在の吉田口経ヶ岳を含むその周辺地に比定される。『甲斐国志』によれば、不浄ヶ岳は現在の経ヶ岳より上にあったとされ、「古ヘハ六七月ノ間山伏此ノ処ニ籠リ居テ登山ノ旅人不浄解除ノ祓ヒセシ所テリ　故ニカク称スルトゾ」[27]とある。この場所は、現在の六合目安全指導センター東側に広がる平地の北東端部で、過去に山小屋の六合荘があった地の周辺と考えられる。また、八葉九尊図には、「ふちやうかたけ」（不浄ヶ岳）の上に「うはかたけ」とあり、現在の経ヶ岳の下にあって、日蓮が風雨を凌いだという「姥ヶ懐」周辺を指しているとすれば、経ヶ岳周辺が「うはかたけ」（姥ヶ岳）と呼称されていた可能性もあるであろう。このように、経ヶ岳という地名自体は、江戸時代中期以降のものであるが、日蓮による富士山中への埋納伝承についても、同様であると考えられる。それは、先述した延享4年（1747）の供養文以前に記録がないことや、日蓮の伝記における初見が、安永8年（1779）に成立した『本化高祖年譜　全』と『本化高祖年譜攷異』[28]であり、それ以前の伝記では確認されないことからも分かる。こうしたことから、経ヶ岳と日蓮の伝承が不可分であることが分かるが、この日蓮による経典埋納伝承は、吉田口の経ヶ岳が最も古く、その後富士山中の各所で語られるようになっていく。

なお、川口（現、山梨県富士河口湖町河口）の御師である大梅谷 本庄監物が制作した版木[29]には、吉田口経ヶ岳に日蓮上人が訪れた際の宿坊が大梅谷であり、その縁で今は日蓮宗の宿坊及び御祈願所となっていることが記されている。また、この大梅谷は、『甲斐国志』の蓮華寺（富士河口湖町大嵐）の記述中において、「弘安五年壬午九月某日　日蓮往ㇾ下ㇾ武州池上ㇾ上ㇾ富士ノ北麓ヲ過ギ　号ㇾ鎌倉海道ㇾ　川口村上野坊ガ家ニ宿ス　浅間明神御師今其家存　隣家ニ梅屋采女ト云フ者アリ　同御師ナリ今存　日蓮ニ謁見ス　日蓮乃チ神仏一致ノ大意ヲ示シ権実ノ道理ヲ説ク　采女拝伏シテ帰依ス」[30]とある中の梅屋采女と同一家である可能性が高く[31]、こうした日蓮宗との深い関係が、大梅谷と経ヶ岳が結びつく背景にあったと考えられる。

これらの『甲斐国志』の記述や版木の内容から、江戸時代後期頃に、川口御師も経ヶ岳の祖師信仰に関係していたことは確かであり、今後経ヶ岳の歴史を探る上では、川口御師の活動も視野に入れていく必要がある。

(2) 吉田口以外の経ヶ岳（図3・4）

須走口　吉田口の経ヶ岳に次いで、祖師信仰が関わる形で経ヶ岳が登場するのが、須走口である。天保2年(1831)に、須走口の浅間神社神主の小野大和が、豆州君沢郡玉沢（現、静岡県三島市玉沢）の経王山妙法華寺の41世貫主日桓の協力を得つつ、日蓮上人550年遠忌に合わせて富士山頂に宝塔（宝経塔）を奉納[32]するのであるが、その山頂の地名が「元経ヶ岳」とされる[33]。この「元経ヶ岳」の場所であるが、『法華富士の記』[34]には、内院（山頂火口）へ賽銭を投じ、神仏へ祈願する地である「初穂打場（はつほうちば）」を表す鳥居手前に「法華開会塔」の標記と共に宝塔が描かれ、その左手に「元経ヶ嶽」と標記があることから、宝塔周辺地かその南にある「観音ヶ岳」（現在の伊豆ヶ岳）が「元経ヶ岳」と想定される（図3・4）。ここで「元」とあることから、その現「経ヶ岳」もあるはずであるが、その候補地としては、吉田口の経ヶ岳以外に、後述する三島ヶ岳や村山口五合目が挙げられる。また、観音ヶ岳については、延宝8年（1680）刊本の『富士山の本地』[35]に「観音之嶽　此所に、八つヲうちば、きやうのみね、せいしがくぼ」とあり、宝塔建立以前から観音ヶ岳周辺は「きやうのみね」（経の峯）と称されていたことが分かる。このことから、詳しくは後述するが、日蓮による富士山中への経典埋納伝承に基づき、その名称から経典関連の由来を持つであろう「きやうのみね」を「元経ヶ岳」とみなし、その近くへ宝塔を建立した可能性がある。次に、この宝塔の建立地であるが、既に竹谷靱負氏が詳述[36]しているように、『富士山真景之図』[37]には「吉田須走拝

図３　富士山頂周辺図

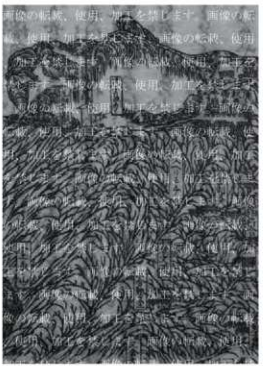


図４「富士山頂上略図」部分拡大
（『法華富士の記』・信州大学附属図書館所蔵）

所」とある初穂打場の手前に宝塔が描かれ、『富士山明細図』[38]や『法華富士の記』にも同様に描かれることから、初穂打場があったと推定される現在の久須志岳と大日岳の合間の平地あたりが宝塔の建立地と考えられる。

なお、この宝塔奉納以降も、天保３年（1832）には題目勧進の版木制作[39]及び小野大和敷地内への富士山開会堂の建立と日蓮大菩薩像の安置[40]、天保４年（1833）には須走口登山道の各合目への神仏の安置[41]、天保12年（1841）には富士山頂への祖師像奉納[42]と立て続けに奉納がなされており、須走口に祖師信仰が根付いていく様子が分かる。

村山口　村山浅間神社で所蔵する縁起に、奥書に天保３年（1832）とある「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」[43]がある。内容は、山頂の経ヶ岳へ宝塔を建立して参詣することと、村山口の中宮女人堂を再建して祖師像を安置することによるご利益を説くものであるが、「大導師日蓮大菩薩文永六己丑（ママ）月此頂に登り給ひて、拾石染筆まし／＼て妙経を書写し、一岳二岳の辺りに塚となし給へるより経ヶ岳と呼なせり、五合目を経ヶ岳とおりふは誤りなり」とあり、日蓮がいわゆる一石経を書写して塚を築き、それを経ヶ岳と呼んだことや、五合目にも経ヶ岳という地があったことが分かる。また、同縁起には、村山三坊のうち大鏡坊と池西坊の旧記とされるものが引用されている。それによると、まず大鏡坊の旧記には、日蓮が大鏡坊の社殿へ正嘉２年（1257）に法華経一部を奉納したことが記され、池西坊の旧記には、同じく日蓮が文永６年（1269）に富士山頂で「全石経修行」したことが記されるとしており、この縁起が村山三坊の協力を得て制作されたであろうことを示唆している。また、このうち後者の「全石経修行」が、先の一石経書写を指すのであろう。ここで、問題となるのは、経ヶ岳の近くにあるという一岳と二岳の位置であるが、江戸時代に村山三坊の池西坊が版行した刷物「蓮嶽真形図」[44]によれば、一岳は表口（村山口）登山道から山頂へ達する左手に描かれ、二岳は更に左手で「剣峰」と標記される。このことから、この「蓮嶽真形図」の認識と「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」の認識が同一であればという前提ではあるが、一岳と二岳は、それぞれ現在の三島ヶ岳と剣ヶ峰に比定することができ、この両岳の近くに一石経の塚が日蓮により築かれたと説くものであると解釈できる。

最後に、縁起中で記される五合目の経ヶ岳であるが、縁起の内容が村山口を主とすることから、吉田口ではなく、村山口五合目を指しているのであろう。この村山口五合目も、大泉寺の主導で、万延元年（1860）に祖師

堂が建立され、天保９年（1838）造立の祖師像を安置[45]しており、縁起版行の時点でも何かしらの信仰があった可能性もある。

(3) 経ヶ岳出土品からみる経ヶ岳成立史

富士山中で「経ヶ岳」と称される地は、先述してきたように、吉田口五合五勺以外に富士山頂の三島ヶ岳周辺と観音ヶ岳周辺及び村山口五合目があるが、その内、三島ヶ岳と村山口五合目は、吉田口経ヶ岳と同じく経典が出土している。まず、三島ヶ岳では、銅仏の破片及び一石経が昭和４年（1929）に発見[46]され、数百本の経巻軸が入った木櫛と50巻の経巻が入った経筒が昭和５年（1930）に発見[47]されており、後者の全てかその一部は、久安５年（1149）の末代上人による埋納物であると考えられている[48]。次に、村山口五合目であるが、昭和６年（1931）に、日蓮上人宝塔の根元から室町時代に埋納されたと考えられる経巻１巻とそれを包む布１枚が発見されている[49]。

この両者に共通するのは、経典が出土したこと以外に、祖師信仰の対象地であることであり、これらの点は、吉田口経ヶ岳も同様である。そして、この３ヶ所の「経ヶ岳」は、いずれもその成立が、これまでみてきたように江戸時代を遡らないものであるのに対し、その出土品の全ては室町時代以前である。では、この３ヶ所に「経ヶ岳」が成立した背景であるが、江戸時代の「経ヶ岳」成立以前から、この３ヶ所で経典に係る遺物、つまり経巻か一石経が出土しており、それが広く知られていた可能性が考えられる。これは、「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」に「拾石染筆まし〳〵て妙経を書写」という一石経を思わせる具体的記述や、実際に三島ヶ岳で一石経が出土しているという事実からも強く示唆されるところである。つまり、「経ヶ岳」成立以前から、富士山中の特定の場所で経巻や一石経が出土することは周知の事実であり、そこへ江戸時代中期から盛んになっていく祖師信仰や身延山信仰[50]が結びついたことで、経典出土地は日蓮により経典が埋納された地であるとの認識になり、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」の成立につながったと考えられるのではないだろうか。このことは、先述したように、祖師信仰が富士山中で盛行する以前である延宝８年（1680）刊本の『富士山の本地』において、「きやうのみね」（経の峯）とみえ、当時から経典や経石の埋納伝承があったことが推定されることや、後になって、その近くへ須走口側から祖師信仰に基づく宝塔が奉納され、「元経ヶ岳」とも称されていたことからも、裏付けられることである。いずれにしても、伝経ヶ岳出土資料も含め、富士山中から出土した経典資料の制作年代と、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」成立年代は、約600年の年代差があるとともに、その間の経緯に未だ不明な点も多い。今後、その歴史の空白を埋めていくためにも、経典資料の分析とともに、経ヶ岳に関する歴史資料の調査を進めていく必要がある。

4　まとめ

(1) 富士信仰地としての経ヶ岳

富士山各所の経ヶ岳の歴史を紐解いてきたが、経典が出土した３ヶ所の経ヶ岳は、富士信仰の歴史上においても重要視されてきた場所であり、経典を埋納するに相応しい地といえる。

まず、三島ヶ岳については、末代上人による埋納が行われたとされるだけでなく、建長３年（1251）の奥書のある「浅間大菩薩縁起」[51]において、やはり三島ヶ岳に比定される「未申峯」に、末代上人の３代前に登拝したとされる金時上人により仏具が納められたとされる。また、その後も覚蘿上人、日代上人、そして末代上人により、「未申峯」と断定はできないが、経典や仏具が奉納されたとしている。このように奉納の舞台として描かれている富士山頂は、古来から神仏の住まう霊地として重視され、中世から近世にかけて仏像など多くの奉納物が納められた地であり、「浅間大菩薩縁起」に描かれる様子は、その一端を指し示しているといえる。また、信仰地として極めて重要な地であるという点は、同じく富士山頂に位置する「きやうのみね」も同様であり、今後、経典や一石経が発見される可能性はあるであろう。

次に、吉田口経ヶ岳と村山口経ヶ岳であるが、植生変化により景観が一変する境界地であり、かつ富士山中腹を一周する巡拝路（御中道）の合流地であるという点で、両者は共通する。吉田口については、『甲斐国志』[52]に、経ヶ岳より下の翳ヶ馬場から中宮までは「古木天ヲ蔽ヒ藤蘿道ヲサヘギリテ攀ヂガタキ所多シ」とあり、中宮よ

り上は「砂石山ヲナシ草木不ㇾ生ㇾ因リテ毛ナシト称ス　岐路益々ハゲシ四方ヲ眺望スレバ名ヲ得シ高山皆目下ニ見ユ　又此所ニ遥拝所アリ　是レ最頂ニ攀ヂルコト不ㇾ能者ノ拝スル所ナリ」とあり、五合目とされる中宮が森林限界で、それより上では草木がなくなり、眺望が一変する様子がよく分かる。経ヶ岳は、こうして森林帯を抜けた五合五勺にあたるわけであるが、更に少し上は、先述したように不浄ヶ岳という地であり、御中道の起点ともなっている。

このように植生の変遷に伴う明瞭な景観変化がある富士山は、近世においては吉田口以外の登山道も、麓から山頂に向かって茅野・木立・毛ナシ[53]や草野三里・木山三里・岩山（すな山）三里八町[54]という３区分がなされ、茅野と木立の境と木立と毛ナシの境が信仰上の区分としても重視されてきた歴史がある。特に、経ヶ岳周辺も含む木立と毛ナシの境は、「天地の境」[55]とも称され、村山口や須走口においては一合目の起点であると同時に、ここから上が本山[56]であり、少し上の五合目は、繰り返しになるが吉田口と同じく御中道の合流点でもあった。このように、吉田口だけでなく、村山口においても五合目は重要な地であり、富士山中において山頂と同じく経典の埋納が行われるに相応しい地といえ、後に両者とも「経ヶ岳」と命名されたことも、全く不思議なことではない。ちなみ、吉田口では、茅野と木立の境である一合目においても、江戸時代と考えられる一石経の経塚が発掘[57]されており、景観上の境界が信仰上重視されてきたことを裏付けている。更に、この一石経からは、法華経28品のうち、第６品の「授記品」と第14品の「安楽行品」が確認されており、経碑が未発見のため、その埋納の背景が不明ではあるが、「経ヶ岳」と同じく日蓮宗寺院や信徒が関連している可能性はあるであろう[58]。

(2) 伝経ヶ岳出土資料の出土地

これまで検討してきた経ヶ岳を称する地は、吉田口五合五勺、村山口五合目、三島ヶ岳、観音ヶ岳の４ヶ所、経典か一石経が出土したとされる地は、このうちの吉田口五合五勺、村山口五合目、三島ヶ岳に吉田口一合目を加えた４ヶ所である。そして、伝経ヶ岳出土資料の出土地は、これらのうち、伝来地である吉田口五合五勺か、同時期の経筒・経典が出土している三島ヶ岳の２ヶ所の可能性が高いが、第２表№40で指摘されるように、それ以外の地である可能性も否定はできない。残念ながら、本稿でこれ以上推定地を絞り込むことは、先述したきたように、手元の資料のみでは困難であり、富士山中から出土した経筒・経巻資料及び各経ヶ岳の歴史調査を今後も継続して行い、解決の糸口を探りたい。

以上、事実確認に終始してしまったが、伝経ヶ岳出土資料の研究に際しての基礎資料として今回の報告が役立つことができれば幸いである。なお、本稿の執筆にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。伊藤昌光・井上輝夫・遠藤是秀・小林義生・大高康正・奥脇和男・梶山沙織・菊池邦彦・櫛原功一・坂詰秀一・高橋晶子・布施光敏・松田香代子・渡井一信（敬称略、五十音順）

---

[1] 小川孝徳「富士登山今昔 上」『山梨時事新聞』昭和42年（1967）７月23日・羽田光 1975「富士登山史」『富士の信仰と富士講』
[2] 布施光敏 2002『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録　富士の信仰遺跡』
[3] 前掲註１
[4] 「嶮の意は、①そばだつ。山がそそりたつ。山が高くぬきんでる。②ぬきんでるさま。独立のさま。起こるさま。（『角川　大字源』より）
[5] 「巻之35　山川部第16ノ上　都留郡郡内領　富士山」『甲斐国志』（『大日本地誌大系　甲斐国志』第２巻　所収）。なお、「甲斐国志草稿」（田辺家文書）では、「岩嶮」とはなく、名称も「法華経ヶ嶽」とある。
[6] 久野俊彦 1989「信仰　５富士信仰と御師（３）御師と講社　経ヶ岳」『市史民俗調査報告書第９集　上吉田の民俗』
[7] 星野芳三 1999「第２章　明治中後期の地域社会　第７節　生活と文化　２　富士登山の振興」『富士吉田市史』通史編第３巻　近・現代
[8] 小澤華人蔵寛保『富士山明細図』（奥脇和男 1997『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録　富士山明細図』所収）の「27　小御岳一之鳥居入口」・「33　経ヶ岳　日蓮上人百日行場」。なお、『富士山明細図』の制作年代は、本文献によれば天保11年（1840）～弘化３年（1846）の間とされる。
[9] 長島泰行 1848『富士山真景之図』（岡田博校訂 1985『江戸時代参詣絵巻　富士山真景之図』所収）の「文永六年妙経一部subscript 経ヶ嶽」と題する絵図
[10] 前掲註７によると、大正４、５年（1915、16）の「福地村富士登山道県費補助書類」に、馬返より経ヶ岳まで幅員一間とし、直登部分は迂回して乗馬・駄馬の通行を可能とするとあるとし、この整備による可能性がある。
[11] 遠藤秀男 1975『富士に埋もれる古銭』『富士山の謎』大陸書房
[12] 前掲註５
[13] 前掲註５
[14] 前掲註８の「33　経ヶ岳　日蓮上人百日行場」
[15] 前掲註９
[16] 前掲註９文献中
[17] 前掲註２によると銀幌付け
[18] 前掲註２

[19] 石田茂作 1926 − 28「経塚」『考古学講座　古墳・和鏡・経塚・梵鐘』３雄山閣　の経筒・経紙の法量に関する論考及び、関秀夫 1985『経塚遺文』東京堂出版・関秀夫 1988『経塚−関東とその周辺』大塚工芸社・奈良国立博物館編 1977『経塚遺宝』東京美術　に記載される経筒・経紙の法量を参照した。
[20] 前掲註２
[21] 大蔵経テキストデータベース研究会（http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/）
[22] 後掲註 46・47・48
[23] 前掲註２
[24]「経ヶ嶽に金銅之宝塔鋳納につき開眼供養文」（富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第５巻　近世Ⅲ　No.75 所収）なお、同年に日勝上人へ授与され、今は上吉田の日蓮宗寺院上行寺に伝わる奈良時代制作とされる銅造如来形立像（県指定文化財）は、「黄金佛経ヶ嶽」と墨書された厨子に納められ、経ヶ岳に安置されていたと考えられる。
[25] 富士吉田市歴史民俗博物館 1993「八葉九尊図」『描かれた富士の信仰世界』
[26]「月旺御身抜」（富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第５巻　近世Ⅲ　No.33 所収）
[27] 前掲註５
[28] 英圓日英校訂 1847 浅井要麟校訂 1974「本化高祖年譜攷異会本」『日蓮上人伝記集』（健立日諦・玄得日耆 1779『本化高祖年譜　全』と『本化高祖年譜攷異』の合本。この原本は未確認）
[29] 富士吉田市歴史民俗博物館所蔵・原文「冨士山之儀者三国第一之霊山ニ付　往古より諸宗之祖師信仰厚く　夫々開山塔被立置　別而日蓮上人之儀者当山へ百日乃大行を被為成　一宗開山之祖師与顧成就なさしめ玉ひ今におゐて冨士山経ヶ嶽と唱大岩有之　自然にして南無妙法蓮華経相顕れ右場処ニ祖師堂相立宗旨之休足所となりぬ　年々登山中繁栄罷有ニ衣而家其節日蓮上人之宿坊ニ而有之　先祖当山江上人御行之導師相勤　依之御宗旨之宿坊ニ有之　右由緒ニ付御宗旨繁栄子孫長久諸災消除之御祓差出し申候　已上　冨士山御祈願所本宮御師　日蓮上人登山之宿坊　大梅谷　本庄監物　巳八月」（菊池邦彦氏に翻刻いただいた。）
[30]「巻之 90　仏寺部第 17 ノ下　都留郡郡内領　持名山蓮華寺」『甲斐国志』（『大日本地誌大系　甲斐国志』第３巻　所収）
[31] 菊池邦彦氏に、大梅谷の宝永３年（1706）の文書に梅谷采女の名があるとご教受いただいた。
[32] 青柳周一 2000「フィクションの後始末−天保２年駿州駿東郡須走村神主宝経塔建立一件−」『富士信仰研究』創刊号
[33] 青柳周一 2006「人の移動と地域社会−富士山の「日蓮宗の名所」化をめぐって−」『近世地域史フォーラム２　地域史の視点』吉川弘文館
[34]『法華冨士の記』（信州大学附属図書館近世日本山岳関係データベース所収）序文末に【干時天保九年　富士山東麓須走口　大歳戊戌中夏　開会堂別当謹誌之】とある。
[35]『富士山の本地』（横山重・松本隆信編 1978『室町時代物語大成』第 11　所収）
[36] 竹谷靱負 2011「天保２年の女人富士登山」『富士山と女人禁制』
[37] 前掲註９文献の「其二　吉田須走拝所」
[38] 前掲註８文献の「45　同（頂上）」
[39] 東口本宮冨士浅間神社編 2008「天保３年小野幾曽女題目勧進」『収蔵版木展−版木にみる富士信仰の諸相』・前掲註 36
[40] 前掲註 34
[41] 前掲註 34
[42] 望月真澄 2008「車返霊場関係資料」『身延論叢』13・望月真澄 2010「江戸庶民の身延山巡拝−法華信仰の形態を探る−」『近世民衆宗教と旅』法藏館・望月真澄 2011「第１章　甲斐国の身延山信仰」『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院・前掲註９文献の「頂上薬師嶽」と題する絵図中において、「日蓮」と標記された石室内に祖師像が描かれており、この時に奉納された祖師像と考えられる。
[43] 大高康正 2010「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」『富士山縁起の世界−赫夜姫・愛鷹・犬飼−』
[44] 堀内真 2000「蓮嶽真形図」『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録　富士山登山案内図』
[45] 富士宮市教育委員会伊藤昌光氏、大泉寺住職遠藤是秀氏にご教授いただいた。
[46] 佐野武勇 1930「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」『考古学雑誌』第 20 巻 10 号
[47] 前掲註 46・足立鍬太郎 1930「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経巻とにつきて」『考古学雑誌』12 − 20
[48] 三宅敏之 1983「富士上人末代の埋経」『経塚論攷』（原典は三宅敏之 1961「富士山における一切経埋納供養について」『歴史考古』5）・勝又直人 2011「三島ヶ嶽経塚小考−富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から−」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』17
[49] 三宅敏之 1980「富士曼荼羅と経典埋納」『山岳宗教史研究叢書 14　修験道の美術・芸能・文学』（Ⅰ）名著出版・和田嘉夫 2009「日蓮の遺跡」『昔の富士登山』
[50] 中尾堯 1999『日蓮信仰の系譜と儀礼』吉川弘文館・望月真澄 2011『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院
[51] 大高康正 2010「『古文状』所収「浅間大菩薩縁起」部分（尊経閣文庫、西岡芳文氏翻刻）」『富士山縁起の世界−赫夜姫・愛鷹・犬飼−』・西岡芳文 2004「新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の様相」『史学』73 − 1
[52] 前掲註５
[53] 新庄道雄 1834「巻二十三　富士山　上」『新駿河国新風土記』（足立鍬太郎修訂 1975『修訂　新駿河国風土記』下巻　所収）
[54] 1823「三の山巡」（国立国会図書館山書を読む会翻刻 1979『江戸期山書翻刻叢書１　三の山巡』所収）
[55] 高山彦九郎 1780「冨士山紀行」（高山彦九郎先生遺徳顕彰会編 1943『高山彦九郎全集』第１巻　所収）
[56] 前掲註 53・秋山玉山 1755「富嶽記」（長野県上伊那郡教育会編『蕗原拾葉』８所収）
[57] 布施光敏 2001『富士山吉田口登山道関連遺跡Ⅰ　歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』・布施光敏 2003『富士山吉田口登山道関連遺跡Ⅱ　歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』
[58] 田代孝 2001『民間信仰遺跡分布調査報告書−近世の経塚』においても、日蓮宗と一石経埋納の密接な関係が指摘されている。
[59] 富士吉田市史編さん室 1991『富士吉田市史資料叢書 11　上吉田の石造物』
[60]「上行寺之儀新規に経ヶ嶽を名乗候差障につき願書」（富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第５巻近世Ⅲ　No.76　所収）
[61]「巻之 90　仏寺部第 17 ノ下　都留郡郡内領　吉祥山上行寺」『甲斐国志』（『大日本地誌大系　甲斐国志』第３巻　所収）
[62] 芙蓉亭蟻乗 1823「富士日記」（国立国会図書館山書を読む会翻刻 1983『江戸期山書翻刻叢書６　富士日記・木曽採薬記』所収）
[63]「富士山道知留辺」（富士吉田市史編さん室 1997『富士吉田市史』史料編第５巻　近世Ⅲ　No.30　所収）
[64]「都留郡上吉田村　明細帳　日蓮宗吉祥山　上行寺」（『甲斐国　社記・寺記』第４巻　寺院編３　所収）
[65]「富士経ヶ岳宗祖霊蹟再興の義につき願書」（富士吉田市史編さん委員会 1993『富士吉田市史』史料編第６巻　近・現代Ⅰ　No.187 所収）

第７節　富士河口湖町河口　西川遺跡の概要

杉本悠樹（富士河口湖町教育委員会）

はじめに

南都留郡富士河口湖町河口字西側に所在する西川遺跡では、平成21年の２回の調査によって奈良・平安時代の遺物が多数検出され、遺跡の所在地域である河口の地名を示唆する「川」の墨書記銘をもつ須恵器をはじめ、墨書土器及び刻書土器のほか、墨痕のみとめられる土器片、須恵器や土師器の破片を二次的に利用した転用硯、灰釉陶器の蕨壺などの出土があり、古代の官道「甲斐路」の３駅のひとつ、河口駅と関連をもつ遺跡である可能性を報告している[1]。さらに平成22年10月には、一般住宅の建設工事に先立つ試掘確認調査の結果、８世紀～９世紀にかけての土師器、須恵器等の土器片に伴い製塩土器の破片が出土した。山梨県内における古代の製塩土器の出土事例として７例目であり、山梨県東部及び富士山麓地域においては初の事例となり、製塩土器をはじめ資料化しうる遺物の紹介をしている[2]。本稿ではこれまで３回にわたる調査によって出土した資料を中心に遺跡の概要を示す。

1　遺跡の立地と歴史的環境

本報告書における河口浅間神社及び宮の上遺跡の調査の項目において、河口地区の地質や遺跡などの概要は記載されているため重複を避ける。

西川遺跡は、西川左岸の平坦地上の標高約843ｍに位置する。遺跡の東方には国道137号が近接しており、河口集落を南北に縦断している。国道は旧鎌倉往還であり、河口の集落は同往還の難所である御坂峠の南に位置し、古くから峠を越える前後の人々が寄宿する宿場町として賑わってきた。特に中世以降は、鎌倉往還を通じて富士山へ向う中部、北陸方面の道者が多く詰めかけ、道者たちに宿を提供し、祈祷を行ったうえで富士登山の案内を行う御師が集住した。近世まで通じて最盛期には140軒を超える御師集落が繁栄した。御師集落には、旧鎌倉往還（現・国道137号）に平行する人工水路が東西対称に設けられ、西川から取水した水が流れている。この水路は呑川と呼ばれ、集落の生活用水のほか、御師住宅に寄宿する道者の潔斎にも使われたと伝えられる。西川遺跡は集落の西地域を南北に流れる呑川により分断されている。また、西川遺跡の所在地の小字は西側であるが、鎌倉往還（国道137号）を挟んだ地域の小字は東側と称され、地名に往還が意識され、往還の東西が字の名称に反映されている。対面する字東側には、史跡富士山の構成要素のひとつである河口浅間神社が鎮座する。また河口は、『延喜式』に記載された東海道の支路、甲斐路（御坂路）の三駅のひとつである河口駅の所在地にも地名などから比定されてきた[3]。

交通の要衝として重要視されて、特異な歴史を歩んできた地域であることが遺跡や現存する地割、古道の状況からうかがえる。

2　調査の経緯と出土遺物

西川遺跡は、古墳時代の散布地及び中世の城館跡（河口氏屋敷跡）が複合する遺跡として遺跡台帳に記載されてきた[4]。国道137号の河口浅間神社交差点から河口駐在所にかけての区間の路肩の西に面した直径約200メートルの範囲が埋蔵文化財包蔵地として周知されている（第１図）。

平成21年２月の調査（試掘確認調査）

平成21年２月、遺跡の範囲内において、一般住宅が建設されることに伴い、富士河口湖町教育委員会が事前の試掘調査を実施した。地盤の脆弱化を防止するため、住宅建設予定地のうち、建物基礎の及ばない地点に２×２ｍのトレンチ（第２図のH21-T1）と１×３ｍのトレンチ（第２図のH21-T2）を設定し、人力により掘り下げた。調査の結果、住宅の基礎が及ぶ深度である地表から60cmの範囲では遺構及び遺物が検出されなかった。しかし、分布調査としての好機であるため、トレンチの一部を掘り下げた。結果として、地表から約90cm～1m10cmの範囲に奈良・平安時代から中世にかけての遺物包含層があることが確認された。遺物の点数は多

くはなく、資料化し得る大きさの遺物は得られなかったものの、現在の河口の集落の中心部の直下に奈良・平安時代の遺跡が存在することが明らかとなった。奈良・平安時代の遺物は、甲斐型の土師器の坏形土器、甕形土器の破片が主なものであった。

平成21年3月の調査（工事立会い調査）

平成21年3月には、先述の一般住宅の建設工事と並行して、この新築住宅を含んだ周辺の家庭に接続する下水道管の埋設工事が実施されることが判明し、富士河口湖町役場水道課と同町教育委員会、工事施工業者の間で協議を行い、工事に際して遺物包含層の存在する深さよりも浅い、地表から約80cmの深さで重機による掘削を一旦中断し、包含層の精査と遺物の検出を目的とした工事立会い調査を実施することが決定した。下水道管は、国道137号に埋設された本管に直交する約53mの支管を敷設するものであり、西川遺跡の範囲内を東西に横断する。下水道が敷設されるのは、河口地区に現存する最古の御師住宅に国道137号から通じる路地（いわゆる「タツミチ」）である。前述の呑川を挟んで地下約2mの深さに埋設する計画で、平成21年3月17日から工事が開始され約半月の期間にわたり工事立会い調査を行った。

第3図－1は、「川」の字が記銘された須恵器の坏形土器である。口径は復元で約16cmを測り、残存高は約6cmである。やや白みがかった灰色の色調をもち、内面には灯明に用いられた際に付着したと思われる焦げ跡がある。また、内面には燃料となる油類を充填していたことによる黄ばんだシミも残る。断面は口唇がやや外反し細く尖り、ロクロ整形による痕跡が段状のくびれた断面を呈する。底部は欠損しており高台の形状等も不明である。墨書は器体部に記銘されており、「川」の字の三画目は右に大きく払われる古代に多く見られる書法である。奈良時代の8世紀中葉～後葉にかけてのもので、静岡県の湖西窯産であるとの教示を得ている[28]。この「川」は、西川遺跡が所在する河口の「河」と同音異字のものと推測され、地名を表す可能性があるとの見解を得ている[29]。地名を表す場合、延喜式にみられる河口駅の所在地を示すものと考えられる。また、これまで河口の地名を示す最古の資料は、『日本三代実録』の貞観6年（864）の記事にみえる「河口海」であったが、この墨書土器の年代観から奈良時代に河口という地名が存在したことも想定される。灯明に用いられている点と、地名と推測される記銘をもつことに大きな特徴を有する。

第3図－2は、「□廣□」という墨書の記銘を底部にもつ土師器の坏形土器である。全体形の1/3ほどの残存状況である。3つの破片の状態で検出され、洗浄後に接合した。復元した口径は直径約12cm、器高は4.5cmを測る。器厚は約5mmとやや厚い。器体部の外面には連続した弧状に、器体部内面には縦位に、見込み部には放射状に暗文がみられ、精巧に磨かれている。底部と器体下部は、ヘラ状の工具でケズリの調整が施されている。器の形状や仕上げは奈良時代の8世紀中葉の甲斐型土器と共通するが、胎土が赤色の甲斐型土器とは異なり、暗茶褐色系の色調をもち、駿東型に用いられる土により作られたとのご教示を得ている[30]。墨書は底部が半分欠損しているため、「廣」の字の下半部のみ認識しうるが、器面に水分を加えると「廣」の字の下に続いて「坏」の字があられ、「□廣坏」という記銘をもっていた[31]。通常の状態では「坏」の字が認識できないため実測図では表記していないが、平川南氏の実見に際するスケッチを掲載している。この土器も灯明に使われたとみられ、器の表面に煤が多く付着している。

第3図－3は、土師器の坏形土器の底部片である。球面に近い形状を呈するため、底径の復元が困難である。元来は仏鉢のような器種である可能性も考えられる。残存している部分の最大幅約8cmである。橙色に近い赤褐色の色調を持つ。破片ではあるが、断面が面取りされたように滑らかに磨耗しており、器全体も擦られた痕跡が認められることから、二次的な使用がされた可能性を示唆していただいた[32]。見込み部は放射状に暗文がみられ、底部は一定方向に磨かれている。刻書により「山太」という記名が施されているが、後に則天文字で「天」を示す文字が追記されている[33]。「山太」の「太」は、「田」と同じ意味をもつとのご教示を得ている[34]が、峠のたもとに遺跡が所在することから、峠の語源である「手向け（たむけ）」との音の関連も推測される。この土器は、奈良時代の8世紀中葉の所産と推測される。

第3図－4は、平安時代10世紀初頭に位置付けられる甲斐型土器の坏形土器片である。呑川西第1地点から

多くの同時期の土器とともに出土した。器体部の下部の細片であるが、「罡（岡）本」の記銘が墨書で施されている[8][9]。細片のため底径の復元等は不可能であり、内面の剥離もあり器の厚さ等は不明である。明るい赤褐色で、胎土には赤色の粒子が肉眼で確認しうる。峠のたもとを連想させる墨書記銘である。

第３図－５は、第３図－４と同時期の所産で、出土も同地点からである。底部の部分片であるため全形は不明だが、横位のケズリの状況から皿形土器と推定している。赤みの強い色調をもち、黒色の斑点がみられる。墨書は底部に「夫」（＝「奉」）と記銘されている[10]。

このほか、須恵器の甕または壺の破片を二次的に使用した転用硯、器体部内面に墨痕がみられる土師器の破片など、文字の筆記行為に関連する遺物が際立つ。灰釉陶器の薬壺などの出土もあり、官衙関連と推測される遺物のほか、河口湖や周辺の河川で漁撈に用いたと考えられる土錘も出土しており、西川遺跡の立地の特徴としてとらえられる。

平成 22 年 10 月の調査（試掘確認調査）

平成 22 年 10 月には、平成 21 年２月に試掘確認調査を実施した地点の北に隣接する地点において一般住宅の建設に伴い試掘調査を実施した。地盤の脆弱化を考慮して、新築される建造物の基礎にかかる部分を避けて２箇所のトレンチを設定した。敷地の制約上、第１トレンチを 2m × 2m（第２図 H22-T1）、第２トレンチを 2.5m × 1m（第２図 H22-T2）として、人力で掘削した。掘削を進めたところ、２つのトレンチともに地表面より約 1m の深さにおいて遺物包含層が認められた。遺物の多くは、奈良・平安時代の土師器片であった。

一方、第２トレンチからは奈良・平安時代の土師器及び須恵器の破片が出土したが、遺構の確認には至らなかった。

この調査における出土遺物は、細片を含め約 100 点を数えた。出土遺物のうち、特徴が南アルプス市の向第１遺跡で出土した８世紀の製塩土器に類似していることから、製塩土器について見識のある帝京大学山梨文化財研究所の平野　修氏に実見していただいたところ、８世紀の製塩土器であるとの見解を得た。３点の製塩土器は第２トレンチからの出土である。

第３図－６は、製塩土器の口縁片である。色調は暗黄褐色であるが、断面を観察すると器内部は明灰色となっており二次焼成を受けたものと考えられる。器厚は約 5.5mm で残存高は約 2.2cm を測る。外面は斜方向に、内面は横方向にナデが施されるのが基本である。内面には細かく斜方向に調整された痕跡も確認される。

第３図－７は、製塩土器の体部の破片である。色調は暗黄褐色で外面は斜方向または横方向、内面は横方向のナデが施されている。器厚は約 5.5㎜、残存高は約 1.7㎝である。色調、器厚ともに１に類似している。

第３図－８は、１と２とは異質のもので、器厚約 3㎜と薄く、色調も外面は灰褐色、内面は暗黄褐色である。外面は斜方向又は縦方向に、内面は斜方向に削りが施されている。残存高は約 3cm を測る。

3　調査結果の考察

西川遺跡は、これまでの調査により墨書土器等の文字資料、転用硯の出土から官衙、特に駅家に関連する遺跡である可能性を述べてきた。製塩土器の出土事例が加わり、流通拠点である証拠をひとつ得ることができた。しかしながら、遺跡のごく一部を試掘によって調査したことに過ぎず、これまで３回にわたる調査では遺跡の全容を把握するまでには程遠いことに変化はない。河口地区全域の分布調査を含め、西川遺跡を中心とする古代集落の広がりの確認、道路遺構の検出に向けて努めたい。また、官衙に関連する遺物は、祭祀に用いられる遺物とも捉えられることから、河口浅間神社との関連なども今後検討する必要がある。

註

(1) 杉本悠樹　2010「富士河口湖町河口　西川遺跡の調査成果について（報告）」『山梨県考古学協会誌』第19号　山梨県考古学協会

(2) 杉本悠樹　2011「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」『山梨県考古学協会誌』第20号　山梨県考古学協会

(3) 1999『山梨県史』資料編2　原始・古代2　考古（遺構・遺物）山梨県

(4) 1999『山梨県史』資料編1　原始・古代1　考古（遺跡）山梨県

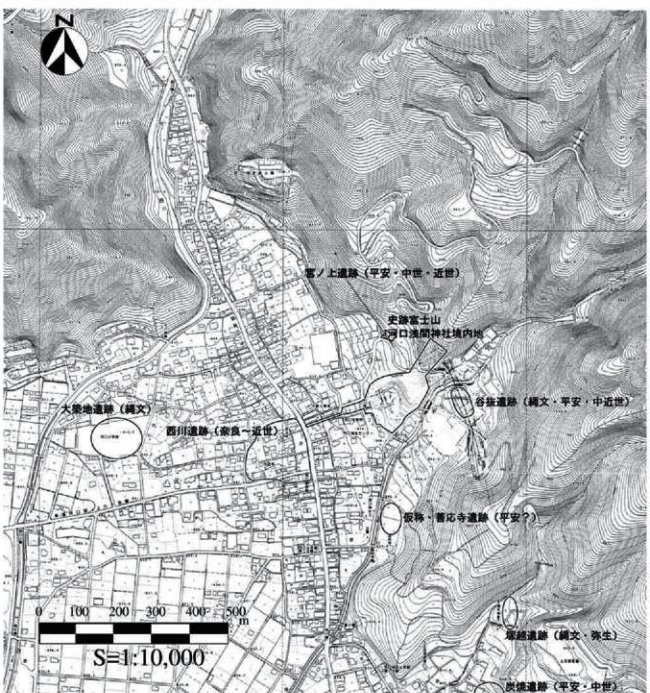
(5) 山梨県立考古博物館学芸課長　保坂康夫氏のご教示による。

(6) 山梨県立博物館　館長　平川　南氏のご教示による。

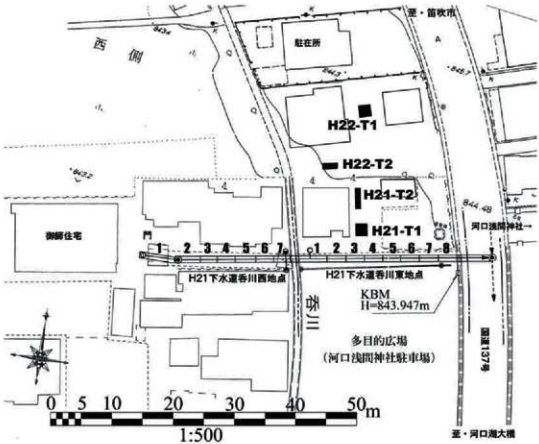
(7) 帝京大学山梨文化財研究所　平野　修氏のご教示による。

(8) 実測図をもとに甲斐市教育委員会の大嵩正之氏からご教示いただいた。

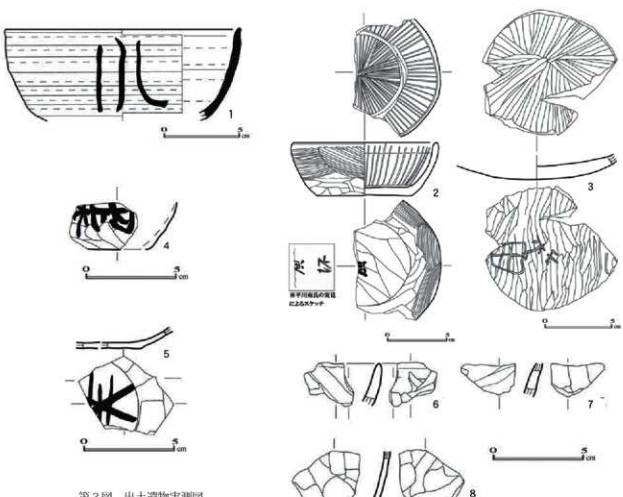
(9) 文化庁記念物課　史跡部門の主任文化財調査官　佐藤正知氏からも平川　南氏と同様のご教示をいただいている。



第1図　富士河口湖町河口地区 遺跡分布図



第２図　西川遺跡調査地点位置図



第３図　出土遺物実測図

第８節　宮ノ上遺跡出土の金付着陶器の科学調査について

香名　貴彦（山梨県立博物館）

1　はじめに

近年、筆者らの調査により山梨県を中心に金が付着した土器片や陶器片が数多く確認されている[1]。その事例は、黒川金山や湯之奥金山の金山遺跡、勝沼氏館跡や武田氏館跡などの城館跡、武田・甲府城下町遺跡から出土した遺物であった。

今回、富士河口湖町に位置する川口浅間神社の境内に近い宮ノ上遺跡出土の陶器片に、金が付着したものが確認された。これは、東部富士五湖地方では初めての事例であり、これまでに確認事例がない神社境内域内からである。

本資料の調査から、資料の使用方法や出土地付近の役割推定、金生産地特定の可能性など新たなる情報が付着物の詳細調査により得られると考え、科学調査を実施した。

以下に、その調査結果について報告する。

調査資料

宮ノ上遺跡出土陶器片　１点

調査内容

○　エックス線透過撮影エックス線透過撮影による資料への重元素の付着状態調査

資料表面への重元素類の付着状況の可視化を目的に、エックス線透過撮影を行った。

・使用装置

デジタルエックス線撮影システム（エクスロン・インターナショナル（株）製）

・撮影条件

管電圧：160kV　管電流：4.0mA

○　顕微鏡による詳細観察

実体顕微鏡を用いて資料表面の詳細な観察を行った。

○　蛍光エックス線分析による付着元素類の非破壊定性分析

蛍光エックス線分析による非破壊定性分析を、金粒子部分や各付着物に対し実施した。

・使用機器

エネルギー分散型蛍光エックス線分析装置　SEA5230HTW

（エスアイアイ・ナノテクノロジー（株）製）

・分析条件

管電圧：50kV　管電流：1000 μ A　照射面積：1. 直径 1.8mm、2. 直径 0.1mm

照射時間：60sec　分析環境：真空中

○　エックス線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡 (SEM-EDX) による付着元素類の分布調査

蛍光エックス線分析で得られた情報を元に、エックス線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡を用いて金粒付着部分の元素分布状態の確認を実施した。

・使用機器

走査型電子顕微鏡：Quanta600（FEI（株）製）

エネルギー分散型エックス線マイクロアナライザー：Genesis CDU（アメテック（株）製）

・分析条件

加速電圧：30kV　分析環境：30Pa

2　調査結果（巻頭図版５）

○　顕微鏡による詳細観察

図１に陶器表面の顕微鏡画像を示す。図 1(a) は図 2(a) 中１の顕微鏡画像（以後部位 1）、(b) は図 1(a) 中２の顕微鏡画像（以後部位 2）である。

金粒子は、大きいもので直径約 0.5mm 以上、小さいものは 10 μ m 以下である。陶器表面には、被熱により釉薬が変化した部分やその周辺に金粒子や、付着物が確認された。

○　エックス線透過撮影エックス線透過撮影による資料への重元素の付着状態調査

図 2(a) には調査資料画像、(b) にはエックス線透過撮影における画像を示す。

(b) において数カ所にみられる黒点は、金粒子によるものと考えられるが、その他に重元素の付着による影状の部分は確認されなかった。

○　蛍光エックス線分析による付着元素類の非破壊定性分析

部位 1,2 に対して蛍光エックス線分析を実施した。その結果を部位 1 は図 3(a)-1,2 に、部位 2 は図 3(b)-1,2 に示す。1. は直径 1.8mm、2. は直径 0.1mm の範囲で分析を行った

図 3(a)-1 では、付着金粒子とその周辺付着物の分析結果であるが、Au 以外に特徴的な重元素の確認はできない。図 3(b)-1 では、Au 以外に Pb や Bi が確認された。

○　エックス線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡 (SEM-EDX) による付着元素類の分布調査

部位 1,2 について、SEM による観察と EDX によるマッピング分析を行った結果を、図 4(a)（部位 1）、図 4(b)（部位 2）に示す。図 4(a) では、粒子部分に Au 以外に Ag,Cu がわずかに確認され、周辺の付着物からは Fe が強く確認された。図 4(b) では、粒子部分に Au や Ag,Cu が確認された以外に Pb,Bi が Au 表面や周辺に広がる状態が確認された。

3　考察

今回、宮ノ上遺跡出土の陶器片１点から金の付着が確認されたことは、この地点で金の生産・加工に関連する作業を行っていたことが示唆される。

金生産遺物での陶器の使用例としては、これまでに筆者の調査により山梨県や長野県の出土遺物から計５例確認されているが、土器に比べればわずかであり、事例が増えたことは重要といえよう。ただし、土器に比べ熱に弱い陶器を用いた理由はまだ不明である。

付着金粒子の分析結果から、金以外に特徴的な元素の未確認部分と、付着物としてビスマスや鉛の確認部分の混在が示された。これまでの調査でも少ない事例である。確認したビスマスも、エックス線透過画像では影として確認できない程度、蛍光エックス線分析チャートでもピークは小さくわずかとみられた。その結果から、この陶器片は不純物を含んだ金の加工や熔解に用いられたと考えられる。

ビスマスなどの不純物は金鉱石に含まれていることが知られており、筆者はこの不純物に着目して調査を行ってきた。これまでの調査から、ビスマスは黒川金山出土の金粒子付着土器から多数確認され、鉛は湯之奥金山出土の金粒子付着土器で確認されている。そのため、そのどちらもが確認される本事例では、両金山から生産された金が持ち込まれた可能性が考えられるだけでなく、金以外に特徴的な元素が確認できず鉄の確認から砂鉄とみられる不純物が確認された部位が他にあることから、この陶器の使用時には砂金も含まれていると考えられ、様々な金がこの地で使用された可能性が伺われる。この点に関しては、今後のより詳細調査が必要である。

今回の調査から、宮ノ上遺跡で金生産・加工が行われていたことが示され、使用した金には金鉱石由来のものが含まれることや、金山との関連も示された。しかし、ここで用いていた技術やその工程等、作業内容の詳細は

不明確なままである。

今後の更なる調査から、宮ノ上遺跡での金生産・加工内容が明らかとなり、中世における金生産・加工の実態に迫ることが可能になると考えられ、今後に期待したい。

参考文献

1)「甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究」山梨県立博物館 2011

写真図版

国福神社より望む富士山

足和田山中腹より望む富士山

滝沢林道二合目より望む富士山

五合目地点調査中に出会った修験の方々

写真図版１

冨士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡

第１トレンチ作業風景

第３トレンチ礎石検出状況

定善（禅）院跡推定地

第９トレンチ古富士堆積物検出状況

第６トレンチ

第６トレンチ出土石造物

第６トレンチ出土石碑

二合目一の鳥居周辺テラス

作業風景

二合目での現地説明会（あおぞらミュージアム）の様子

富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点

第 1 テラス礎石検出状況

第 3 テラス

第 10 テラス

五合目　富士守稲荷跡近くで発見された石碑

北口本宮冨士浅間神社

A区　調査風景

B区　第 2 トレンチ

C区　御鞍石がのるマウンドの土留め

C区第 1 トレンチ集石検出状況

吉田の火祭　御鞍石での神事

地中レーダー探査の様子（拝殿前）

随神門東側の調査風景

随神門東側の遺物出土状況

大塚丘

地中レーダー探査の様子

簡易ボーリング調査の様子

冨士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）

第２トレンチ

第３トレンチ作業風景

A区石列検出状況

C区片山社　土台石周辺作業風景

C区片山社　土台石

C区片山社　土台石の孔中の遺物検出状況

C区片山社　土台石の孔底の剣形鉄製品検出状況

大石邸（神社隣接地）作業風景

藤塚

地中レーダー探査の様子

河口浅間神社

地中レーダー探査の様子（拝殿前）

写真図版 5

A区　作業風景

B区　作業風景

B区　集石状遺構検出状況

C区　石段検出状況（奥は出雲社）

御墓

C区　全体

地中レーダー探査の様子

宮ノ上遺跡

宮ノ上遺跡全体（写真中央の富士山の裾部は長尾山周辺）

富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原下Ａ遺跡

石組周辺作業風景

石組検出状況

行者平遺跡（大善寺行者堂伝承地）

A区　全体

A区　土層

C区　作業風景

行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）

行者像・後鬼像

礎石検出状況

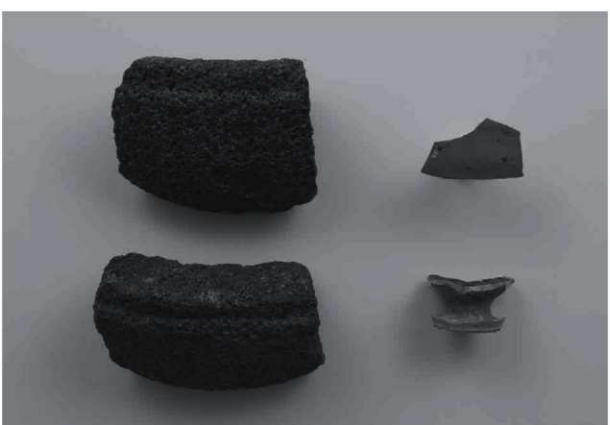
榛名池

作業風景

榛名池と調査風景

写真図版 7

富士山二合目冨士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡　H21 年度出土遺物



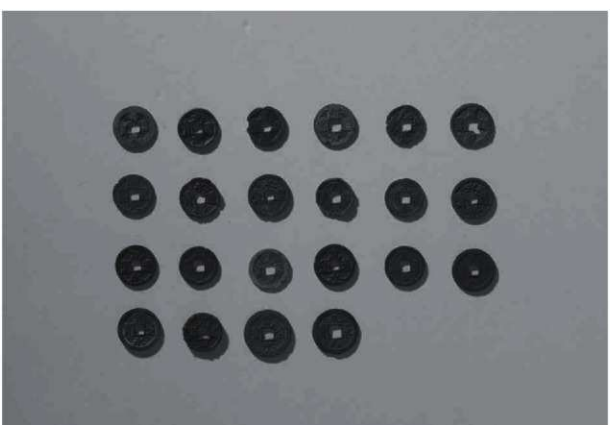
富士山二合目冨士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡　H22 年度定善（禅）院跡伝承地出土遺物

富士山二合目富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡　H22 年度一の鳥居テラス出土遺物

富士山吉田口登山道関連遺跡　五合目地点出土遺物

写真図版 9

北口本宮冨士浅間神社社有地　H21 年度出土遺物



北口本宮冨士浅間神社社有地　H21 年度出土遺物

北口本宮冨士浅間神社社有地　大塚丘　出土遺物

行者平遺跡　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	やまなしけんないさんがくしんこういせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ　－ふじさんしんこういせきにかかわるちょうさほうこく－
書　名	山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書　－富士山信仰遺跡に関わる調査報告－
シ リ ー ズ 名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 285 集
編 著 者 名	野代恵子
編 集 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
所 在 地	山梨県甲府市下曽根町 923　℡：055-266-3016
発 行 年 月 日	2012 年 3 月 23 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積㎡	調査原因
【試掘確認調査】								学術調査
富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡	南都留郡富士河口湖町勝山 3953-1,2,3 番地	19430	427-0022	35° 24′ 01″	138° 45′ 19″	2009.10.5 ～ 10.30・2010.9.2 ～ 10.6	165	
北口本宮冨士浅間神社境内地	富士吉田市上吉田 5558 番地	19202	－	35° 28′ 14″	138° 47′ 32″	2009.11.9 ～ 11.30・2011.5.16 ～ 5.23	150	
御舩石遺跡	富士吉田市上吉田 5363 番地	19202		35° 28′ 13″	138° 47′ 22″	2009.11.9 ～ 11.30	40	
富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）	南都留郡富士河口湖町勝山 3949 番地、3951-2,3,4,7,8 番地	19430	427-0001	35° 30′ 38″	138° 44′ 45″	2010.6.1 ～ 6.28	35	
富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原 A 地点	富士吉田市上吉田鈴原下 5603 番地	19202		35° 26′ 18″	138° 46′ 05″	2010.6.28 ～ 7.15	12	
富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点	富士吉田市上吉田字富士山北向 5618 番地	19202		35° 23′ 27″	138° 44′ 57″	2010.7.15 ～ 7.23	12	
大塚丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202	－	35° 28′ 06″	138° 47′ 20″	2010.10.7 ～ 10.18	22	
河口浅間神社境内地	南都留郡富士河口湖町河口 1 番地	19430	－	35° 31′ 51″	138° 46′ 29″	2011.5.23 ～ 6.6	22	
宮ノ上遺跡	南都留郡富士河口湖町河口字宮ノ上 1215-1 番地	19430	19430-0035	35° 31′ 54″	138° 46′ 30″	2011.6.29	2	
行者平遺跡	笛吹市御坂町上黒駒御坂山 6752 番地	19211	109	35° 34′ 08″	138° 45′ 39″	2011.6.8 ～ 6.14	26	
行者屋敷遺跡	南都留郡鳴沢村 8512 番地	19429	23	35° 29′ 34″	138° 42′ 35″	2011.6.22 ～ 6.23	7	
【地中レーダー探査】								
大塚丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202	－	35° 23′ 27″	138° 47′ 20″	2009.1.25	－	
北口本宮冨士浅間神社境内地	富士吉田市上吉田 5558 番地	19202	－	35° 28′ 13″	138° 47′ 22″	2010.11.16	－	
河口浅間神社境内地	南都留郡富士河口湖町河口 1 番地	19430	－	35° 31′ 51″	138° 46′ 29″	2010.11.16・2011.7.13	－	
藤塚	南都留郡山中湖村	19425	－	35° 25′ 21″	138° 50′ 21″	2010.2.25	－	
御[illegible]	南都留郡富士河口湖町	19430	－	35° 31′ 56″	138° 46′ 29″	2011.7.13	－	
【簡易ボーリング調査】								
大塚丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202	－	35° 28′ 06″	138° 47′ 20″	2010.10.26・2011.2.22	－	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡	神社	中世・近世	旧道跡	山茶碗片、陶磁器片、銭貨、石碑	富士講の石碑が出土
北口本宮冨士浅間神社境内地	神社	近世	造成の跡	陶磁器片、銭貨	
御舩石遺跡	祭祀場	近世		陶磁器片、銭貨	
富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）	神社	縄文・平安・近世	石列、地鎮遺構	縄文土器片、土師質土器片、陶磁器片、地鎮遺物	神社内の片山社より地鎮遺構を発見
富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原 A 地点	堂跡？	近世？	石積	磁器片	
富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点	小屋跡	中世・近世	礎石？	陶器片、銭貨、火打石	調査地より少し上方で石碑を発見
大塚丘	遥拝所	？	造成した土盛	銭貨	
河口浅間神社境内地	神社	平安・中世・近世	集石状遺構	土師質土器片、陶磁器片、鉄製品	
宮ノ上遺跡	工房跡？	平安・中世・近世		土師質土器片、陶器片	金が付着する陶器が出土
行者平遺跡	堂跡？	中世・近世	礎石？	土師質土器片、陶磁器片	
行者屋敷遺跡	堂跡？	近世	礎石	灯明皿	

要約	平成 21(2009) ～ 23(2011) 年度の 3 ヵ年で実施した、山梨県内一特に東部富士五湖・郡内地域の富士山信仰遺跡についての分布調査。11 地点の試掘確認調査を行ない、その他、関連調査として、5 地点についての地中レーダー探査と 1 地点についての簡易ボーリング調査を実施した。富士山二合目・五合目の調査では山林中より石碑が発見され、その場所がかつての信仰の道であることなどが明らかとなっている。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 285 集

山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書

－富士山信仰遺跡に関わる調査報告－

印刷日　2012 年（平成 24 年 3 月 19 日）
発行日　2012 年（平成 24 年 3 月 23 日）
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
　　　　山梨県甲府市下曽根町 923
　　　　TEL 055-266-3016
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社峡南堂印刷所